
さかさまクロック

佐倉アヤキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さかさまクロック

【Nコード】

N41980

【作者名】

佐倉アヤキ

【あらすじ】

そこは魔術やエルフと呼ばれるものが当たり前のように存在する世界。17歳の学生ラファは、自他共に認める非現実嫌いな少年。けれど、夢見がちな親友ムキに連れられて行った幽霊屋敷探検から、彼の「非現実的な」長い長い旅がはじまった。（4/7タイトルを「アテナのリコリス」↓「さかさまクロック」に変更いたしました）

世界設定（前書き）

物語の世界設定です。参考になればどうぞ。

世界設定

【地名】

この世界はその昔七つの国がひしめきあっていたが、「世界創設戦争」と呼ばれる千年前の戦いによってひとつの国に統合される。中央の島に世界政府のある「神都」をおき、その周囲に広がる大陸はおよそ五つに分断され、「五大都市ディアランド」と呼ばれている。

神都ファナティリスト

この世界の中央都市。この世界を統べる「世界王」がいる場所。

学園都市レクセディア

東南に位置する五大都市のひとつ。その名の通り教育機関が集まる都市で、町の運営も子供たちが中心となっていることから、別名「子供の街」とも呼ばれる。主人公ラファの出身地。

神聖都市ラトメディア

南に位置する五大都市のひとつ。神官、貴族、舞い手がそれぞれ力を奮う土地で、神官のリーダー「神の子」が治めている宗教都市。ファナティリストとは折り合いが悪い。

自然都市インテレディア

東に位置する五大都市のひとつ。都市というよりは小さな集落をかき集めたような場所で、農牧がさかん。南寄りにある「名もなき村」は旅人たちの立ち寄る憩いの場となっている。

軍事都市シェイルディア

北に位置する五大都市のひとつ。軍事関係に秀でた都市で、シェイ

ルディア騎士団は世界的に有名な治安部隊。ファナティリストとは友好関係にある。

湖岸都市クライディア

今作には未登場。西に位置する五大都市のひとつ。世界文明発祥の地とも言われる場所で、古代の遺跡が数多く残っている。考古学を学ぶ者がこぞって行きたがる土地。

【用語解説】

双子神

この世界は「エル」と呼ばれる兄妹神によってつくられたとされている。二人は互いを思うがゆえに命を落とすが、その魂は四つに分断されて、ノルツセル、シエルテミナ、エファイン、ソリティエの不老不死四家になって後世に残っているといわれる。

世界創設戦争

千年前、この国がまだ七つの王国だった頃に起こった世界戦争。今は「世界創設者」と言われるグループがそれを平定し、ファナティリストを建てたと言われている。

赤い印

世界創設者が作ったといわれる、宿した者に不老不死の肉体と絶対無敵の魔力を与える印。これを宿した者を「赤の巫子」と呼び、彼らはこの世界の危機に現れて、世界を救うとされている。

過去夢の君

この世にひとりしかない、人の過去を司る魔術師。過去を変えた

り、過去に渡るなどという能力を持つ。

予知夢の君

過去夢の君と対を成す、人の未来を司る魔術師。同じく未来を変えたり、未来に渡る能力を持つ。

異分子

世界創設者が赤の巫子を作り出してでも止めようとした人物。最初の「第九の巫子」。

登場人物（前書き）

最新話までのネタバレを多分に含むので閲覧の際はご注意ください。

登場人物

【主要キャラクター】

ラファ：レクセディアの学生。ブラウンの髪に瑠璃色の瞳の少年。非現実嫌い。この物語の主人公。

マユキ：ラファの親友。小麦色の髪 of 少女。夢見がちで不思議なことが大好き。

チルタ：ファナティライスト高等祭司。黄土色の髪 of 少年。ラファのことを付け狙っているようだが…

【神聖都市ラトメディア】

トレイズ：ラトメディア神護隊の隊長。その昔「紅雨のトレイズ」と渾名された殺し屋だったらしい。

エルディ：トレイズの部下。銀髪に瑠璃色の瞳の美少年。毒舌家。

レイン：トレイズの部下。金髪にみかん色の髪 of 少年。トレイズを信奉している。

エルミ：トレイズの部下。エルディに瓜二つの双子。現”予知夢の君”。正体はエルミリカ・ノルツセル。

クルド：トレイズの部下。神護隊の副隊長。神経質で几帳面、トレイズの我侭に振り回されている。

サザメ：ソリティエ神殿の門番。エルフ。フェルマータに並々ならぬ恩があるらしい。

エツフェルリス：ラトメ貴宿塔の塔長。フェルマータと仲が悪い。

フェルマータ：ラトメディアの最高権力者”神の子”。誰かに似ているようだか…？

【自然都市インテレディア】

ギルビス：医者志望の少年。とても頭がいい。巫子をめぐる争いで天涯孤独の身となった。

リイナ：ギルビスの妹。ギルビスを守るため、肩に刺青を入れて第三の巫子を騙る。

ソラ：インテレディアに住むエルフの少女。リイナの友人で、兄妹を心配している。

フエイ：ギルビスの友人。彼の父が旅医者で、ギルビスの師を務めている。ちよつと臆病。

【ゼルシャの村】

ラゼ：ルセルによつて幽閉されている人間の少女で、捨て子だったところをレイセリアに拾われた。

レイセリア：ゼルシャの村の村長。人間とエルフの間で板ばさみにされている。

ルセル：レイセリアの補佐。エルフの存続を重視しており、レイセリアに不満を募らせている。

エリーニヤ：レイセリアの息子で、人間に偏見を持っている。

【軍事都市シェイルディア】

ロビ：シェイルディア騎士団長。トレイズの幼馴染。

ナエ：ロビの連れているエルフの少女。トレイズの知り合い。

ティエラ：ロビの妹。ブラコン。

イデリー：シェイルディア副騎士団長。破天荒な団長に日々頭を悩ませている。

【学園都市レクセディア】

ユール：マユキの弟。占いが得意。いつも眠たげな少年。ルイシルヴァ学園の役員。

ピル：いつもユールの傍にいる少女。ユールのことが好き。

エピナ：マユキの友人。突然行方不明になったラファ達を心配している。

メアル：ルイシルヴァ学園の教師。歴史教師で、赤の巫子の伝承が

好き。

【過去の軍事都市シエイルディア】

過去のチルタ：幼少時のチルタ。無邪気な少年。ラファを兄と慕っている。

過去のルナ：幼少時のルナ。男装しているが、密かにチルタのことを想っている。

レナ：ルナの妹。チルタと想いあっている。病弱。グランセルドに殺される。

チルタの父：チルタの父親。シエイルディアの豪商。

【神都ファナティライスト】

ルナ：チルタに付き従う”巫子狩り”。密かにラファを心のよりどころにしている。

シェーロラスディ：”世界王”。温和だが食えない人物。チルタを救うよう画策している。

ファレイア：ファナティライスト高等祭司。人をおちよくるのがライフワーク。

【世界創設者】

レーチス：自称ラファの父親の父親。”異分子”。のんきに旅して回っている。

レフィル：ファナティライストの神官服を着た少年。レーチスを追っている。

エルミリカ：”赤の巫子”の発案者。崖から落ちて死んだはずだが…クレイリス：聖女。世界創設者を束ねるリーダーだった。

act・0 プロローグ

―世界がそのまま続いていくならば、私が死ねばよいのでしょう。
銀髪の乙女はそう言っ て目を伏せた。

エゴでも欺瞞でもいいから、あなたを守れた、証がほしかったから。

元々この世界をお創りになった「神」という存在は、銀の髪と瑠璃の瞳を持つ、双子の兄妹神だったという。二人の名前は同じ、「エル」といった。

兄のエルは、誰もが忘れてしまった過去さえも、妹のエルは、誰も予想できないような未来までもを、視ることができた。

未来を司る妹が示すとおり、兄は世界を創つていった。どうすれば未来が幸福になるか知っている妹に従えばすべてがうまくいくと、兄は何の疑問も持たずにいた。

その時の兄は、この世の全てはしあわせでできていると、信じていた。

けれど未来はやさしいばかりではなかった。

妹は途方もなく長い間、実の兄を騙していたのだ。

妹が視ていたのは、とても悲しい未来だった。このまま世界を作り続けると、兄が死んでしまう。そしてどんなにその未来を変えようとしても、いずれその時は来てしまうのだと、妹は知っていた。知っていたけれど、兄には、どうしても言えなかった。

妹は、少しでも兄を生き延びさせるよう、いっぱい、いっぱい考えた。そしてある時、とうとう妹のエルは見つけたのだ。兄を生き延びさせることができるような選択肢を。どうすれば、兄は生きてい

られるのかを。けれど、喜んだのもつかの間だった。それはとても残酷なものだったから。

兄妹が唯一、二人で協力して創りあげた世界を、壊してしまうか。または兄の代わりに、自分が犠牲になること。

どちらも妹には苦しい選択だった。兄が楽しそうに創る世界を壊すなんてできない。兄妹がはじめて一緒に創ったものを、壊すなんてけれど自分が死ぬのも怖かった。怖くて怖くて、けれど。

妹のエルはとうとう選んだ。世界が守れるなら、兄が生きられるなら。自分の命など、どれほど重要なものだろう？

妹が死んだ時、兄はようやく妹がしてきたこと、そしてしようとしていたことを知った。兄はたった一人の妹を失ったことで、悲しみに狂ってしまった。妹は知らなかった。分かっていなかったのだ。妹がそうであったように、兄もまた妹が大切だったということ。そして兄は、もうこのような悲しい想いをしたくはないと、自らの剣で自分と、そして妹の亡骸とをまっぴらに切り裂いた。妹がないこの世界を、見守っていてなんになる？ いいや無意味だ。だってこの世界を創ったのは、妹と一緒にいられる、証がほしかったからなのに。

切り裂かれた兄妹の身体は、四つの光となって二人のエルの世界へと舞い降りていった。四つの光は、それぞれ四つの人間の形を成した。

ひとつは戦士シエルテミナとして。

不老不死の力と、何者にも勝る権力を握った。

ひとつは聖人ソリティエとして。

不老不死の力と、全てを守り抜く慈愛の心を宿した。

ひとつは歌姫エフアインとして。

不老不死の力と、人々を優しく導き見守る声を授かった。

ひとつは賢者ノルツセルとして。

不老不死の力と、過去と未来を視通す能力を継いだ。

妹のエル願いはとうとう叶わなかった。彼女の悩みは水泡に帰し、兄は死に、世界を守る者もいなくなってしまった。

そのせいで、後に「世界創設戦争」と呼ばれる、世界をその果てまで壊しつくした大戦争が起こるとも露知らず、この世界から、神は消えてしまったのだ。

―君のいない世界に、なんの価値がある？

銀髪の男はそう言って天を仰いだ。

作り出した世界の民たちが、神の物語をなぞるように繰り返すとも知らぬまま。

a c t . 0 プロローグ（後書き）

初投稿です。皆様どうぞお付き合いくだされば幸いです。

act・1 幕開け

それは今から千年も昔の話。

この世界は七つの国に分かたれていた。どうしてそんな話になったのかは明らかになっていないけれど、各国は我こそが世界の王者だと、互いに戦いを繰り返していた。

そんな無意味極まりない戦争を食い止めたのが、今は「世界創設者」と呼ばれる十数人の一団と、彼らを束ねるリーダー、聖女クレイリス。彼らは七つあった国をひとつの大国に纏め上げ、それから新たに神都・ファナティライストと呼ばれる都市を作り上げて、世界に平穏をもたらした。

世界は平和になった。平和になったのだと、誰もがそう思っていた。

けれどあるとき、世界創設者たちは忽然と姿を消すことになる。いかな目的か、「人工的な」不老不死の力を、世界に遺して。

「そして！その力を示す赤色の証を『赤い印』といい、それを宿した人間は不老不死の身体と絶対無敵の魔力を持った『赤の巫子』となる」と言い伝えられています。巫子達は全部で十人いて、歴史の節目に現れては世界を平和へと導くといひます」

歴史教師、メアル先生の声が広い教室に響いた。

レクセ・ルシルヴァ学園は、学園都市レクセディアの中でも一際大きな学校である。その四年生の発展クラスで、その授業は行なわれていた。

しんとした教室内。皆の視線は黒板と、メアル先生にぼんやりと注がれている。壁を一枚挟んだ廊下を歩く生徒達の声がやけに耳につく中で、一人の少年が鼻で笑うように声を上げた。

「はっ、『赤の巫子』なんてただの御伽噺だよ。本当にそんなのいるわけないって……ってうわっ!!」

慌ててメアル先生から飛んできた指差し棒を避けたブラウンの髪に瑠璃色の瞳の少年は、その棒を難なく受け止めた彼の後ろの席の少女の姿を見とめてから、真っ青になってメアル先生に向かって噛み付いた。

「あ…危ねえだろメアル先生!」

「お黙りなさいラファ君!あなたは世界創設者がお創りになったこの世界を否定したのですよ?その恥を感じないのですか!?さあ、後ろのマユキ君に謝りなさい!『よけてごめんなさい』って!」

「その前に投げたことをアンタが謝れよ!」

指差し棒を右手でもてあそびながら、当の小麦色の髪の少女は陰悪な雰囲気のアファとメアル先生に静かに言い放った。

「別に謝らなくても結構ですよ二人とも。その代わり…」

「その代わり?」

声を揃えて尋ねてきた二人に、生徒達の誰もが言いたくてたまらなかった台詞を、彼女はいとも簡単に言つてのけた。

「もう終了時間を十五分も過ぎた授業、いい加減に終わらせてください」

生徒達は、その通りだとばかりに一斉に力強く頷いた。

「まったく…本当に何考えてんだメアル先生は…」
「ラファってメアル先生と仲悪いよね」

夕方のレクセディアを、ラファとマユキは並んで歩いていた。メイ
ンストリートにはずらりと露店が並び、さまざまな品を売っている
のは皆レクセの学生だ。この都市が「こどもの国」などと言われる
所以は学生達が一般階層の人々の中心となっていることにある。
世界中の子供たちは、レクセで働いたり、勉強することに憧れてこ
こにやってくる。生まれた頃からこの街に住むラファにとっては、
この光景も見慣れたものだった。

そんなにぎわうストリートを曲がり、ひどく閑散とした脇道へと入
って、マユキはぼつりと呟いた。

「……私はいえると思うんだけどなあ、『赤の巫子』」
「そうかあ？」

「うん、ラトメの”神の子”だって巫子の一人だって言われてるし、
ありえると思うんだよねえ」

そう目を輝かせてばやいたマユキに、ラファは嘆息した。

彼女は、現実的な（マユキに言わせれば「堅物」な）ラファとは違
って、かなり夢見がちな性格をしている。妖精だとか天使だとか神
だとか、「現実味の無いこと」が好物で、学園で占いを営む弟と、
共に語り合っては人の話も聞かないほどに盛り上がってしまう。

ラファからしてみれば「赤の巫子」なんて歴史書と絵本の物語とし
か思えない。第一「不老不死」なんて存在してたまるものか。しか
もそれが十人も、など。神話の中では双子神エルの四つの光が不老
不死の人間となったなどと言われているが、レクセにいてもそんな
人間、一人も見ることが無い。この街は世界中からごまんと人が集

まってくるし、実在するとしたら一人くらい、知り合いがいてもおかしくないだろうに。

だから、俺は「不老不死」なんて認めない。
それはラファの信条であり、信念だった。

するといつもと同じようにマユキは口を尖らせた。

「ラファってば、相変わらず堅物だよな」
悪かったな。

その屋敷は、レクセディアのはずれにある。

屋根の緑色は雨風にさらされてくすんでいたし、壁はところどころ崩れ落ちている。草花は屋敷の主がいないのをいいことにぐんぐんと伸びはびこって、見るからに幽霊屋敷、というような大きな館の雰囲気をも更に際立たせていた。

名づけて、「無人廃墟の館」。

ルイシルヴァ学園の生徒達の中で駆け巡る噂は、いわゆるありがちな幽霊スポットとさして変わらないものばかり。ラファであれば一笑して次の瞬間には存在すら忘れてしまうところだが、（ラファにとっては）運が悪いことに話を聞きつけたのはマユキのほうだった。例によって「幽霊」という単語に反応した彼女に引つ張られて、今に至るというわけである。

「巫子の次は幽霊かよ……今日は厄日か」

「いかにも出そうな雰囲気じゃない？」

割れた窓から屋敷に侵入しながらマユキが嬉しそうに声を上げた。
ラファも続いて中へと身を滑り込ませると、なるほど確かに「いかにも」だ。

箒箆や椅子は倒れているし、床はホコリまみれ。天井近くにはクモ

の巢のヴェールがかかり、廊下へと続く扉は、金具が片方外れて不安定に半開きになっていた。大きな窓を飛び越えて部屋に着地すると、ふわりとホコリが舞い上がった。

見ると、床のいたるところに足跡がついている…

案外、マユキのような人間は多いらしい。ラファはげんなりと溜息を吐いた。

「幽霊が出るのはね、一階の居間らしいよ。ここの向かいの部屋で、日没ちょうどに」

どこで手に入れたのだろうか、屋敷の見取り図を見ながらマユキが言ったので、ラファは窓の外を振り返った。西向きの窓から、名残惜しく輝くオレンジ色の光がいつぱいにこちらへと注ぎ込んでくる。

「日没か…あと十分くらいか？」

「みたいだね。じゃあそれまで…」

屋敷の探検でもしようよ、そう言おうとしたのであろうマユキの台詞は、最後まで続かなかった。ラファ達のいる向かいの部屋から、床が軋むような高い音が響いたからだ。

外を見る。まだ陽は沈んでいない。

「まさか、先生かな？それとも幽霊の気が早いのかな？」

「馬鹿、そんな幽霊いるかよっ」

不安げに囁くマユキの腕をひつつかみ、ラファは考えるより先に唯一立ったままの箆笥の中へと押し込んで、自分もそこに飛び込むとそつと扉を閉めた。

レクセディア学園の寮の門限は日没まで。この館に生徒達がたびたび入り込んでいるのを知って、先生達が見回りに来たのかもしい。こんなところに忍び込んでいるのを見つかれば、規則の厳しいルイシルヴァでは間違いなく処罰が下されることだろう。

じつと息を殺して縮こまっていると、向かいの部屋の扉を開く音がした。

明るいテノールの男声が耳に入ってくる。

「……今日はちよつと早く来ちまったな」

「別にいいでしょう数分くらい。それよりこのワープゲート、なんとかならなかったんですか？出るたびにホコリまみれになって勘弁してほしいんですけど」

「しょうがないだろ、ここがいちばん目立たないんだ」

もうひとつのボーイソプラノの声が近づいてきた。続いてこの部屋の扉を開く音。

「……足跡が増えてますね」

どき、と心臓が高鳴る。マユキとそつと視線を交わす。

「もしかして、例の奴らかな？」

「わかりませんが……そろそろだ、ってあの方も言っていましたね」

「運がよければ今日でホコリともおさらばかもな」

テノールの声が近づいてきた。どうやら彼らは誰かを探しているらしい。

どうしよう、教師ではなさそうだ。でも生徒でもなさそうだ。もし見つかつて学園に突き出されたら……

ラファは目をつぶった……誰か！

助けを求めてもしようがないことはわかってる。

それでも彼は願わずにはいられなかった。

誰か俺達を助けて下さい、カミサマ！

神の存在を信じたのなんて、初めてかもしれない。

その時…

ラファの願いが届いたのか、青年の声が、聞こえてきた。

a c t . 2 継承（前書き）

早速ですが少しばかり戦闘シーンが混ざります。

a c t . 2 継承

君は、守りたいかい？

生ぬるい水のなかで漂っているような心地だった。

どこからともなく響く声は、不思議なことに、ラファの胸の中にじんわりと染み渡っていく。

青年の声はくすり、と笑った。

助けてあげる。僕は君を待っていたんだ。

真っ白な視界の中で、青年の声は言った。

待っていた…待っていた？俺を？

声に出して言ったわけでもないのに、青年の声はきちんとラファの思いに反応する。

そう。助けて欲しいなら、手を取って。さあ…

待ってくれ、お前は誰なんだ？

そう問いかけたかった。白い視界のむこうから、手が伸びてくる。なぜだか怖いとは感じなかった。

ラファの手がひとりでに動く。

そして、ラファはその青年の、”手を取った”。

我に返ったことにも気づかぬまま、自分の身体からほとばしった眩しい光に、ラファは目を丸くした。マユキが腕で目を覆い、「な、

何！？」と叫んでいる。慌てて見ると彼女の髪の一部からも、光が放たれている。

何が起きているのかもわからないうちに、光は収束して消えていった。ラファとマユキはぽかんと口を開いて、身動きひとつ取れもしない。外に人がいるであろうことも忘れて、二人は互いを見やつた。特にラファは、少女の髪に。

彼女の髪は、小麦色だった。それは変わらない。

しかし、ついさっきまではなかったはずだ、マユキの顔の両脇にあるふた房の髪が、メッシュでも入れたように、真っ赤に染め上がっていたのだ。

…当然、今までになかった色だ。

「マユキ、その髪…」

「か、髪？」

同じく呆然としてラファを見ていたマユキは、自分の髪をつまんでみて、息を呑んだ。当人も身に覚えの無いらしい赤色に、青ざめる。

「な…なに、これ！？」

「なにつつつても…俺にも何が何だか…」

「大丈夫か！？」

慌てるラファとマユキの間に、第三者の声が割って入った。

箆笥を勢いよく開けられて、夕陽の光が箆笥の中に飛び込んできて、ようやくラファたちは、今まで何をしていたのか気づいた。そういえば、自分たちは身を潜めているところだったのだと。

テノールの声の持ち主が姿を現した。

赤錆のような色が混じった、薄いブラウンの髪に、きらめく金色の瞳。年は十代後半くらいだろうか。十七歳のラファ達よりもわずか

に大人びたその青年は、白い詰襟の軍服の上に麻のコートを羽織っている。焦ったようにこちらを見、マユキの赤い髪を見て顔を更にこわばらせた。

「お前…いや、お前達、まさか、”手を取った”のか？」

「手を取った」？

もしかして、先ほどの青年の手のことを言いたいのだろうか。そういえば、あの青年はどこから現れて、どこへ消えていったのだろうか。そもそもこの筆筈にはラファとマユキが入ってしまつて、もう誰かが入れるスペースなど存在しないというのに。

しかも、何故だかもう彼の存在自体、ラファの中では白昼夢だったかのように曖昧になっていた。

いや…まず、あれは、本当に白昼夢ではないのだろうか？

首をひねりながらもとりあえず頷いておくと、隣のマユキも戸惑つたまま首を縦に振つたのでラファは目を丸くした。

「マ、マユキもなのか！？」

「つて…ことは、ラファも？」

「……お前ら…今までの俺達の苦労を無駄にしゃがつて…！」

がつくりとうなだれる青年に、訳が分からない二人は揃つて首を傾げた。

「あなた達、それがどういう意味を持つのかわかつてるんですか？」
その時、青年の背後から、一人の少年…おそらくボーイソプラノの声の持ち主が現れた。そのあまりの美麗さに、ラファたちは事情もつかめぬままにはつと息を呑んだ。

肩を流れる滑らかな銀の髪に、宝石のように澄んだ瑠璃色の瞳。抜けるように白い肌。十代半ばと思われる人形のようなその小柄な立ち姿は、まさに美少年と呼ぶに相応しいもので。青年と同じ服を身

にまとった少年は、呆れたように縮こまるラファ達を見下ろしている。

彼の言いたい意味はまるでわからなかったが、とりあえず馬鹿にされていることだけは確かだった。しかし、あんまりにもこの少年が美しいので、二の句も継げずにラファは黙り込んだ。

啞然としているラファたちをちらと見て青年が口を挟んだ。

「エルディ。こいつらは何も知らねえんだ。なっちまったもんはしようがねえだろ？」

「なにのんきなこと言ってるんですかトレイズさん。これ、任務失敗ですよ。しかも重要度Sランクの任務の。確実に減給ものなのに」
「げ……」

事情はよく分らないが、その単語を聞いてトレイズ、というらしい青年は青ざめた。

頭を抱えてうずくまったトレイズの代わりに、エルディは前に出てラファたちに向き直った。

「失礼しました、僕はエルディ。ラトメディア神護隊の一員です。ここにいるのが隊長のトレイズさん。僕らはあなた方をラトメにお連れする為にここまで来ました」

「……な、なんだって…俺達を？」

ラトメディア神護隊。聞いたことがある。

正式名称を「ラトメディア神護警備部隊」とかいう、ここから南にある神聖都市ラトメディアにいる「神の子」直属の、庶民上がりのラトメ唯一の軍人だ。

隊長は弱冠二十二歳の風雲児と聞いていたが…

それにしたって、たかが幽霊屋敷探検ごときで世界的な力を誇るラトメ神護隊長直々に注意に来るはずもない。人違いではないか？思

わず言いそうになると、それを見越した様子でトレイズが言った。
「フェル様…」神の子”のフェルマータ・M・ラトメ様に言われて
な。ここに新たな”赤の巫子”が現れるって聞いたんで、俺達は数
週間前からここでお前達が巫子にならないように見張ってたんだ」

トレイズがよろよろと立ち上がった。

その姿をぼんやりと見ていたマユキは、はっと我に返るなり慌てた
ように身を乗り出した。箆笥から転げ落ちそうになるのを、ラファ
にしがみついてなんとか留めて、叫ぶ。シャツの襟が引っ張られて、
ラファがぐつと息を詰まらせた。

「わ、私たち、巫子じゃありません！」

「そ、そうだよ、巫子が実在するわけじゃないじゃん」

鼻っから信じるつもりのないマユキとラファに、トレイズとエルデ
イはちらと顔を見合わせた。
朗らかに、トレイズが言った。

「まあ、長くなるけど、ちゃんと説明するからさ。とにかくそこか
ら降りて、座ろっぜ」

「俺達神護隊の一番の仕事はな、”赤の巫子”になりそうな人間を
探し出して、その人間が巫子にならないように食い止めることなん
だ。でなきゃ、巫子をラトメで保護すること…それで、ここに来た
んだけど」

「どうやって、”赤の巫子”になりそうな人間を探すの？」

「”神の子”、フェルマータ様は第一の巫子であらせられます。彼
女の持つ全てを見通す”眼”で、巫子になりうる人間を探し出すん
です」

「眼？」マユキがオウム返しに言うと、トレイズとエルデイが力強く頷いた。

「巫子の持つ”赤い印”が、宿した者に不老不死と多大な魔力をもたらすことは知ってるな？それに加えて、赤い印にはそれぞれ、固有の能力がつくんだ。例えばお前の印は”髪”だ。：そう、それが赤い印。それは”第五の赤い印”で、お前は”第五の巫子”だな。これは唄を操って、その唄が持つ力を引き出すんだ。その唄によって、人を守ったり、癒したりする。

で、フェル様の”第一の印”は眼で、全てを：世界中の人々の居場所や、能力や、果ては未来まで：を見透かす力を持ってるらしい。それで、まだ巫子になってなかった第五と第二の巫子を探して、遠路はるばる俺達はラトメからやってきたって訳だ」

「……これが、”赤い印”：？」

赤くなった髪をつまんで、マユキが呟いた。

戸惑いながらも、トレイズの言うことを素直に聞いているらしいマユキに、ラファは胸の奥がむかむかしてくる。

何故そんなに冷静でいられるのだろう？ラファは身を乗り出して、トレイズを睨んだ。

「そんな話信じられるかよ！第一、なんで巫子にしないようにする必要があるんだ？巫子は世界を平和にしてくれる、ありがたい存在なんだから！？」

「平和に導く者がいれば、逆に平和を壊したいと思う者もいる……」

巫子の力は、そんな平和を壊すのに

うってつけな存在でもあるってことさ」

神妙な口調で、ゆっくりとトレイズは言った。

「神都ファナティリスト」

「ファナティリスト：？なんでそこで神都が出て来るんだよ」

「！そっか：ファナティリストとラトメディアは長い間対立状態にあるから：巫子は、ラトメ側のものなのね？」

納得したように声を上げたマユキに、エルディは頷いた。

「半分正解です。ラトメは、立場的にはファナティリストに服属する形にありますが、実質の権力は神都にも匹敵している。それに加え、巫子がラトメに組するというなら……ファナティリストにとってこれほど恐ろしいことはないでしょう。」

神都には”巫子狩り”と呼ばれる暗殺者達がいて、巫子を捕らえようと血眼になって巫子を探しています。きっとじきに、あなた方にも手が伸びるでしょう。分かりますか？これは国家規模の、巫子の争奪戦なんですよ。」

「そんな……俺達はただの、レクセの学生なのに……」

「はいそうですか」と認められる話ではない。今まで考えたこともなかった世界の話に、頭がくらくらした。どうしたものかとマユキと目を見合わせていると、トレイズが窓の外を見、腰に下げた剣の柄に手を掛けて、吐き捨てるように言った。

「どうやらのんびり話してる暇はなさそうだぜ」

外はいつの間にか真っ暗で、トレイズの視線の先に何があるのかなどラファには分からなかったが、彼には何かが見えているらしい。トレイズは視力がいいのだろうか。ラファはよく分からないままぼんやりと思った。

すらり、と銀色に鈍く煌く刀身が姿を現した。口元を歪めて無理矢理に笑んだ。

「巫子狩りだ。あいつらもうかぎつけてきやがった」

「早いですね」

「エルディ、お前この二人連れて先に行け！俺は後で追いつくから……モール橋で落ち合おう」

エルディは黙ってトレイズを見上げた。トレイズも口をつぐんでエルディを見下ろした。

数秒のあと、エルデイが口を開いた。

「……………了解しました。さあお二人とも、こちらへ」

「ちょ、なんなんだよ!？」

「巫子狩りって、さっき言ってた人たちのこと？」

「事情を説明してる暇は残念がないんだ。悪いけど、今は黙ってついてきてくれないか？」

「でも…っ」

抜き身の剣を持ったまま、トレイズは肩越しに振り返って、ラファとマユキを安心させるように微笑んだ。

「文句はあとでゆっくり聞くなり。頼むよ、こんな状況で信じるなんていえないけど…死にたくなかったら付いてきてくれ」

「トレイズさん!」

エルデイの声にトレイズはとっさに右手の剣を振り上げて、窓の外から飛び込んできた黒いマントの人間をなぎ倒すように、斬った。迷いの無い動きだった。

トレイズの足元に、フードを深く被った人間がごとりと落ちた。マユキが怯えたように小さく息を詰めて、ラファのブレザーの裾を掴んでくる。あんまりにも一連の流れがあっけないものだから、ラファは一瞬なにが起こったのかわからなかった。

殺した。

この男、ひとを、ころした。

「な……………」

「さっさと行け!」

トレイズに怒鳴られ一歩たじろぐと、エルデイが床に白いチョーク

で、何か不可思議な紋様を描いて、その中心に立った。その手には、細く白い手には不釣り合いな、刃渡り三十センチほどのダガーが握られており、彼はラファ達を呼んだ。

「お二人とも、この上に立つてください！」

「で、でも……」

トレイズとエルディを交互に見ながらラファが途方に暮れていると、誰かがその腕を引っつかんで陣の上へと引きずり込んだ……マユキだ。

「マユキ!？」

「今はまだ信じられないけど、でも……ここにいるの、よくない!」

「でも……っ」

「まだお前らの名前を聞いてなかったな」

やたらものんびりとした口調で、またしても窓から飛び込んできた巫子狩りをなぎ払って、トレイズは言った。

「名前は？」

なぜそんなに平然としていられるのだ。

ラファは混乱しつつも、トレイズが世間話でもするような口調で言うから、思わず呆けたまま答えてしまった。

「……………ら、ラファ」

「マユキ」

「ラファにマユキか。……………いい名前だ」

きょとんと、した。

「お二人とも、魔方阵から出ないで下さいね！」

……………『我が大いなる天空の支配者達よ!今ひとたびここに我の助けとなれ!導け我らが望む地へ……………転移!』」

足元の紋様から、目もくらむような閃光が走った。
遠ざかる視界の彼方で、窓の外から大量の「巫子狩り」がトレイズ
の首を狙わんと剣を振りかぶる姿が、見えて……消えた。

act・3 モール橋

まばたきをひとつする間に、がらりと景色が変わっていた。

緑豊かな木々があたり一面に広がっている。どこかの森の中だろうか。夜の冷えた風が緩やかに体を掠めて、ラファは身震いした。

「ここは…」

唯一冷静なエルデイが、静かに答えた。

「ここはレクセディアとインテレディアの国境、モール橋です」

高鳴る心臓が落ち着いてきた。

ラファはほうと息をついて、もう一度あたりを見回した。

インテレディアとレクセディアは、大陸の東側に隣接している。

その国境は、内海から流れる大河ソーガル川と、川の脇に広がるセント・クロスの森の外側に沿って引かれていて、川の中と森の中は完全な無国籍地帯のため、そのあたりは治安が悪く犯罪が絶えないという。

ずっとレクセディアで育ち、国を出るつもりもなかったラファにとって、縁の無い存在だと思っていたのに。

ラファ達が来たのは、セント・クロスの森の中でも、大河を渡る唯一の橋だといわれている、モール橋のすぐ側らしい。茂みの向こうに、広大な石造りの橋が見えた。その手前で、ファナテイライストの兵と思われる黒い鎧の男達が、一人の、これまた黒い神官服を着た少年を囲んでいる。

「チルタ様！どうやらレクセの学生はここを通っていないようです！」

チルタ、と呼ばれた黄土色の髪の少年は、ふとその柔和な顔を背後

の黒マント集団に向けて、
穏やかな口調で問うた。黒マントの……そう、先ほどトレイズがな
ぎ払った、巫子狩りの衣装を着ている者に。

「紅雨のトレイズは、確かに仲間に、モール橋で落ち合うように言
ったんだよね？」

「はい。確かにそう言っておりまして」

「ふーん……」

チルタは答えた巫子狩りから視線を外し、ふとこちらの茂みを見た。
ラファはぎくりとした。

……まるで、そこにいるのは分かってる、そんな風に言われた気分
だった。

しかしすぐにこちらからは視線を外し、巫子狩りを振り返って、チ
ルタは言った。

「……でも、”神の子”相手にケンカ売るにはまだ早いしね。今日の
ところは撤退しようか」

「しかし！」

「紅雨がいるんだよ？結局今回も取り逃がしちゃったしね。あの『
千人殺しの紅雨』相手にこの兵力じゃあ負けは確定だ。相手方には
素人でも巫子が二人いるし」

「……」

巫子狩りは悔しげにうつむいた。

チルタは彼女（声からして、この巫子狩りは女だ）が反論してこな
いのを見て取って、一瞬困ったように微笑んでから、すぐに顔を引
き締めて兵に向き直った。

「撤退だ！」

「……あいつ、俺達に気付いてたよな…」

「ですね。見逃してやったつてところですかね」

「今の子、私たちとそう変わらない年頃なのにすごく偉い人みたいだったね」

マユキをちらと見て、エルディは返した。

「あれはファナティライストの神官の中で、”世界王”のすぐ下に立つ”高等祭司”の一人、チルタです。今高等祭司は二人しかいませんが、チルタは軍事関係を全て牛耳つてるといいます」

いけすかない偽善者野郎ですよ。そう吐き捨てたエルディに、ラファは首を傾げた。

「会ったことあるのか？」

「ええ。トレイズさんに付き添って世界大会議の警備にあたった時に何度か。あいつ、なんでか知らないけどトレイズさんのこと目の仇にしているんですよ」

「そういえば、トレイズのこと『紅雨』とかなんとか…」

するとマユキの台詞に、エルディは苦い顔をした。しばらく黙り込み、言う。

「それ、トレイズさんにはあんまり言わないでくださいね」

なんで？と何も考えずにラファが尋ねると、マユキから頭をはたかれた。

「なにすんだよ！」

「ラファの馬鹿、ほんとにデリカシーがないんだから！」

「全くですね」

エルディまで便乗してきた。

一拍遅れて失言に気づいたものの、二人の言い方が癪にさわってラファはむっとした。

「お、お前ら…っ」

「ん？なんか仲良くなってるなお前達。エルディが初対面にこんなに打ち解けるなんて初めてかもなあ」

いきなりの声。ラファは息を吞んで振り返った。

背後に、先ほど別れたばかりの男が立っていた。ちよつとの間、目の前の男が誰なのか考えて、そして…

「トレイズ…！」

「おう、思ったより嬉しい歓迎だな。出会い頭に一発ずつくらい殴られるんじゃないかってトレイズさんヒヤヒヤしてたぜ」

その台詞にはつとして、ラファはそっぽを向いて口を尖らせた。

「ベ…っ、別にそんなんじゃないやねえよ！ただ、お前にはまだ色々聞かなきゃと思って…！」

「はいはいそれは橋を渡ってからなー。エルディ、見張りの兵は？」

ラファの憤りなどなんのその、茂みの向こうを見ながらトレイズが質問すると、エルディは首を横に振った。

「今さっき撤退しました。にしても早かったですね。場合によっては夜中になると思ったのに」

「俺の実力をなめんなよ」

そういえばそうだ。

あの無人廃墟の館からここまで、どんなに急いでも一、二時間は軽にかかるくらいの距離があるはずだ。なのに、まだ転移してから二十分と少ししか経っていない。ただでさえ巫子狩りと戦っている時間があつたのに、一体どんなスピードでここまで来たというのだ。

「トレイズは魔術師……じゃないわよね。転移呪文で来たの？」

「いや、俺の場合はちよつと裏技があつてな。まあその辺は深く聞かないでくれよ」

さらりと流して、トレイズはラファたちに向き直った。うまく煙に巻かれた気がするが、話題が摩り替わったのでラファは何もいえなかった。

「…で、だ。できればこれからお前達にラトメまで来てもらいたいんだが…いいかな？」

「いいわけあるかよ！俺たちは帰りたいんだ！な、マユキ！」
「う、うん…」

マユキは赤くなつた髪をいじくりながら困つたように眉を寄せた。何か言い出せないことがあるとき、いつもマユキは背中まであるその髪に触れる。

「……なに？」

「わ…私、行こうかな…」

「はあ!？」

居心地が悪そうにもじもじしながら、続ける。

「だ、だって、私、髪赤くなつちやつたし…」手を取った”男の子も、『君は赤の巫子だ』とか、そんなこと言つてたし……レクセにいてまたあんなやつらが襲つてきたら、私、ラファ達に迷惑かけちゃう…」

「そんなことないって！髪染めちゃえば誰にもわかんないさ！」

「そいつはどうかな」

トレイズが肩をすくめて見せた。

「”赤い印”は強力な魔力の象徴…ま、つまりそのまんま”印”だ。マークがそうそう簡単に消えちゃ困るだろ？それこそ巫子の絶対無敵の魔力でも使わなけりゃ、その赤いのは消えねえよ」

「そんな…」

「ね？だから私は行くよ。ラファは…なんかよくわかんないけど印もないみたいだし、ルシルヴァ学園に戻ってメアル先生に休暇届出しといてよ」

「出来るわけないだろ！？それなら俺も行ったほうがまだ！」

言ってから、気付いた。

……しまった。

ラファは深く溜息をついた。

その前で、トレイズがにやりとしてやつたりな笑みを浮かべている。

「言っただな？」

「……ああもう！わかったよ、行けばいいんだろ？」

「ラファ！」

マユキが声を上げるが、ラファは肩を落としこそしたが何も言わない。

「ねえ、ラファ。戻ったら絶対怒られるよ？」

「だな」

「学園の処罰がすごくきついので、知ってるよね？」

「そりゃまあ腐るほど受けたからな」

「もしかしたら退学かも」

「だから、いいってば！ここまで来てマユキ一人ほっといてもらえるかよ！俺も行くってば！」

マユキがおろおろしているのを尻目に、エルディが口を開いた。

「決まりですね」

「んじゃ行くか。さっさと橋渡ろつぜ」

さっさと行ってしまうトレイズとエルディ。

残された二人は顔を見合わせて、諦めたようにもうひとつ溜息をつ

いた。

act・4 ルシファの村

歩き始めて、早くも数時間。

ラファはしかし、自分にとつては途方もなく長かったその道のりに、これまた早くもマユキについてきたことを後悔しはじめていた。

「まだ…着かない…の、か…？」

息も切れ切れに言うラファ。トレイズが振り返った。彼はといえば、全く疲れていない様子で、ラファの数歩先を行っていた。やはりラトメディア神護隊長の名は伊達ではないらしい。ラファはげんなりとした。

トレイズは白い目でラファを見た。

「お前…ちよつと運動したほうがいいぞ。いくら学生だつて」

「してるよ！選択科目は武道だよ！長距離を歩かないだけだよ！」

「ラファは武道の才能ないもんねえ」

にこにこと笑いながら痛いところを突くマユキ。彼女はレクセに来る前は旅暮らしたったそうだから、この旅路にもまったく堪えていないらしい。彼女の辛辣な台詞に、また先に進む気が失せたラファに、手のひら大の小さな巾着袋が突き出された。

「エルディ」

「これ、飲むと少し疲れが取れますよ」

中を見ると、白い小さな錠剤が数十個、袋一杯に入っていた。そういえばこれは、レクセの学生バザーによく出ていた気がする。ラファは心からエルディに感謝した。

「ありがとな」

「いえ」

相変わらずの仏頂面で、エルディはさつさとトレイズの隣へと戻ってしまった。

…耳が赤い。どうやら少し照れているようだ。

毒舌家だと思っていたが、案外いい奴じゃないか。ラファは同世代

の中では比較的小柄だったが、それより更に背の低いエルデイが気に入った。

感動するラファをよそに、マユキが隣にやってくる。

「大丈夫？ラファ」

「なんでマユキはそんなに元気なんだよ…！」

「だって私、レクセに来るまで旅暮らしだったもの。それに武道の授業で成績いいの、ラファだって知ってるでしょ？」

「……………」

そうだった。ラファは悔しくなつてマユキから視線を外した。エルデイからもらった錠剤はよく効いて、飲み込むなり体中の気だるさや痛みが嘘のように消えうせたが、そのときに感じた氷を流し込むような冷気が、余計に自分を虚しく感じさせた。

前方から、トレイズが声を上げた。

「あとちよつとで中継点に着くからな。それまでがんばれよ！」

どこが「ちよつと」だ！

結局ラファ達がルシファにたどり着いたのは、もう真夜中も真夜中、辛うじて日付が変わる直前だった。

それまでにラファは七つの錠剤を浪費しており、エルデイに錠剤の冷氣などよりもずっと冷え切った目で睨まれてしまった。

「わ、悪かったよエルデイ…」

「これ、高かったんですからね。ラトメに着いたら買いなおして下さいね」

「ええっ!？」

ラファは絶望して声を上げるも、エルディは聞いちゃいなかった。落胆して肩を落とすと、マユキが慰めるようにその背を叩いてきた。「元氣出してよ、ラファ。エルディだって本気で言ってるわけじゃないよ」

「はは…だといいんだけどな」

トレイズは我関せずを決め込んで、荷物を肩にかけなおすとラファ達を見て言った。

「宿取りに行こうぜ。疲れただろ？」

「ほんとだよ…」

「そういえば、なんで転移呪文を使って一気にラトメまで行かなかったの？せつかくエルディが使えるのに」

マユキが指摘すると、何故かトレイズの肩が大きく跳ねた。妙に上ずった声で、彼は言った。

「い、いや！歩いていくのもいいだろ！？運動不足も解消されて！」
「……」

かなり怪しいが、トレイズの仕草があまり哀れだったのでラファは聞かないことに決めた。

エルディは事情を知っているらしく、ひとつ溜息をついた。

「…とにかく、のんびりしてる暇はありませんよ。明日も早いんですから」

やはり数時間歩き通したので体力が限界だったらしい。ラファはベッドにもぐりこむなりすぐに深い眠りに沈み込んだ。

すぐに寝息を立て始めるラファを横目に、エルディが窓の外を見つめるトレイズを振り仰いだ。

「……やっぱり全部説明してから連れてきたほうがよかったんじゃないですか？これじゃ僕達、場合によっては誘拐犯ですよ」

「エルミヤクルドならちゃんと説明できるんだろっけだな…俺達じやいらぬ誤解されるだけだろ。なら、ラトメに着いてからあいつらがフェル様に頼めばいいさ」

「それは…そうですね」

エルディは側で泥のように眠るラファを見た。控えめに、小声でトレイズに問う。

「にしても…あのラファ様、でしたっけ？本当に”巫子”なんですか？見たところ、”印”があるようには見えませんが」

「俺が同族を見間違えるわけないさ」

エルディの疑問を、トレイズは一笑した。きっぱりとした口調に、エルディは口をつぐむ。

「それに、万が一ラファが巫子じゃなかったとしても、巫子の存在を知っちゃった以上、巫子狩りに利用される可能性は十分あるんだ。知ってるだろう？以前、巫子がファナティリスト兵につかまりそうになって、巫子を匿ってた暗殺者集団が全滅したこと」

「聞いてます」

「……レクセを、あれの二の舞にはさせたくねえのさ」

トレイズは口調こそ笑っていたが、金色の瞳は抜け目なく窓の外を見つめたままだった。この村の夜はひどく静かだった。

しばらくして、エルディが普段より幾分か優しい声で、立ち上がり、言った。

「……もう寝ましようか」

「だな」

そして、夜闇は更に深まっていく。

学生の朝は早い。

しかしそれにしても、今日は早く起きすぎてしまった。

マユキもトレイズもエルディもまだ寝ているようだし、ラファは大きく伸びをして、ルシファの散策をすることにした。

朝の柔らかく冷えた空気が頬を撫ぜる。まだ陽が昇る前で、少し暗い。宿から出たラファは、澄んだ風を吸い込んで深呼吸をした。レクセとは違う、レクセよりも優しく柔らかいそれに、ラファは口元に弧を描いた。…こういうのも、たまには、たまにはだけれど、悪くないかもしれない。

「旅がいいものだとも思っているのかい？」

そんなラファの思考を見抜いたかのような、見知らぬ、声。ラファは息を詰めて振り返った。

閉じられた宿屋の扉の前には、ラファ一人だけ。しかし聞こえた声は確かに背後からのものだった。ラファはぞわりとした。

一体どこから…

「こっちだよ」

「！」

見上げた宿屋の、赤い屋根の上。

そこにその少年は立っていた。

くすんだ茶髪は左半分だけ長く、三つ編みになっており、瞳は温かいハニーブラウン。黒い神官服を身にまとっており、胸元には銀の十字架。ラファと同じくらいの少年は、感情の読めない視線をこちらへと向けていた。…当然、知り合いではない。

「……誰だ？」

「今後君が関わることになるだろう者だよ」

全く持つて訳がわからない。

早朝の爽やかな気分も忘れて、ラファは少年を睨み上げた。しかし意に介した風もなく、少年はなおも言った。

「君はきつと、これから”哀しい物語”を紡ぐことになるだろう」
「……？」

「僕らの責任を君達に押し付けるのはすごくいけないことだけど……
それでも、僕は願うよ」

疑問符を浮かべるラファを見下ろし、少年はわずかに笑んだ。

「……………どうか、第九の巫子を救ってやって」
それはそれは、泣き出してしまいそうな、顔で。

ラファは少年の顔に魅入った。

自分と同じくらいの年頃だろうに、まるで彼は何十年も生きてきたかのように、深い瞳をしていた。

「お前……………」

「僕は、レフィル」

少年はラファに背を向けた。

顔だけこちらに向けて、笑みを消し去って見下ろしてくる。

「また会うこともあるだろう。君らに幸がありますように」

「お、おい……………」

ラファが止める間もなく、少年はどこかへと消え去ってしまった。

「どうしたのラファ？なんか機嫌悪いよ」

「今日もいっぱい歩くから嫌になってたんだろ？」

「軟弱ですね」

「違う！」

朝食を食べていざ出発、という時。ルシファの入り口でラファは叫んだ。

正確には機嫌が悪いのではなくて、先ほどの少年のことが気にかかって考え込んでいるだけだ。わけがわからない奴だった。黒服だったし、ファナティライストの神官ということもありえる。まさか、マユキを狙って…？

「なあトレイズ、ルシファってラトメ領だったよな？」

「ああ」

「ラトメにも巫子狩りって来るのか？」

トレイズはきょとんとしてラファを見た。

そして、…どうやら巫子狩りのことを心配して不機嫌になっているのだと思っただけだ。妙に暖かい笑みでトレイズは首を横に振った。「神の子」のいる土地にはそうそう入ってこれやしねえよ。巫子狩りが入ってこれないように結界も張ってあるしな。だからこれからは安全だよ」

では、彼は巫子狩りではないのか。

一旦は安心したものの、すぐにラファは首をひねった。それでは、あのレフィルとやらは何者なのだろう？ 受付の者に聞いても宿にそんな少年は泊まっていけないというし、探してみても村のどこにもいないし…

思考にふけって周囲に気を配るのがおろそかになった、その時。

ドンッ！

「うわ、」

「きゃっ」

トレイズの背に、思い切り誰かがぶつかった。ラファははっとしてそちらを見た。

肩にかかったオリブグリーンの髪がはらりと舞う。その少女は跳

ね返って、後ろに尻餅をついた。

「いつ……っ……」

見るとまだ年下の少女だった。地味な旅装束に身を包んだ彼女は、とても愛らしい顔立ちをしていた。エルディと並んだらまさに美男美女だろう。珍しいオリーブグリーンの髪と瞳の少女は、取り落とした分厚い黒い革表紙の本を、慌てて大事そうに抱え込む。

トレイズが身をかがめて少女に手を伸ばした。

「ごめんな。大丈夫か？」

「あ……ああ、平気だ……」

少女は可憐な立ち姿には少し似つかわしくない大仰な口調の、アルトの声でそう言って、トレイズの手を取り……その立ち姿に息を呑んだ。何故だか固まったように、彼の顔をまじまじと見る。

「……？おい？」

「………るな……」

「？」

トレイズが心配そうに少女の顔を覗き込むと、少女は弾かれたように立ち上がり、トレイズの手を振り払って、後ずさった。

「さわるなっ！！ラトメの犬が！」

「……は、あ？」

「神護隊が……まさか、この本を奪いに来たのか！？この本はお前達には渡さない……この本はお兄様のものだ……神の子なんかには渡させはしない！」

そう甲高い声で叫ぶと、少女はぎゅっと本を抱きしめて、更に一歩二歩と後ろに下がった。

トレイズは首を傾げた。

「何のことだか分からないんだが……」

「とぼけるな！」

「……話がよく見えないんだけど、ふざけるのも大概にきなよ？君の被害妄想は分かったけど、これ以上トレイズさんとフェルマータ様を侮辱するようなら容赦しないよ？」

ついにエルデイが一步前に出て口を挟んだ。冷たい瑠璃色の瞳が殺気だつて少女を射抜く。それに少女はぴくりと肩を震わせたが、唇を引き結んでエルデイを見やった。

「…やれるもんならやってみろ！」

「へえ…いい度胸だね。それじゃ遠慮なく…」

「エルデイ、やめろつて」

トレイズが冷や汗をたらしてエルデイの肩を掴むと、彼は舌打ちして構えていたダガーを収めた。

それを見届けると、愛想のいい顔でトレイズは少女に向き直った。

「ごめんな、嬢ちゃん。別に俺達、君の本を取りに来たとかじゃないからさ。今からここ出るところだし安心してくれよ」

「…」

「じゃ、兄さんを大切にな。…行こうぜ」

ちらちらと少女を気にしながら、ラファとマユキもトレイズとエルデイに続いて、ルシファを出て行った。一人取り残された少女は、腕の中の本を見下ろして、ぽつりと呟いた。

「今の銀髪の…まさか、”あの一族”の末裔か…？」

act・5 ラトメディア神護隊本部

それからまた一日中を歩き通して過ごし、やはり時々エルディの錠剤に世話になりながらも、ラファ達はどうかこうにかラトメディアア首都、フレイリアへとたどり着いた。

「なんとか日が暮れる前に着いたな」

「2日で着けるとは思いませんでしたよ。今日は野宿だと思ってました」

息切れもしていないトレイズとエルディ。隣のマユキは流石に疲れたらしく口数が少なかった。

「疲れた…」

「これからしばらく筋肉痛だね…」

トレイズたちは門の前で遅れている二人を待っていてくれた。見張りの兵が少し緊張した面持ちでトレイズを見ている。彼は懐からなにやらカードのようなものを取り出して兵に提示した。

「ラトメディア神護警備部隊隊長トレイズだ。任務を終えて帰還した。通行許可を」

「はっ、お帰りなさいませトレイズ様！」

兵士はすぐに四人を通した。へとへとになりながら、ラファは、こうして見るとトレイズもなかなか貫禄があるものだな、と思った。

門の向こう側には、レンガ造りの建物が立ち並んでいた。灰色の舗装されたレクセの道とは違って、ラトメは全てがレンガでできている。赤茶色のレンガが夕陽にきらきら輝いて、暖かい光を受け止めていた。

神聖都市ラトメディア。

世界統一戦争の時代、ここは一番の激戦区だったという。

レクセと、北のシェイルとの連合軍がこの場所へ押し入り、家々に火を放ち、人々を女子供も見境なく斬り殺した。今は夕陽にきらめくこの場所も、当時は炎に巻かれた恐怖と悲鳴が渦巻く土地だったのだ。

メアルの授業を思い出して、ラファは息を吐いた。

人々が買い物を楽しむ今の光景からは、とても想像もつかない歴史である。

前で、トレイズがこちらを見て、笑った。

「さてと、まず神護隊の本部に行くか！さっさと帰ってみんなを安心させてやらなきゃな」

「神護隊って…なんかお堅そう」

「まったくもってそんなことはありません。一人…いや、若干二人ほど、問題児がいますから」

「問題児？」

エルディは溜息をついた。そしてなにやら説明しようと口を開いた。しかし、その言葉は声になることなく、道のむこうから飛び込んできた叫び声にかき消された。

「トレイズさん！」

喜びに満ちたボーイソプラノの声。

見ると前方に、神護隊の制服に身を包んだ金髪の少年が、みかん色のまん丸の瞳を輝かせてこちらを見ていた。

知り合いだろうか。ラファが隣のトレイズを見上げると、唇の端が引きつっていた。会いたくなかった顔のようだ。首をかしげてエルディに視線を移すと、彼も似たり寄ったりな表情である。

「げ、レイン…」

「『げ、』じゃないですよ！」

よく響く声で叫ぶと、トレイズに詰め寄る。

「なんで僕を置いて行っちゃうんですか！僕：僕、寝ないでずうつと待ってたのに…」

「君がいたところでうるさいし足手まといだよ」

「エルデイ！君もだよ！いつもいつもトレイズさんに付き添ってさ！僕もエルミも、今日帰ってこなかったら、レクセまで迎えに行ってる所だったんだよ！？」

きゃんきゃんと犬のようにわめく少年。

突然の登場にラファとマユキが間抜けに口を開いていると、彼はひとしきり騒いで満足したのか、ようやくラファ達に気付いてにこりと笑いかけてきた。

「あなた方が赤の巫子ですか？」

「い、いや、俺は…」

「そうだよ。ラファにマユキだ」

トレイズがラファの台詞をさえぎって返すと、彼は嬉しそうに目を輝かせた。

「うわあ…初めまして、僕レインっていいです！ラトメディア神護隊神宿塔護衛室所属です！」

「はあ…」

マユキとラファとしっかり握手するレイン。噛みそうな肩書きだな、ラファは内心で思いつつ、こっそりエルデイに尋ねた。

「あれが”問題児”の一人？」

「ええ。もう一人と組んだら更に酷いことになりますよ」

あれ以上のマシンガントークが繰り広げられる様がラファには全く想像できず、とにかく恐ろしいことだけは分かってラファは肩を落とすトレイズたちに少しばかり同情した。

「レイン、皆本部に揃ってるか？」

「全員いますよ！…あ、でもエルミはちょっと女の子に呼び出し食

らって外出してますけど」

「またか…」

トレイズが大きく溜息をついた。深い嘆息だった。神護隊長はなかなか苦勞する職種らしい。

「とにかく行くか。クルドに頼んでラファ達泊めてやらなきゃ」

ラトメ神護隊。正式名称をラトメディア神護警備部隊。

確か五、六年前に設立された、”神の子”直属のラトメ唯一の軍であり、最大の精鋭部隊だ。全員が流民や孤児で、女性は入隊できない。神護隊員である間は結婚もできないと聞いたことがある。神の子と隊長の命令は絶対だ。逆らえば極刑ものだという。

そんな厳しい職業でも、貴族相当、またはそれ以上の暮らしが約束されるものだから、各地の腕っ節に自身のある男達が集まってくるらしい。ラファたちの同級生にも、何人か神護隊へ入隊したいと漏らしていた奴らがいた気がする。

そんなところだとは言え、一応神官職なのだから落ち着いたところなのだと、ラファは勝手にそう思っていた。レインと出会って早々にそのイメージは崩れ始めていたが、それでも本部の広い、そして細かく上品な彫刻がほどこされた白い壮麗な神殿を見上げて、ラファは再び期待を寄せていた。

大きな石造りの門を、レインとエルディがそれぞれ押し開けて、二人は深々と頭を下げた。

「お帰りなさいませ、トレイズさん」

「……」お帰りなさいませ！」「……」

門の奥、ホールに敷かれた鮮やかな赤色の絨毯の両脇に、神護隊の人々と思われる白い詰襟の軍服に麻のコートの青年達が、トレイズ

たちが足を踏み入れるなり一斉に礼をした。ぴたりと息の合った光景にラファとマユキは息を呑むが、トレイズは全く気にせず、にかりと笑って言った。

「おう、ただいま！」

するとホールの奥から、カツカツとブーツの踵を鳴らして、濃灰色の髪をぴっちりとした決めた吊り目の青年がやってきた。…言っちゃ悪いが、トレイズなどよりもずっと隊長のように見える。彼は神経質にトレイズの数歩手前で立ち止まると、斜め四十五度にすらりと一礼した。驚くほど洗練された動きだった。

「お帰りなさいませ、トレイズさん。道中何事ありませんでしたか？」

「ああ、ただいまクルド。しばらく本部を空けてすまなかったな。…で、こいつが例の、ラファとマユキだ。宿取らせるのも悪いしさ、しばらく神護隊で預かってもいいよな？」

朗らかにトレイズが問うと、対するクルドは少し唸って、ちらとマユキの方を見た。

「……しかし…神護隊は女性禁制…」

「クルド、隊長命令は絶対だよ！」

レインに言われ、クルドは言葉を詰まらせる。しばらくして、深々と息を吐いた。

「………今回だけですよ」

「やрийい！ありがとなクルド！」

トレイズが無邪気にそう言って、ラファ達を早速案内しようと腕を引っ張ってきた。神護隊でのトレイズとクルドの関係が垣間見えた。

一方で、エルデイが誰かを探しているようにきょろきょろと辺りを見回している。ラファは首をかしげた。

「……エルデイ？」

「いや…」

クルドに何か尋ねようとエルデイが口を開いたその時、神殿の門が勢いよく開いた。

「エルデイ君が帰ってきたってほんとですか!？」

けたたましい音に一同はびっくりとして入り口に視線を走らせる。そこにいた人物に、ラファとマユキはおやと目を見開いた。

叫んだのは、……エルデイに瓜二つの少年だった。

肩にかかった滑らかな銀髪も、澄み切った瑠璃色の瞳も、人形のようない肌も…何もかもがエルデイと同じで、しかしその表情はエルデイのものよりも温和な印象を醸し出している。エルデイ同様女顔だが、ちよつとした行動が粗雑なエルデイと比べると、彼は慌てて扉を閉めるその拳動ひとつとっても優雅で、ここが神護隊という場でなければ性別が判断できなかったことだろう。

少年はエルデイを見つけるなり、ぱあ、と顔を輝かせた。正直、エルデイがこんな顔をしていたらと思うただけで背筋が凍った。エルデイが心なしか少し表情を緩めて、その名を紡いだ。

「エルミ」

「お帰りエルデイ君!あ、トレイズさんもお帰りなさいませ!ほんとに心配してたんだよ?僕もレインと一緒に迎えに行く予定だったんだけど、女の子にまた呼び出されちゃってさ…」

「エルミ、客人にごあいさつしろ」

息せき切って語りだすエルミに対してクルドが一喝すると、彼はくるとラファ達に振り向いた。…何故だかすこし、こちらを……特にラファを…見て、目を丸くしたような気がしたのは、気のせいだろうか。しかし瞬きした後、少年はエルデイに向けたのと同じ笑みでラファとマユキに言った。

「初めまして、エルミです。クルドさんの補佐をしています」

「僕とは双子なんですよ」

双子。どおりで似ているわけだ。

「あ、そうだエルディ君。僕ちよつと提出しなきゃならない書類があつたんだつた！あとでレクセの話、聞かせてね。…お二人とも、ごゆっくり休んでくださいね」

少年はもうひとつラファ達に笑いかけると、トレイズに一礼して去つていった。突風のような少年である。ラファとマユキは顔を見合わせた。

誰も知らない。

そしてラファ達から見えない場所に行くと、大きな窓からオレンジ色に染まった空を見上げて、彼は酷く哀しげに呟いたのだ。

「レーチス…あなたは、自分の血縁でさえも巻き込むと言つのですか…？」

act・6 神宿塔

次の日。

日が高くなりつつある時間にラファは起きた。すこし朝寝坊したせいか、今度はラファよりもマユキの方が先に起きたらしい。割り当てられた部屋を訪ねてみても、マユキは既にいなかった。

一体どこへ行ったのだろう。

マユキの部屋の前で首をひねっていると、廊下の奥から呼びかけられてラファは飛び上がった。

「あれ、ラファ様？」

見るとエルミ（二人の見分けがまだついていないが、エルディの場合驚いた顔など見せないから、きっと彼はエルミだ）が、分厚い書類の束を抱えてこちらへと駆け寄ってきた。

「エルミ……だよな？」

「はい、おはようございますラファ様。マユキ様でしたらトレイズさんの執務室にいらっしゃいますよ。よろしかったらご案内いたしますでしょうか？」

「いいのか？」

「僕もトレイズさんに書類を提出するところだったんです」

にこりとエルミは笑って、書類の束を少し持ち上げてみせる。ちょっぴりお茶目に舌を出す姿に好感が持てた。昨日はあまり話す機会もなかったが、朗らかな少年らしい。それならば、とエルミの言葉に甘えてついていくことにして、彼の隣に並ぶ。皆もう起きだしているのか、宿舎の廊下はひどく静かなもので、ラファとエルミの足音が大理石の床にやけに冷たく響いた。

エルミは話し上手だった。

うまく巫子だのファナティライストだのという重い話題を避けて、ラファのルイシルヴァでの生活や、レクセのことについてさらりと話を投げてくる。少しでもラファが答えにくそうに口ごもると、それとなく話題を変える手際も完璧だった。昨日、彼が女性に呼ばれていたという話を聞いた気がするが、なるほどこの顔でこの性格ならば、もてるのも無理はない。

少し話題が途切れたところで、エルミが一拍置いた。さりげなく問いかけてくる。

「そういえば…不躰な質問ですみません。ラファ様は、ご両親はご健在ですか？」

「ん？ああ。俺は寮暮らしだからここ一年会ってないけど、多分元気でやってるよ」

「へえ。じゃあ、お祖父様や、お祖母様は？一緒にお暮らしなんですか？レクセじゃあ、そういう家も多いですよ」

「いや、うちは親と三人暮らし。いや、今は二人暮らしか。確か、母方はもう両方とも亡くなってるらしいな。父方の方はばーちゃんだけ生きてて、父方のじーさんは…えーと、なんか、誰だか分からないらしい」

「分からない？」

ああ、とラファは頷いた。エルミの顔が神妙になったので、妙な話題に持っていつてしまったと、ラファは内心で舌打ちした。

「どうもうちの父さん、ばーちゃんと行きずりの男との間に出来た子供なんだつてよ。話によると俺と同じ青い目らしいけど…」

「へえ。青い目。それは…それは、さぞかし綺麗な瑠璃色の瞳なのでしょうね」

そこまでエルミが言ったところで、あれ？と首をかしげた。彼の意味深な物言いがやけに気にかかった。ふと隣の空気が変わって、ラファは振り返る。エルミが数歩うしろに立ち止まって、薄く微笑ん

だまま、ラファをじっと見ていた。

その瞳を見返して、ラファは瞬いた。エルミの瞳の色が、自分の持ったものと、まったく同じに見えたから。

「エルミとか、エルデイの目も、瑠璃色だよな」

「そうですね」

「あはは、もしかして遠い親戚だったりして」

「そうかもしれませんね」

「……？」

エルミの口調があまりに淡々としているので、とうとうラファは眉をひそめた。彼の瞳がきらきらと光っている。廊下の灯りの具合だろうか。少し不気味に感じた。

「どうか、したのか？」

「いえ、やっぱりだと、思ってた」

興奮さえした口調だった。いよいよおかしい。

「何が、やっぱり？」

「……エルデイ君には内緒ですよ？」

そしてエルミは歩き出した。ラファの隣に立って、コートのポケットをこそそそと探り出す。

「どこかで見た目だと思ったから。僕、あなたのお祖父様を知っているかもしれません」

「えっ!？」

「…その男は、強い魔力を持っていて…僕が最後に彼と会ったのは、確か二、三年前。僕がここに来て間もない頃です」

「どういう…!？」

エルミはそして、コートのポケットからシンプルな腕時計を取り出した。

彼はラファの手を取り、その左手首に、鎖が二重になっているベルトを通して留めた。

見ると、その時計の盤面には数字がなく、何本も針がついていた。

「…？これは…」

「彼から預かったんです。

『もうじきラトメに、自分と同じ瑠璃の瞳を持った少年が来る。彼は自分の孫だ。どうか道を指し示してやってくれ。この時計は彼に渡してくれ、きつと役に立つはずだから』って」

「……俺に…？」

「この時計の使い方、僕は知らない。けれど、これをいつか必ず、あなたは必要とする。彼はそう言っていました」

沈黙が、流れた。その時のエルミの視線は、とても鋭くて…エルデイにそっくりだと、ラファは思った。

しかし次の瞬間、また彼はにっこりと笑って、ぱたぱたと数歩先へと駆けた。

「まあ、今言えることはそれくらいなんです。同じ瑠璃の目だからって、ラファ様がそうだとは限らないんですけど…でも、彼と貴方はとてもよく似てる。どうぞその時計を、役立てて下さい」

「え、でも、もし…その人がおれの祖父さんじゃなかったらどうするんだ？」

「そのときは、そのときです。でも、僕、けっこう勘が鋭いんですよ？」

そういう問題だろうか、にわかには信じられない話だ。

立ち止まっているラファに、エルミは苦笑した。

「…いきなり変な話して、ごめんなさい。はやく執務室に行きましょう？」

「なあ、エルミ。……その男の、名前は？」

エルミはくるりと振り返って、澄んだ声で言った。

「レーチス」

「お、遅かったなラファ。寝坊か？」

「違う！」

「おはようラファ」

マユキは、トレイズと朝食を食べていた。

朝食はいつも抜いているラファはその食事風景だけで満腹になりつつも、マユキが座っているソファに自分も腰掛けた。それを見計らったトレイズが言う。

「さて、と。今マユキと話してたんだが、今日はフェル様に会いに行くぞ」

「現”神の子”、フェルマータ・M・ラトメ様は、ラトメディア三尖塔がひとつ、”神宿塔”にいらっしやいます」

トレイズの脇に立っていたエルディが、執務室の窓から見える三本の塔のうち、真ん中にあるものを指した。エルミが続けて説明する。「両脇の塔は、それぞれ”舞宿塔”と”貴宿塔”です。舞宿塔は舞い手達の、貴宿塔は貴族達の、そして神宿塔は神官達の住んでいるところです。フェルマータ様は神宿塔の最上階にある神殿：かつて世界統一戦争の時代、ロゼリー帝国が滅亡した際に、世界創設者が本拠にしていたソリティエ神殿にいらっしやいます」

「…へえ、そっぴや随分前にメアル先生がそんなこと言ってたような…」

ラファとマユキが感心して塔を見ていると、トレイズは食後のコーヒーに口をつけながら言った。

「お前ら、この世界の古代史についてちゃんと思い出しておけよ。赤の巫子の説明はその辺りの歴史が重要になってくるからな」

古代史か。

ラファはなんだかわくわくしてきた。

神宿塔は、神護隊本部からそう遠くない場所にあった。木で出来た門の前に、レインが槍を携えて立っている。

「おはようございますトレイズさん。通行証はお持ちですか？」

「ああ」

トレイズは懷から、赤地に羽のモチーフがついたカードを取り出して、レインに見せた。ラトメに入る時に兵士に見せたのと同じものだ。

「はい、どうぞお通りください」

レインはにつこり笑うと脇に下がった。門を通りながら、ラファはトレイズにこっそり問うた。

「昨日となんか…性格が違わなかったか？」

「仕事中は真面目なんだよ」

トレイズは苦笑した。

門を潜り抜けて塔の中に入ると、その光景にラファとマユキは思わず感嘆の溜息を漏らした。

そこはとても静かだった。

息をするのも緊張してしまいそんな壮嚴な雰囲気、大理石の傷ひと

つない床には、一本の真つ赤な絨毯がまっすぐに敷かれており、その両脇には等間隔で白い、細かい彫刻が左右対称に所狭しと、かつ上品に彫られた柱が立ち並び、奥には礼拝堂と思われるスペースにベンチがいくつか並び、一番奥に漆塗りの机が置かれ、両脇に一對の蝋燭がゆらゆらと炎を揺らしていた。机の背後の壁には、淡い金色の大きな十字架が架かっている。裏に大きなステンドグラスがはめ込まれているようだが、十字架が邪魔でよく見えなかった。天井には大きなシャンデリア。これもまた淡い金色のそれは、自らが発する光をきらきらと反射して、幻想的な灯りを塔内に落としていた。広いホールの端に、上階へと続く螺旋階段が大きく構えている。

「すごいだろ？」

感動するラファとマユキに、嬉しそうにトレイズが言った。

「俺も初めて来た時はびっくりしたな。…でも、今日はやたら静かだけど」

「いつもは、違うの？」

トレイズは首を横に振った。

「礼拝日はいつもこんな感じだけど…今日はそうじゃないし。もしかして誰か貴族のお偉いさんでも来てるのかもな」

そしてトレイズは円形のホールの中心へと向かった。彼についていくと、十人くらいが入れそうな大きめの円形の段差があり、トレイズはその中心に立ってラファ達を手招きした。三人が立つと、段差に彫られた魔法陣のような紋様が、淡い光を発した。続いて、やわらかい女性の声が、ラファ達の頭に直接響く。

『何階へ？』

「最上階、ソリティエ神殿へ！」

トレイズが声に出して言うと、妙な浮遊感を感じて…

一瞬後、ラファ達は全く別の空間に立っていた。
円形のホールとその雰囲気から、そこが神宿塔の中であることは分かったが、そこには礼拝堂はなく、端の階段は下へ続くものだけ。
ルイシルヴァ学園にもある、自動階段式の転移装置だ。

見ると、奥に一本のハシゴが下がっていた。最上階と言いつつ、まだ上の階があるらしい。

そしてその前に青みがかった銀髪を結った、エメラルドグリーンの瞳の綺麗な女性が、右手に身の丈より長い槍を握ってこちらを見ていた。

女性はゆっくりと頭を垂れ、柔らかい声で言った。

「お待ちしておりました、赤の巫子様。私はここの門番をしており
ます、神宿塔護衛隊長、サザメと申します」

そして女性は頭を上げると、ふわりと花のように微笑んだ。ラファは思わず、顔が赤くなるのを感じた。エルディやエルミも端正な顔立ちだったが、彼女は大人の女性の色香を思わせる美女だった。隣のマユキが呆れたような視線を向けてきた。

トレイズが一步前に出てカードを見せた。

「サザメさん、フェル様に会いに来ただけだ」

「敬語を使いなさいな、トレイズ。フェルマータ様なら今貴宿塔の
塔長とお話中よ」

「へえ…どおりで妙に静かだと思った」

そしてトレイズはラファ達を振り返った。

「ラファ、マユキ。彼女はサザメさん。見ての通りのエルフだ。俺
がラトメに来たばかりのとき世話になったんだ」

言われて気がついたが、よく見ると彼女の耳はぴんと長くつながって
いた。…エルフの一番の特徴である。

エルフというのは人間を忌み嫌っていて、人里には決してやってこようとせず、森に引っ込んでいるものだと思っていたが…

「昔、私もフェルも若かった頃、彼女に命を助けられてね。今その恩を返してるの。来た当初は人間なんて大嫌いだったんだけど、トレイズの世話をしているうちに愛着湧いてきちゃったのよ。おかげですっかり居ついてるわ」

ラファの疑問を見透かしたようにサザメは笑んだ。マユキが隣で嬉しそうに言う。

「エルフ、初めて見た…」

「…出たよ、マユキの非現実好き」

「…ラファだってサザメさんに見とれてたくせに」

お互いに毒づいてにらみ合いを始めそうになったとき、ハシゴから誰かが降りてきた。

a c t・6 神宿塔（後書き）

本編で多分出てこないと思うのでここでいっただけ解説。ラファ君の将来の夢は考古学者なので、体力に関してはてんで駄目ですが歴史は得意科目です。

「まったく……」神の子”だからといって何もかも思い通りになるとでも思っているのかあの性悪女が！エルフの門番に孤児の護衛隊：奴め、貴族をなんだと思っているのだ！」

「あらエツフェルリス殿。お話はお済みですか？」

自分に対する悪口に気付いているのかいないのか、サザメは下りてきた裕福そうな男に朗らかに話しかけた。隣のトレイズはあっけらかんとしてその様子を見ている。

エツフェルリスと呼ばれた男は、ぴたりと立ち止まり、一瞬憎憎しげな凶悪な視線をサザメたちにぶつけたものの、すぐに頬を引きつらせて無理矢理に二人に笑いかけた。

「やあ、門番さんに神護隊長さん。お元気ですかな」

「おかげさまで」

さらりとトレイズが言うと、エツフェルリスは肩を怒らせてワープ地点へと立ち、「一階！」と怒鳴って消え去った。

その様子を見送って、マユキが尋ねた。

「今のは？」

「貴宿塔の塔長……つまりラトメーの大富豪、エツフェルリスよ。プライドがやたら高くて、エルフや孤児、つまり私たちを毛嫌いしているの」

「フェル様とは馬が合わないのさ」

呆れたように肩をすくめあうサザメとトレイズ。ラファは首を傾げた。

「……の割には、あまり気にしてないんだな」

「いちいち気にしてたらこっちの身が持たないさ。ああいう人種は適当に言わせておけばいいんだ。エルデイが前怒って魔術乱射して大惨事になったけど」

「きつと今、フェルマータ様はエツフェルリスを言い負かして機嫌がいいと思うわ。すぐにお会いになる？」

サザメはエツフェルリスが下りてきたハシゴを槍で指した。あの先に”神の子”がいるらしい。トレイズは頷くと、一番にハシゴに足をかけた。

フェルマータ・M・ラトメ。

五大都市の中でも最高の力を持つラトメディアの指導者で、ラトメの人々は彼女をそれこそ”神の子”のように崇めているという。ラファたちも、宗教の授業で最初に習う人物の名なので、その人物のことは耳に馴染みがあった。

そんな人物と会うのかと思うと、今更ながらに緊張してきたが、トレイズはいやに彼女に親しげなようだった。ファナティライストの”世界王”と並んで、この世界の宗教の大將みたいな存在のはずだが、そんなに気張る相手でもないということだろうか。それとも彼の気質ゆえか。

ハシゴを登った先にあったのは、真っ暗い広い部屋だった。今までが明るかっただけに何も見えずにラファ達が目を凝らしていると、暗闇の奥から、聞いている側が安心するような優しい声が響いてきた。

「ようこそソリティエ神殿へ。赤の巫子様……」

女性の声に呼応するように、ふわりと部屋が明るくなった。

汚れひとつ見当たらない、美しい広間の奥……赤いクッションのソファに、その女性は座っていた。

小麦色の長い髪を後ろでゆるくひとつに束ね、すこし青白い透けるような肌。白い着物姿の若い女性の瞳は、血のように濃い紅色だった。異質な瞳をこちらに向けられて、ラファはぎくりとした。

「お初にお目にかかります、ラファ様にマユキ様。私がこのラトメディアの最高権力者、フェルマータです」

そう言つてフェルマータはゆるやかに頭を下げた。優雅な動きだった。隣のマユキは、そのうつくしい佇まいに感極まっているのか、頬を紅潮させたまま何も言えないようだった。

フェルマータはマユキの反応など慣れっこだとばかりに気にも留めず、トレイズを見た。

「お疲れ様でした、トレイズ」

「いえいえ、フェル様の命令なら。それに結局任務失敗でしたし」

「それは不問としましょう。無事保護でただけでもよしとしなければ」

そしてフェルマータは軽く目を伏せてひとつ息を吐くと、表情を引き締めてラファとマユキに向き直った。

「さて…お二方をお呼びしたのは他でもありません。あなた方に、

”赤の巫子”を集めていただきたいのです」

「”赤の巫子”を？」

「なんで俺達が？」

何を言い出すかと思えば。首をひねるラファ達に、フェルマータは頷いた。

彼女が細い右腕を前にかざすと、ラファ達の周囲に、赤い光が丁度十個現れて、それぞれが違う形の紋章を形作った。

「”赤の巫子”…それは十人の『哀しき者達』。歴史の節目に現れるという彼らの役目を、あなた方はご存知ですか？」

「役目：？」

「『赤の巫子、不老不死の身体と絶対無敵の魔力を持ち、歴史の境に現れて世界を救うだろう』ってやつですか？」

ラファの台詞に、フェルマータはゆるゆると首を横に振った。

「『巫子』の歴史には、とても哀しい物語があるのです。書物にも記されないほどの、悲劇が」

世界創設者。

それは千年も昔、世界中を巻き込んだ大戦争…今「世界創設戦争」と呼ばれる恐ろしい戦いを集結させた、二十人弱のメンバーのことを指す。

戦争の原因は、今となつてはわからない。

しかし、人というのはくだらない理由でも大きな傷を作るもので。戦う理由すら分からずに、人々は互いを殺しあつた。

今、世界では、中央の孤島にある神都・ファナティリストを中心として、孤島をとりかこむようにしてあるドーナツ型の大陸を五つの都市に分けている。

北には軍事都市シエイルディア。

南には神聖都市ラトメディア。

西には湖岸都市クライディア。

そして東には、学園都市レクセディアと、自然都市インテレディア。エルフの森を除けば、今この世界には、ひとつの巨大な国の中に、六つの自治区があるのだ。

しかし、世界創設以前…「創前時代」と言われる時は違った。

そのときはまだファナティリストはなく、中央の孤島はエルフの根城だった。

そして今の五大都市はまだそれぞれが「国」であり、その上全部で国は西に位置していた、ヤイン国とロゼリー国を含んで七つあった。この二つの国は戦時中、当時の大国であったレクセとシェイルによって滅ぼされてしまい、現代には残っていない。

その滅ぼされた国のうち、この物語では、女王が統べる帝国・ロゼリーが重大な鍵を握る。

この国は世界創設者の原型を作ったとも言われており、当時は戦争に反対するレクセやシェイルの反逆者などが集まった一団に過ぎなかった世界創設者の拠点ともなっていた。

結局そのすぐ後にロゼリーは攻め入られてしまい、女王が殺されて滅ぼされてしまったのだが、当時の王族の中でたった一人だけ、生き残りがいたという。

それが、エルミリカ・ノルツセル。

目の見えなくなる病気を患う一方で、未来を読むことが出来る「予知夢の君」として次期女王と謳われていた少女。彼女もまた、世界創設者の一人であった。

そして「彼女こそが、”赤の巫子”の考案者なのだ。

ノルツセル。

双子神エルの一部といわれる一族で、不老不死のはずの人々。

しかし不老不死といえども、彼らは本当に際限のない寿命を持つというわけではなく、彼らにもひとつだけ、「死ぬ方法」というものがあった。それが、レクセの秘密兵器であった、「魔弾銃」といわれる武器。これによって、ロゼリーの王族は大半が処刑されてしまったと伝えられている。

だからエルミリカは考えたのだ、完全な「不老不死」を。

天才児と言われていた彼女が”赤の巫子”を考案するのに、さして時間は必要なかった。

しかし、その代償には、大きな力が必要だった。

それは「高い魔力を持つ者の魂」。

つまり、命だった。

しかもそのほかに代償になりそうなものは、この世界のどこにも存在しなかった。

「人を死なせたくないという思いから来たこの秘術が、人を死なせてしまうなんて！」

エルミリカはとうとう、この術を禁忌として、術を記した書に強い封印を施した。

ノルツセル家だけが…つまり、今となってはエルミリカだけがこの本を開けられるように。

これで、もう禁忌が起こる必要はない…エルミリカが安心した直後に事件は起こった。

世界統一戦争が終結し、中央にファナティライストを建てた後、エルミリカが崖から落ちて死んだのだ。原因は、事故だとも、暗殺だとも言われている。今となっては真相は闇の中。

しかし、エルミリカの死に、ひととき強い怒りを示した者がいた。

世界創設者の一員であるミフィリと、そして、今は名を伝えられていない「異分子」と呼ばれている男だった。

エルミリカは知らなかったのだが、二人は亡くなったロゼリー帝国の女王の息子で、女系一族しか王位を継げないために幼い頃女王の伴侶に捨てられてしまった、れっきとしたノルツセル一族の者だったのだ。

エルミリカが不老不死の研究をしていたことを知っていた二人は、そこにエルミリカを生き返らせるヒントがないかと探して、…見つ

けてしまった。” 赤の巫子” に関する、エルミリカの手記を…

その内容を見て、二人の男は絶句した。

今生きている人間を死なせないようにするのも、多大な犠牲が必要なのだ。

死んだ人間を生き返らせるとしたら… 考えただけで恐ろしい。

二人は他の方法がないか探し……… そして見つけた。

しかしその魔術が完成するには、強い魔力と、そして何百年もの歳月が必要だった。

並の人間には、とても成し遂げることでできない代物の、しかし唯一の手がかりを無駄にしないため、二人はとうとう、手を出してしまったのだ。絶対無敵の魔力を持つ、「赤の巫子」の秘術に。

しかし、そのためには犠牲となる命が必要だった。だれか一人、魔力の強い誰かを殺さなくてはならない… そして、「異分子」は決意した。

誰かを犠牲にするくらいなら、自分が犠牲になろうと。

「異分子」は、自分の命を代償とすることをミフィリに伏せて、儀式に挑んだ。そしていよいよ、代償を支払わねばならなくなったときのことだった。

ミフィリが、魔方阵の中へと入ろうとした「異分子」を押しつけて、代わりに犠牲になった。

「異分子」は、自らの身に宿した” 赤い印” を見て、呆然とした。そして悟ったのだ。ミフィリには自分の考えなどお見通しで、彼は自分を生かしたのだと。

しかし、他の世界創設者は「異分子」のやってしまったこと、そし

てミフィリの死を知るなり「異分子」を責めた。仲間を殺した大罪人だと、ファナティリストから追放し、彼の名前を歴史から抹消したのだ。それでいいのだと、その時は誰もがそう思っていた。

数年の後…

ようやく世界創設者達は危機感に駆られた。

強大な魔力を持った「異分子」が、自分が追放されたことで世界を憎み力を奮ったら？

一体我々に、どれだけ「赤の巫子」の彼を押し留めるだけの力があるだろう？

答えは既に出ていた。”赤の巫子”に対抗できるのは、同じく”赤の巫子”だけ。

ならば自分達の命を持つて”赤い印”を作り出し、いずれ現れる「異分子」を消滅させるに相応しい人物に宿るようにしよう。そして、かつての世界創設者の中の幹部九人が、”印”を創りあげ、そして……消えた。

「じゃあ、巫子は、その『異分子』を殺さなきゃならないのか…？」

ラファの問いに、フェルマータはゆるゆると首を横に振った。

「『異分子』は……彼は、既にいません」

「えっ…じゃあ、”印”は、もう必要ないんじゃない？」

マユキも言っと、トレイズが苦々しげに言った。

「そうじゃないんだ」

「え…？」

「敵は、まだ別にいるんだよ」

act・8 倒すべき敵

「別につて…？」

戸惑うように視線をトレイズからフェルマータに移すと、彼女はまっすぐにこちらを見て、言った。

「そのような顔をなされるのも、無理もない話。」赤の巫子”の役割は『異分子』の消滅。けれど『異分子』は既に亡くなっている…なら、マユキ様の仰ったとおり、印はもう役目を果たしているはずなので。本来自ら、赤い印が再びこの地に現れることなど、万に一つもありえなかった。

けれど、ご存知の通り、巫子は歴史の節目にたびたび現れた…つまり、役目は他にまだあるのです」

フェルマータが手招きするように手を動かすと、ラファ達の周囲を取り囲んでいた紋章のうち、ひとつが輪から飛び出して、彼女の元へと吸い寄せられていった。

フェルマータの手のひらの上で静止した紋章をラファ達に見せて、彼女は言った。

「”第九の巫子”…かつて『異分子』とミフィリ様が創りあげた”印”です。『異分子』の死後、この印はどこかへと消え去ってしまった。人びとは、もう印は失われたのだと、そう思っすらいた。しかし月日が流れ…”第九の巫子”が、再びこの世に現れたのです」

「異分子が生き返ったのか！？」

「いいえ。」

他の九つの印が、『異分子』を倒すに相応しい者を選んだように、第九の印もまた、『異分子』の消えた後、後世でその印を宿すに相

応しい者を選んでいたので…

すなわち、力を追い求め、世界を破壊し尽くそうと企む者を」

しばらく、誰もが黙ったままだった。ラファもマユキも、その先が簡単に予測できてしまった。

猶予は費えた。ついに、フェルマータが口を開いた。

「お分かりですね？あなた方”巫子”は今、新たな”異分子”となりうる第九の巫子を滅ぼ」「やめろよ！」

耐え切れなくなって、ラファが叫んだ。

「巫子だなんて…そんなの、御伽噺だろ！？信じられるわけないじゃないか！マユキはただのレクセの学生で、人よりちよつと武術が得意で夢見がちでもただの女の子で！人なんか…殺せるわけないんじゃないか…」

か細い声で言い、うつむくラファ。マユキは絶句したまま何も言わなかった。神殿内を沈黙が包んだ。するとトレイズが追い討ちをかけるように厳しい声で言った。

「人事みたいに言うな、ラファ」

「え…？」

「お前も、その”巫子”の一人なんだよ」

ラファは目を見開いた。赤の巫子？俺が？

「まさか！だって…だってラファには”印”なんて…」

マユキがすかさず反論するが、フェルマータはそれにゆるゆると首を横に振った。

「赤い印は、目に見えるところばかりにあるとは限らないですよ、マユキ様…」

フェルマータはまた右腕を一振りした。するとラファ達を取り囲ん

でいた印が流れるようにフェルマータの元へと向かい、今度は彼女を囲んで浮かび上がった。

「眼”、”肩”、”左耳”、”髪”、”左手首”、”左手”、”左足”、”右手”、”左手首”、”背中”……十ある印のうち九つは、確かに目で捉えられる位置にある。ですが……”第二の巫子”の印は、”骨”。これは私、眼を印とする第一の巫子以外に、見ることはできません」

骨。ラファは自身の両手を見下ろした。

この肉と皮の奥にある、白いはずの骨組みが……マユキの髪のように血色をしているというのか？信じられるか。肉を引き裂いて見れば分かるとでも？自分は、自分たちは、この”神の子”とかいう双子神の代行者を名乗る女に、だまされているのではないか？

「ラファ」

トレイズが、呆然と固まるラファに声をかけた。

「ラファ、決めるのはお前だ。……マユキも。いきなりラトメまで連れてこられて、”あなたが巫子です”なんて言われたって、納得できないことくらい分かっている。巫子としての役目を放棄しても仕方ないと思う。ただ……何の力もない民衆は、巫子にすぎるしかないんだ。分かってくれよ……」

トレイズは、とても情けない表情でラファ達を見ていた。彼はラファよりも背が高く、大きいのに、今はとても非力で、小さく見えた。

ラファはゆっくりと後ずさった。

「……………いや、だ……」

「ラファ、」

「嫌だ！！嫌に決まってるだろそんなこと！だって、だって世界を救うっていったって、それ、そんなの、人殺しだろ！ただの人殺しだよ！俺達に人殺しをしるだなんて、無理に決まってるだろ！？俺は絶対にレクセに帰るんだからな！！！」

「ラファ！」

マユキが呼び止める声も聞かず、ラファは駆け出した。立ち尽くすトレイズを押しつけ、下へと降りるはしごを飛び降りて、目を丸くするサザメを無視して、転がるように魔方阵の上へと飛び込んで…悲痛な声で、叫んだ。

「一階！！」

「ラファ…」

取り残されたマユキはうつむいた。

ラファが、いなくなってしまった。自分はどうすればいいのだろうか？トレイズが隣で戸惑ったようにハシゴとマユキを見比べていると、フェルマータが奥で小さく溜息をついた。

「まったく…最後まで話を聞いていたきたいものです」

「え…っ？」

「話はまだ終わっていないのですよ。この物語にはたったひとつだけ、…抜け道があるのです」

「抜け道？」

「フェル様！！あれは言うべきじゃないでしょう！あれはほとんど成功することのない…！」

「トレイズ。私は、彼らならば大丈夫だと信じています」

まっすぐにトレイズを見据えたフェルマータ。彼女はそして、何が何だか分からずにただおろおろしているマユキに視線を戻して、柔らかに微笑んだ。

「お教えしましょう、第九の巫子を殺さずに済む、物語の終わらせ方を…」

ラファは走っていた。

道行く人を掻き分け掻き分け、

迫り来るもの何もかもから逃げるように、

ラファは走っていた。

どうしてだ？

どうしてこんなことになった？

自分はただ、毎日を平凡に生きていただけなのに。

自分は普通に生きて、普通に死んでいくと、

ずっとずっと、そう信じていたのに。

ラファは立ち止まった。辺りに人気は無い。気づけはそこは自分の全く知らない道で。心の奥が、深い闇に飲み込まれるような不安に駆られ、ラファは情けなくもその場にうずくまった。

「畜生……」

ぼつりと呟いた台詞は、ラファの耳にだけかすかに掠めて、憎らしいほどの青空に、消えた。

「……………ラファ」

かつり、と。靴の踵が鳴って。聞きなれた声がラファを呼んだ。顔を上げると、彼女は途方に暮れた表情でこちらを見下ろしていた。

「ラファ、その……………あのね、」

「マユキ」

何か言おうとするマユキの台詞をさえぎって、ラファは言った。

「帰ろう、マユキ」

「え…っ？」

「帰るんだ、レクセに。こんなのもう全部嘘に決まってる。レクセディアに帰れば、きっと何もかも終わるんだ」

「ラファ……」

「だから、はやく帰ろう。帰ればまた、巫子なんて全部御伽噺に戻るんだから」

「……」

立ち上がってマユキを見るラファと、しかし彼女は目を合わせようとしなかった。その右手で、血色に染まった髪をもてあそんで、困ったように地面を見つめている。

いつもと同じ、マユキの癖。

聞きたくなかった。気づかないふりをしたかった。マユキが何をいうのか、分かってしまった。そりゃそうだ、ラファは、もう何年も彼女と一緒にいるのだから。

「……なに」

「あ、あのね、ラファ……その、私……巫子として、ここに残ろうかなって……思ってた……」

「……」

そして、予想していた言葉が外れることもないと知っていた。けれどそれでもショックには違いなかった。ラファもまたうつむいて、吐き捨てるように言った。

「……人殺しに、なるのかよ」

「それは、」

「もういい！」

マユキの肩が大きく跳ねた。何度も喧嘩した。相手は女の子だったから、暴力なんて振るったことはないけれど。下らない噂の真偽だとか、授業の討論とか、好物とか、そんな些細なことですぐに口論した。だけど、今は違う。そんなどうでもいい話じゃない。

ちくりと胸が痛んだものの、今更弁解する気も起きずにラファは、
「もういいよ」

マユキに背を向けて、ラファは逃げた。

「俺はレクセに帰る。ばいばい、マユキ」

本当かどうか分からない巫子としての役目から。

そしてそれを取り巻く、すべてのものから、ラファは逃げた。

a c t・9 逃げ出した少年

——エルミリカ、今日も研究かい？

誰かが尋ねている。自分の中にいる誰かが、少しうろたえた様子で答えた。

「いえ、今日は聖女と神都の様子を見に……」

自分が「知って」いることを、目の前のひとに悟られないように。きつと浮かべているだろう、朗らかな微笑みを崩させないように。こちらも唇に力を込めて無理矢理微笑んだ。彼はきつと気づいていない。彼の隣にいる男がそつと息を呑んだ。

——僕はまたエルフとの会議だよ。全く……エルフ達は堅物ばかりでやんなっちゃうよ

「無駄にプライドだけは高いですからね。……でもそれ、聖女の耳には入れないほうがいいですよ」

——勿論。あの子はそういう差別が嫌いだからね。じゃ、エルミリカ。神都見物の感想を待ってるよ。

「……………ええ、きつと……」

知っている。知っているのだ。自分がきつと、こうして彼と話すことは、もうないのだと。

なんだか、とても悲しい夢を見た気がする。一人の女性と、一人の

青年が話している、ただそれだけの夢だったのに、何故だか無性に切なくて、懐かしくて、そして涙があふれてきそうなほど、悲しかった。無性に家族に会いたくなかった。そんなノスタルジックな、ただの夢。しかしよくあるように、その印象ばかりが後味として残るばかりで、実際に何を話したのか、まるでおぼろげで、ラファは思い出せなかった。

ラファは大きく伸びをした。野宿なんて大嫌いだ。身体の節々が痛くてたまらない。むしむしとした気候がうざったく、ラファは布団にしていた上着を着ずに腰に巻き、シャツの袖をまくった。

あれからラファは、その足でラトメを飛び出した。行きはたった数日だったが、途中のモール橋までは転移呪文で飛び越えてしまったし、道中はトレイズやエルデイの後についていけばよかった。道なんてまるで覚えていない。旅も初心者のラファにとっては、レクセに帰ることも無謀なのではないかと薄々感じ始めていた。

マユキのことは考えたくはなかった。取り残してきた彼女が気になる反面、もう道は別れたのだからと自分に言い訳して。けれど、もし彼女がラファのことをあっさり忘れて、あのラトメの連中とほのぼのと笑っているのかと思うと、腸煮えくり返る思いだった。

レクセに戻ったら、メアル先生になんて言おう？ 巫子だなんて言うてもきつと信じてもらえない。第一自分が信じきれていないのだ。

「マユキは巫子になったからラトメに行きました」？ 馬鹿げている、そんなの。くだらない。現実主義のこの俺が、まさかこんな非現実的なことで悩まなければならいなんて。かといって、嘘を先生に告げるのもなんだか癪な話だった。大体嘘がばれたら、また罰則が増えてしまう。これまでそれなりに、そつなく学校生活を送っていたというのに、戻ったら大目玉だ。両親がなんと言っだろう。

一人頭を抱えて、しかしそれでも前に進もうと歩き出すラファ。と

にかく帰らなければじまらない。まず、無事にルイシルヴァ学園に帰るのだ。心に決めて、晴れ渡る街道を進んでいると、近くの茂みで、葉と葉の擦れるような音が、ふと耳に入って…

直後、ラファは囲まれていた。

「いきなり人殺しを薦めるのは流石に手酷かったんじゃない、フェル？」

「確かに少し言い過ぎたとは思うけど…でも最後まで話を聞かないラファ様にも非があるとは思わない？」

少し機嫌を損ねたらしいフェルマータは、しかし穏やかに笑んだままだった。古い友人である自分にも、彼女はポーカーフェイスを装うようになった。十数年前からずっとだ。それにサザメは小さく溜息をつくと、槍を抱えなおして口調を正した。

「フェルマータ様。第二の巫子様の保護に神護隊が向かいました」

「第五の巫子様はどうされていますか？」

「レインが引き止めています。第二の巫子様なら、第五の巫子様のお力を借りずとも、トレイズとクルド、それと銀髪の双子が付いておりますゆえ、十分事足りるでしょう」

「ええ。第二の巫子…ラファ様を、何としてでも無傷で保護してください」

サザメは一礼して神殿を出て行った。残ったフェルマータは、目を伏せ、呟く。

「そう…あの方を失ってはならない……絶対に」

ラファを大きく囲む、黒いマントの集団。巫子狩り！ラファははつと息を呑んだ。そしてその円の内側…ちょうどラファを向かい合うような形で、鶯色の髪の少年が、人懐こい笑みをこちらに向けていた。流石に数日でこの顔を忘れはしない。モール橋で見かけた、フアナテイライスト高等祭司、チルタだった。

「初めまして…というのも変だけど、こうやって面と向かって話すのは初めてだね。フアナテイライスト高等祭司、チルタです。よろしく頼むよ、ラファ…君？それとも第二の巫子と呼んだほうが、いいのかな」

「…！」

その台詞の冒頭。モール橋で彼と目が合ったことを思い出す。やはり彼はこちらに気付いて、それでわざとラファ達を逃がしたのだ。なぜだかは分からないが、いい予感はない。彼の笑みに、何か底知れぬどす黒い闇のようなものを感じて、ラファは息を呑んだ。

「な…何言ってるんだ？俺は巫子なんかじゃ…」

「認めようとしなくて、本当は分かっているんでしょ？君は覚えているはずだよ、『手を取った』時のことを」

「っ…」

図星を突かれて思わずたじろくラファに一步一步近づきながら、チルタは詠うように言った。

「どうして僕は、君と敵対しなきゃいけないんだろう」

「え？」

「世界を滅する第九の巫子…どうしてこの世の自分勝手な支配者はその暴挙を許されているのに、第九の巫子だけは許されないのかな？」

「な、」

「本当に遺憾だよ。もっと裁かねばならない者がいるだろうに、人々が恐れるのは第九の巫子のほうなんだ」

「何を…」

「ねえ、ラファ君？君もそうは思わないかい？そして、腹立たしい

とは思わないかい？」

チルタは立ち止まった。もう彼は目の前にいた。頭の中でけたたましく警鐘が鳴り響いているのに、ラファの足はすくんでしまつて動かなかつた。この微笑む敵が…ああ、なぜ自分は彼を「敵」と認識しているのだろうか…なんだかラファの见えない何かを見ているようで、恐ろしかつた。

ラファの深い青色の瞳をのぞきこんで、チルタは嬉しそうに微笑んだ。

「綺麗な目だね。さすが、裏市場で高価く取引されるのも分かるよ」「たか…っ!？」

「ああ、大丈夫だよ、こんな価値のあるもの、持ち主から離して売るなんてもつたいたい。これで銀髪だったらもつと綺麗だったらうに…男系血統ではうまく容姿が引き継がれないんだつたっけ」

「……何を、言ってるんだ…?」

銀髪?目?血統?容姿がなんだというのだ。自分は一般家庭に生まれたただの…

「君のその瞳の意味を考えたことある?」銀の腕時計”の持ち主からのおくりもの」

「!？」

ラファは左腕についた、数字の書かれていない時計を見下ろした。

エルミから受け取った、祖父からの…

そつえば、エルミやエルディは、銀髪で…

「僕はレーチスさんの思いを継ぐんだ。あの人成し遂げられなかつたことを、僕が実現してみせる。

それが…」

「エルミ！単独で前に出るな馬鹿！」

ふわ、と。

ラファとチルタの間に、銀色の糸のような髪が舞い上がった。

ラファの腕を引いて、チルタから遠ざけて、麻のコートがはためいて、右手には抜き身の剣をたずさえて、一人の少年が、チルタの前に立ちはだかった。

「……それが、君の使命だとも言っの？」

その少年…エルミは、冷たい声で言った。

「エルミ…」

「お探しましたよ、ラファ様。さあ、下がっててください」

背後を指して言うので、慌ててラファが振り返ると、丁度ラファを囲んでいた巫子狩りたちを、トレイズ、エルデイ、そしてクルドがなぎ倒したところだった。トレイズは、出会った時と同じように、頼もしい笑顔を浮かべて、ラファを見ていた。なんにも怒っていないのだと、そう主張するように。

「よお、ラファ。無事か？」

「トレイズ…」

「まったく、手間かけさせないでくださいよ。貴方が死んだら元も子もないんですから」

「エルデイ、少し黙れ」

クルドになだめられて、エルデイは肩をすくめた。そして一同は自然とエルミとチルタに視線を戻す。二人はそれぞれ細身の剣を構えて、不敵に微笑みあっていた。しかし瞳の色は冷え切っていて、辺りの空気もまた…凍っていた。

「そこを通してくれるかな、エルミ。まだ僕はラファ君との話が途中なんだ」

「どうせ銀髪蒼眼は高く売れるだの」レーチス教”の話だの持ち出して、ラファ様を恐がらせていたんでしょうチルタ？だから僕は君が大ッ嫌いなんだよ。さっさとお国に帰って世界征服の算段でも立てたらどう？」

「あはは、相変わらずの口の悪さだなあ。でもレーチスさんを尊敬するこの気持ちを宗教扱いしないでくれるかな？君こそラトメなんかでその力を腐らせていては勿体無いとは思わないのかなあ？」

穏やかな笑い声を上げる二人。トレイズとクルドは、頭を抱えた。

「また始まったか…」

「あれ始まると長いんだよなあ…」

「あ、あの二人も知り合いなのか？」

エルディだけはいいい気味だとばかりに鼻を鳴らして二人を見、暗い影を落とすトレイズ達を尻目にラファの問いに答えた。

「よく分からないけど、あの二人は僕より前からの知り合いらしいです。顔を合わせれば口争いしてますよ。まあ流血沙汰にはなりませんから安心して下さい。でも下手すると魔術の飛ばしあいがありますから屈んでいたほうがいいですよ」

「そ、そこまで…？」

「とにかく、ラファ様はファナティリストには渡さないよ。例えば彼が巫子の役目を放棄したとしても、ラトメディアには彼を保護する十分な義務がある」

「……それは、なんとしてでも阻止しなきゃね」

くすり、チルタが笑んだ。その口端は妙に歪んでいて、瞳は濁っていて…ラファは、ぞわりと鳥肌が立ったのを感じた。

「”過去夢の君”…」予知夢の君”と並んでこの世で最も尊い存在…君ではありえない。そこにいるエルディ君でもない。そしてラファ君のご両親でもなかった…分かるだろう？ならばもう彼しかないな

い。

その”銀の腕時計”が証拠だ」

一体彼は何を言っているのだろうか？

過去夢だとか予知夢だとか…それがなんだというのだ？

それに…

「俺の母さんと父さんが…なんだって？」

呟いたラファの声が届いたのか、チルタがこちらを見て…微笑んだ。その笑みがあまりにも優しくて寂しげで切なげなもので、逆でラファは、やけに…嫌な予感が、した。

「ああ、そうか。ラファ君はまだ知らないんだね」

それはやたらと明るい声音で。

「僕、大体一月くらい前に、君のご両親とお会いしたんだよ」

世間話のように、軽い口調で。

「でも君の父さんは『違う』みたいでさ。腕時計もないし…普通の人だったよ。不老不死云々のことも知らなかったみたいで魔弾銃一発でズドン。きっと何か思う暇もなかっただろうね」

あまりにも当たり前のように言うものだから、ラファにははじめ彼が何を言っているのか分からなかった。

「あ……………え？」

「君、まさか…！」

「おいおい、マジかよ……」

エルディとトレイズが声をあげ、クルドの顔も険しくなった。呆然とするラファに追い討ちをかけるように、エルミが唸るように言った。

「ラファ様のご両親を……手にかけたのか、君は！」

act・10 第二の赤の巫子

死んだ？

誰が？

俺の、父さんと…母さんが？

一月も前に？

そんな…そんな、馬鹿な。

「嘘だ！！」

「嘘じゃないよ。」

まあでも、あんな平凡な奴、偉大なるレース様の血筋には相応しくなかったしね。清々したよ。君には悪いけど」

全く悪びれる様子も見せず、チルタは言った。全身の血が止まってしまったかのようなだった。ラファはただヒトガタの石のように、その場に立ち尽くして凍り付いていた。

「……………そん、な、そんな訳……………何かの、間違いじゃ……………」

「あ、そうそう。ラファ君の顔を確認しようと思って、ちよつと拝借させてもらったんだ。一緒に写ってるの、ご両親でしょ？」

微笑んで、チルタは何かを投げてきた。足元に転がる、見覚えのある写真立て。ラファがレクセに入学したばかりの頃の、家族で撮った最後の写真。ヒビの入ったガラス。木製の枠には、何やら赤黒い染みが飛んでいて…

「……………！！！！」

むっつり顔のラファの両脇でにっこり笑う両親の姿に、ラファは。

「ああああああああああああ！！！！」

——憎いかい？

……

——両親を殺した、あいつが憎いかい？

……憎いよ

——じゃあ、仇を取ろう

……え？

——大丈夫。僕に任せて。だって君は、

赤の巫子なんだから

ぴん、と。

糸が張り詰めたような、そんな静寂が、辺り一面を支配して。

トレイズが声を荒げた。

「ラファ……！お前、まさか……やめろ！」

「うるさい……」

駆け寄ってくるトレイズに向けて右の手のひらをかざすと、トレイズは目の前に透明の壁でも現れたかのように跳ね返り、尻餅をつい

た。

「うわっ」

「トレイズさん！」

「ご無事ですか！？」

エルディとクルドがトレイズの脇に膝をつくのを見もせずに、ラファはゆっくりと、歩き出した。

……チルタを、目指して。

とにかく彼を傷つけて、めっちゃめっちゃにして、ああ、もう原型も留めなくなればいい。殺したい殺したい殺したい殺したい、この悪びれもせずに立っているこの少年を殺してやりたい！！這い蹲らせて、イヤだといっても滅多打ちにして、それで、それで……！！

巫子狩りが寄ってくるが、気にするものか。

腕を一振りすると、巫子狩りたちは石になったかのように突然立ち止まって、動かなくなった。

…ああ、なんという快感だろう。

これが”赤の巫子”の力。

これを使って、奴を……

——それで、満足ですか

「っ！」

ラファは立ち止まった。辺りを見回すが、誰もそんな台詞を発したものはいない。

——それで、そうやって全てを壊してしまうことが、あなたのしあわせだともいいますか

誰だ？

誰が言っている？
どこから…

ラファはそして、ふと銀の腕時計に視線を落とした。
文字盤のない時計。

その止まっていた針が、今は目にも留まらぬ速さで回っていた。

——あなたにとってのしあわせは、なんですか

「……俺は…」

ゆらり。

ぴんと周囲を張っていた空気が揺らいだ。

それにいち早く気付いたチルタが、手にした剣に力を込める。

「油断は禁物だよ、ラファ君？」

「…！」

そして振り下ろされた鈍色の光が、ラファを捉えて…

………ぴたり。

しかしチルタの剣はラファを斬る事なく、その頭上で静止した。

「……？」

恐る恐る、閉じた目を開いたラファは、息を呑んだ。

エルミ、クルド、エルディ、そしてトレイズ。

四人がそれぞれの得物の切っ先を、チルタの首筋に向けていたのだ。

「……過去夢だのなんだの、俺にはよく分からねえけどなあ…」

トレイズが、今まで聴いたこともないくらいに冷めた口調で言った。

「それはラファみたいな”ただの学生”巻き込んでまで、手に入れ

なきゃならないモンなのか？」

「…………トレイズ…」

呆然とラファが呟くと、彼は少し高い位置からラファを見下ろして、そして、微笑んだ。

もう何も心配することはないんだと、そう言うように。

「…だから、僕は君が嫌いなんだよ、紅雨のトレイズ。」 予知夢の君”を保有しておきながら、その価値にまるで無自覚で、しかも今度は、” 過去夢の君” まで我が物にせんとしている…」

「チルタ」

「ただの、人殺しのくせに。自分のやったことなど、なかったような顔をして」

チルタは剣を下ろした。ラファに背を向け、右腕を一振りすると、巫子狩りの石化が解けた。

「撤退だ」

「し…しかし、チルタ様！」

「文句は聞かないよ、命令だ」

自身の背後から剣をつきつけていたエルミを押しつけ、チルタは数歩歩いてからふと立ち止まって、ラファを振り返った。その表情はどこか憔悴していて、名残惜しそうだった。

「…ラファ君。君はいつか、絶対にその男の側についてたことを後悔する日が来るだろう」

「え？」

「君はあのレーチスの孫だ。その血には決して、抗うことはできない」

血？それがなんだというのだろう。

レーチスとは何者なんだ？
チルタとは…

「お前は……………まさか」

「僕？……………お察しの通りさ」

そしてチルタは、歪んだ笑みを浮かべた。酷薄な笑顔は、まるで全てを破壊したいと、そう語っているようだった。

「そう……………僕が”第九の巫子”だ。君がいずれ、殺すであろう人間だよ」

「お戻りになられましたか、ラファ様」

「フェルマータ、様…」

ラトメディア神宿塔、最上階。ソリテイエ神殿の、赤色のソファに座った女性。彼女はラファの姿を見止めて、目を細めた。

この微笑みは嫌いだ、ラファはぼんやりと思った。何もかも見透かされていそう。そのくせ、自分の本音は何もかも覆い隠すかのような微笑。見ると吐き気がした。

「巫子として生きることを、決めたのですね」

「別に、アンタの為じゃないからな。父さんと母さんが殺されたって話も本当かどうかまだ分からないし、ただ、巫子になればいいさんのことも何か分かるかもって、思って……」

それだけだ。消え入るようにそう言ったラファに対して、フェルマータはしばし目を伏せた。……笑みを浮かべて。

「…そうですか」

「……」

「いいですよ。私のためなどではなくても。どうぞそのお力、自らの目的の為に存分にお役立てくださいませ。それだけで、十分です」

そう言って笑ったフェルマータの、顔。

それを横目に、ラファはこの顔をどこかで見たことがあるような気がした。

そう、とても身近なところで…

「マユキ様も心配しておりました。はやく顔を見せてあげてください」

「ラファー!!」

神護隊本部に着くなり、小麦色の髪の少女が飛びついてくるものだから、ラファはよろめいた。花のような陽だまりのようない香りがした。ラファはぎくりとして、涙まじりにこちらを見上げるマユキを受け止めた。彼女の顔には予想していた笑みはない。むしろ少しやつれただろうか。ラファは胸がちくりと痛むのを感じた。

「ラファ、よかった、本当に、無事でよかったあ…」

「マユキ…」

「マユキ様、ラファ様のことすっごく心配して大変だったんですよ？」

マユキの後から本部の門をくぐってきた、みかん色の瞳の少年は、少し呆れたようにラファを見て、言った。彼は笑みすら浮かべている。トレイズが助けに向かったからには、ラファがここにいるのは当然とも言いたげな様子だ。

「レイン」

「まったくもう。チルタ高等祭司に会ったって聞きましたけど、大丈夫でしたか？エルミは機嫌最悪だったし、トレイズさんも珍しく怒ってるし…散々な逃走劇だったみたいですねえ」

「…………悪かったな」

にこにこ笑うレインにバツが悪くなつて、ラファはうつむいた。それを気にも留めずにレインは続けた。

「それにしても珍しいものが見れましたよ。本部の入り口でトレイズさんとエルミがケンカしてたんです！」

「えっ!？」

「なんか過去だか未来だか…とにかくトレイズさんが『なんで言わなかったんだ!』って顔真っ赤にして叫んでたし、エルミはエルミでいつもの愛想笑いもせずにもっつりしてるし…はじめはエルディ

「が何かやらかして怒られてるものだと思ってましたもん」

過去と未来。そういえば、その辺りのことにエルミは詳しいようだった。あの銀の腕時計を渡してきたのも彼だし、ひよっとしたら何か知っているかもしれない。あとで顔を出そうか、そうラファが思ったとき、マユキが嬉しそうに言った。

「ねえラファ、私、エルミに剣を教えてもらうことになったの！ラファも一緒にやらない？」

「剣？」

「……巫子を集めるって話、さ。トレイズも手伝ってくれるって言うてたけど、守られてばかりじゃ駄目じゃない？だから、私もちゃんと戦う術を持とうと思って」

「マユキ……」

ラファはそんなマユキに唇を引き結んだ。自分より一回り小さい少女が、こうして自分の辿る道を決めている。

「じゃあ、俺は？」

「俺は決められるのか？そうでないのか？」

その時、「じゃあ俺も」とまたしても流されそうになっていたラファの脳裏に浮かんだのは、チルタに振りかぶられた、鈍い光の記憶だった。

「……いや、俺はいいや。なんか剣って怖い。エルディに魔術でも習うさ」

「そっか」

「俺、ちよつとエルディたちの部屋に行ってくる。聞きたいことがあるし」

「行つてらっしゃい……」

マユキは目を丸くしてラファを見送った。本部の中へと入っていくラファの背を見ながら、レインがぼつりと呟いた。

「なんだかラファ様、大人しくなってますん？」
「どうしたんだろっ、ラファ」

エルデイとエルミは同室らしい。途中出会う人に道を尋ねながら、たどり着いたその扉をノックすると、中からエルミらしい声が聞こえた。しかし、先ほど聞いたより声のトーンが高く、ラファは目を瞬いた。

「エルデイ君？どうしたの、何か忘れ物……」

「……………」

開いたドアが、ぎいと音を立てて。ラファとエルミは、しばし硬直した。

風呂上りらしいエルミは、ワイシャツにズボンというラフな格好で、シャツの第二ボタンまでは外れていた。そして、その胸のあたりが、もっこりと膨らんでいて……胸？

「って、ええええ！？」

「え、わ、その、ちょ、ちょっとラファ様、大声はっ……ああもう！」

腕を引っつかんで、ラファを部屋に連れ込むと、エルミは勢いよくドアを閉めて鍵を閉めた。

「……………」

「……………」

そしてまた、沈黙。

ラファは心底居心地が悪かった。

目の前に座る少年……いや、これからはその呼び名も改めねばならない……は、少し頬を赤らめて、困ったようにラファを見ている。その

姿は、どうして気がつかなかったのだろう？確かにラファと同性のそれではなかった。

近くにエルディという女顔負けの美少年がいたからだろうか。それと同じ顔をしたエルミを見てもさしたる疑問はなかった。むしろ、この男所帯に「彼女」がいること自体が問題ではないのか？

「つ……つまり、エルミは、女…なのか？」

「はい……」

「で、でも神護隊は、女性禁制じゃ」

「だから男装してたんですよ。胸潰して声低くして。身体検査のときはエルディ君の幻術にがんばってもらってました」

「なんだってそこまでして神護隊に……」

エルミは窓の外に目をやって、微笑んだ。

「エルディ君が、神護隊に行っちゃったから」

「え？」

「僕ね、昔…色々あって、目が見えなくなってたんです。でも僕たちは孤児で……ラトメの荒地にある孤児集落で育って、助けてくれる大人なんて誰もいなかったんです。…そんな時、集落にトレイズさんが来て、神護隊のメンバーを探してて…ラトメの”神の子”直属の部隊だなんて、お給金だつていいし…エルディ君は、僕の目を治すために神護隊に入ったんです」

「エルディが？」

「ふふ、今のエルディ君からは想像がつかないでしょう？でも、そのすぐあとでした。チルタが孤児集落にやってきて、僕の目を治してくれたんです」

エルミとチルタは、僕より先に知り合いだった…そう言ったエルディを思い出す。しかし、なぜチルタが孤児集落に来て、エルミの目を治したのか、彼女は何も言わなかった。問おうとしたラファをさえぎるように、彼女は先を続けた。

「だから、僕はエルディ君に、もう僕のためなんかには働く必要はな

いんだって言おうとして、ラトメに來たんです。…結局分かったのは、エルディ君はトレイズさんに心酔しちゃって、神護隊を抜ける気なんてさらさらないってことだけなんですけど。それで…僕もエルディ君と一緒にいるために男装して、隊に」

「……………そうだったのか」

「一年くらい経ってから、トレイズさんには女だってばれちゃったんですけどね。それでもまだ僕をここに置いてくれてるあの人は…とても、優しいんです」

トレイズ。

何も決められずに逃げ出した自分を、わざわざ追いかけてきてくれた人。

自分を、チルタから守ってくれた人。

兄がいたらあんなかんじだろうか。

頼もしい男だと、思った。

「…うん」

「それよりラファ様、僕のことは置いておいて、結局なんの御用だったんですか？」

「それは、」

ラファはレースのことを聞こうかと口を開いたが、しばし迷って、そして…口を閉ざした。

「……………いいや、やっぱり。また今度にする」

なんとなく、チルタやエルディのことを話す「彼女」が寂しげに見えて、ラファはそのまま疑問を脇に押しやった。

「ほら、もつとしつかり集中しないと失敗しますよ」

「してるよ」

「目は閉じる！…魔力の流れを身体で感じて…」

「わかってるつてば！…うわっ」

ぼん、と小気味いい音が響く。開いて突き出した手のひらの先から小さな爆発が起こり、ラファはびくりして思わず尻餅をつく。それを見下ろしながら、無慈悲にもエルディが言う。同性から見ても美少年のため息はダメージが大きい。

「あなた、武術だけじゃなくて魔術も駄目ですよね」

「うるせえよ悪かったな！！」

あれから時はめまぐるしく過ぎ、ラファ達がラトメディアにやってきてから優に三ヶ月の時が過ぎていた。その間にマユキは剣を、ラファは魔術を、それぞれエルミとエルディから教わっているのだが、「エルミってばすごいんだよ！今日買いい物に付き合ってもらったんだけど、エスコートは上手だし、私服のセンスもいいし…ほら見てこのネックレス！おごってもらっちゃった！さすが街の女の子の一番人気なだけあるね！」

日に日にマユキとエルミの仲が深まっていくのがなんとなく不安なラファだった。

この様子では「エルミが好きだ」と恋愛相談される日も遠くないだろう。そうなればいろんな意味で応援できない。女性としてマユキを意識したことはなかったが、性別を超えて気安い関係なのは彼女くらいのものだし、そうした彼女の女の子らしい一面を見るのは何となく嫌なのだ。

エルディはというと、予想に違わぬスパルタぶりで、ラファは毎日

へとへとだった。仕事も後回しにして付き合ってくれているのだからと、最初は従順に従っていたラファだったが、流石に三ヶ月、毎日この生活が続くとなると話は別だ。文句のひとつも言いたくなる。四つんばいになって息を整えていると、今いる中庭から見える渡り廊下から、クルドが出てきた。この青年は相変わらず涼やかだ。裏に一物抱えていそうな悪人顔だが、なんだかんだ言って彼は神護隊いちの常識人だし、細々としたところまで気を配れるクルドにラファは好感を持っていた。今も、汗をかいているラファにふかふかのタオルを手渡してくれた。用意周到である。

「ラファ様、トレイズさんがお呼びです。至急執務室へ」

「おう、来たかラファ！」

トレイズと、先に着いていたマユキは、優雅に午後のお茶会と洒落込んでいた。おろしたての白いカップに、やわらかい香りを放つハーブティーを注いで、クルドはマユキの隣に腰を下ろしたラファにそれを差し出した。

「どうぞ」

「あ、どうも」

「で、ラファも来たところで早速本題だが、どうやらチルタが本格的に動き出したらしい」

「！」

唐突な話題に、むせたお茶をなんとか喉に流し込み、ラファは言った。

「チ、チルタが！？」

「ああ、まだ奴の目的は分からねえけど、まず奴が狙うのは各地に散らばってる巫子だ。巫子が全員揃わなけりゃ、第九の巫子を滅ぼす儀式もできないからな。向こうには魔弾銃もあるし、ラトメの保

護なしで生き残るのは難しい」

「チルタがファナティライストの高等祭司だからか」

「そういうこと。しかも奴はまだ17歳にして一丁前にファナティライストの軍を統率してる。まだ高等祭司になって二年かそこらで相手ごわい相手ってわけ。」

そこで、だ。これから各地を回って、巫子を保護していく。それにお前達も同行してほしい。……頼めるか？」

ラファとマユキは顔を見合わせた。わざわざ口に出してどうするか相談する必要はなかった。二人は互いに、頷きあう。

「行くよ」

「勿論！」

「いい返事だ。クルド、地図を」

「はい」

クルドが机上に広げた大きな地図を覗き込む。トレイズが南側の一点を指した。

「ここがラトメの首都、フレイリア。今いる場所だ。そのすぐ近くにあるのがルシファの村で、そこから北東に上ったところがモール橋だ。地理は分かるな？…よし。」

今居所が分かっている巫子は二人。まずはインテレディアのはずれの村に行って、第三の巫子を仲間にしよう」

「あと一人は？」

「あいつはシェイルにいるはずだから、インテレのあとで大丈夫」
そう言うトレイズは、もう一人の巫子と知り合いらしい。相当気安い関係のようで、トレイズの口調には親しみがこもっていたし、彼はちよっぴり意味深に苦笑していた。深く問おうかと口を開いたらファの隣で、トレイズではなく地図を見ていたマユキが別の話を振った。

「それで、インテレディアまでは転移で行くの？」

「いや、徒歩で」

「ええ、なんでだよ！？俺せっかく転移呪文マスターしたのに！」

するとトレイズは深い溜息をつき、げんなりとして言った。

「……俺、転移呪文苦手なんだよ」

「でも、レクセの無人廃墟の館には転移装置で来たんじゃないの？
ほら、ワーブゲートがどうか言ってたじゃない」

「人がやる呪文がだめなんだ。どうも酔うというかなんと言つか……
とにかくあまり好きじゃない」

「ちえっ、やっとスパルタ修行の成果が出ると思ったのに」

すねたようにラファが言い、トレイズが苦笑すると、廊下からどたばたとけたたましい音が聞こえてきた。その音はこの部屋の前で止まって、そして。

「トレイズさん!!」

「お前達、廊下は走るな!」

「うるさいよクルド!トレイズさん、巫子集めの旅に出るってホントですか!?!」

見るとその音の出所はエルディとレインだった。二人揃って息を切らし、顔を真っ赤にしている。彼らはクルドを押しつけて、トレイズへと詰め寄った。

「ああ、ほんとだよ」

「僕も連れて行ってください!」

全く同じタイミング叫んで、そして、二人はお互いを見た。

「君なんて一緒に行っても足手まといになるだけじゃない?レインは本部でエルミと留守番だよ」

「何言ってるんだよ、エルディこそ可愛い弟と留守番してなよ。僕が代わりに行って来てあげるからさ!」

するとぎゃいぎゃいと騒ぎ出すエルディとレインの脇から、兄と同僚を見事に無視してエルミが書類片手にやってきた。彼女はいつもどおり柔らかな微笑みを浮かべているだけだ。

「ラファ様にマユキ様、巫子探しの旅に出るんですって?」

「エルミ」

「気をつけて下さいね、ラファ様。チルタなんかにそそのかされたりしないように」

「しないよ!」

エルミはくすりと笑うと、書類をクルドに渡してトレイズに向き直った。

「行つてらっしゃいませトレイズさん。あいにくとまた女の子に呼び出されてて、

お見送りが出来ませんので今のうちに言っておきますね」

「お前ホントにモテるよなあ」

確かに顔よし武芸よし地位よし人当たりよしとくれば、憧れるのも無理はないだろうが、流石に性別の壁はあまりに高い。

「でも誰とも付き合う気はないんだろう?」

「ご期待にこたえられなくて申し訳ないんですけど、今のところ女の子には興味ありませんねえ」

クルドの質問にエルミは朗らかに答えた。そしてトレイズは、未だに口論しているエルディとレインをようやく止めにかかる。

「おーい二人とも、言っておくけど、今回は俺とラファとマユキの三人で行くからな」

「ええっ!?!」

たちまちショックを受けた顔で声を上げたエルディとレインを尻目に、クルドが控えめに申し出た。いつもトレイズを諫めるときと同じように、やや渋い表情である。

「一人くらい、付き人をつけてもいいのでは?」

「大人数で行動しても目立つただけだな。大丈夫だろ、ラファもマユキもこの三ヶ月、がんばってたしな」

トレイズはそしてばかりとラファとマユキに向けてウィンクした。

ラファとマユキは再び顔を見合わせる。転移呪文をお披露目できないのは残念だが、トレイズが自分たちの努力を認めてくれたので、ラファは現金にも気分が浮上した。

「いよいよだねラファ！」

「だな」

わくわくした様子のマユキに対して、ラファはひどく緊張していた。チルタの計画を阻むための旅。ということは、彼とまた会うこともあるかもしれない。いや、会うと考えたほうがいいだろう。どちらにせよ、自分はその少年を阻むためにラトメに戻ったのだ。

次に会うとき、自分はどんな態度で、彼に立ち向かうのだろうか。そもそも……立ち向かえるのだろうか。

考え出すととても楽しい気持ちにはなれなくて、荷物をまとめながらはしゃぐマユキを横目で見てみると、殺風景なラファの部屋の扉がノックされた。

「はい？」

「ラファ様、…あ、マユキ様もこちらでしたか」

二つの銀色の頭が、扉のむこうからひょっこりと飛び出してきた。

エルディとエルミだ。相変わらずそっくりな双子である。

エルミがにっこりと笑った。

「エルディ君がラファ様に会いたがってたから、連れてきました」

「違う！」

エルディが真っ赤になって妹に噛み付いた。彼がトレイズの絡んでいないところでそんな表情をするなんて、珍しいこともあるものだ。つくづく思うが、彼は妹に随分弱いらしい。この三ヶ月、案外粗野でデリカシーがなく毒舌なことが判明しているエルディは、しかしエルミにだけはとことん紳士的で甘い。いわゆるシスコンってやつかな、絶対に本人には言わないがラファはそう踏んでいた。

そのエルディがエルミを怒鳴りつけるのも初めて見るが、対する妹のほうは平然としている。ほらほらとなにやらエルディを促している。双子の兄はため息をついた。

「……これを」

「うん？」

エルディが手のひら大の麻袋を突き出してきた。受け取って中身を見ると、それは懐かし、レクセを出たあの時に、エルディがくれた錠剤だった。

「くれるのか？」

「まっ、また疲れただのなんだの言ってトレイズさんを困らせたら、貴方を教えた僕の面子がないでしょう！それだけです！」

「まったく素直じゃないなあ、エルディ君は」

けたけた笑うエルミに、また陶器のように白い肌を紅色に染めてエルディは怒った。ラファはエルディに笑いかける。彼の不器用な心遣いがありがたかった。

「ありがとな、エルディ」

「っ！べ、別に……」

「じゃあ今度は僕の番ですね」

エルミは懐から銀の指輪を取り出すと、銀の腕時計をつけたラファの左手の、中指に通した。きらり、部屋の照明の光をうけて輝く。ラファは眼前にそれを持ち上げてまじまじと眺めた。

高価そうな指輪だ。鎖を模ったそれは、以前もらった腕時計と似たようなデザインで、それを問おうと顔を上げると、エルミは察して頷いた。

「レーチスが僕にとくれたものです。でも僕には必要のないものだから、ラファ様に差し上げます」

「いいのか？なんか高そうだけど」

「値段なんて！きつと、ラファ様がお持ちになられていたほうが役に立つでしょう」

するとマユキが膨れっ面で指輪を睨んだ。

「いいなあラファ……」

「マユキはもうネックレス買ってもらったんだろ？」

「あはは、じゃあ僕たちはこれで」

「チルタにズドンといかないように」

「怖いこと言うなよエルディ！」

騒がしくエルディとエルミが出て行って、マユキは一息つくとならアに向き直った。

「エルミって、なんかラファに優しいよね。私、ちょっと妬いちゃうなあ。別に男の子同士だし、どうってことはないんだろうけど」
ラファは苦笑するしかなかった。

「ではラファ様、マユキ様。くれぐれもお気をつけください」

「トレイズさんっ、はやく帰ってきて下さいね！」

フレイリア入り口の門で、クルドとレインがそれぞれ言った。

麻袋を肩にかけたトレイズは、心配そうな表情のレインの頭に大きな手を置いて、にかりと笑って見せた。

「ああ、さっさと行ってさっさと帰ってくるさ。クルド、あとのことは頼んだ」

「承知いたしました」

クルドが一礼するのを見て、トレイズはラファとマユキのほうを向き、言った。

「んじゃ、行くか！インテレディアへ」

「おう」

「旅立ちだね！」

そして三人は、三本の塔が立ち並ぶラトメディアに背を向けて、一歩前へと、踏み出した。

a c t・12 旅立ち（後書き）

余談ですがエルディ君はツンデレです。個人的にクルドはクーデレだといいいおもいます。なんか名前と語感が似てるから。

act・13 インテレディア

インテレディアはレクセから見て北西にある農業都市だ。

国というよりは、その辺りに数ある農村を取りまとめてひとつの「都市」と呼んでおり、レクセやラトメなどのほかの国と違って、権力者が存在しない。村によって暮らしも随分違うらしい。レクセやラトメの舗装された街しか知らないラファにとっては、大自然の村などピンと来なかったが、遠くに見えてきた木造のこじんまりとした家々に、わけもなく気分が高揚した。

気づけばラトメディアを出てから、三週間が経っている。ラファは疲れた足首を振りながら、ようやくやってきたインテレディアのはずれの村、その入り口のアーチをくぐりぬけた。

「やつと着いた…」

「遠かったねえ…」

「ほらほらお前達！これから巫子を探すんだから座り込むなって！」

「ええっ！？ちよつと休もうぜ！」

しかし断固として巫子を探す気らしいトレイズは、ラファとマユキの腕をひつつかんで立ち上がらせた。今となつては四ヶ月ほど前になるが、レクセからラトメに向かう時とはえらい差である。神護隊の手伝いとして来ているのだから、トレイズとしても二人をいつまでも特別扱いしている気はないらしい。ラファが不貞腐れているとくすりとどこからか笑い声が響いた。

「旅人さんなんて珍しいわね」

次いでその笑いとおなじ、明るい少女の声が村のほうから聞こえてきて、ラファたちはそちらに視線を向けた。

長い栗色の髪を結い上げた、若草色の瞳の少女。

インテレディアの民族衣装らしいエプロンドレスに身を包んだ彼女

は、長いまつげをしばしばさせてこちらを見ていた。その耳は、ぴんと長く、とがっている。

「エルフ？」

「エルフ！？」

ラファは驚きながら、マユキは喜びながら声をあげた。それに悪戯っぽくエルフの少女は微笑む。トレイズは二人の叫びに全く動じない少女に声をかけた。

「やあ、ここの村の人か？」

「ええそうよ。ソラっていうの。よろしくね旅人さん」

「エルフが人里で暮らしているなんて…」

エルフと人間とは本来相容れない存在ではなかったのか。サザメも人里住まいといえそうだが、彼女は神宿塔の奥深くに引きこもっているからか大して違和感を感じなかった。しかし、人間嫌いのエルフが、人と共存して生きていくなどできるのだろうか。

しかしソラは、あっけらかんと笑って見せた。

「よく言われるの。でも私は生まれたときからここで暮らしているから、人間のこと嫌いなんかじゃ全然ないわ。ただ人よりちよつと耳が長いだけよ」

「うわー、いいなあ、エルフと共存かあ」

夢見がち筆頭のマユキが羨ましそうに言った。きらきらと目を輝かしている彼女を放って、ここのところマユキのこうした性格もしっかり把握しているらしいトレイズが一歩前に出た。

「俺達、”赤の巫子”について調べてるんだ。そういうのに詳しい人、知らないか？」

”赤の巫子”。

その単語が出るなり、ソラの目が一瞬きらりと光った。ラファは少し違和感を感じてトレイズを振り仰いだが、彼は人当たりのいい笑みを浮かべるばかりでこちらを見ていなかった。もう一度ソラに視

線を戻したときには先ほどと同じように明るく微笑んでいたので、もしかしたら光の錯覚かもしれない。

「赤の巫子」？そうね。私は全然知らないけど、フェイとギルビスなら詳しいかもしれないわね。村で一番頭がいいのよ。そこにある食堂で働いているの。行って聞いてみたら？」

ソラの台詞を聞いて、ラファ達はひとつ顔を見合わせた。

「わかった、行ってみるよ。ありがとな」

「いいえ、何かわかるといいわね」

口々に礼を言いながら食堂へと向かっていくラファ達の背を見送ってから、ソラは優しい笑みを拭い去って、駆け出した。

食堂は、昼時ということもあってそれなりに混み合っていた。

空いたテーブルに座ると、すぐにブラウンのエプロンを腰に巻いた、さらさらとした茶髪のウェイターがやってきた。トレイズと大体同じような年頃だろうか。男も女もお洒落に気を配る、華やかなレクセの学生とは違って、まだ垢抜けない雰囲気のある柔らかな青年である。

「ご注文は？」

「ランチ三つ。それとさ、ここにフェイとギルビスって奴がいないか？」

「え？僕がフェイだけど、何の用？」

「いや、ちょっと聞きたいことがあって……あ、忙しいならいいんだ。出直してくるから」

フェイは警戒心もあらわにしばらくトレイズを見ていた。ここでもまた、ラファは妙な違和感を感じる。今度はトレイズも何か感じたようだ。チラリとラファとマユキを見てくる。この青年が何か隠し

ているらしいのはすぐにわかった。

青年はやがて身を翻し、言った。

「ちよっと待ってて、ギルビスを呼んでくる」

ギルビスは、十代前半の少年だった。

フェイと同じブラウンのエプロンを身に着けており、濃紺の髪は綺麗に切りそろえられていて、髪と同じ色の瞳はどこか淀んで、白い顔は少しやつれていた。満足に食べていないのが見て取れる細っこの腕。ラファ達よりも年下だろうが、彼の表情はラファなどよりもずっと知的だ。そして、この初対面の客人に、怪訝な表情を隠しもしない。

「僕と、フェイに何か用？」

その台詞はエルディのようにつんとしたものだっただけで、それにしては覇気がなく、抑揚もなかった。ちよっと面食らいながら、ラファは言った。

「俺達、赤の巫子について調べて旅してるんだ。入り口のところでソラって子に、君達なら何か知ってるかもって聞いてさ」

びくり、フェイが肩を揺らした。ギルビスはすいと目を細める。いかにも知っていますといわんばかりの二人の様子を目ざとく見つけて、マユキが問う。

「知ってるのね？」

ギルビスとフェイは素早く、視線をお互いに走らせた。ギルビスは警戒を、フェイは困惑を、それぞれの顔にたたえて。やがて、ギルビスが重そうに口を開いた。皮肉っぱく唇の端っこを持ち上げて。

「知ってるよ。というか、この村に一人、”赤の巫子”が住んでるからね」

「えっ」

「ギルビス！」

「フェイ、黙っててもらえないかな。…会いたい？」赤の巫子”に」

ギルビスは淡く笑んだ。濃紺の瞳の奥の奥、何かが嘲笑ったかのような、そんな含みのある笑みだった。試されている。出し抜けにラファはそう感じた。ラファとマユキは、一斉にトレイズを見た。彼もギルビスの台詞をどうしたものか決めあぐねているようだった。

「その巫子ってのは、ホンモノなんだろうな？」

「当たり前だよ」

トレイズとギルビスはお互い笑みを浮かべていたが、二人の間の空気は火花を散らしあうかのようになり、不穏な香りがした。

ギルビスの家は、村の西にある小高い丘の上に建っていた。

「おい、ギルビス？本当にいいのか…もしあいつらがファナティライストの奴らだったら」

「さあ、そのときはそのときさ」

「そんな悠長な…」

ひそひそと何事か話し込んでいるギルビスとフェイ。と、話が済んだのか、ギルビスがこちらを振り返って言った。

「君達、ここに巫子がいるから、粗相のないように頼むよ」

「ああ」

そしてギルビスは扉を開けた。扉が軋んで、高い音を立てた。

「リイナ、起きてるのかい？…って、うわ」

「うわって何よ『うわ』って」

家の中には一人の少女がいた。隣のマユキがあつと声を上げる。ソラだ。

彼女を見るなりギルビスとフェイが顔をゆがめた。

「なんでエルフがここにいるの」

「エルフじゃなくてソラよソ・ラ！あーあ、結局ばらしちゃったんだ。今まで私たちが必死になって隠してきたことってなんだったのよ」

「元はといえばお前がギルビスのこと話したからだろ、ソラ！」

怒鳴るフェイには目もくれず、ソラはラファ達に笑いかけた。

「また会ったわね旅人さん。赤の巫子について存分に調べていってね」

「やっぱりあんた、知ってたのか巫子のこと」

ソラは不敵に笑んだ。

「ええ、でも勝手に会わせるわけにはいかないもの。ギルビスの妹なんだから、ギルビスと本人が決めなきゃ。ああ、リイナは会う気があるみたいよ」

「妹、なのか」

ラファ達はギルビスを見た。彼は観念したようにひとつ小さく息をつく。そうして奥の部屋の戸をノックした。扉の向こうから、柔らかない返事が返ってくる。

「兄さん？」

「リイナ、客だよ」

「通してあげて」

ギルビスは扉を開いた。その向こう側で、ひとりの少女が椅子に座っていた。彼女は読んでいたらしい分厚い本から視線を上げて、客人であるラファ達に微笑んだ。ラファは目を見開いた。

その少女が身にまとうノースリーブの服からのぞく、むきだしの細い肩には、血のように真っ赤な紋様が刻み込まれていたのだ。

act・14 第三の赤の巫子

少女の髪と瞳は、ギルビスと同じ濃紺色。細っこい体は、雪のように真っ白で、とても儚い印象を受けた。深窓の令嬢というよりは、病弱な女の子に見える。同年代の男子の中では小柄なラファと比べても、一回り小さい。きっとラファよりいくつか年下だろう。

少女は薄っすらと微笑んで言った。まだ幼い声音だ。

「第三の巫子、リイナです。はじめまして」

フエイとソラはリイナに乞われて渋々部屋を出ていった。扉がしつかりと閉まってから一拍置き、さらに一息ついて、リイナが口を開いた。

「それで……ラトメ神護隊の方が何の御用ですか」

「気付いてたのか」

驚いたようにトレイズが言った。

それもそのはず。ラファ達が今身に纏っているのは旅人には一般的な軽装の上にマントを羽織っただけの簡素なもので、神護隊である要素など欠片も残っていないかったのだ。マユキも、ラファの幻術によって赤い髪を隠しているし。

いくら神護隊長のトレイズは有名だといっても、顔まで全国に知られているわけではないし、会って名乗りもしないうちに分かるはずがない。

ラファたちが驚愕しているとリイナが笑い声を上げた。

「あはは、ちょっと鎌かけてみただけですよ。こう聞けば、巫子狩りはすぐにそれを利用して、私を騙してファナティリストに連れて行くこうとするだろうし、本当の旅人ならどうしてそこでラトメが出てくるのか分からないでしょ？まあ、お兄ちゃんがただの旅人をうちに連れてくるわけないんだけどね。そういう反応をするってこ

とは、本当にラトメから来たのね！」

ラファとマユキは白い目でトレイズを見た。こんな幼い少女ひとりに翻弄されて、トレイズは視線を泳がせていた。

「まあ、あの、うん。神護隊だつて分かっているなら話は早い。俺達はお前をラトメで保護するために来たんだ」

ラファたちに言ったことと同じ台詞である。きっと巫子にはこういうことになっているのだろう。リイナもトレイズがそう言うことは分かっていたのだろうか、驚きもしないで目を伏せた。考え込む、というよりも、心の中にある自分のことばを口に出すかどうか迷っているようだった。

「……………お断りします」

やがて、リイナは真つ直ぐにトレイズを見据えて言った。

「私は…私と兄さんは、この村で生まれ、この村で育ちました。外へ出ようと思ったことはないし、出たいと願ったこともありません。両親が死に、ギルビス兄さんはずっと私を守ってくれている…ラトメに私一人行ってしまえば、兄さんはたった一人になってしまいます」

「じゃ、ギルビスも一緒にラトメに来ればいいんじゃないか？」

ラファの台詞に、一同はギルビスに視線を移した。彼は肩をすくめ、すぐに切り返す。

「ここを出るつもりはないね」

リイナは苦笑して言った。

「ね？だから私は行けません。巫子の役目を放棄するのは気が引けるけど…やっぱり、私たちはたった二人の、きょうだいだから」

「断られちゃったね」

ギルビスの家を出て、マユキが開口一番にそう言った。

トレイズの話では、巫子に保護を拒否されるのはそう珍しいことではないらしい。予想の範囲内だとばかりにトレイズもそれに同意するが、ラファだけは一人、じっと閉じられてしまったギルビスの家の扉を見つめていた。

「どうした？ラファ」

「うーん」

ラファは口元に手を当てた。

「妙だと思つて」

「なにが」

「あのリイナつて子だよ。」

あの子、巫子についてやけに詳しくうたった？第九の巫子を殺さなきゃならないってことも、知ってるみたいだった。…なのに、やけにあつさり断つただろ？村を出たいと思わないとか、兄さんと離れたくないとか…確かに理由としてはアリかもしれないけど、本当にそれだけの理由で割り切れるものなのか？自分達巫子にしか出来ないことなんだろう？」

「そりゃ、お前の言えた台詞じゃねえだろうよ」

トレイズに痛いところを突かれて、ラファは言葉に詰まった。自分が手を汚したくないから、日常に戻るためにラトメから逃げ帰ろうとした出来事は、まだ記憶に新しい。

「確かに、俺も逃げたから人のこと言えないけどさ…でも、なんかあの子は俺とは違う気がするんだよなあ…」

答えの出ない疑問。

ラファは首を傾げたが、そのまま身を翻して、宿へと向かった。

その様子を、窓から覗き込む影が、ひとつ。

「……兄さん、行つたよ」

「多分また来るだろうね」

リイナは呑気にお茶をすすする兄の姿に、眉尻を下げて言った。

「なんでそんなに冷静なの？ 私なんか手のひらが汗でギットギトなんだから！ きつとあの人たち、私がラトメに行くって言っただけで何度でもここに来るよ！ ああもう… どうしよう流れにまかせて”はい”とか言っちゃったら…！」

「そうしたら僕がフォローするから大丈夫さ。そもそも最初に言い出したのはお前だろ。最後までやり遂げろよ」

「そうだけどお」

するとギルビスはカップを受け皿に置き、小さく溜息をついた。

「赤の巫子、ねえ…」

彼はそして目を伏せ、どこか怒りを込めて吐き捨てた。

「ばかばかしい。そんなくだらないものの為に、父さんと母さんが死んだなんて… 考えただけで反吐が出るよ」

リイナはうつむいて、赤い刻印の入ったむき出しの左肩を、そつとさすった。

「あら？ 今日はよく会ったね」

「ソラ！」

村唯一の宿屋にやってくると、見覚えのある少女がカウンタに肘をついていた。ソラだ。彼女はラファ達に笑いかけると、カウンターの後ろにある棚から宿帳を取り出した。

「ここ、私の家なの。国境近くだからそれなりに儲けさせてもらってるわ。… あ、ちなみに値引きはしないから」

「両親は？」

「結婚二十周年記念でクライディアに旅行しに行ったわ。だから」

日前から私一人で店番してるの」

「へえ、えらいな」

そういったトレイズに嬉しそうに笑い返して、ソラは宿帳を差し出した。

「あら、ありがとう。…でも値引きはしないから」

トレイズが宿帳に名前を書き込むのを見ながら、ぼつりとソラが呟いた。

「ギルビスとリイナは、なんて言ったの？あなたたち、あの子をラトメに連れていくために来たんでしょ？」

「ああ、残念ながらって感じたな。断られたよ」

トレイズが答えると、ソラは少しほっとした様子で溜息をつき、それから、眉尻を下げてうつむいた。

「ギルビスとリイナのこと、ごめんなさいね」

「なんでソラが謝るの？」

「……」

ソラは黙り込んで、マユキの質問には答えず、窓の外に視線をやった。夕暮れの空は、どんよりと曇っていた。

「あの子達ね、きつとてこでもここを動かないわよ」

「え？」

「あの子達、ラトメを恨んでるから」

「……なんで？」

「両親をね、巫子狩りに殺されたの」

自分達以外誰もいない宿が、しんと静まり返った。ソラはじつと窓の外を見つめたまま、しかし心はどこか遠くに追いやって、ぼつりぼつりと小雨のように語りだした。

「あの子が、赤い印を継承したとき。すぐに巫子狩りが来て、巫子を出せてあの子達の両親を脅したの。あの子が巫子になってから、おじさんたちは巫子に関する本をいっぱい読んでいたから…巫子狩りは、巫子を連れて行って、食事も与えずに暗い地下牢に閉じ込め

ちゃうんでしょう？おじさんは、あの子をそんなところへはやれな
いって言って、あの子を守るために強い魔術を打ったの。

……結局、魔術は暴発して、生き残ったのはギルビスとリイナだけ
だったわ」

ラファは息を呑んだ。

両親を巫子狩りに殺された。

ギルビスとリイナを守って。

では、自分の父さんと母さんはどうだったのだろうか？

巫子のことなど何も知らないというのに、殺されてしまった自分の
両親は……

「あの家、村からちよつと離れてるでしょ？昔はあの子たちも、村
の大通り沿いに住んでいたの。ただ、あの子が赤い印を継承してか
ら、村の人たちがね、関わりあいになんたくないからって、あそこ
に建てて、あの兄妹を引っ越させたのよ。だからリイナは村にも出
て来れないの。村の人たちは、近くにいると、自分達もあのわけの
分からない連中に殺されちゃうんじゃないか、って言ってる。うち
のパパとママもそう。」

フエイのところのおじさんは、いつもあの二人のことを気にか
けてるけど、食堂のおじさんもギルビスだけたくさん働かせたり、本
当にあの子達、見てられないの」

ラファ達は目を見合わせた。やつれたギルビスの細い体。青白いリ
イナの顔色。ソラがギルビスにいたときに、彼とフエイがいい顔を
しなかったのは、のちにソラの両親が、娘が彼らに近づいたことが
知られたときのことを氣遣ってのことだったのだろうか。

するとソラはなおも言った。

「赤い印なんて。ギルビスがね、時々言うの。『僕らが犠牲になっ
たお陰で、アンタは幸せに生きてるんだろ』って。ギルビス達がこ
んなことになる前は、陰口言われてたのは私の家の人たちだったか

ら。あのね、この村は、そういう風にしか生きていけないの。パパもママも、ギルビス達が嫌われ者のままでいてほしいって思ってるだって、そうじゃなきゃ、また私たちが、ひどいと言われるかもしれないんだもの」

閉鎖された土地だからといって、必ずしも皆が助け合って生きていくわけではないのだろう。ラファは衝撃を受けた。しかし、ソラは首を振って、にこやかに言った。

「ごめんなさい、旅人さんにこんな話をするもんじゃないわよね」
「……で、なんで今の話で、あいつらがラトメを恨むことになったんだ？」

「巫子狩りが襲ってきた時、ラトメは助けられなかったから。フアナテイライストに対抗できるのは、ラトメだけなんだもの……ただの、八つ当たりよ」

マユキはそろりとラファを見た。どこかそわそわした様子のマユキに小首を傾げる。不安そうにこちらを見つめる瞳。ラファはそんな隣の少女を安心させるように笑いかけると、ソラに向き直った。

「でも、それじゃなおさら、ラトメに行かないにしても、村を出たほうがいいんじゃないか？ そんな生活嫌だろ？ あいつらだって……って、こういうこと言うのは、あんたに悪いかな」

「ううん、そんなことない。私も、ホントはそうすべきだと思う」
するとソラはどこか呆れたような笑みを浮かべた。

「ギルビスはね、医者になりたいんですって」
「はあ？」

「フェイのお父さんのところで見習い中なの。おじさんは結構有名な旅医者で……少なくともここに居る間は、いろんなことを学びたいって」

「そんな……妹の命のほう的大事だろ！」
「さあ、どうなのかしら」

ソラは曖昧に笑っただけだった。

a c t ・ 1 5 二人の巫子（前書き）

今回と次回は残酷表現が入ります。グロテスクなものではありませんが、苦手な方はお気をつけくださいませ。

act・15 二人の巫子

「父さん！母さん！」

またこんな夢だ。ぬるま湯に浸かるような心地で思った。自分の中にいる誰かが、悲痛な叫び声を上げていた。家の中が火で囲まれていた。木造の部屋だ。濃紺の髪の方が、力強くこちらの肩をひっつかんで、剣呑な表情で言った。

——ギルビス、逃げるんだ……！リイナをつれて、早く……！

「父さん！嫌だ！ふたりも一緒に逃げるんだよ」

——ギルビス、賢い私たちの子……私たちはここで奴らを食い止めるから、あなた達はお逃げなさい……

「母さん……」

憔悴した様子で、頬をてらてらと乾いた涙で照らした女性が言った。行きたくない、行きたくない！心の奥底からそうやって叫ぶのに、目の前の大人二人は、なにも恐れることはないのだとばかりにこちらを追い立てる。腕に抱いた細っこい少女が、わんわんと泣いていた。

——さあ、分かったら行きなさい。

——ギルビス、リイナ。どうか強く生きて……

怖かった。行きたくないと叫ぶのに、とうとう二人の顔を見ていられなくなつて、きびすをかえして、嫌だと泣きじゃくる少女を抱え込むようにして、火の手の上がる家から逃げ出した。

——兄さん…

場面が変わった。今度は日の落ちた、薄暗い部屋だ。ゆっくりとうつむけた顔を上げると、こちらをまっすぐに見ている少女が目に入った。あの時、そう、泣きじゃくっていたあの時とは違う。彼女は自分ひとりを置いて、一足先に大人になってしまったかのよう。

——兄さん、私巫子になるよ

「……リイナ」

やめてくれ。聞きたくない。心を閉じようとするけれど、誰よりも多く聴き続けた彼女の声はすんなりとこの胸に響いてしまう。いやいやと首を振るのをなだめるように、少女は決然と言い放った。

——ねえ、兄さん。私が巫子になる。第九の巫子を、父さんと母さんを殺したあいつらを、私が倒して見せるから、だから泣かないで、兄さん…

「リイナ、いいんだ。お前がそんなことをする必要はないんだ。こうやって暮らしていこう。ラトメにも感づかれないように、生きよう。そうすれば、きっと…」

そうすればきっと、恐れることは何もない。

あいつらが来るまでは、そうして生きてこられたんだ。まっさらな少女の肩に手を置いた。あの時、父もまた、自分の肩にこうして手を置いていた。

両親のいなくなってしまうた今、何よりも大事な妹。

彼女を守るためなら、彼女を危険にさらさないためなら、どんなこ

とだつてしてやるのだと、そう思った。

ラファは飛び起きた。

心臓が強く脈打っていた。

今のはなんだ？

ギルビス？リイナ？巫子？

左手で胸を強く押さえて、高鳴る鼓動を鎮める。

「過去夢の君」。

ラファはチルタが自分をそう呼んだことを思い出し、ぞくりと背筋が凍った。

過去夢。

これが？

そつえば以前にも、内容はよく覚えていないが、やたらと懐かしい気持ちになる夢を見た。

まさか……あれも？

ラファは枕元に置いた銀の腕時計を見た。その止まっていたはずの針は、ゆつくりと、反時計回りに、時を刻んでいた。

トレイズとマユキはすでに起き出しているようだった。ラファはざっと身を整えると、機嫌の悪いまま扉を開けた。天気は雨だ。けたたましい雨音にうんざりする気分を抑えて、こめかみに手をやっている、マユキが鬼気迫る表情で振り返った。

「あ、ラファ！」

「……なにごと?」

カウンタの前で、マユキとトレイズ、それからソラとフェイが何事か話していた。フェイはびしょ濡れで、その顔色は、寒さの所為だけではなさそうな青さだった。窓の外を見る。大粒の雨が地面に叩きつけられていた。

フェイはラファを見るなり詰め寄って、必死の形相で言った。旅装が濡れることよりも、フェイの泣きそうな顔に、身体の芯が冷えていくような心地がした。

「お願いだ！助けてくれよ！」

「な、」

「ねえフェイ、どうしたのよ!? 何があったのかちゃんと説明して！」

顔をしかめて叫んだソラをゆっくりと見て、ようやくフェイは我に返ったようだった。掴んでいたラファの袖を離し、言った。台詞も身体も、ぶるぶる震わせて。

「ギ……ギルビスの家に……ギルビスの家に、巫子狩りが……」

さあ、とソラの顔から血の気が引いていった。ラファは眠気も吹っ飛ばして、トレイズとマユキを見た。

「行こう」

トレイズがひとつ頷いて言った。

「フェイとソラはここで待っていてくれ」

「嫌よ！私も行くわ！」

「……お、俺も……！」

トレイズの胸倉を掴まんばかりの気迫で言い放つソラに、トレイズは眉を寄せた。

「駄目だ。村人を巻き込むわけにはいかない」

「何部外者扱いしてんのよ！私はあの子たちの友達なんだからね！」

「お、俺だって！俺だって！」

「でもなあ……」

「トレイズ、連れて行ってあげようよ」

「マユキ！」

ラファが咎めるように言うと、彼女はむっとした様子で言い返した。
「だって！……待ってるのって、不安なんだよ！？」

温和な彼女が、いつになく激しい口調だったので、ラファは思わず言葉を詰まらせた。うつむいて、自身の服の裾をつかんで、マユキは言った。

「私だって……ラファがラトメを出て行っちゃったあの時、ラファが死んじゃったらどうしようって、

すごく、すごく不安だったんだから！見えないところで友達が危険にさらされてるなんて、しかもそれを知ってて何もできないなんて、どれだけでもどかしかったか分かる！？」

「……」

ラファはトレイズを見上げた。

あの能天気なマユキが、そんなことを考えているだなんて予想だにしていなかったのだ。

彼もまたマユキの台詞に虚を突かれたように目をぱちくりして、それから罰が悪そうに頭をかいて、降参したとばかりに溜息をついた。
「悪かったよ、マユキ。…そこまで言うなら、わかった。ただしお前ら、絶対に前に出るなよ？俺が来るなって言ったら、そこで待つんだ」

なんにせよ時間がない。今ここで討論している余裕はラファたちにはなかった。トレイズがソラとフェイに念押しするように言うと、二人は勢いよく頷いた。

「ええ！」

「わかった……」

一同は表情を引き締めて、宿屋の扉を押し開けた。

ラファ達がギルビスの家の近くにある、ちょっとした林の茂みに隠れて様子をうかがうと、ギルビスの家の周囲には、黒い人影が大量に立ち並んでおり、そのわずかな隙間から、ギルビスと、見覚えのある黒い服を身に纏った鳶色の髪の少年が向き合っているのが見えた。ラファはそれが誰なのかはつきりと認識するより前に、無意識にその名を口にしていた。

「チルタだ」

チルタは前と変わらぬ穏やかな口調で言った。

「ねえ、君も死にたくないならはやく”巫子”を出したほうが身のためだよ？巫子を出せば、誰も死なずに済むんだ。なに、取って食おうってわけじゃない。ちよつと僕の計画に協力してもらっただけだよ」

「世界征服の協力かい？はっ…リイナをそんなところに連れて行かせるわけにはいかないよ」

すると、チルタはくすくすと肩を揺らして笑った。彼がグローブをはめた右手を掲げると、周囲を囲んだ巫子狩りが、一斉に鉄製の筒のようなものを構えた。

ラファの隣で、トレイズが息を呑んだ。

「まずい……魔弾銃だ！」

「早死にするタイプだね、君」

チルタが先ほどとは打って変わった冷たい声で言った。叩きつける雨のように、無情な響きだった。ラファの時とは違う。あの時は、彼は常に柔らかい口調でラファに対峙していた。

「といつても、今この場で死ぬ訳だけど」

トレイズが、かがめていた身を起こしかけた。ソラとフェイが息を

詰めた。

その時だった。

「やめて！」

家から一人の少女が出てきた。…リイナだ！

「お願い、やめてください！」

リイナはギルビスの前に飛び出して、彼の壁になるように両腕を大きく広げた。ノースリーブからのぞく白い肩から、血色の印が雨に濡れてきらめいていた。

チルタはしばし黙っていたが、やがて朗らかに言った。

「君が、”第三の赤の巫子”？」

「リイナ！裏口から逃げろって言っただろ！？」

「だって…だって兄さんを置いて、一人逃げるなんてできないよ！」

リイナは表情を硬くしてチルタを見た。気丈にも、ファナティライストの高等祭司を睨み上げて言う。

「あなたが、ファナティライストの高等祭司ですよね」

「いかにも」

「私が行けば、兄さんは殺されずに済むんですね？」

「リイナ、何を…！」

チルタは一瞬口をつぐんだが、すぐに柔らかく言った。

「…約束するよ」

リイナが一步前へと踏み出した。

チルタが手を伸ばした。

リイナは、その手を……

「リイナ！行くな……行くなあああつ……！」

手を、取った。

その時だ。ラファの頭の中で、少女の声がした。

——私が巫子になるよ

「…違う」

「ラファ？」

「違うんだ……リイナは、」

——私”が”、

「リイナは、巫子なんかじゃない！」

「……違うな」

パン！！

ラファがそう言ったのが先か、それともチルタが呟いたのが先か。それともその一瞬後か、乾いた音が、響いた。

リイナの身体が、わずかに浮かび上がった。

濃紺の髪が、雨景色を舞う。

肩の刻印と同じ、赤色が散る。

少女の白い体躯は、後ろで呆然と立ちすくむギルビスの元へと、還って。

その重みに耐え切れず、ギルビスは、尻餅をついた。

熱いものが、少女の腹からこぼれ溢れた。

「リイナ……！」

ギルビスの絶叫。

「にい、さ……」

「リイナ…待ってて、今僕が…！」

ギルビスは自身の左手をリイナの傷口にかざし、右手で自身の左肩をつかんだ。

と、ギルビスの左肩が、眩く光った。

「第三の赤き刻印よ…彼の者の傷を癒したまえ！」

その台詞を聞き、チルタの口端が上がった。

「へえ、考えたね。」

妹を巫子に仕立て上げて隠れてたわけか。君が魔弾銃で撃たれて、家の中はもぬけの殻。妹を追ってももうホンモノの第三の巫子はどこにもいない…なるほど、なかなかいいシナリオじゃないか。君が本物の巫子だったんだね。危ない危ない…知らずに殺しちゃうところだったよ」

「くそっ…」

ギルビスは唇を噛んだ。

ここまでか…！

眼を閉じ、けれど肩を大切な妹に癒しをかけることだけはやめずに、ギルビスは腹をくくった。

すると、

「第七の赤き刻印よ、彼の者に血色の雨を降らせよ！」

「トレイズ…？」

自分達に降り注いでいた大粒の雨が、突然血のような赤色に染まった。次いでラファの驚く声。その声のほうへ、チルタの顔が動く。感情の読めない瞳が、トレイズをじっと移した。血色の水滴がぽつりぽつりと、彼の白い頬を濡らしていく。

「やあ、紅雨。来てたんだ」

「よく言っぜ、はじめからこっちに気付いてたくせに」

トレイズは茂みから出て、チルタに向かって歩き出し、一瞬、その姿がぶれたかと思うと、その直後、彼はリイナとギルビスを守るかのようにチルタの前に立ちはだかつていた。

その、手袋を外した左手は、血に染められたように、紅い。

「嫌な雨だ」

チルタは必死で呪文を紡ぐギルビスから気が逸れた様子で、ふいと空を見上げた。トレイズがくつと喉の奥を鳴らして笑った。

「俺だつて嫌いさ。だけど、フェル様から、お前にはこれが効果的だつて言われたんでな」

「ふうん」

ラファはおやと目を見開いた。チルタの表情は氷のように固まったままだったが、最初は力も入っていなかった手が、いまやギリギリと握り締められ、震えていたのだ。

「トレイズって、巫子、だつたんだ」

ラファがそれを指摘する前にマユキが呟く。すると、ソラが立ち上がった。憤怒の表情だ。

叫ぶ。

「なんでよー!!」

「ソラ!馬鹿っ」

「なんでリイナを撃つたのよ!?リイナを傷付けたって、なんにもならないじゃない!!」

止めるフェイの声も聞かず、ソラは泣き叫んだ。すると、チルタはゆっくりとソラのほうを見た。ソラの肩がびくりと強張る。

「”なんで”？」

心底不思議そうな口調だった。

「なんで…って、当たり前だろう？自分の目的の邪魔をする奴は、排除しなきゃ。誰もがそうしてる。ラトメも、ファナティリストも関係なく」

チルタは笑った。人懐こい笑みで。

「なんにもならないよ。だけど僕の願いを邪魔する奴らがいるんだ。しょうがない。…君も、」

チルタの震える右手が、ゆっくりとローブの懐へと伸びていった。

「邪魔だよ」

ラファは飛び出した。とにかくソラを助けなきゃ、という気持ちだけが先走って、何をしようと考える間などなかった。

轟音と共に、チルタの魔弾銃が火を噴いた。ラファはソラを押しつけ前に出て、頭の奥の奥が命令するままに、大声を上げた。

「第二の赤き刻印よ！我らを来たる刃から守れ！」

——君の願うままに、我が巫子

赤い印を継承したときに聞いた誰かの声。その直後、身体のコが熱くなり、ラファの眼前に透明の壁が現れた。それに弾丸は弾かれてひしゃげて、ラファの足元に転がった。こんな小さなものに、今リイナが苦しめられているのかと疑問に思うほど、あっけなく攻撃は防がれた。

背後でソラが腰が抜けてへたりこんだ。チルタはそんなことを意にも介さず、ラファに笑いかけた。

「やあ、ラファ君。久しぶり」

ラファは黙ったままだった。

「チルタ…！お前、なんでそんな…」

トレイズの剣の切っ先が、チルタに向いている。それをちらと見ると、チルタはにこりと笑ってみせた。

「僕を、殺すのかい？紅雨」

「お前は不老不死だろ。剣じゃ殺せない」

するとチルタは何が面白いのか、肩を震わせて笑い、トレイズから背を向けた。

「チルタ！」

「ふふ…っ、まあいいや。第三の巫子はくれてやるよ。僕の力はまだ未完成だし」

チルタは顔だけトレイズに向けた。

「知らないようだから教えてあげるよ、トレイズ。」

この世界で、赤の巫子を殺せるものは存在しない。魔弾銃であつても、赤の巫子は殺せないんだ。エルミリカ・ノルツセル女史の理論は完璧だったのさ。君達は、僕を殺すまで…人殺しに堕ちるまで、不老不死の呪いからは逃げられないのさ。しかも、僕を除く巫子全員が揃わないと、僕は殺せないんだ。……僕が巫子を引き込むのが先か、君が巫子を引き込むのが先か…勝負だよ。僕は君に勝てたことは一回もないけど、今回ばかりは僕が勝たせてもらうよ」

チルタはラファを見た。ひどく優しい笑みだった。今の場にあまりにもそぐわない微笑みに、ラファの背筋がぞわりと粟立った。

「僕は死ぬわけにはいかない。どんな死に損ないになっても」

そしてチルタは巫子狩りの大群を引き連れて去っていった。トレイズは、ただ呆然と、赤色の雨の中に立ち尽くすだけだった。

a c t . 1 6 リイナ（前書き）

引き続き悲惨シーン注意。

act・16 リイナ

チルタ達が去ったあとのことだ。

ギルビスは震える冷たい指が自分の左手に触れるのを感じて、慌てて下を見下ろした。リイナが薄目をあけて、ギルビスを見ていた。

「リイナ！」

「に、さ………」

茂みから、ソラと、次いでフェイが飛び出して、癒しをかけるギルビスと、倒れたリイナの元へひざをついた。ラファとマユキも顔を見合わせ、彼女の元へ駆け寄る。

「リイナ、リイナ！」

「おいギルビス、なんとかなんないのか!？」

「なんとかする……なんとかするから!」

ギルビスは爪が食い込むほど強く肩をつかんだ。血が出たのか、服から小さく赤が滲んでいる。見かねたトレイズが、その手を押さえた。

「なにするんだよ」

「やめとけ、もう助からない。苦しめるだけだ」

「そんな……そんなの分らないだろ!? 離せよ!」

「にいい、さん………」

か細い声。一同はリイナを見下ろした。彼女は青白い顔を精一杯微笑みの形に変えて、ギルビスを見ていた。

「にいい、さ……ごめ、ね………」

「リイナ、何を、」

「ごめん、ね……にいいさん、ひとりにして……ごめんね………」

「何言ってるんだよ!!! そんなこと言うな!」

「トレイズさ……ラファ、さん……マユキサ……わたし、の……おにい
ちゃ、ん……を……おねがい、しま………」

リイナの声は、雨に溶けて、途切れて、消えて。
ずんと重い静寂が、丘の上に押し掛かっていた。

やがて、ギルビスが囁いた。

「リイナ？」

眠りについた少女に、呼びかける。

「リイナ？ねえ、起きろよ……リイナっ！」

ギルビスは、目を閉じた眠り姫に癒しをかけた。
少女は動かなかった。

「リイナ、……リイナ、頼むから、起きて」

ギルビスは、目を閉じた妹に癒しをかけた。
彼女は動かなかった。

「リイナっ……！」

ギルビスは、目を閉じた唯一の肉親に癒しをかけた。
リイナは、動くことはなかった。

「リイナの”赤い印”は刺青なんだ」

次の日、フェイはゆつくりと語りだした。

「ギルビスを守ってあいつらの父さん母さんが亡くなったとき、本
当はギルビスはラトメに行くって言ったんだ。リイナを危険にはさ

らせないって言って、さ。そしたら、リイナは自分が代わりに巫子になるって言い出したんだ。自分が身代わりになれば、ギルビスはここに残ってやりたかった医者勉強が続けられるし、どこにも行かずにすむってさ。医者になる奴が、人殺しをするなんていけないって。

馬鹿みたいだろ？…あいつ、頭悪いんだ。ギルビスとは正反対で」

そうして苦笑したフェイになんと言ってやればいいのか分からず、ラファ達は口をつぐんだ。フェイは続けた。

「でも、ギルビスにも俺たちにも、リイナは止められなかったんだ。…ギルビスとリイナってさ。父さん母さんが亡くなるまで、あんまり仲、よくなかったんだ。ギルビスは頭もいいし、それなりに運動だってできる。だけどリイナは馬鹿だし鈍くさいから、コンプレックスっていうか…だから、兄妹二人きりになって、あいつが兄さんのために、一生懸命考えたことを、ギルビスも否定できなかったんだ。リイナって、頑固なんだよ。俺たちが何か言ってやればよかったんだろって、ギルビスの奴、俺たちに相談もほとんどしなくて。

今だから言うけど、ギルビスはあんたたちが来た時さ、ほんとに全部ばれちゃえばいいって思ってたんだよな、きつと。だからリイナに会わせただ。ファナティライストにばれて殺される前につて。

…結局、間に合わなかったけどさ」

ラファは思った。

自分は一人っ子だ。兄弟はいないが、そのつながりというのは切っても切れないものなのかもしれない。マユキにも弟がいて、傍目にも随分と可愛がっていた。ちらとマユキを見ると、彼女は唇を引き結んでうつむいていた。

朝早くの、インテレディアの名もなき村の入り口で、少し冷たい風がそよりと吹いた。
雨は、降っていない。

ソラが尋ねた。

「ねえ、本当にギルビスを置いていくの？ギルビス、きっとあなたたちについていくと思うけど」

「あの状態のまま連れて行くわけにもいかないだろう。しばらくしたら、また出直してくるさ」

トレイズが肩をすくめて言った。この輪の中に、ギルビスはいない。「チルタが、くれてやるって言っただ。当分は奴はここには来ないだろう。なら、落ち着いた頃にでも…ん？」

すると、丁度入り口の前を通りがかった村人の会話が耳に飛び込んできた。

「ねえ…聞いた？丘の上のあの兄妹が住んでる家にファナティライストの兵が来たって…」

「聞いた聞いた。妹のほう死んだんだって？本当に呪われてるんじゃないか、あの一家…」

兄貴の方にも近づかないほうが…って!!」

村人の片方が、急に膝を折った。その後ろから、一人の小柄な少年が現れる。濃紺の髪の少年、ギルビスは、冷たい瞳で、自身が膝裏を蹴りつけた相手を見下ろした。

「じゃあ、今すぐ呪い殺してみせようか？」

「ギルビス！」

村人たちが尻尾を巻いて逃げていったあと、ソラが彼に駆け寄った。ギルビスは肩に担いでいた麻袋を抱えなおして、ソラを無視してトレイズを睨み上げた。

「僕を置いていくなんていい度胸してるね」

「ギルビス…」

「お前、だって」

「僕も行くよ、当然ね。君達だって僕がいなきゃ困るんだろ？あの高等祭司が、巫子が揃わなきゃ駄目だとか言ってたじゃないか。」

「それに、君達はリイナに僕をよろしくされたんだから、ちゃんと保護する義務があると思わない？」

ギルビスは、自嘲気味に口端を上げた。フエイが一步前に出た。

「ギルビス」

「止めるとか、言わないでよ」

フエイは、しばし黙って、首を横に振った。

「言わない、言わないよ。ギルビスがそう考えて、決めたことなら」

「フエイ…」

「ギルビス！」

ソラが目一杯涙を溜め込んで言った。ギルビスは呆れたように、ようやくソラを見た。

「なに？そんなに自分が苛められっ子に逆戻りするのが悲しい？」

「いいの！そんなことどうでも！」

ソラはギルビスにがばりと抱きついた。ギルビスは少しよろめいたが、倒れるのをすんでのところで留めた。

「……許さないから」

「…ソラ、」

「死んで、骨になって帰ってきたら、許さないから！

絶対生きて帰ってくるの！あ、あんたが、…死んじやったら、リイナがあんたを守ろうとした意味も、な、なくなっちゃうんだからね

「！」

「…」

ギルビスは表情を消してソラを見た。目を伏せ、言う。

「……約束する」

「それで」

名もなき村を出て、南北に分かれた道に出たとき、ラファはトレイズを振り返った。

「これからどうするんだ？フェルマータに”赤の巫子”のこと、聞きに戻るのか？」

「うーん……」

トレイズは口元に手を当てた。

チルタの言ったあの台詞。巫子が”完全な”不老不死で、巫子を全員集めなければ第九の巫子は倒せない。これらのことは、トレイズにとつて初耳だったらしい。

「フェル様が知らないはずはない。フェル様は、前にも巫子の役目を果たしたことがあるんだ。それに、巫子を集めなきゃならないなら、そもそもどうしてラファやマユキを巫子にならないようにしようとしたのか？それもおかしいだろ？」

昨晚そう言っていたトレイズ。

しかし彼は、問うたラファに向かって首を横に振ってみせた。

「いや、シエイルに向かおう」

「いいのか？」

「確かに、チルタが言ってたことは気になるけど、それを聞いた俺たちに、ラトメに向かって時間を潰させることが目的なら、このままシエイルに行って巫子を集めたほうがいいだろ。…といっても、あいつは多分チルタに付いていく、なんて言い出したりはしないだろうけどさ」

「二手に分かれて、片方がラトメに戻れば？」

「二人だけ……っていうのは、少人数が過ぎる。いいさ、なんにせよ俺たちの目的は変わらない。巫子を保護して、ラトメに連れて行くこと。だろ？なら、それを成し遂げなきゃな」

マユキの提案を一蹴して、トレイズは言った。

「……よろしかったのですか？」

ラトメディア神宿塔、ソリティエ神殿。

ブーツのかかとを鳴らして、麻のコートをなびかせて、凜とした声で、問う影が、ひとつ。

対する小麦色の髪的女性は、普段となんら変わらぬ微笑をたたえたままだった。

「何が、ですか？」

「巫子たちに、きちんと正しい説明をしなかったことです。信用を失われては、第九の巫子の思う壺でしょう、”神の子”フェルマー
タ」

カツ。ひと際大きい音を立てて、「彼女」はフェルマータの一步手前で立ち止まった。

「だから、ラファ様にレーチスからの時計と、あなたからの指輪を？……エルミ」

「あなたが動かないからです。上手く事が進んで、あなたは嬉しいでしょう？」

「ええ、とても。けれど、エルミ。あなたも人のことは言えないでしょう？過去夢の君に、その力の恐ろしさを何も伝えていない」

「……」

エルミは黙り込んだ。フェルマータは追い討ちをかけるように続け

る。

「あなたには、この物語がどのように”視えて”いるのですか？――予知夢の君」

エルミは顔をしかめて、フェルマータに背を向けた。ホールへと続くはしこの前で立ち止まり、不敵に笑んで、顔だけ振り向く。

「終焉の、赤い光が」

act・17 ゼルシャの村

北のシェイルディアへと向かう途中、分かれ道にさしかかった。一同は、地図を持っているトレイズを見る。彼は一枚の大きな羊皮紙とにらめっこして、やがて自信満々に、言った。

「右だ!」

「……で、どこまで行けばシェイルディアに着くのかな、トレイズ?」

あれから七日。

いつまで経ってもシェイルディア領に入る関所は見えてこない。周囲には木々ばかり。鳥の鳴き声が、やけに高く響く森。一行は完全に迷っていた。

ギルビスに無表情で詰め寄られて、トレイズはたじろいだ。

「い、いや、だって…確かに、地図には右だって…」

「貸して」

言葉少なにギルビスは地図をひつたくと、広げた。両側でラファとマユキが覗き込む。インテレディアの名もなき村から、北への一本道を辿って、七日前の分かれ道へとさしかかって…

「思いっきり左じゃないか。君、地図も読めないの?」

「本当かよ!?!」

「トレイズ…普通間違えないだろこれは」

見ると確かにシェイルディアへと向かうのは左の道で、自分達が選んだ右の道は東の深い森へと続いて、途中で途切れていた。

つまり、この道がどこに続いているのか分からない、ということだ。

「あ、でもちよつと待って」

マユキが森の中のある一点を指した。

小さく集落のマークがついている。距離から見て、おそらくここからそう遠くない場所にあるはずだ。

「ね？もうすぐ日も暮れるし、ここに泊まって、シェイルへの行き方を聞こうよ」

しかし、トレイズとギルビスは、何故だか渋い顔を見合わせていた。

「うわ」

「やっぱりか」

それぞれ槍を突きつけられながら、両手を挙げてギルビスとトレイズがばやいた。目を吊り上げてこちらを睨めつけている、村の入り口の番人の耳は、ぴんと長く尖っていて。

「人間がこのゼルシャの村に、何用だ！？」

「ここはエルフの住まう地！人間は早々に立ち去れ！」

「うわあ…エルフの集落だ！」

刃を向けられているというのに、一人嬉しそうなマユキはやけに浮いていた。ラファは慌てて前に出た。

「ケンカしに来たわけじゃないんだ！ただ、一晚泊してもらおうと思っ……」

「人間などに与える宿などはない！」

番人のエルフは、なおもラファに刃を向けていた。ラファは途方に暮れて、トレイズを見上げる。

「どうするんだよ！？」

トレイズは何事か考え、やがて顔を上げた。

「ラファ、マユキにかけてる幻術を解くんだ」

「はあ!？」

「いいから。このまま牢獄が宿になるなんて嫌だろ? 最悪墓場の土の下に生き埋め、なんてのもありえるな」

「う」

ラファは口を詰まらせ、ひとつ指を鳴らした。すると、マユキの髪の一部が、小麦色から赤色へと変わる。変わったというより、戻った、というのが正しいか。

マユキの髪を見た番人たちが目を丸くした。トレイズが左手の手袋を外して、赤く染まった手を見せる。

「赤の巫子としての旅の途中なんだ。悪いけど泊めてくれないかな?」

「赤の巫子…!？」

番人は顔を見合わせ、困り果てたように呟きあった。見る限り、巫子ということに随分動揺しているらしい。

「おい、どうするんだよ?」

「し、しかし、巫子とはいえ人間は」

「何事ですか」

村の奥から、ひとりのエルフの青年がやってきた。くすんだ金の髪に瞳の彼は、穏やかな笑みを浮かべている。その影に隠れるように、淡い金髪の、十歳ぐらいのエルフの子供が、こちらをきりりと睨みつけてきていた。

「ルセル様! エリーニヤ様も!」

番人が慌てたように姿勢を正した。

「じ、じつは赤の巫子様らしき一行が、村に泊まりたいと…」

「赤の巫子?」

青年がこちらを見た。一人一人に視線を留めて、そしてマユキの髪まできて止めた。

「成る程」

青年は、どこか嬉しそうに目を細めた。子供のほうが言った。

「ルセル、赤の巫子とはいっても人間だろう？通すのは」

「いえ、このゼルシャの村に住まう者として、赤の巫子は歓迎するしきたりとなっております。お通り下さい、赤の巫子。宿へとご案内いたしましょう」

ルセル、というらしい青年と、エリーニヤと呼ばれていた子供について村の中へと入ると、村人のエルフ達がどよめいた。皆ラファ達を指して、何事か囁き合っている。

「人間だ」

「なんで人間が村に」

「でも見る、あの女の髪」

「まさか、赤の巫子？」

妙に背筋が痒くなるような感覚を覚えつつ、ラファは前を歩くルセルに尋ねた。

「お、おい、どういふことなんだ？」

「この村では、人間と巫子は別個のものとして見ているのですよ。」

赤の巫子は、この村じゃ”特別”なんです」

「…特別？」

落ち着かない様子で赤い髪を弄っていたマユキが顔を上げた。エリーニヤが、声変わり前のキンキン声で返した。

「このゼルシャの村は、かつての世界創設者のひとりの故郷なんだ。だから、彼の作った”赤い印”の継承者を敬ってるんだ」

「エリーニヤ様、分かってるんじゃないですか。村に入れることを反対のようでしたから、ご存知無いのかと思いました」

「そのくらい知っている！僕をいつまでも子ども扱いするな！」

「私から見れば、エリーニヤ様などまだまだ子供ですよ」

そしてルセルとエリーニヤは、ある一軒の屋敷の前で立ち止まった。つられてラファ達も足を止め、屋敷を見上げる。丸太づくりの大きな家が、ずんとそびえ立っていた。ルセルが、こちらを振り返って笑った。

「こちらにお泊りいただきます」

「ふうん、森の奥にあるのに、随分大きな宿なんだね」

「ええ、村長の家ですから」

ラファ達がきよんとしてルセル達を見ると、エリーニヤが半ば呆れたように肩をすくめて見せた。見た目が中身にそぐわない、随分と大人びた子供だ。とはいえ、エルフは人間よりもずっと長命の種だから、彼も見た目どおりの年齢ではないのかもしれない。

「こんな村に宿屋などあると本気で思っていたのか？うちに泊めてやるって言ってるんだ。感謝するんだな、赤の巫子」

「うちって…」

「ああ、エリーニヤ様は、このゼルシャの村長のご子息であられます。ちなみに申し遅れましたが、私は村長の補佐をさせていただいております」

改めて宜しく願いますね、と微笑むルセルに、ラファ達はようやく、何故番人がこの二人をやけに敬っていたのか、合点がいった。

ゼルシャの村長は、とても美しかった。

エリーニヤと同じ淡い金髪を長く伸ばしてシニヨンに結い上げ、瞳の深い青色は、深海のように穏やかで柔らかかった。絹のように滑らかな衣服に身を包み、“彼女”は優雅にお茶をすすっていた。…ゼルシャの村長は、女性だったのだ。

真っ白な薄いティーカップをソーサーに戻し、その女性は客人を笑顔で受け入れた。

「赤の巫子様をお泊めできるなんて、一生の誇りですわ。さあ、お疲れでしょう。食事を用意させるので、お座りになつてくださいな」

「なんだよ、巫子つていつたって人間じゃないか」

「エリーニヤ、口を慎みなさいな」

笑顔だが有無を言わせぬ口調で女性が言うので、エリーニヤはむくれたまま口をつぐんだ。女性はそれに頷くと、ラファ達を見回して言った。

「遅ればせながら、わたくしがこのゼルシャを治めております、レイセリアと申します。不肖ながら、かつての世界創設者のうち、第三の赤い印をお創りになつた方の子孫です」

「第三の…？」

ギルビスが興味を抱いて椅子から身を乗り出した。そういえばギルビスは第三の巫子だ。レイセリアはゆつたりと頷いた。

「ええ、あの方はエルフも人間も関係なく、傷ついた人ならば誰でも診る戦医でいらつしました。その所為で…人間に味方するものとして故郷の森から追放されて、旅医者となつたところを、その腕を買われて世界創設者に名を連ねることになつたと、そう聞いております」

レイセリアは、給仕が運んできたお茶を一口飲んで、ギルビスに向けて微笑みかけた。

「その所以あつてか、第三の赤い印は、医学の才を持つ者に継承されていくそうです。…この度の第三の巫子様も、医学に興味がおありで？」

「あ…いや」

途端、ギルビスが口ごもつた。

自分が第三の巫子、またはその縁者であると公言しているようなものだということに気付いて、今更ながらレイセリアを警戒したようだ。と、彼女はくすりと笑った。…よく笑う女性だ。

「何もいたしませんよ。ファナティリストに協力する義理など、こちらにはございません。ですが、第三の印の主の手前、赤の巫子様は敬うべき方と思っていますが…その争乱に首を突っ込む気もまた、ありません。」

エルフは常に、人間に対して中立でなければ」

最後の台詞。

まるで自分に言い聞かせているようであった。

その言葉を吐いたレイセリアの顔はとても優しいのに、氷のように冷たかった。

act・18 隠されたもの

「トレイズ、なんでこの村で巫子を敬ってるって分かったんだ？マユキの幻術を解けて言ったって事は、そういうことだろう？」

食事を取ってあてがわれた部屋に入るなり、ラファは尋ねた。トレイズはああ、と思い出したように声を上げた。

「サザメさんに聞いたんだ。インテレディアを抜けた先にある森には、巫子を敬う村があるってさ。だからここがそうじゃないかと思つて。サザメさんも、この村の出身らしい。」

サザメ。神宿塔の神殿を守るエルフの女性を思い出して、ラファはようやく合点がいつて頷いた。すると、ギルビスがふかふかのベツドに飛び込んで、寝転び声を上げる。

「でも、なにかおかしいと思わない？」

「なにが？」

「あのレイセリアって女だよ。人間に対しては中立、無干渉……っていうのは、エルフにとっての大前提。エルフは普通……まあ、ソラミたいな例外はいるけど、たいていは人間が大嫌いだからね。なのにあの人、巫子だけは特別だ、みたいなことを言ってた。だろ？」

「それは、第三の印を作った人の子孫だから」

「そこがおかしいんだ。第三の印の主は、人間とエルフを平等に診たからエルフの森から追放された。人間など診る必要もないって言うエルフに対立したからね。つまり、エルフの大前提である、”人間に対しては常に中立に、対立しない”……っていう掟を破ってるんだ。でも、巫子を敬ったりして、そこまで第三の印の主を崇拝してるなら、子孫であるこの村人達も彼の遺志を引き継いで、人間を受け入れてるってほうが自然じゃない？」

けど、あいつらははじめ、僕たちを村に入れようとしなかっただろ？ルセルとエリーニヤが来るまでは。……ということは、エルフの掟も

守ろうとしてるってことだ。

第三の印の主と、一般のエルフ…両者の考えは、まるっきり逆なんだ。両方を守ろうとするなんて、矛盾してると思わない？」

あの全てを悟りきったような、レイセリアの瞳。

彼女はギルビスが第三の巫子であることを見抜いても、慌てず騒がず、まるで当然のことのように受け流していた。トレイズは村に入ったら再び手袋をはめてしまったし、そうなるとマユキ以外の印は隠されていたのに、だ。つまりギルビスも巫子の一人であることを予想していたということ。

それだけの推察力がある彼女が、この矛盾に気付かないとは考えにくい。…それとも、気付いていてもなお、それを変えられない理由でもあるのか。

トレイズも唸った。

「そういえば…サザメさんも、この村は結構人間にも寛容だから、何かあれば頼るといいとか言ってたな」

サザメはフェルマータの護衛をするために村を出ている。こんなラトメから離れた場所に度々戻るわけにも行くまい。ということは、サザメが村を出てから、この村は何かが変わったということになる。だとすれば。

「僕らを受け入れた理由は、まだ別にあると考えたほうがいいね」

迷いなく言ったギルビス。ラファとトレイズは互いの顔を見合わせ、そしてまたギルビスに視線を戻した。

「ギルビス」

「うん？」

「お前、頭いいな」

医者志望の肩書きは、伊達ではなかった。

——お願いです…その子を…どうかその子を、連れて行かないで！

——レイセリア様…もういいです、私、みんなに迷惑はかけられないし…

——レイセリア様……！

「なら、実力行使といこうか。」

——そんな……駄目、嫌つ、やめてええええええええええ！！！！

ラファはベッドから飛び起きた。いつになく鮮明な夢だった。泣き叫ぶ女性、彼女が守っていた少女、斬り伏せられていく人々、中心に立つ、一人の少年…悲鳴、足音、血飛沫…いくつもの恐怖が、何度も何度も繰り返して、ラファの頭の中で再現されていく。

（なんだ？）

荒い息をなんとか抑えようと胸を押さえる。

（なんだ、今の夢は）

インテレディアでの上のリアリティ。夢であったということすら納得がいかない。

（今の、情景は）

『現実ばかり見ていても、見えないものはあるですよ、”過去夢の君”』

「っ!？」

右手に添えられた、白い手。澄んだ声。ラファは息を呑んで、その手の先を辿った。

その持ち主は、瑠璃色の冷たい虚ろな瞳をしていた。まるで盲いているようだった。肩をかすめて彷徨う長さの銀の髪。陶器のように白いなめらかな肌は、黒い神官服によって、さらに幽霊のように青白く光って見えた。黒い神官服…この姿が示すものは、ひとつ。

「ファナティライストの…!」

『大声を上げないで下さい。私はあなたの敵じゃありません』

信用できるか！叫ぼうとしたラファの口をそつとふさいだつめたい手のひら。焦点の合わない、ラファと同じ蒼い目に見つめられて、ラファはようやく、目の前の人物に見覚えがあるのに気付いた。

「エルディ？いや、エルミ…?」

『……私は、この指輪を通して話しています』

ラファの問いに答えず、ラファの指にはめられた銀の指輪を指して、その謎の人物は言った。

『過去夢の君。我がノルツセル一門の絶望にして希望…あなたの視る夢を、どうぞ忘れぬようにしてください』

「はあ？」

『私が犯した罪を、どうぞ繰り返さないでください。あなたに栄光の輝きがあらんことを』

「お、お前、一体…？」

何を聞けばいいのかわからないまま、ラファの口から質問が飛び出した。と、その人物は虚ろな目を穏やかに細めて、ラファの頬に手を添えた。

まるで、母が子を労わるように。やさしくて、悲しい手のひら。

『私は、そう、エルミリカ』

「える、みりか？」

『私のたいせつなラファ、私はいつでも、あなたの側に…』

ラファが瞬きをするうちに、その人物は、目の前から消えうせていた。

次の日。

ラファは朝に弱いとは思えないほど勢いよく、起き出してきたマユキの肩をつかんで尋ねた。

「マユキ！」

「わっ、朝に元気なんて珍しいね、なあに、ラファ？」

「エルミリカって誰だっけ？」

我ながら間抜けな様だとは思っ。

その脈絡のない質問に、マユキは「はあ？」と訝しげに声を上げた。

「いきなり何言ってるの、ラファ？フェル様が言ってたじゃない。
”エルミリカ・ノルツセルは赤の巫子の考案者だ”って」

act・19 過去夢の君

自分の見たあの悪夢、そして現れたエルミリカ。

ラファが熱っぽく語った話を聞いて、マユキ、トレイズ、ギルビスの三人は顔を見合わせた。

「過去夢の君」かあ…そういうば、チルタもそんなこと言ってたな」

トレイズの台詞に、ラファは記憶を掘り起こした。確かに、そんなことを言っていた。

過去夢の君と、予知夢の君。「この世で最も尊い存在だ」と、チルタは言った。そして予知夢の君は、トレイズが保有しているのだと「うん…エルミなら何か知ってるかもしれないけどなあ…」

「そういえば、あの指輪、エルミから貰ったんだ。ラトメを出るときに、”僕には必要ないものだ”って。な？マユキ」

「うん」

「指輪…」

ギルビスが身を乗り出した。

「その指輪、ちょっと見せてもらえない？」

「構わないけど。あ、あと、チルタが俺のことを”過去夢の君”って呼んだ時に、この時計が証拠だって言ってたんだ。これ、インテレディアで見たときに、今までは止まっていたのに、いつの間にか動いていたんだよな。しかも、逆周りに。両方俺のじーちゃんの持ち物らしいけど…」

指輪と腕時計をまじまじと見て、ギルビスの目が大きく見開かれた。感動したように、言う。

「まさか、本物が残っていたなんて…！」

「本物？」

マユキが首を傾げた。ギルビスはありがとう、と二つの品を返すと、一同を見まわした。

「過去夢の君”っていうのは、”予知夢の君”と並んで、この世で最も強い魔力を持つと言われてるんだよ」

「強いつて…赤の巫子よりもか？」

「赤の巫子だって、所詮は人の作ったものだ。でも、この二人は違う。双子神”エル”の直系の力を受け継いだ、言わば現代に生き返った神のようなものだ」

”神”。ラファはその単語が、自分の背中に重くのしかかるのを感じた。神？誰が？俺が――？

「ノルツセル一族の、それも王家にのみ引き継がれてる、特別な力……それは読んで字の如く、”過去夢”を視る者と、”予知夢”を視る者。つまり、双子神がそれぞれ持っていた、過去と未来を視る力だ。それを唯一制御できるのが、銀の腕時計と銀の指輪…ノルツセル王家の秘宝だよ。ノルツセルっていうのは、世界創設戦争のときに滅亡した、ロゼリー帝国の王家一族のことだけど、この道具もロゼリーが滅んだときに一緒になくなっただって、父さんの本に書いてあったのに…」

「ただの、御伽噺とかじゃなくて？」

さすがのマユキも、あまりに非現実的すぎるその話には乗り気にはならなかったらしい。しかし、ラファにはギルビスのその話に、妙な説得力を感じた。

「でも」

ラファの口をついて、言葉が飛び出した。

「インテレディアで、俺はギルビスの過去が視えたんだ…」

一同が黙り込んだ。最初に我に返ったのはギルビスだった。彼は何

かに気づいた様子でラファを見た。

「だから、君はリイナが巫子じゃないことに気付いたのか…」

「え…あ、ごめん……」

「いや、いいんだ。いいんだけど…」

ギルビスは口ごもった。トレイズが後を引き継ぐ。

「おいおい、つてことは本当に、ラファは”過去夢の君”とやらってことかよ」

「本当に、ラファが？」

「俺だつてびつくりだよ！！でも、だとしたら全部、説明はつくし」

ギルビスは口元に手をやった。戸惑うラファ達の中で、彼一人だけが冷静だった。

「…それで、今回はこの村長の過去が視えて、その上エルミリカ・ノルツセルと名乗る奴が現れたってわけだ」

「あ、ああ…」

「史実によるとね、エルミリカは、今のところ最後に確認されている”予知夢の君”なんだよ。だから、その指輪はかつてはエルミリカの持ち物だったってこと。つまり、エルミリカは指輪に何らかの仕掛けをしたのかもしれない」

「エルミリカ・ノルツセルって、赤の巫子を考案したっていう、天才なんだろう？」

「そうだね」

「それって、」

ギルビスが肯定すると、マユキがラファに飛びついた。

「すごい！すごいよラファ！！それって、ラファはエルミリカ・ノルツセルに会ったってことでしょ！千年以上も前に死んでる人……幽霊……いいなあ、私も会いたかったなあ！」

「げ、マ、マユキ……」

珍しくあの非現実好きのマユキが大人しいと安心していたのに、今になって発作がおきたらしい。ラファが後ずさると、マユキはラファの腕をひつつかんで、興奮したように言った。

「ねえねえ、ラファが呼んだらエルミリカさん、出てくるかな？呼んでみてよ、ラファ！」

「む、無理だつて！やってみたけど、出来なかったんだよ！」

そんなやりとりをするラファとマユキを尻目に、険しい表情でトレイズは頭1つ分下にあるギルビスの頭を見下ろした。

「でもよ……ノルツセル一族って確か、もう生き残りはいないんじゃないかって思ったか？」

「確か、エルミリカとミフィリに子供はいなかったって聞いている。でも、異分子に関する記録っていうのはほとんど残ってないんだ。エルミリカとミフィリ以上に、嚴重に隠されてるからね。だから、ラファがノルツセルの血を引くとしたら……」

ギルビスは、ラファの背を見た。

マユキに詰め寄られて戸惑う、どこからどう見ても普通の少年。そして、吐き出すように言う。

「ラファは、”異分子”の子孫なのかもしれない」

ラファの見た夢。

それがもしかしたら、昨夜ギルビスが指摘した矛盾の原因なのかもしれない。そう話しながら食堂へと向かう途中、エリーニヤが食事の入ったトレイを手に、廊下を歩いているのが見えた。

「あれ……エリー」

「マユキ、待て」

エリーニヤに呼びかけようとしたマユキを制して、トレイズは一同を物陰に押し込んだ。

「な、なんだよ？」

「いいから黙ってるって」

エリーニヤはこちらには気付かず、一瞬視線を周囲に走らせると、廊下の奥へと消えた。…食事のトレイを、持ったまま。勿論、そこらは食堂ではない。

エリーニヤの足音が聞こえなくなると、トレイズが真っ先に立ち上がり、呟いた。

「追うぞ」

「えっ、ちょ、トレイズ!？」

「どうしたんだ？」

「……」

ぽかんとするラファとマユキとは違って、ギルビスはなにかに気付いたようにトレイズの後を追った。

「ほら、何やってるの君達。置いていかれるよ」

「あ、ああ。行こうぜ、マユキ」

「う、うん」

トレイズは、三つ向こうの角を曲がった先にいた。行き止まりの壁をさすっている。

「あれ、行き止まりじゃないか」

「じゃあ、エリーニヤはどこに行ったのかしら？」

「隠し扉だ、ほら」

トレイズが、木製の壁についた小さなへこみを押すと、カチ、と錠が外れるような音が耳に入り、壁の端に、丁度扉くらいの大きさの、長方形の筋が入った。トレイズがその部分を押すと、それはまさに

扉のように、蝶番をまげて開いた。

向こうに広がるのは、薄暗い廊下。冷たい空気が、流れてくる。

「やっぱり、何かあるね、この村」

ギルビスの呟きと共に、一同はゆっくりと、暗闇に向けて歩き出した。

その廊下は、とてもひんやりとしていた。足音すら高く響くその空間では、声を上げることすらはばかられて、ラファ達は、廊下の向こうからエリーニヤの声が聞こえるまで、心臓の音さえ抑えながら進んでいた。

「なにか、食べなよ」

男の子のまだ高い声が、反響したところで、ラファ達は足を止めた。暗い廊下の奥に、淡い金髪が白く映えて見えた。

エリーニヤの押し殺したような声に続けて、なにやら少女のような声が返した。そっけない口調だった。

「いない」

「食べないと倒れちゃうよ」

「いい。食べたくない」

この声は。ラファは眉を寄せた。この声、昨夜の夢で聴いたものはなかるうか。

エリーニヤがひとつ溜息をついたあとで、気を取り直した様子で言った。

「ラゼ。昨日ね、赤の巫子が村に来たんだ。ファナティライストの奴らがラゼを連れて行くこうとしてから、人間は村に入れないって決めたのに。はやく出て行ってくれないかな」

え？と少女の声が上がった。絶望の中に一筋の光が見えた…そんな声音だった。

「巫子が、ここにいるの？」

「そう。まさか、会いたいわけじゃないよね？」

「……」

「会うことなんてないよ。人間なんてみんな、薄汚くて卑怯者なん

だ。そんな奴らに、ラゼが会う必要なんて無い」

「エリーニヤ……」

悲しみを帯びた声で、少女は言った。しばらく、沈黙が続く。やがて、エリーニヤが動く音がした。食器が鳴る。

「夜にまた来るよ。この食事、食べてね」

少女の声は何も答えなかった。諦めたのか、エリーニヤがこちらへ向かってきた。ラファ達が慌てて曲がり角に隠れると、金髪の男の子はラファ達を素通りしていなくなった。

「なにが……」

「！誰か、いるの？」

マユキが思わず声を上げると、先ほどの少女の声が返ってきた。はっとして、振り向く。静かな足音と共に、一人の少女が姿を現した。エリーニヤよりも濃い、太陽のような金髪に、金の瞳。真っ白で、細っこい腕。白いワンピースからのぞく足は、この冷たい廊下のなかで裸足だった。金色に、その耳は隠れていた。そして、この少女は、この冷徹な廊下の奥にずっと佇む檻の中に閉じ込められていたのだ。

「誰？」

ひた、とまた一步少女が前に出た。ラファ達を一人一人見て、首を傾げる。

「……もしかして、あなたたちがエリーニヤの言ってた巫子なの？」

一同はぐ、と言葉に詰まった。自分達が今この場にいることがとても怪しいことは、火を見るより明らかだった。ギルビスが、答える。

「そうだよ」

「エリーニヤの後をつけてきたのね、そうでしょ？」

全部見透かしているかのような金の瞳に見つめられて、ラファ達が答えあぐねていると、少女はにこりと笑って、手をひらひらさせた。

「大丈夫、あなた達がここに来たことは、誰にも言わないわ。安心

して」

「君は、何でこんなところに…」

ラファが恐々問うと、少女は表情を曇らせた。

「私が外にいと、みんなの迷惑になるから」

「フアナテイリストに、つかまるから？」

ラファの問いに、目の前の少女は目を丸くして、ラファをまじまじと見た。他の者もあつけにとられた様子でこちらを見ている。

「レイセリア様に聞いたの？」

「あ、いや…」

まさか「夢で見ました」とは言えまい。もし自分が少女の立場だったならば絶対に信じられないだろう。彼女がマユキと同じ系統の人間なら話は別だが。

すると、少女は戸惑うラファを氣遣ってか、ふと微笑んで首を縦に振った。

「そうよ。ねえ、あなたたちは、どうしてこの村に？」

「道に迷って」

マユキが答え、三人でトレイズをじつとりと見る。旅の一行の中で最年長のトレイズは、その威厳も空しく恨がましげな視線に後ずさった。

「い、いや…その」

「じゃあ、元は旅人かなにかなのね？そうでしょ？」

妙に期待を込めて少女が問うてくるので、ギルビスは首を傾げた。

「確かに、今は旅の途中だけど…どうして？」

「お願い！私も一緒に連れて行って！」

少女は鉄格子から手を伸ばして、ラファの腕にしがみついた。骨と皮ばかりの、細くて折れそうな手だった。トレイズが声を上げる。

「おいおい、いきなりなんでそんなことを」

「なんでもするわ！途中で売っても、海に落としてもいい！とにかく

くこの村から出してほしいの！」

少女の必死の形相。

それは、ラファが夢の中で見たのと同じ、レイセリアの名を叫んだときと同じようにがむしゃらだった。ラファは途方に暮れた。

「で、でも、こっちは事情も知らないし…そもそも、俺たちまだ君の名前も聞いてないんだぜ？」

「あ、あれ？」

少女の手が緩んだ。頬をバラ色に染め、ラファから手を離して口元に手を当てた。

「や、やだ、ごめんなさい…ちゃんと説明するわ。私の名前はね、ラーゼファア。ラゼって呼んで。」

レイセリア様の娘で、あのね、赤の巫子なの」

そうしてラゼは、金髪に隠れた左耳をあらわにした。その丸い小さな耳は、絵の具を塗りたくったかのように、血色に染まっていた。

a c t ・ 2 1 ラゼのわがまま（前書き）

直接描写というか半分モノローグみたいな感じですが、残酷表現含みます。苦手な方はご注意ください。

act・21 ラゼのわがまま

赤の巫子。大体予測どおりだった。今までの経験からいって、ファナティライストに襲われるとしたらそれしか考え付かない。しかし、彼女が赤い印をあらわにするときに、もうひとつ分らないことが出来てしまった。

「レイセリアの娘って、だってアンタ、人間じゃないか！」

ラファの上げた台詞に、ラゼは気恥ずかしそうに口端を上げた。その耳はエルフのようにぴんと尖ったものではない。ラファ達と同じ人間のものだったのだ。

「拾われっ子らしいから。赤ちゃんの頃にね、森に捨てられてたところを、レイセリア様に…村の皆には、私が人間だってことは内緒でね。エリーニヤも知らないのよ。知ってるのは、レイセリア様とルセルさんと、そして今は、あなたたちだけよ」

そしてラゼはどこか遠くを見つめた。突然盲目になってしまったかのように虚ろな瞳で、過去に思いを馳せて、語りだす。

「この村はね、もともと人間ととても仲のいいところだったのよ。でも、流石に村長が人間の子供を育てるのは、他の集落のエルフの反感を買うから…レイセリア様はいつも、私に言ってたわ。」自分が人間であることを誇りに思いなさい。我々がエルフであることを誇っているように”って。ルセルさんに言われて、耳は隠さなきゃならなかったけど。…私、人間って、エルフと同じように優しく、誇り高いものだと思ってた」

失望したような声だった。目を伏せ、厳しい口調で言う。

「あるときね、黒い服を着た人間達が、大勢村に押しかけてきたの。”ここにかくまってる人間の子を出せ”って。”呪わしい、破滅を導く者に育つから”って…この村に住んでる人間は、私しかない

から、私、怖くて、レイセリア様に言われて、隠れてたの」

黒い服。ファナティライストの兵士達か、もしくは巫子狩りだろう。ラゼはその時の恐怖が蘇ったのか、小刻みに震えだした。

「そうしたらね、あいつらのリーダーみたいな奴が、エリーニヤを……エリーニヤを人質にとったの。」

エリーニヤを気絶させたの。レイセリア様は泣いてて、息子を返してって叫んでて、私は、私は本当のレイセリア様の子供じゃないのに、エリーニヤを犠牲になんかできないって思ってた……」

そして、その情景が、ラファのあの悪夢だったというわけか。

「何に代えても」。そう言ったレイセリアは、自分の腹から生まれたいエリーニヤよりも、ラゼを取ったと……そうということだろうか。

「私、夢中で。そうしたら、どこからか声が聞こえてきてね、」私の手を取ったら助けてあげよう”って、そう言ってる……私、手を伸ばしたの。そうしたら……

耳がすっごく熱くなったの。あんまり熱くて、熱い熱いって、そればかり考えて、他の事なんかもうどうでもよくなっちゃって……気付いたら、黒い服の奴らが、いっぱい倒れて……血、出して……死んだの」

それを聞いて、ラファはラトメを逃げ出した時のことを思い出した。全てがどうでもよくなり、チルタを殺すことしか考えず、巫子狩りたちを石にした、あの力。

あの時の不可解な声がなければ、この少女と同じように、自分は敵も味方も殺しつくしていたかもしれない。その事実気付かされて、ラファは今更ながら背筋が凍った。

ラゼはぶるりとひとつ大きく震えて、すがるような目でラファを見上げた。

「ねえ、だから私をこの村から出して。あの時だってたくさん死ん

だの。次は、レイセリア様や、みんなを殺しちゃうかもしれない。ねえ、そうなる前に、私を連れ出してよ…

どんなに長い間食事を取らなくても、私、死ねないの…ナイフで胸を刺しても、私、死ねないの！」

ラゼの悲痛な叫び。

ラファ達は言葉を失った。

目の前の、細っこい体躯。真っ白い肌。

一体誰が、この少女の願いを打ち砕けるだろう…

トレイズが、ラゼの前に膝をついた。こぼれた涙を大きな指で掬ってやって、やさしく問うてやる。

「一緒に来るか？ラゼ」

ラゼは大きく、頷いた。

「にしても、どうやって連れ出すんだよ」

一応は一行の責任者であるトレイズの決定で、ラゼを連れて行くことにした方がいいが、レイセリアの屋敷であるこの隠し部屋から彼女を連れ出すことは至難の業だった。

「一度出直したほうがいいかもね。いい加減戻らないと、レイセリア達に感づかれるよ」

ギルビスが唸りながらも来た道を見る。するとラゼは眉を寄せ、行かせまいとするようにトレイズの服の裾をつかんだ。トレイズは頼もしい笑顔でラゼの頭を撫でくり回した。

「すぐ戻ってくるさ。勝手に置いて出て行ったりしないよ」

「本当？本当に、戻ってくる？」

念を押すラゼ。どうしたものと困り果てるトレイズの脇をすり抜けて、マユキが首にかけたネックレスをラゼに差し出した。…エルミに買ってもらったという、ネックレスだ。彼女がこの旅の間、片時も外すことなくつけていた、それ。

「これ、すつごく気に入ってるの」

「…？」

脈絡の無いマユキの台詞に、ラゼは首を傾げる。

「だから、戻ってきたらこれ、絶対に返して。なくしたりしたら、怒るからね。…それじゃ、駄目？」

控えめに尋ねたマユキをぽかんと見つめて、ラゼはそしてネックレスをぎゅっと握り締め、うつむいた。

「うん…それでいい」

明るい廊下に出たラファ達は、チカチカする目を開閉しながら、食堂へと向かった。と、部屋の向こうから、男女の声が漏れ聞こえてくる。

「どういうことですか、ルセル！ラゼを、ラゼをファナティライストに引き渡すなど！」

レイセリアの、声。一同ははっと息を呑んだ。次いで、ルセルらしき男の声が響く。

「"あれ"は我らゼルシャの民を危険にさらします。ならばファナティライストへと送ったほうが我らの為となりましょう」

「恥を知らないさい！我々がかねてより巫子を敬うよう定められた一族！ラゼがファナティライストでどのような扱いを受けるのか、あなたはもう忘れてしまったのですか？そのような場所に、あの子を行かせるわけには」

「ええそうでしょう、エリーニヤ様とラゼを天秤にかけて、ラゼを

取ったあなたならば」

レイセリアが、黙り込んだ。ルセルは続ける。

「古いしきたりばかり見て現実から目を背けていては、何も進歩などしないですよ、レイセリア様。あなたはラゼを巫子である以上に、大きなものとして見ている。違いますか？」

「それは…」

「勘違いなさいませんよう、レイセリア様。あれは所詮人の子…我らエルフとは相容れない存在なんですよ」

「…！エルフと人は共存できます！事実サザメ様は人の中に生き、現神の子や世界王は、種族の差など気にも留めなかった…そしてラゼは、この村であそこまで育ってくれたのです」

そういえばトレイズが、サザメはこの出身だと言っていた。彼女を護衛する、フェルマータが神の子。では、”世界王”というのは…？

疑問に思う間もなく、ルセルが冷たい声音で言った。

「そんなものは夢物語でしかありません。エルフの寿命はあまりに長く、人の儚い生ではとても追いつけない。共存するには、我々はあまりに違いすぎるんですよ」

コツ、と扉越しの足音がこちらへと向かってくる。ラファ達が慌てて物陰に隠れると、扉を開け放ってルセルが出てきた。部屋を振り返って、言う。

「巫子狩りは手配いたしました。あとはあなたのお心ひとつです、レイセリア様」

ルセルが去ったあと、食堂に入ると、レイセリアは椅子に座り込み頭を垂れていた。

恐る恐る、マユキが声を掛ける。

「レイセリア、さん？」

「！」

息を呑み、弾かれたように顔を上げ、目を丸くしてレイセリアは一同を順繰りに見た。

「巫子様方……まさか、聞いておいでに……？」

そして何かひらめいた、と言った風に、きらりと彼女の瞳の奥が光った。

「そうだ……あなた方がいらっしやった」
全てに合点がいった、とばかりに呟く。

「あなた方なら、あの子を……お願いします、わたくしの娘を、助けて下さい！」

「わたくしの娘、ラゼを、どうか巫子狩りから守ってやって下さ
いませんか、赤の巫子様」

レイセリアは、今にも泣き出しそうなか細い声で、すぐるように言
った。その姿は、ラゼにそっくりだと、そう思った。

「わたくしの娘は、第四の巫子です。きつとお役に立つことが出来
るでしょう」

お願いです、お願いです。

何度も何度も頭を下げるレイセリアに、ラファ達は何も言えなくな
ってしまった。

「本当に彼女は、巫子、なんですね」

トレイズが、やがて口を開いた。

「はい」

「もう、ここへは帰さないかもしれませんよ」

あんな暗いところへ閉じ込めて。レイセリアを責めるようにして吐
き出されたトレイズの台詞に、しかし目の前の女性は目を丸くした。

「暗いところ……？何の話ですか」

何のことだか分からない、そんな様子のレイセリアに、一同は眉を
寄せた。ギルビスが、言う。

「隠し扉の奥で、ワンピース一枚で裸足だったけど」

「そんな！この屋敷には、隠し扉などありません。ラゼは自分の部
屋に戻したとルセルが……ただ、ひどい高熱だから、私がうつらない
ようにとラゼが言ったと、」

そこまで言って、レイセリアは言葉を飲み込んだ。ラファ達も固ま
る。まさか。

「ラゼのところへ！案内して下さい！！」

ひんやりとした床ですら暖かく思えるほど、ラゼは冷え切っていた。恐怖で足がすくみ、動けない。目の前のこの男は、こんなにも冷たい瞳をしていただろうか。

「ルセル、さん？」

男は微笑んでいた。ひどく酷薄な笑みだった。ラゼがなんとか足を引きずって後ずさると、ルセルはくすりと笑った。――嘲笑うかのように。

「ラゼ。外に出てもいいと、レイセリア様からお許しが出ましたよ」

ラゼは目を丸くした。

何故、今になって。

まさか、あの人たち……巫子の人たちが、レイセリアに何か口ぞえしてくれたのだろうか。

ルセルの冷えた視線なども忘れて、ラゼは彼に詰め寄り、服の裾を掴んだ。

「本当！？私、外に出られるの？レイセリア様に、会ってもいい？」

「残念ながら、それはできません」

ラゼの手から、力が抜けていった。その瞳の奥が暗くなるのを見て、ルセルの目がさらに細くなった。

「ラゼはこのまま、あなたを引き取ってくださいる方に引き渡したあと、その足で村を出ていただきます。レイセリア様はあなたとはもう二度とお会いしたくないそうです」

「エリーニヤは？エリーニヤも、私とは会いたくないって言ったの？」

ラゼはうつむいた。今までよりも幾分か優しい口調で、ルセルは返した。

「はい」

「そう、…なの」

ラゼは、拳を握り締めた。

そうだ。

わたしは、邪魔者だ。

エルフでもない、この村に災厄を運んだ厄介者だ。分かっていたことじゃないか。

引き取ってくれる人、多分あの人たちだろう。

一緒に行こうと、そう言ってくれて。

それをまさか「本当」にしてくれるなんて。

それだけで十分だ。それだけで、自分は十分果報者じゃないか。

ルセルが手を差し出した。

「さあ、行きましようか。皆さんお待ちかねですよ」

「……はい」

そして、ラゼはルセルの手を…

「ラゼ！……！」

取ろうとして、響いてきた声に、止まった。ルセルの目が、見開かれる。

とん、という音と共に、ルセルの脇に一人の少女が駆けしてきた。鞘に入ったままの剣を、左足を軸にして、身体ごとなぎ払うようにして振るう。ルセルは当然、飛びのいた。その隙に、ラファがルセルの背後に回りこんで、ラゼの手を取った。少女…マユキは、ルセルに剣を向けた。

沈黙を破ったのは、高く響く靴音と、怒りに満ちた声だった。

「ルセル……まさか、あなたがこんなことをしでかすとは思っても見ませんでした……！」

ギルビスとトレイズを両脇に伴って現れた、レイセリア。その目は厳しく、ルセルを失望の眼差しで見ている。ラゼは訳が分からず、ルセルとレイセリア、ルセルに切っ先を向けるマユキ、そして自分を守るように立つラファとを見比べる。

「ど、どういうこと？」

「危なかったな、ラゼ。こいつ、お前を巫子狩りに引き渡すつもりだったんだよ」

「え？」

呆然と、ラゼはルセルを見た。ルセルは、その顔から笑みという笑みを吹き飛ばして、レイセリアをにらみつけた。

「レイセリア様、何故邪魔をなさるのですか？」

「何故……何を言うのですか、ルセル。自分の娘が苦しむような場所に、みすみすとやる気はありません！」

まっすぐにルセルを見据えて、レイセリアは言い放った。そのすぐ後、弱弱しい声で、顔をゆがめて続ける。

「あなたは……あなただけは、人間を蔑みはしないと……そう、信じていたのに……」

ルセルはしかし、それを聞くなり嘲笑って鼻を鳴らした。

「人間など」

押し殺すような、声。

「我が父母を、そしてレイセリア様やサザメ様の父母を殺した悪しき人間など、愚か以外の何者でもない。なのに何故、あなたがたは自ら人間と関わろうとするのか。かつて人間を憎んでいたあなた方は、何処へ行ったのか。信じていたのは、私のほうです。裏切られたのは、私のほうだったのですよ、レイセリア様」

「ルセル、」

だから、とルセルは、マユキを突き飛ばし剣を引ったくり、ラファを蹴飛ばしてラゼを引き寄せると、剣を鞘から抜いて切っ先をラゼに向けた。

「ひ…っ」

「だからこいつさえいなくなれば、元のあなたに戻ってくれる！！私はそのために、こいつを巫子狩りに引き渡すのですよ」

そしてルセルは何事か呟くと、その場から消え去った。ラゼと共に。

「ラゼ！！」

「チツ、転移呪文か」

トレイズが舌打ちをして出口に目を走らせた。マユキとラファが立ち上がる。

「ご、ごめんね…」

「いってえ…あの野郎、思いっきり蹴りやがって…」

レイセリアが呆然と震えているのを見て取って、ギルビスがその手に触れた。

「あ…」

「ラゼのことは、僕らがなんとかします。あなたはここで…」

「そんな…いえ、ええ、そうですね。わたくしがいても、何にもなりませんものね…」

うつむくレイセリア。美しい顔が悲愴に歪む。きっと、本当は一緒に行きたいのだろう。見ず知らずの人間などに、自分の娘を任せたくないのだろう。たとえそれが、敬うべき「赤の巫子」だったとしても。

しかしレイセリアは、顔を上げると、何かを決心したような表情で言った。

「ラゼを、ルセルから引き離したら…」

ぽつり、ぽつりと。言葉を選んで。

「ここに戻ることもなく、この村から出て行ってください。ラゼを、つれて」

母として、村長として。

ラゼを守る為に。

村を守る為に。

目の前のこの女性は、選んだ。

…自らの望みを、犠牲にして。

「ラゼを、ゼルシャの村から追放します」

a c t . 2 3 すべてにさよなら（前書き）

最近多いですが今回も残酷描写注意です。

act・23 すべてにさよなら

ラファ達が屋敷の外に飛び出すと、周囲にはなぜか人影がひとつもなかった。ここに来た時のように注目を浴びないのがあるがたいが、それにしたって静か過ぎるその町並み。

一体どういふことなのか。警戒して、一同が足を止めたその時。村の入り口のほうから、悲鳴が上がった。

「うわあああああああああああつ！！！」

子供の甲高い悲鳴。すぐに誰のものかわかる。エリーニヤだった。ラファ達は互いの顔を見合わせる間も惜しんで、一目散に駆けつけた。目的地はすぐにわかった。村中の人が集まっているのだろうか、大きな人だかりができていたのだ。無理矢理エルフ達を押しつけて円の中心に出ると、ラファの隣で、マユキが小さく息を呑んだ。

まず目に入ったのは、地面にへたり込むエリーニヤだった。彼は目を見開き、恐怖の形相で、白いワンピースを着た少女……ラゼの背中を、見つめていた。安心して、呟いている。

「に……人間……？ラゼが、人間？」

その声を聞きとがめたのか、ラゼはぐるりとエリーニヤと、彼の延長線上にいるラファ達を、振り向いた。

金の瞳は蛇のようにきりりと敵意を放ち、顔を含めて体の前面は、びっしりと赤色で塗りつぶされている。手には、先ほどマユキがルセルに取られた剣。銀の刃もまた、ラゼの左耳のように紅色に染まっていた。

ぴちゃん。刃の先から雫が落ちる。だが、赤い液体がぶつかっただけは地面ではなかった。ラゼの白い裸足のすぐそこに、等身大の人間の抜け殻が横たわり、雫はその頬に当たって、跳ねて、「彼」の目

元に向けて垂れていった。

——ルセルが、胸を一突きされて、死んでいた。

ラゼの薄紅色の唇が、にいと弧を描いた。くすくすくす……葉がこすれるような微かな音。ラゼの口から漏れた、笑い声。

「赤色、好きよ、素敵な色……」

熱に浮かされたように、夢見る口調でそう言ったラゼ。ラファは彼女を見て、再度、チルタに会ったあの時を思い出した。自制がきかない。まるで何か強い力にでも操られているような、全てがどうでもよくなる、あの瞬間……

「まずい、印が暴走してる！」

トレイズが眉を寄せて剣に手を伸ばすが、ちょうど隣にいたエルフがぎゃああと悲鳴を上げて駆け出し、その肩が当たって出遅れた。ラゼの目が、今度は縮こまるエリーニヤを見下ろした。少年はびくりと肩を震わせ、目尻に涙を浮かべた。

「ら、ラゼ……っ、」

「ねえ、もつと見せて？私に……」

手にした剣が、高く上がった。人々が息を呑む。悲鳴を上げる。逃げ出す者がいる。けれど、少年を助けようとする勇気ある者はいなかった。

「血を見せてええええええっ……！！」

ひゅん。剣が、風を切って、振り下ろされて。

気付けばラファは、走り出していた。

「ラファ！？」

マユキの制止も聞かず、走って、走って、走って……

そしてまた気付けば、ぼつかりと、腹に穴が開いた気がした。

「あ……？」

ラゼの顔が、いつの間にか目の前にある。

その瞳に光が戻る。

恐怖の色が金色を支配する。

腹から、胸から、熱いものがこみ上げてきた。

鉄の味、香り、地に根が生えたように身体が動かない。

直後、ラゼの顔がさあと白くなっていくのを最後に、ラファの意識は、途絶えた。

人だかりの一番後ろ。黒いマントの人間が立っていた。

騒ぎの様子をじっと見て、やがてその人物は、くるりと身を翻す。

顔だけ振り向いて、死したエルフをちらと見やると、その場から歩き去りながら、その”巫子狩り”は呟いた。

「役に立たないエルフね。もう少し上手く事が運べば、また一人、チルタ様のお力になれる者が増えたでしょうに」

誰かに、呼ばれている気がした。

ほの暗い部屋。

あたたかい家。

ここは……レクセの、俺の……実家？

ことごと何かを煮込む音。

やさしい、母の料理の香り。

やわらかな風。

無性に泣き出してしまいたくなる、懐かしさ。

ラファは真っ白な、赤ん坊用の寝台に横になっていた。
そして気付く。

ああ…これは夢だ。

もう、とうの昔に過ぎ去ってしまった、遠い遠い、記憶。

と、ラファの額を、だれかの冷たい手が包んだ。
まるで、親が子の熱を測るかのように、そっと。
誰だろう？

父さんの手は、こんなに小さくなかった。
母さんの手は、こんなに冷たくなかった。
心地よい、それは。

手の主が、口を開いた。

「君が、ラファ？」

男の声だった。…青年、と言ったほうがいいだろうか。
まだ若い男だった。

ぼんやりとした視界の向こうで、銀色の光がちらりと輝く。

あんたは、誰だ？

覚えていない記憶。

けれど、懐かしい、記憶。

男が微笑んだ。

唇が、開く。

「俺の力を君に渡すことを、許してくれ。俺の名前は、」

男は……

「ラファー!!!」

「……………ん、…あ？」

次に目を開いた先に見たのは、目に涙をいっばいに溜め込んだマユキと、心配そうなトレイズ、冷静なギルビス、そして…蒼白な表情のラゼの、それぞれの表情だった。

あれ？

自分は今まで、何をしていたのだったか。

確かゼルシャで、ラゼがルセルを刺し殺していて。エリーニヤまでも手を掛けようとしていて…

周囲を見回すと、四方は草原に囲まれていた。森が少し遠くに見える。……………あれ？

「エリーニヤを庇って刺されたんだよ、お前」

トレイズが深い息をついて言った。ラゼの肩がぴくりと跳ねる。白かったワンピースは、いまや赤黒くなってパリパリに硬くなってしまっていた。

「そこでラゼがやっと我に返ったから、その隙にお前とこいつひつつかんで逃げてきたって訳」

良かったな不死で。トレイズが軽い調子で笑って見せると、マユキが金切り声を上げた。

「笑い事じゃないよ!!!」

「マ、マユキ…」

「なんでラファが庇うの!? 巫子の力を使って助けることだって、できたはずじゃない! 巫子だって……………不老不死だって言っただって、痛いことに変わりはないんだよ!？」

「い、いや、だって…気付いたら、足が動いてて…」

「私、ラファが死んじゃうかと思った」

はらはらと。

とうとう、マユキが精一杯せき止めていた涙が洪水を起こした。彼女がこのように泣くのを、ラファは初めて見た。

「…俺は不老不死だぜ」

「首はねても生きられると思う？」

切り返したのはマユキではなくて、ギルビスだった。名もなき村から持ってきた医療器具を片付けている。思わず手を当てたラファの腹には、包帯。どうやら手当てしてくれたらしい。

「悪いな、ギルビス」

「そう思うならさっさと治してよね。…といっても、血はすぐに止まったし、傷もふさがり始めてるから、痛いのは多分今日だけだよ」

ぱちん。ケースの留め金を閉めて、ギルビスは立ち上がった。そして、後ろの方でうつむいたままのラゼを振り返った。

「ほら、ラゼ。ラファに何か言うことがあるんじゃないの？」

ラゼは恐る恐る、と言ったふうに顔を上げた。ラファは静かに言葉を待っている。数秒の間。やがて、ラゼが口を開いた。

「……ごめんなさい」

ラゼは言った。その身体のように、細く折れそうな声だった。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

何べんも頭を下げるラゼ。その瞳に、金のまぶしさはなく。ラファはなんだか悲しくなってしまった。

マユキがラファを助け起こしながら、ラゼを睨んだ。

「許すわけないでしょ！ラファはあなたに……！」

「マユキ」

ラファが制した。マユキは口をつぐんだ。

「いいよ。ラゼ」

ラゼの顔が強張った。

ラファは、彼女が少しでも安心できるよう、出来る限り微笑んでいた。

「謝ることないって。巫子の力に、吞まれちゃったんだろ？俺も一度、そういうことがあったし」

「でも、」

ラゼはまたうつむいてしまった。確かに、それで納得できる話でもないだろう。ラファは続けた。

「それでも、お前の気がすまないなら、さ。そうだな……じゃあ、謝るんじゃないかって、お礼をくれたほうが、嬉しいな」

「……え？」

「ほら、俺、お前が弟を殺さないようにこうやって身を挺して守ったんだぜ！名誉の負傷ってやつ。よく言うだろ？男は傷が勲章なんだよ。それなら謝られるより、”弟を守ってくれてありがとう”って言うてくれたほうが俺は嬉しいかな」

ラゼは目をぱちくりした。トレイズとギルビスも、ラファのこの台詞は予想外だったらしい。目を丸くして、ラファをまじまじと見つめている。自分だって本当は予想だにしていなかった。もしラファが、レクセにいた頃となんの変化もなかったら、きっと思い切りこの少女を罵倒していただろう。自分は、レクセを出てからかなり「現実離れ」に慣れた気がする。

マユキが、腫れた目でぼそりと憎らしげに呟いた。

「ラファってば、こういう重苦しい話になるとすぐに逃げたがるんだから」

ラファは苦笑した。

いいじゃないか。生きてるんだ。

以前だったら、そもそも庇いに入りすらしなかったかもしれない。そういう意味では、なかなか嬉しい収穫だ。痛いのは、嫌だけれども。

ラゼが、ぼろぼろと、先ほどのマユキとは比べ物にならないほど大量に、目からしょっぱい水を流した。

「ありがと、う」

嗚咽が漏れた。

「あ、あなたがいないければ、エ、エリーニヤを、わたし、こ、殺してしまふところだった…」

ラファはそれを見て、ふと思った。

もし、

もし巫子が、人々を助ける為に存在しているのだとしたら。

世界が壊れようとしているのを止める為に存在しているのだとしたら。

では巫子のことは、一体、誰が助けてくれるというのだろうか？

どうなんだ？エルミリカ・ノルツセル。尋ねても、答えは返ってこなかった。

そのまま泣き疲れて眠ってしまったラゼをトレイズが負ぶって、一同は再びシェイルに向けて歩き出した。まだ日は高い。少しでも、シェイルに近づかなければ。

マユキ一人が、不機嫌なままだった。

「マユキ…ほんと悪かったって…」

「ラファのこと怒ってるんじゃないの！でも」

マユキがちらとラゼを見た。ああ、とギルビスが声を上げた。

「いいじゃないか、ラファが許したんだし」

「なんでそんなに簡単に割り切れるの！？死ぬとか死なないとか、そんな問題じゃないでしょ？」

むつつりと口を閉ざしたマユキ。こうして自分を大切に思ってくれる彼女に、ラファは笑いかけた。

「……ありがとな、マユキ」

マユキは、黙り込んだままだった。

act・24 シェイルディア

それからシェイルディア首都・クレイスフィーに入るまで、とうとうマユキはラゼに一言も口を利かなかった。平和主義のマユキにしては珍しい。自分から人を嫌うことは決してしない奴だと思っていたが、やはり人間である以上そうもいかないのだろう。ラファはそんな人事のような感想を漏らした。

ラゼの方はいえ、なんとなく居心地が悪そうだった。トレイズが気さくに話しかけているが、まだ負い目を感じているらしく、どこかぎこちない。チラチラとマユキの方を見ては、返しそびれたネツクレスを弄っている。

前途多難。

これから先のことを思っ、ラファはため息をついた。

軍事都市シェイルディア。

そのレンガ造りの町並みはセピア系の色合いで統一されており、またとてもにぎやかだった。ギルビスとラゼを宿の予約に行かせて、ラファはトレイズを見上げた。

「それで、巫子の居場所は分かってるのか？ 知り合いみたいだけど」「ああ。これからクレイスフィー城に行くぞ」

そう言っ、トレイズは、大通りの一番奥にある大きな城を指した。シェイルディアの王城、クレイスフィー城である。マユキが不安そうに尋ねた。

「まさか巫子っ、王族とか…？」

「シェイル王室じゃねえよ。ここの騎士団の団長をやってるんだ。シェイル騎士団って知ってるか？」

しばし考えたのち、二人は首を縦に振った。確か、シェイルディア王室お抱えの騎士団で、年齢の関係なく実力のあるものを認めるのだとか。

その団長、ということは。

「そうか、トレイズはラトメディアの神護隊長だから、立場の近い者同士知り合いにもなるよな。神護隊と騎士団って、世界の二大治安部隊なんだろう？」

「いや、そういうのじゃなくて」

トレイズは、そして、苦笑した。

「そいつ、俺の幼馴染なんだ。昔っからの腐れ縁」

「え？」

幼馴染同士で、似たような地位に就き、その上巫子とは。出来すぎた偶然もあるものだ。

そのことをラファが指摘しようとしたとき、背後から誰かに声をかけられた。

「あのっ！」

「…？」

見ると、それはギルビスと同年くらいに見えるエルフだった。まだ子供。エリーニヤを思い出したのか、マユキの顔がわずかに歪むインテレディアのときから、妙にエルフと縁があるな。ラファはぼんやりと考えた。

さらさらとした淡いブラウンの髪。黒いワンピースに身を包み、綺麗な翡翠色の目をいっばいに開いてトレイズを見上げていた。

「あ、」

「トレイズ！トレイズじゃないですか！」

エルフの女の子はトレイズに駆け寄ると、彼のマントの裾を掴んで

につこりと笑った。

「ナエ？」

「はいっ！ナエです。お久しぶりですね、トレイズ！」

「どうやら、トレイズの知り合いらしい。疑問符を浮かべていると、トレイズが紹介してくれた。」

「あ、ラファにマユキ。こいつはナエ。これから行こうとしてた、第八の巫子の側近だよ」

「お初にお目にかかります、ナエです。ということは、あなた方は赤の巫子なのですね」

ナエは一礼すると、ラファとマユキに微笑みかけた。…可憐、だった。

「おいナエ、ロビは？」

「また仕事を抜け出したらしくて…多分、またスラムにでも行っているでしょうから、これからお迎えに行くところです。トレイズは、ロビ様に会いに来たんですね？」

「ああ」

「ということとは、その「ロビ」というのが、今回会いに来た巫子のことなのだろうか。」

「トレイズ達も来ますか？ロビ様もきつとお喜びになりますよ」

「ああ…そりゃ喜ぶだろうよ、第一声は”オモチャが帰って来た”だろうな」

重苦しい影を背負って言ったトレイズを、しかしナエは笑い飛ばした。

「今日は久しぶりにロビ様の楽しそうなお顔が見れそうですね！」
「はあ、と溜息をつくトレイズに、事情を知らないラファとマユキは、顔を見合わせた。」

ギルビスとナエが戻ってきてからナエに連れられてやってきたのは、暗く細い、悪臭の立ち込める地区だった。身なりの悪い、薄汚れた服を身に纏った人々が、地べたに座り込んで、少ないパンをひとかけらかじって今日を生き抜いている。

「スラム」。

そう呼ばれている、浮浪者の寄せ集めのその地区。そこを、ナエは先頭を切つてずんずんと進んで行った。濁った目が、幾対もナエに突き刺さる。

「ね、ねえ…こんなところに入って、だ、大丈夫なの……？」

不安そうにラゼが尋ねる。マユキもその意見には同感らしく、今回はばかりは嫌な顔をしなかった。しかしナエは笑みを絶やさずに振り返って言った。

「はい、大丈夫です。ただ、はぐれると大変なので、ちゃんとついてきてくださいね」

すると、彼女の背後に二人の男が立ち、ナエの両肩を掴んだ。言わんこつちやない！ラファ達が慌てるのもつかの間、男達は親しげにナエに話しかけた。

「よお、ナエ。また来たのかア？」

「ついでに俺達と遊んでつてくれよ」

掠れた、下品な声。しかしナエは臆することなく微笑んだ。

「お断りします。ロビ様を探す途中なので」

「チエツ、つれねえなア」

「ま、こつちだってロビの奴の女に手エ出すような度胸なんざねえさ」

「それは良かった」

子供らしからぬ大人びた笑みを浮かべて、ナエは自分の頭四つ分背

の高い男達を見上げた。

「よろしければ、ロビ様の居場所をご存知でしたら教えていただけませんか？」

「四つ目の角でガキどもにパン配ってるよ。見ろよこれ、パンを一個も食えるなんて三ヶ月振りだア」

男は嬉しそうに、丸い、片手に収まる程度のパンを、宝物のようにこちらに見せびらかした。そしてラファ達に、

「お前ら、スラムの新入りか？だとしたらロビとは仲良くしとくと得だぜ。美味いモン食わしてくれるからなア」

と言い、立ち去って行った。

するとナエがこちらへ頭を下げてきた。

「申し訳ありません。スラムの者がご迷惑を…」

「い、いや」

「そのロビって奴、スラムの人間にパンなんて配ってるの？」

ギルビスの問いに、ナエは嬉しそうに頷いた。

「はい。スラムの方々は、今日の食事にも困る方ばかりですから。

街中から残飯を集めて。下々の方々にもお優しい方なんです」

トレイズが彼に会いに行くのを妙に嫌がっていたから、どんな人間なのかと思えば。そんなことをする地位の高い人間は、そうそういないだろう。そう思っただけでトレイズを見ると、彼はずんと落ち込んでいた。何故？

「どうしたんだよトレイズ？」

「いや…とうとう会わなきゃいけないと思うと、なんだか胃が痛くなってきた…」

「ロビさん、いい人だと思ったけど」

「位の低い奴とナエには、な。でも他はてんで駄目。人で遊んで楽しむような奴」

その上猫かぶりだ。そう言ったトレイズの肩を、後ろから誰かが叩

いた。

「心外だなあ」

心底おもしろそうな、けれど冷え切った印象を与える、明るい少年の声。

「人の陰口言うなんて。君がそんな人だとは思わなかったよ、トレイズ」

瞬間、トレイズの顔色が、さあと青くなった。

「出たあああああっ！！！」

「あら、ロビ様。用事はよろしいんですか？」

「ああナエ。来てくれたのかい？…ほらトレイズ、人を幽霊みたいに言わないでよ。僕傷ついちゃうよ？」

にこにこ笑った「ロビ」は、まだラファよりいくらか年下の、十五、六歳くらいの少年だった。黒い軍服に、白いマントをなびかせた、モスグリーンの髪の子少年。腰に長剣を吊っている。

ということとは、彼が噂の「シェイル騎士団長」ということか。

まだほんの子供じゃないか。ラファ達は目を丸くした。ロビはそんなことも気に留めず、溢れんばかりの笑みでトレイズに詰め寄っている。

「君が遊びに来てくれるなんて嬉しいなあ。なんの用だい？シェイルに住む気にでもなった？」

「そんなわけねえだろ！何が悲しくてお前の近くに住まなきゃ…！」
「だろうね。まあ、城に来なよ。お茶の一杯くらいは出してやってもいいよ」

そしてロビは、呆然とするラファ達に顔を向け、笑った。

「よかったら、その皆さんも一緒に、ね」

a c t ・ 2 4 シェイルディア（後書き）

「王室」という単語が出てきますが、この世界には現在一つしか国がなく、国王も「世界王」一人しかいません。

ので、正確にはシェイル王室ほか各都市の王室は、世界創設以前の「旧王室」という名称で呼ばれています。が、この世界一般的には旧王室のことも「王」と呼ぶので、作中でも頭の「旧」を取って呼称としています。ややこしかったら申し訳ありません。

「面倒くさい」

「俺達の仲間になってくれ！」というトレイズの台詞を、ロビは優雅に茶をすすりながら一刀両断した。あまりの切り返しの速さに、一同は一瞬啞然とする。最初に我に返ったのは、ラファだった。

「なんでだよ！」

「なんでも何も…だってシェイル出る時の手続きって大変なんだよ。僕は仮にもこの騎士団の団長だし？えーっと…ラピー君？」

「ラファだ！」

「そうそうラファ君。まあ、これがトレイズの個人的なお願いで、なおかつトレイズが僕に土下座でもしてくれるなら、考えてやらないうちもないかな。トレイズには不本意ながら色々之恩があるからね。」

でも、ラトメの神の子の為に動く気にはなれないなあ。僕、あの人のこと大嫌いだから」

「チルタを止めなくちゃ、世界が壊れちゃうんだよ！？」

「世界なんてどうなろうと知ったことか」

さらりと言い放った台詞に、ラファ達は絶句した。ロビはカップをソーサーに戻して、脚を組み替えてにこりと笑った。

「僕は、自分と、ナエと、まあついでにトレイズくらいの命があれば、他はなんだっていいんだよ。他の奴らがどうなろうと知ったことじゃない。第九の巫子が世界を滅ぼすというのなら、そうだな…僕はそれに加担したいくらいだよ。強きが力を奮い弱きがひれ伏す？ハッ…全く持ってナンセンスだ。そんな時代遅れのしがらみに囚われたままよりは、いっそ世界を滅しつくして新たに創造しなおしたほうが得策だとは思わないかい？」

冗談めいた口調と表情だったが、その目は至って本気だった。ラゼが、珍しく怒ったように言った。

「そんな…だつて、あなたはシェイル騎士団の団長でしょ！？シェイルディアの人たちを守る人でしょ？それに、さっきだつて、スラムの人たちにパンをあげてたつて…」

「騎士団長なんかになっちゃったのは失敗だったよ。今の副団長…当時の団長と成り行きで戦うことになって、しかも勝っちゃってさ。だからなりたくなつた地位じゃないんだよね。それに、スラムの奴らを生かしているのは、ああいう奴らを味方につけておけば色々と役に立つからだよ。生きてて欲しいとか、死んじゃ駄目だとか、そういう崇高な気持ちからじゃない」

世間話でもするかのように軽い調子で、ラゼの怒りをかわしていくロビ。ラファは無性に腹が立ってきた。彼は、人の命を、なんだと思っているのだろう！？

ラファが抗議しようと口を開くが、それよりも早くに大きな音を立てて立ち上がった人物がいた。ギルビスだ。

「ふざけるな！！」

ギルビスが声を荒げた。

いつも冷静な彼にしては珍しいことだった。

「役に立つからとか、そんな理由でも人の生き死にを決められる立場にいるくせに、それをまるで無駄なことみたいに…っ守られる側の気持ちにもなってみろ！守られた側は、ずっとずっと、命を救ってくれた奴の為に生き続けなくちゃならないんだよ！守られた人間にとつては、それが助けてくれた奴に出来る唯一のことなんだよ！それを…必死になって生きてる奴を、否定するな！！」

肩を上下させて、ギルビスは荒い息をついた。

彼も、妹が…リイナが、彼を守ろうと巫子の振りをして、死んでし

まった。守られた側の人間としても、医者の卵としても、ロビのこの態度は許せなかったのかもしれない。

「それに…っ」

ギルビスが拳を握り締めて続けた。

「あんたにだって大事な人がいるのに、なんで他の人にだって同じことが言えるって分らない？そういうものが巡り巡って、あんたの背中に乗ってるんだ」

シエイル騎士団長として。

ギルビスの叫びが終わると、ロビは静かに目を伏せた。茶を手に取り、一口含む。

「…うん、なるほどね」

たいした感銘を受けた様子もなく、あっさりと。それにギルビスは、とうとう彼を殴り飛ばそうと一歩前に出た。

「この…ッ」

「あーっと！待った待ったギルビス落ち着けて！」

トレイズがギルビスを後ろから羽交い絞めにして抑えた。

「トレイズ！離せよ僕は…ッ」

「まあまあロビを殴るのは仲間にしてからな？な？」

「こんな奴仲間になんてッ」

しかしギルビスは途中で口をつぐんだ。一人でも巫子が欠けては…チルタに奪われては、ならないのだ。

ギルビスが黙ったのを見て取って、トレイズは前に出てロビに笑いかけた。

「えーっと…俺もさ、お前の言い分は良く知ってるけど…俺達には、お前の力が必要なんだ」

「…必要なのは、僕の巫子の力かい？それとも僕の血筋かい？」

「どっちでもない。いや、まあそのふたつもちよっとはあるけど。」

俺は、無印の”ロビ”っていう一人の人間の能力と頭脳が必要だと思ってる」

そのためにはなら土下座だっしてやるさ。

につこりと笑って言い切ったトレイズに、ロビもまた笑みを絶やさずに返した。

「そうだね……」

思案するように、宙を見上げる。

「いいよ、そこまで言うなら協力してあげる」

やけにあっさりと意見を変えるものだから、一同は思わず目をぱちくりさせてロビを見た。今の今まで「面倒くさい」とか言っていたのはどこのどいつだ！と一言文句を言っでやろうとすると、ロビはただし、と言っでトレイズの眼前に指を突きつけた。

「ひとつ条件があるよ。僕……」第八の赤の巫子”の能力を最大限に生かす、僕の最大の武器、”黒い本”を探して見つけてよ。

実は僕の妹が勝手に持ち出したらしくてね……妹ごと行方不明。部下の調べで、クレイスフィーに戻ってるのは確かなんだけど。”黒い本”を探して、持ってきてくれたら仲間になっであげてもいいよ」

”黒い本”？どこかで聞いたフレーズだ。

「妹なんていたのか、お前」

「去年突然押しかけてきて、『私もお兄様のお手伝いをいたします、ナエには決して負けません！』……と、ね。いやあ、油断したら”黒い本”持っで逃げられちゃった。黒い本さえなければ、僕が巫子としての役目から解放されるとでも思っただのかな」

そんなことあるわけないのにねえ。

気楽に言っだロビ。彼をまじまじと見つめ、ようやくラファは気が付いた。

「あああつ！！！」

「えっ？」

「な、何事？」

「トレイズ、マユキ！そいつってまさか…ルシファで会った緑の髪の毛の子のことじゃないか！？」

人と人とのつながりというのは、巡り巡って意外なところで糸を張っているものだ。

act・26 黒い本と緑の髪を探せ

「なんだ君達、ティエラと知り合いだったのかい？」

ロビは首を傾げて問うてきた。

「知り合いつていうか…ラファとマユキをラトメに連れて行く途中に寄った村でたまたま会ったんだよ。」この本はお兄様のものだ”とかなんとか…」

「まったく。」僕のものだ””って言うんならさつさと返してほしいね」

そう言つてロビはからからと笑った。しかしその口調は、まるで失くしたものを取り返そうという気概がまったく見受けられない。ラファは怒りも通り越してあきれ果てた。なんなんだこいつは。

するとその時、執務室の扉が開かれた。廊下から、黒い軍服に身を包んだ、淡い金髪にエメラルドの瞳、そして楕円形の眼鏡をかけた二十代半ばほどの青年が入ってくる。シエイル騎士団の一員だろう。生真面目そうな顔立ちだ。

「ロビ様、お呼びですか？…」って、お客様がいらつしやっていたのですか！？ロビ様、そういうことは先に私に話を通してくださらないと！」

「やあ、イデリー。ちょっと頼みがあるんだけどやってくれるよね？」

イデリーと呼ばれた青年の怒鳴り声をものともせず、ロビは無言を言わせぬ口調で返した。イデリーは、ぐつと言葉に詰まる。

「…なんですか」

「いやあ、ちよつと彼らに人探しのゲームをしようと思つてね。この間ティエラを見かけたの、君だろう？ちよつと行つてつれてくるのを手伝つてやつてよ」

「そんな！」

雷に打たれたような顔で、イデリーは叫んだ。そしてこちらを見てきたので、トレイズがやんわりと笑いかけて、返す。

「相変わらずいいように扱われてるんだなあ、イデリーさん。久しぶり、よろしく頼むよ」

「トレイズ…！前からも言ってくれ！ロビ様、私にも仕事が…」

「どうせ取るに足らない庶務雑務だろう？僕とナエでやっとくよ。さあ行っただ行っただ」

「ロビ様！」

どちらが優勢かは簡単に見て取れた。にこにことお茶のおかわりを注ぐロビに、イデリーはがつくりと肩を落とした。

「…行きましよう、皆さん。申し遅れましたが、私はシェイル騎士団の副団長、イデリーです」

「”あんたの背中に乗ってるんだ”…ねえ」

人のいなくなつた執務室。ロビは執務机の後ろにある大きな窓から、広がる町並みを見下ろして、小さく息をついた。

「そういうのが嫌だから、ここまで逃げてきたのになあ…って、今更言つたって仕方ない、か」

ぽつり、呟く。

と、執務室の扉が小さく開く。

「ロビ様」

「…ナエかい？」

ナエはうつむき、ロビの側に寄つた。ロビの見える先…町の大通りへと歩いていくラファ達。それを見ながら、ナエは小さく尋ねた。

「ロビ様…トレイズたちと一緒に、行ってしまうのですか…？」

「さあ、ね。ほんとうにトレイズ達がティエラを連れてきちゃったら、行かなきゃならないね」

「……噓。本当は行きたくてたまらないんでしょう?」

ナエは自嘲的に笑んだ。

「本当は、ロビ様は、ティエラ様の居所も知っているんでしょう? トレイズたちが見つけれられるってわかって、そういう取引にしたんだわ。トレイズが来たとき、ロビ様、すごく嬉しそうな顔してたもの」

「……ナエ」

「………行かないでください」

搾り出したような声音だった。ナエはか細く呟くと、ロビのマントの裾を指先できゅっと握った。

ロビは微笑む。

「そうは言ってもね。いずれはラトメか、ファナティライストか、どちらかの側につかないといけない。なら、チルタかトレイズか、僕がどっちを選ぶのかくらい分かるだろう?」

「でも!……でも、私は…ナエは、ロビ様がなくなったら、これからどうやって生きていけばいいのかわかりません」

またうつむき、唇を噛み締めるナエの頭に、ロビはそつと手を置いた。

「すぐに戻ってくるさ。…ついだから、そのままシェイルから逃げちゃおうか。うん、それがいいな。そうだな、昔、ファナティライストの森の中に小さな家を、僕とトレイズが建てただろう?」

あそこで待っててよ。巫子のうざったい役目が終わったら、すぐに行くから」

「……」

「…すぐに行くから」

優しく言って、ロビは目の前の細いからだを、自分の胸で包み込んだ。ナエのあたたかいなみだが、黒色の煩わしい軍服に染みこむ

のを感じながら、ロビは、そつと目を伏せた。

「本当に…何だつて言うんだ、あいつは！」

ずんずんと大通りを闊歩しながら、ギルビスは吐き出した。一緒に旅をはじめて結構な月日が経とうとしているが、彼がここまで感情をむき出しにするのも珍しい。トレイズが苦笑してその背を眺めている。

「まあまあギルビス。そういきり立つなって。ロビだつて本気で言つたわけじゃないさ」

「そんなふうには見えなかったわ」

ラゼもぷりぷりして返す。トレイズは困り果てて、頭を掻きながら言った。

「うーん、あいつも素直じゃないからなあ…それに、生まれ育ちのこともあるし」

「生まれ…？」

マユキがそう返したら、トレイズはちらとイデリーと顔を見合わせた。

「ロビの本名を聞けばすぐに分かるさ。あいつはロビ・S・ファナティライストって言うんだ」

「ファナティライスト!？」

「ロビ様は今のファナティライストの王である、世界王シェーロラスディ・T・ファナティライスト陛下のご子息であらせられます」

ファナティライストは、レクセ、ラトメ、シェイル、インテレ、クライの五大都市を統べる、世界全体の中枢に当たる。つまり、そのファナティライストの王ということは、世界全体の王、ということ。それで、ファナティライストの支配者には、敬意を込めて「世界王」という位が与えられているのだ。その息子ということは…

「じゃああいつ、次の世界王なのか!？」

「あんな命の尊さを欠片も理解してないような奴が…?」

ギルビスが顔をしかめた。するとイデリーがすぐさま反論する。

「何を言うんですか! あの方ほど人の命を大切になさる方はどこにもいません! でなければ、私はあの方に、騎士団長の地位を引き渡したりはしませんでした!」

「あいつは、地位の高さに期待されたり、地位が高いからって民衆を守るのが当然だとか、そういうことを思われるのが大嫌いなんだよ。それに嫌気が差して、ファナティライストから逃げ回ってるんだ」

そして、トレイズは語りだした。

ロビは走っていた。

追っ手が来ていやしないかはらはらしながら。人ごみにまぎれて、自分を追う、あの黒い神官服の端すら目に留まらぬくらいに、一目散に。

やがて、ロビは立ち止まった。人気の少ないスラム街。ロビは背後に自分を探す声もないことを確認して、得意げに微笑んだ。

「へへっ」

やっと逃げられた。自分に「王族」を強要する女官たちから。自分に取り入ろうとする神官たちから。そして…自分に見向きもしない家族からも。

「いい子」の自分を演じていれば皆満足そうな顔をしていたけれど、ロビはもうずっと前から見抜いていた。本当に心から、自分を想ってくれる人なんていなかった。否、優しくしてくれるひとはいたけれど、そのひとの一番にはなれず、本当に寂しいときに限ってそのひとはロビの前に現れなかった。

たった一人、一人だけ、おばさんばかりの女官の中でまだ十代半ばほどの少女の召使だけが、ある時ロビにこう言った。

「そんな”いい子”の仮面被ってて、自分のことしか考えてないよ。うな奴らにいい目見させて楽しいですか？」

全ての、張り詰めていた糸が、切れた気がした。

そして今に至る。

抜け穴はその女官に教えてもらった。利己欲のカタマリみたいな神殿の奴らを一度出し抜いてみたかったんだ、大丈夫私のことは気

にしないで、あとのことはうまくやるさ。…そう言った彼女は、今まで会ったどんな人間とも違っていた。

彼女は大丈夫だろうか…最初は後ろ髪引かれる思いであったが、一旦神殿を出てしまえば、あとはもうほんの少しの恐怖と怯えと、大きな好奇心しか残ってはいなかった。

ロビはスラムを見回した。人はほとんどいない。薄汚れた壁にもたれかかる、皮と骨ばかりの、生きていいのか死んでいるのかも分からない、深く淀んだ目をした、希望の抜け殻だけが、いくつか小さな命を灯していた。彼らは見知らぬよそ者に嫌悪の視線を投げかけて、何人かはしゃがれた声で咳きあう。

「なんだ、ガキかよ…」

「失せる」

「ヒトの肉って美味しいと思うか？」

ロビの背筋に冷たいものが走った。スラムがどんなところか、ロビは知らない。けれど、単なる興味や好奇心で足を踏み入れている場所ではないことだけが、今の一瞬で理解できた。

スラムの男が一人、立ち上がった。こちらをじっとりと見据えて、よたよた歩いてくる。ロビは一步後ずさった。逃げなければ、逃げなければ。なのに足が震えて動かない。すると…

とん。

「!？」

ロビの肩が、真後ろに立っていた誰かに当たった。息を呑む。肩を、その「誰か」につかまれて…

「目を合わせるな」

「ひっ…」

「ほら、行くぞ。つかまったら厄介だからな」

少年の声だった。ロビの前に出て、手首を握られた。赤錆のような

色がちらほらと混じった、薄いブラウンの髪が目に入る。薄汚いスラムの人々の中で、彼のその髪は妙に綺麗だった。

立ち上がった男が、舌打ちした。

「チッ…グランセルドのガキの連れかよ…」

グランセルド？ロビは少年を見た。聞いたことがある。確か、世界中を旅して回る殺し屋の一族だとか…殺し屋？この少年が？

「ここまでくれば大丈夫だろ」

人のいない空き地に出て、少年はロビを振り返った。金の瞳が太陽の光できらりときらめく。金の瞳はグランセルド一族の証だと聞いたことがある。ということは、間違いなく彼はかの有名な殺し屋の一人なのだ。

ロビは挙動不審に辺りをきょろきょろしながらどうにか言った。

「え…えつと、ありがとう？」

「なんで疑問系なんだよ」

少年はにかりと笑った。

「お前だろ？大通りで騒いでた、家出した世界王子って。そんなナリでスラムを歩くようなガキは、

よっぽどの世間知らずしかいねえからな」

「！」

「そんな怯えるなって。神殿に引き渡したりはしねえよ。…それに、俺も今家出中だから」

「えっ？」

そして少年は、ぼろぼろの堀に腰掛けた。ロビを見下ろして、手を差し伸べる。

「俺はトレイズ・グランセルド。でも、無印のトレイズで覚えてく

れよ」

「……僕は、ロビ・S・ファナティライスト。でも、無印のロビで覚えてくれると嬉しいな」

手を握り合って、二人の少年は笑みを漏らした。殺し屋と王子。相容れないはずの二人が、出逢った瞬間だった。

「グランセルド一族って聞いたことある！世界最強の殺し屋の一族でしょ？」

マユキがまず目を輝かせた。マユキの好みは殺しも何も関係ないらしい。トレイズは苦笑した。

「昔の話さ。あのあと俺はロビと一緒に逃げて、殺し屋稼業からは足を洗ったんだ」

「でも、話を聞いてる限りだと、さっき会ったあいつからはあんまり想像できないな……なんかもっと、嫌な子供かと思った」

「例の、ロビを逃がしてくれた女官？そいつの性格をマネしてるんだってさ。いつだったか珍しく真面目な顔して言ってたよ。」思い出を美化してあの人に再会したときに幻滅したくないから。こうして、まわりに嫌なやつだ嫌なやつだって言われてれば、どんな性格だったかすぐに分かるでしょ？”ってさ”

「でも、逃げるにしたって、特にロビのほうは、相手はファナティライストでしょ？すぐに捕まっちゃうんじゃない……」

「ああ、あの時は大変だったなあ！逃げ込んだ先がエルフの森でさ、その長に見つかっちゃったんだ。ファナティライストの近くのエルフの森では、他に比べて人間嫌いが際立ってるって、知ってるか？あの時は本当に死ぬと思ったよ」

エルフの集落。

しわくちやの顔を嫌悪に歪ませて、エルフの長老は縮こまるトレイズとロビを見下ろした。

「人間がエルフの土地に踏み入るとは！」

「すみません、お、俺達、知らなくて」

「嘘をつけ！！我らの土地を侵しに来たのだろっ！？」

全く持つて埒が明かない。トレイズとロビは顔を見合わせた。見ると、皆一様にこちらを睨みつけてくるエルフ達。子供であろうと、容赦するつもりはないらしい。

その時。

「おじいさま！」

「ナエ！」

一人の、エルフの女の子が、トレイズたちを守るように、長老の前に立ちはだかった。長い、ブラウンの髪。トレイズより頭1つ小さいその背丈。ナエと呼ばれた少女は、厳しい口調でエルフの長老に言い放った。

「おじいさま、どうしてそんなこと言うの？この人たちは、”迷い込んだ”だけだ”って言うてるのに！」

「ナエ、そこをどきなさい。人間などを庇ってなんになる……」

「なんになる？なんになる、ですって？あなたはヒトを庇うのに見返りが必要なの？人間のことを嫌いなのは分かるけど、エルフの森の木を切り倒したり、焼き払ったりしたのはこの人たちじゃないじゃない！！」

「ナエ！！」

長老は怒りの矛先をナエに向けた。ナエは一瞬だけぎょつとして怯むが、すぐに気丈な瞳を目の前の老人に向ける。

「それ以上の戯言は、いくら我が孫といえども許しはせぬぞ！我々はエルフ、人間のような愚かな生き物とは相容れぬのだ」

「それは、お互いがお互いのことを理解しようとしなからだわ！
私はそんなことない、人間もエルフも一緒よ！」

ナエはトレイズとロビの手首を引っつかむと、小さく「行きますよ」と呟いて、唱えた。

「『我らを包み込む天空の宗主たちよ！今我々に迫り来る魔の手の届かぬ地へ導きたまえ！』」

「ナエ！何をする気だ！」

長老が止めようとするが、ナエは彼の手が届くよりはやく、高らかに宣言した。

「『^{ワープ}転移

刹那、ナエと二人の少年の姿は、その森から消えうせていた。

「大丈夫ですか、お二人とも」

ナエに連れてこられたのは、森の入り口だった。ちよつとした広場になっていて、だだっ広い芝生にトレイズ達は立っていた。

「転移呪文……？」

「ここは？」

「あの森の、ファナティライスト側とは逆方向の出口です。ヒトがここまで来ることはまずないです。何もありませんからね。私の秘密の場所なんです」

そしてナエはちよつとだけ苦い色を混ぜて笑った。

「でも、あんなこと言っちゃったから、もうあそこには戻れませんね。正直、あそこは息が詰まるからちよつと苦手で、いつか絶対家出しようって決めてたんですけど……あなた方は、どうしてあんなところに？あそこは人間の来るところじゃないと分かっていたでしょうに」

「迷い込んだじゃったんだよ。言っただろ？俺もおまえと同じ。自分のいたところが嫌だったから家出てきた。ロビもだろ？」

「うん」

「ふふっ、じゃ、私たち、似たもの同士ですね」

ナエはまた笑った。今度は心底楽しそうに。幼いその見た目は想像もつかないほど、大人びた笑みだった。

「それから、俺達はその広場に小さい家を建てて住むことにしたんだ。どうせ港にはフアナテイライスト兵の見張りがあるし、特にロビは、緑色の髪なんて目立つからな。一発で見つかる。転移呪文も大陸まで飛ばすだけの力は俺達の中の誰も持ってなかったし。それでのんびり暮らしたら、ある時フアナテイライストの連中に見つかってさ。二手に分かれて逃げようって話になって、別行動してたら俺は色々あってフェル様に拾われて、一方であいつらはシエール騎士団に入っていて、任務中に再会したんだ。その頃にはもうあの性格だったな。俺も最初は驚いたの、覚えてるよ。なにか変なものでも食ったのかと思った」

トレイズはからからと笑った。

この広い世の中。高い地位というものが嫌いなロビと会うことなど、もう一生ないと思っていたのに。会ったら会ったで、今トレイズがついている地位に嫌悪感を示して、ロビは自分から離れていくことを確信していたくらいだったのに。

彼はいつの間にか、シエール騎士団長になっていた。

「あいつ、人から期待されるのは嫌いなくせに、人に望まれると拒めないんだよなあ。相当なお人好しだよ」

「……そんなふうには、見えなかったけど？」

先程よりは少し控えめに、ギルビスが問うた。トレイズは苦笑した。
「まあ、あいつにとって……いや、俺と、ナエと、ロビのなかで一番
幸せだったのは、三人で、あの何もない広場で暮らしてた時だから
な。あいつは今も、あの時に戻りたいって、そればかり考えてる
んだろうさ」

でも、……いや、だからこそ、またそのときに戻る為にも、あいつは
絶対に俺の敵にはならないよ。
トレイズは自信ありげに言った。

ロビの過去を聞いて、ギルビスはロビへの考えを改めたようだった。ラファからしてみれば、今のトレイズの話のどこに彼への評価を変える要素があつたのかさっぱりだったが、ギルビスには分かっているらしい。もう、彼が怒り出すことはなかった。

「それにしても、その、ティエラ……さん？その人はどこにいるのかしら」

ラゼが口火を切った。すると、イデリーが唸る。

「実は、私にもさっぱり。何か餌になるものがあればいいのですが」「餌って……そんな、ペットじゃあるまいし」

マユキが呆れたように言うが、イデリーは大真面目だった。

「いえ、あの方のロビ様への溺愛ぶりは異常です。ロビ様に何かがあつたと知れば、例え地の果てからでもすぐに飛んでくるでしょう」

ペット以上の忠誠心だった。一同が沈黙してしまうと、イデリーはにこやかにトレイズの肩を叩いた。

「……なに？」

「と、いうわけで。一芝居打ってティエラを呼び出す役は、お前に任せたからな！」

「はあ！？嫌だつてそんなの、自分でやれよ！」

「ロビ様が”黒い本”を、初対面の人間に探させるわけがないだろう？そもそも見つかる保証もないのにそんなことはさせない。だとしたら、トレイズ、ロビ様はお前なら出来ると信頼なさっているんだ。期待に応えるのも幼馴染としての役目だろう」

「なんでそんな役目が！」

「私はただの手伝い役だからな」

「理不尽だ……！」

しかしどんなにイデリーに物申そうとも、彼は折れなかった。ロビに対してはすぐに諦めたくせに、他の人間には頑固らしい。渋々、人気の無い道に入って、トレイズは深く溜息をつく、叫んだ。

「たいへんだー！！！！」

その叫び声に、書類の山を片付けていたロビとナエは顔を上げた。外から聞こえてくる、ロビが大怪我をしたという、めいっぱいの音量の声。それに、無傷で、ここ一年ほど風邪ひとつ引いていないロビは笑い声を上げた。

「あつはは！まさか本気でこんな手を使う奴がいるとはね！僕も一緒に行けばよかったなあ、トレイズの奴、絶対に顔真っ赤だろうに！」

「イデリーさんの策略でしょうね……トレイズも気の毒に」

「いやあ、でも確かにこれが一番手っ取り早いのは確かだし。うん、トレイズが戻ってきたらからかってやらなきゃね」

「……ロビ様、イデリーさんがこの手を使っつて、分かってたんですね」

「うん？なんのことだい？ナエ」

「いえ、なにも。……本当に策士ですよ、あなたは……」

忠誠心の強い「ペット」はすぐに網にかかった。

イデリーに縄でぐるぐる巻きにされた、緑の髪の少女。ルシファの村で会ったのと、やはり同一人物である。ギルビスが、足元に落ちた黒い革表紙の本を拾い上げて砂を払うと、少女が甲高い声で叫んだ。

「あ、ああつ、何をする貴様！！それはお兄様の大切な……！！」

「そんなに大切なものなら、おまえが盗むことがいけないことだということも知っているだろう？」

「うっ……」

イデリーに言われて、ティエラは言葉に詰まった。

「だって、黒い本さえなければ、お兄様は第八の巫子としての役目を果たせなくなるから、だから……」

「……どういうことだ？」

本一冊でそんなに変わるものなのだろうか。トレイズを見上げると、彼はちよつと首を傾げた。

「あれ、言つてなかったか？」黒い本” っていうのは、エルミリカ・ノルツセルが巫子の創り方を記したという禁忌の秘術書のことだ」

「えっ!？」

「じゃあ、その本、巫子の創り方が載つてるのか!？」

「すごい! ねえねえ、見たいよ!」

ラゼとラファとマユキが、それぞれトレイズに詰め寄った。本を片手に、ギルビスが呆れたように溜息をつく。

「まさか君達、” 巫子の創り方 ” がそのまま正直に書いてあるのも思つてるの? 料理の本じゃないんだよ? 暗号化されてるに決まつてるだろ。確か、一見すると、召喚術か何かの魔道書に見えるって、そう聞いたことがあるな……精霊を使役する手順だったかな」

「精霊!」

マユキは大興奮だった。ギルビスの手から黒い本を奪い取りたいと、手がぴくぴくしている。ラファは、いつぞやのフェルマータの言葉を思い出した。

「あれ? だけどその秘術書って、エルミリカの……なんだっけ、ノルツセルの一族だっけ? そいつらにしか開けないんじゃないのか?」

「原書はね。だけどこれはエルミリカの研究の手伝いをしていた、第八の巫子の印の主が持っていた複製、レプリカだよ。原書は行方不明だつて聞いている。マユキ、言っておくけど、この本も第八の巫

子しか開けないよ」

「なあんだ」

口を尖らせて、マユキは残念そうに声を上げた。ギルビスが続けた。「そして、第八の巫子の力を発揮するためには、黒い本が必要不可欠なんだ。逆に言えば、”本”がなきゃ、巫子の絶対魔力が使えない、ということかな」

「なんてことを！」

イデリーが憤慨してティエラを見下ろした。ティエラはというと、むっつりと不機嫌そうな表情で、イデリーから目をそらした。

「ティエラ、ロビ様は大変お怒りだぞ！どう償うつもりだ！？」

「……」

「そんなに怒っているようには見えなかったけど。私たちがこの人を探すのを”ゲーム”って言うてたくらいだし」

「あいつにとつては大抵のことはゲームだよ」

「本当に嫌な奴だな」

ラファは、どうも彼を好きになることはできないのではないかと薄々感づいていた。過去の話聞いても、それはあくまで過去の話だし、ロビのあの性格の理由がわかって、どうも納得できなかった。幼馴染であるトレイズには悪いが、言わずにはいられない。

トレイズは苦笑しただけだったが、ティエラはいきり立った。

「お兄様を侮辱するな！！」

「侮辱してるんじゃない、褒めてくれてるんだよね。えーと……ラピー？」

「だからラファだ！それに褒めてない！！……って、あれ？」

反射的に返したはいいが、今、これまでここにいた人々のどれでもない声がしなかったか。

ラファは振り向いた。薄い笑みをたたえて、エルフの少女をひと

り引き連れて、黒い軍服の少年がこちらへとやってきた。

「ロビ」

「やあ。なんだか面白いことをやっていたみたいだから来ちゃった。無事”黒い本”を見つけてくれたみたいだね」

「お、お兄様……」

ティエラが、蒼白を通り越して真っ白な顔色で縮こまった。ロビは笑みを浮かべたまま、ティエラを見下ろした。その瞳からは、温かさも冷たさも感じなかった。

「やあ、無様だね、ティエラ。」黒い本”を持ち出すなんて、僕や、僕らの親愛なる父上の顔に泥でも塗ったつもり？」

「そ……そんな、そんなことは……！」

「だろうね。やるならもつと派手なことやらなきゃ」

そして、ロビはティエラの脇にしゃがみこんだ。やさしくやさしく、笑んでそのオリーブグリーンの髪を梳いてやる。

「ねえ、ティエラ？君、黒い本を僕の執務室から盗んだ時、なんて言い訳したか覚えてるかい？」

「……っ、……その、それは……」

「”ナエにそののかされました”って言ったね。ね、ティエラ。そう言っただよね？」

「お、おい、ロビ？」

だんだんと、ロビの纏う雰囲気が険悪なものになってきたので、トレイズは止めようと一歩前に出た。すると……

「答える、ティエラ。お前はナエに罪を着せようとしたな？」

ぶるり。ティエラがひとつ大きく震えた。ロビは立ち上がり、笑みという笑みを消し去って、ティエラをまっすぐに見下ろした。繰り返す。

「答える」

「……は、はい」

ナエの肩が跳ねた。直後、ロビが目を細めて、ちらとギルビスを見た。

「その本、ちよつと貸して」

「何するつもり」

「なんにも。いいから貸して」

ギルビスは迷ったようだった。このまま渡して、ロビはこの本をどう「使う」のか。実の妹に対して、どんな仕打ちをするつもりなのか。最悪の予測が、頭をよぎる。

ロビは溜息をついた。

「あのね、心配しなくても、体罰なんて柄じゃないからやったりしないよ。人が苦しんでるのを見るのって嫌いなんだ」

「……」

ギルビスは、遂に黒い本を差し出した。ティエラが大きく息を呑む。ロビはぱらぱらとページをめくり、とあるところで止まった。詠うように読み上げる。

「“歌わずの墮天使の罪”の章・序文」

「……」

「さて……いつだったかな。君にも聴かせたことがあったよね？覚えてるかな」

ティエラはうつむいた。ロビは構わず続けた。

「“歌わずの墮天使の罪”の最期の詩……」

『生きる生きとし生けるもの、我らがこの世に生きる以上、
いかなるものも我らが同胞。』

なんじ我が身の同胞よ、我らがこの世に生きる以上、
いかなるものの命も尊し。

同じ命の持ち主よ、我らがこの世に生きる以上、

いかなるものを疑ってはならぬ。

信じよ生きよさもなくば、我らの内には涙も残らぬ。
信じさせよ生きさせよさもなくば』…

このあと、なんて書いてあったか、忘れるわけがないよね？」

ティエラは黙ったままだった。他の者は首を傾げている。ラファだ
って勿論そんな知識は無い。

…そう、そのはずなのに。

「…『我らの内には涙を残さん』」

「！」

「ラファ？」

口をついて、知りもしない詩の一節が飛び出してきた。頭の中で、
誰かが答えを囁いてくれたかのようにすんなりと。ロビは、こちら
に視線だけを向けた。

「…博識だね、ラファ。その通りだよ。エルミリカ・ノルツセルの
遺した詩の中でも、一番はつきりと自分の主張を記したものだ。そ
して、僕が一番守りたいと思っているものだ。皆に守ってほしいと
思っていることだ」

エルミリカ・ノルツセル。ラファは気付いた。もしかして、ラフ
アにその詩の最期の一節を教えてくれたのは、エルミリカ…？指輪
を見下ろす。いつもとそんなに変わらない輝き。

「ティエラ。君は僕の信頼を裏切った。僕に自分を”信じさせ”な
かった」

ロビは、すぐるように自分を見上げる実の妹に背を向けた。

「僕は、それを許すつもりはないよ」

ラファ達以外に人気の無い路地は、ひどく静かだった。ずんと重
い静寂。動く者はいなかった。うつむいて震えるティエラに声をか

ける者はなく。やがて、ロビがいつもの調子で声を上げた。

「さてと！それじゃあ城に戻ろうか。僕疲れちゃった。トレイズ、久々に君の淹れたお茶が飲みたいな。淹れてよ」

「…本当に変わってねえなあお前は」

しょうがないとばかりに肩を落として、テイエラを気にしながらもトレイズは踵を返した。ラファとマユキ、それからラゼの背を押す。イデリーもロビについて、歩き出した。

a c t ・ 2 8 「黒い本」さえなければ（後書き）

ところでロビとトレイズが「幼馴染」と言ってますが、二人の出会い
はロビ10歳くらい、トレイズ12歳くらいなので、実際は「幼
馴染」というほど昔馴染みではありません。

ですが、トレイズにとってもロビにとっても、お互いが初めての
友人のため、このような表現を用いています。

足音が遠ざかる。ティエラはうつむいたままだった。そんな中で、その場に残っていたナエは、彼女に近づいた。

「ティエラ様」

「いい気味だろうな、ナエ。嘲笑いに來たのか？」

「そんな、そんなことはしません」

ナエはしゃがみこんで、ロープを解きにかかった。硬い結び目に手を掛ける。外れない。ナエは小さく何事かを唱えて、結び目を切り離れた。

呟く。

「ティエラ様は、私のことが嫌いかもしれませんが、私は…ティエラ様が羨ましいです。私の知らないロビ様を知ってるから」

「はっ、八方美人の偽善者が」

ティエラは鼻で笑った。

「せっかくお前を蹴落としてやれると思ったのに。エルフなんかにお兄様の隣を盗られるなんて許さない。お前なんて、大嫌いだ」

「…いかなる者も我らが同胞”ですよ、ティエラ様”

ロープを解き終えて、ナエは立ち上がった。ティエラを立たせて、服についた汚れを掃ってやる。すると、もう一人の残留者が前へと出た。

「君は、知らなきゃいけないよ」

「？なんだ、お前は」

「ギルビス様？」

ギルビスは、ティエラを真っ直ぐに見据えて、言った。

「君は、ロビの妹なんだろう？なら、君は、あいつの妹にしかねないんだ。それ以上でも、それ以下でもない」

「…何が言いたい」

「僕にはできなかったことだ。大切にしているからこそ、あいつは君に”君”であってほしいんだと思う。ナエでも、トレイズでもなく、巫子でもなくて、ただ、”自分の妹”のティエラという人間として」

「……」

「…あいつはすごいよ。僕にはできなかったことだ」

ギルビスは自嘲的に笑って、城に向かって歩き出した。ナエも後を追おうと振り返るが、ふと立ち止まって、ティエラに向き直った。
「私は八方美人なんかじゃないです」

笑みさえ浮かべて、穏やかに。

「私が本当の偽善者だったら、わざわざティエラ様に”黒い本”を盗ませて、信頼をなくさせたりはしませんよ。…言っただけでしょう？ 私はあなたが羨ましくてしょうがないんです。ギルビス様はああ仰っていましたけど、

私はロビ様の”全て”になってみせる。そのためには、ティエラ様。あなたは邪魔ですから」

私と、トレイズの次にロビ様に愛されているのはあなたですからね。につこりと可憐に笑って、エルフの少女は言った。対する世界王の娘は、歪んだ笑みを乗せて毒づいた。

「それこそ”裏切り”じゃないのか？ お兄様に取り入る悪女が」

「ふふっ、何を仰るんですか？ 私はみんなを信じてますよ。トレイズも、あなたもね。そして…ロビ様も私を信頼してくれている。ティエラ様の言い分を信じなかったのがいい例じゃありませんか。…せいぜい、頑張って足掻いてくださいね、ティエラ様？」

優雅に一礼して、ナエはギルビスを追って駆けていった。誰も、彼女の目論見などに気付きやしないだろう。いや、ロビは実は気付

いていたのかもしれない。でも、彼にとっての一番の座は、今、ナエに他ならないのだから。

それを分かっていて、ナエはあんなことをした。

「なんて策士だ……」

悔しいが、今回は完敗だ。ティエラは唇を噛み締めた。

「ギルビス様！」

ナエはのんびりと城に向かって歩いていくギルビスを呼び止めた。青い髪の少年は振り返った。

「関係者がいないと、城には入れないでしょう？ お供いたします」

「ああ、ありがとう」

並んで歩く。ギルビスが口を開いた。

「トレイズに、ロビのこと、聞いたよ」

「そうですか。……昔との性格のギャップに驚かれたでしょう？」

「まあね。でも、あいつのこと、少し見直した。僕も、分かるから地位も役目もない、無印の自分ってやつを、さ」

「そうですか」

ナエは淡い笑みを浮かべた。

「ギルビス様なら、ロビ様の親友になれるかもしれませんね」

「さあ……でも、残念だけど僕は一度嫌った人間とは仲良くなれない人種でね。なんとなくアイツからは同じにおいがするんだ。同族嫌悪、ってヤツかな」

それよりも。

ギルビスは、城門の前で足を止め、ナエを見た。

「ロビを欺いたのは、ティエラじゃなくて、君だろう？」

ナエは表情を消した。ほんの少し目を見開いて、その一瞬だけは、

見た目どおりの年の少女に見えた。ほんの数秒の間。ナエはそして笑った。

「……あなたは、本当に、ロビ様の親友になれると思いますよ」

「……遠慮しておくよ」

二人は、クレイスフィー城の門をくぐった。

「さてと、じゃあトレイズがわざわざ僕を仲間にする為に、あれほどのアホ……いやいや名演技をしてくれたんだから、僕は約束を守らないといけないよね！うん、大変不本意というか、僕みたいな弱い美少年を徒歩の旅に出すだなんて横暴だなあとか、文句を言うつもりは今のところはないし、よろしくね！」

最悪なあいさつもあったものだ。ラファは突っ込む気すら失せて肩を落とした。するとイデリーが真っ青になってロビに詰め寄った。

「ど、どういことですかロビ様！？ここを出るだなんて……騎士団長としての仕事はどうされるおつもりで！？」

「ああ、辞める。書類はナエに後で出させるから。よろしく頼んだよ、ナエ」

「お任せください、ロビ様」

「そ、んな」

イデリーはがつくりと座り込んだ。頭を抱えて唸りだす。トレイズが彼の肩を叩いた。

「悪いな、イデリーさん。でもさ、巫子が揃わないと駄目らしいし、仕方ないよな！」

「いいじゃない、僕がいなくなれば繰り上がりでイデリー、君が騎士団長に戻るんだから。万事元通り！文句ないだろ？」

「大有りです！！今更騎士団長になるだなんて！ああ、こんなこと

なら協力などするんじゃないかった！」

うなだれるイデリー。ロビは至極楽しそうだ。

「そうだ、どうせティエラのヤツは一週間くらい経てばぴんぴんして戻ってくるだろうしさ。そうしたら僕の分の仕事も押し付けちゃってよ。それをやったら許してやるって言えば喜ぶくらいでしょ」

「はあ…止めても行くんですよね…」

「約束を破るのは嫌いなものでね」

「……はあ…」

イデリーは深く息をついた。眼鏡の奥の瞳が残念そうな光を帯びる。

「…わかりました、わかりましたよ。あなたが言っても聞かないのは百も承知です。行きたいところへ行ってください。スラムの奴等をなだめるのは大変ですが…暴動でも起きたら我らが世界王子のお名前を出しますからね」

「大丈夫だよ、その辺りはナエに一任するから」

瞬く間に荷物をまとめて、ロビは最後に、騎士団長のみがつけていた白いマントを外すと、相も変わらず座り込んだままのイデリーの頭に投げつけた。

「さよならイデリー。もう二度と会うつもりはないよ」

「……どうぞ、私ももう二度と会いたくありませんので」

二人とも笑顔だった。ギルビスがそれを見て、疲れたように頭を振る。かぶり

（この国には、天邪鬼と策士しかないのかな…）

シェイルディア首都、クレイスフィーの入り口で、ロビは一同を振り返った。

「で、ラトメに行けばいいんだよね？僕は歩くの嫌いだから、転移でぱっと行っちゃおうか！」

「冗談だろ!？」

案の定、すぐさまトレイズが反論した。ラファはふと疑問に思っ
て尋ねる。

「…そういえば、トレイズはどうして転移呪文が苦手なんだ? 転移
装置は大丈夫なのに」

「ああ、トレイズ、君まだ転移がだめなのかい? まったくしょうが
ないなあ」

「誰のせいだと思ってるんだよ!？」

渋々話すトレイズと、嬉々として語ったロビの説明を要約すると、
トレイズ、ロビ、そしてナエの三人が暮らしていた隠れ家が、ファ
ナティライスト兵に見つかった時まで遡る。

ロビは習得したばかりの転移呪文で、自分達を大陸へと飛ばした
らしい。だが、初心者がそんな長距離を、しかも三人も運ぶのは無
理があつたようで。トレイズはそれ以上詳しくその恐怖は語らな
かつたが、とにかく以来、転移呪文はトラウマになって仕方ないら
しい。

「いいよ俺は…」風”使つて行くから、お前達転移で行けよ」

「風?」

ラゼが問うた。

「巫子の力っていうのか? 俺の…第七の巫子の力は、自然を操るん
だ。風をちよつと操れば、一瞬でラトメに着ける。ただ不安定だか
ら一人しか運べないけどな」

「転移と大して変わらないじゃないか」

ギルビスは呆れたように言うが、要は気持ちの問題なのだろう。ト
レイズはどうしても転移が…特にロビの転移が嫌いらしい。

ラファが申し出た。

「ロビの転移が駄目だつていうならさ、俺がやろうか? 俺も一応転
移呪文はできるし」

「エルデイのスパルタ修行に三ヶ月も耐えたんだもんね、ラファは」

「まだ俺、修行の成果が全然出てないんだぜ!？」

だが、それでもトレイズは動かない。ラゼが控えめに声を上げた。
「…トレイズの言うとおりにしたら?」

「うーん」

ロビが思案するように宙を見上げた。嫌な予感がしたらしい、トレイズの顔が歪む。そそくさと身を翻した。

「決まりだな!それじゃ俺は一足先に…」

「よし決めた!トレイズの転移呪文克服に一役買っただけようじゃないか!」

ロビは逃げようとするトレイズの首根っこをむんずと掴み、手早く呪文を唱えた。

「『偉大なる我らが双子の兄妹神よ!」

主よどうぞ我が元へ

神のご加護がありますように…転移^{ワープ}!」

a c t・29 策士たちの計略（後書き）

ロビの性格の原因は女官にありますが、半分は素です。

act・30 そして物語はじまりの舞台へ

「おえ…気持ち悪い」

「まったく軟弱だなあトレイズは。あんまり暴れるから、座標がずれちゃったじゃないか」

「…あれ？ここは」

ラファは辺りを見回した。

目の前に広がるメインストリートにはずらりと露店が並び、様々な品物を売っている、学生服を身にまとう子供達。立ち並ぶ家々。夕暮れの一時。メインストリートの奥には、今もいくつもの学び舎が建っているのだろう。

そこはレクセディア。

ラファの、生まれ育った土地だった。

「レクセだ…」

レクセだ。懐かしいこの場所。もう戻ることはないと思っていた、この場所。マユキも呆然と、その場に立ち尽くしていた。

「転移をやり直さなきゃいけないじゃないか。トレイズ、後でこのお返しはきっちりしてもらうからね！」

「やめてくれよ！」

は、と我に返って、ラファはトレイズたちを振り返った。鈍器で頭をぶん殴られたような衝撃だった。

そうだ。

自分は今、巫子なんだ。

戻れない。

戻れないんだ。

みんな、自分のいた場所を犠牲にしているんだ。

ギルビスも、ラゼも、ロビも、トレイズも、そしてマユキもみんな。

「…さっさと行こうぜ。転移をやり直せばいいんだろ？」

搾り出すように声を上げる。ロビはにこやかに笑った。

「うん。ほらトレイズ、しゃきつと立つ！また酔いたいのかい？」

「横暴だ…」

構わずロビは呪文を紡ぎだした。ラファは、もう一度レクセの町並みを振り返った。今度こそさよならだ。目に、この景色を焼き付けておかないと…

その時。背後に感じた気配にいち早く気付いたのは、ラゼと、それからロビだった。

「マユキ、伏せて！」

未だ立ち呆けているマユキを、ラゼが押し倒した。一瞬遅れて、ダン！と大きな爆発音。マユキの舞い上がった髪が数本、どこかへと吹っ飛ばされた。

「な、何！？」

「ラファ、結界を張ってくれるかい？」

ロビが”黒い本”を取り出して叫んだ。ラファは訳が分からず、言われるがままに自分達の周りに結界を敷いた。すると直後、弾丸の嵐が、透明の壁に跳ね返って、足元に転がった。

「なんなんだ！？」

「どうも巫子狩りがいるようだね…ぜんぶ魔弾銃の弾だ」

ロビが、ひとつ弾丸を拾い上げて言った。と、ラゼがマユキを助け起こしながら、心配そうに問う。

「マユキ、ごめんなさい。大丈夫？」

「……うん」

「でも、どこにもいないな…幻術でも使ってるのかもね」

ギルビスの言うとおりだった。周囲を見回しても、あの黒いロープの裾すらどこにも見当たらないばかりか、学生達は発砲音など聞こえなかったかのようになり、先ほどとなんら変わらぬ日常を築いていた。「どういうこと……?」

「つまりは、このレクセ全体に幻術がかけてあるってことだね。この土地に一步でも足を踏み入れれば、僕らはもうやつらの術中にはまってるって寸法さ。この分だと、転移に失敗したのも、途中で誰かに介入されて、座標を操作されたんだろう。……まったく、そんな魔道師がいるなんて聞いてないよ」

「ちよつと待て、そんなの無茶苦茶じゃねえか！」

酔いも吹っ飛んだらしいトレイズが、ロビに詰め寄った。

確かに、そんな広範囲に幻術をかけたり、人の転移の目的地を変えるだなんて、エルディも言っていなかった。幻術に関しては、第二の巫子……幻術を司るラファなら不可能ではないが、……あまり自信は無い。

「まあ、確かに無茶だけだね。僕は幻術は専門じゃないからなんともいえない……でも、困ったな」

全く困った様子も見せずに、呑気にロビは言った。

「これだとレクセから出られないじゃないか」

ロビの台詞の後半を遮って、再び魔弾銃の火を噴く音が、高く響いた。

それからラファの幻術を駆使して、なんとかその場から逃げ出し、一同は人気の無い路地へと飛び込んだ。姿消しの幻術を解いて、ラファは言う。

「大通りに出たら弾丸の嵐か……どうするんだよ？」

「どうする、と言っても、俺はこの辺の地理はよくわかってないか

らなあ。ラファ、マユキ。お前達は知らないか？隠れ家になりそう
なところだとか、レクセから出られる抜け道だとか…」

「隠れ家…」

ラファはマユキを見た。マユキもラファを見た。二人同時にトレイ
ズを見る。

「それならあそこだな」

ラファは、路地の向こう側にある、大きな建物を指した。

「レクセ・ルイシルヴァ学園」

「あそこ、簡単に編入手続きができるんだよ。”旅人だ”って言え
ば、多分簡単に通してくれる。どんな人間でも基本的に受け入れて
くれるの。それこそ殺人鬼でもなんでも、ね。その代わり、学生に
なったら先生に逆らっちゃいけないの。学園の処罰って、すっごく
厳しいんだよ」

「だけど、あそこはレクセで一番国に守られてるから、巫子狩りも
そうそう入ってはこれないと思う」

「学園が…」

一同は路地の奥を見た。しばしの間。ギルビスが口を開いた。

「それしかないんじゃない？」

「だな。そうと決まったらさっさと行こうぜ」

「あ、でもちよつと待って」

ラファが止めた。神妙な表情で、マユキを見る。

「……俺達は、悪いけど行けない」

「どうして？」

「言っただろ？学園の処罰は厳しいんだ。俺達、無断外出に無断外
泊…しかも魔術の無断使用に武器の所持。きつい拷問のあとに留年
に、三ヶ月くらいの幽閉は軽いな」

「おい、ルイシルヴァ学園っていうのは本当に学校なのか？」

「言ってるでしょ？”学園の処罰は厳しい”の」

再三言うマユキ。ロビが唸った。

「うーん…処罰はまあいいとしても、三ヶ月も足止めを食らうのはご勘弁願いたいね」

「処罰だってよくねえよ!」

「でも、君達二人でどうするつもりだい? 巫子狩りに許しても請いに行くのかい?」

マユキが黙り込んだ。確かに、あの弾丸の嵐からして、レクセに潜んでいる巫子狩りは大勢いるだろう。対するのが二人では、多勢に無勢、無茶もいいところだ。

「……俺の、」

ラファが口を開いた。自分の心の中ではもう決めていることなのに、声に出して言うのはまだためらいがあった。

「俺の、家がある」

トレイズが唇を引き結んだ。

「俺の家には…チルタの言ったことが、本当なら、だけど…今は、誰もいないはずだ。あそこは住宅地で、人も沢山いるから、巫子狩りもそう簡単には騒ぎを起こせない。二人くらいなら、隠れていられるはずだ」

「ラファ、でも、お前…」

「俺、確かめたいんだ」

ラファは思いがけず強い口調で吐き出した。トレイズは口をつぐむ。

「チルタが、本当に俺の父さんと母さんを、殺したのか」

ラゼがはつと息を呑んだ。ギルビスの肩が跳ねた。ロビですら、笑みを消し去ってラファを見た。マユキが、首を横に振りながら声を上げる。

「……そんなの、聞いてないよ、ラファ」

「そりやそうだ。誰にも言っていない」

「いつ！？いつ知ったの！？」

マユキが詰め寄ってきた。ラファは、努めて軽い調子で返した。

「俺がラトメから逃げ出したときだよ。チルタに会ったって、言っただろ？そのときに言われたんだ」

「……っ」

ラファはマユキから視線を外して、トレイズを見上げた。

「なあ、いいだろ？無人廃墟の館も考えたけど……あそこは何度も生徒が入り込んでから、多分教師が見張ってる。特に、俺とマユキの行方が分かる最後の場所だ。学園側からすれば、だけど。学園は、きつと俺達を探してると思う。手がかりになるような場所は、行っちゃ駄目だ。でも学園の入学手続きでは、自宅の住所とかは書いたりしないから、多分学園にも見つかることはないと思う」

「……」

「なあ、トレイズ。頼むよ」

トレイズは途方に暮れた表情でラファを見下ろした。だが、彼と出会ってから、もう何ヶ月も経っているのだ。こういうとき、彼は必ず折れるということを知っている。

「……わかったよ。ただ、まずいと思ったら、すぐに逃げることを見て、レクセから出られると思ったら、俺達を放つても行くんだ。その代わり、何があっても俺達は助けに行つてやれないからな」

「それって、ラトメに着くまで別行動ってこと？」

「当たり前だろ？連絡手段なんてないんだから。マユキもラファも、うちの一軍から戦う術を学んだんだから心配ないだろ。……行つてこいよ」

「やった！そうと決まったらすぐに行こうぜ、マユキ！」

「ちよつと待って」

ギルビスが呼び止めた。

「どうやったら学園に入学できるのか、教えてよ。推薦とかは必要じゃないの？」

「ああ」

ラファが振り返った。

「俺達が戻ってきてることは、”あいつ”ならすぐに分かると思うんだけどな……」

「あいつ？」

カツ。

ラゼの問いに応えるように、学園の方向から足音が響いてきた。一同は息を詰め、得物に手を伸ばしながらそちらを見る。

「それは、もしかするとぼくのことですか、ラファ先輩」

小麦色の、男にしては長めな、顎まで伸びた髪。眠そうな、半目の茶色い瞳。ルイシルヴァ学園の制服。両手になにやらボードのようなものを持って、小柄な少年はこちらへとやってきた。後を、一人の少女が追ってくる。栗色の髪の、同じくルイシルヴァの学生だった。

マユキが別段驚いたわけでもなく声を上げる。

「ユール。それにピルも」

「やあ、姉さん。随分と長旅だったじゃないか」

「姉さんって、マユキの弟？」

ユールはボードを折りたたんで小脇に抱えると、声を上げたトレイズを見上げた。彼の背丈は、トレイズの胸くらいまでしかなかった。

「そうですよ。ぼくはユール。マユキ姉さんの弟です」

「あたしはその友達のピル。あたしたち、ルイシルヴァ学園の三年生なの」

「どうも、姉さんのお友達が学園に入学したいみたいだから、手伝ってあげようと思って、来ちゃった」

「ユールはね、占いが得意なの。本当に予知でもしてるみたいに、絶対に外さないんだよ。ラファは信じないんだけどね」

「ラファ先輩は頭が固いから」

「喧嘩売ってるのか？」

「予知」。しかし最近よく聞く言葉だ。ラファは嘆息した。

昔は確かに、何か仕掛けでもあるのではないかと思っていたが、自分だって「過去夢」などという訳の分からないものを視るのだ。今更占いごときで驚きなどしない。

「それで、君達はその占いとやらで、僕らの居場所を割り出したっていうのかい？」

「そうですよ。信じられませんか？」

小ばかにしたように、ユールが口ビを見た。かの世界王子とも知らず、恐れ多いやつだ。

「とにかく、君達についていけばいいってことだよな？」

「安心して！あたし達、学園の中で役員とかやってるから、大抵のことは融通が利くの」

ピルに言われ、ラファとマユキを除いた面々は、不安そうに顔を見合わせたものの、渋々動き出した。

「じゃ、行ってくるよ。ラトメで会おう」

「ああ」

「気をつけてね」

「そっちも」

トレイズたちが立ち去って行くのを見送って、ラファはマユキに向き直った。

「俺達も行こう」

act・31 レーチスの手紙

ラファの家は、どこにでもある住宅地の、ちょうど真ん中あたりに位置する。レクセディアでは一般的な、二階建ての一軒家。青い屋根、白い壁。子供の頃、隣の家の幼馴染とちゃんばらごっこをして、あっさり負けて大泣きした、少し広めの庭。居間の柱に、小さい頃身長を測る為に父さんにつけてもらった傷は、今も残っているだろうか。

ラファの、十七年分の記憶が、この家には詰まっている。

家の鍵は開いていた。一瞬迷ってから、ラファは扉を開いた。マユキの心配そうな視線を感じる。奥へと伸びた廊下。だれもない。

ラファは家の中へと上がった。一番手前の、左手にある部屋をのぞく。

広がるリビング。

だれもない。

だれもない。

「ラファ」

マユキが自分呼びかける、声。

「…その辺で、くつろいでいていいよ。俺、ちょっと自分の部屋に行ってくる」

顔は引きつっていやしないだろうか。

声は硬くなっていやしないだろうか。

ラファは階段を駆け上がった。

客間を見る。

だれもない。

寢室を見る。

だれもない。

風呂を見る。トイレを見る。物置を見る。

だれもない。

だれもない。

だれもない…

自分の部屋。

扉を開く。

だれも…

だれかが、いた。

「……あ…？」

父さんじゃない。

母さんじゃない。

銀の髪を後ろでひとつにくくった、青年が、ラファに背を向け立っていた。

扉を開く音に気付いた青年が振り返った。吊り目気味の瑠璃色の瞳が、ラファを映した。青年は、ゆっくりと微笑んだ。

「やあ」

どこかで聞いた声だった。優しい声だった。

「あんた、だれ」

「ちよつとね。お邪魔してるよ。君にどうしても渡したいものがある」

青年は懐から一通の手紙を取り出した。ラファに押し付ける。

「これ、は…？」

「君の知りたいことが書いてあるだろう。どうせエルミリカのヤツ

は何も話してないんだろ？俺は、君には知る権利があると思ってる」
手紙から顔を上げると、青年は窓枠に足をかけていた。にっこりと笑いかけられる。

「そうそう。君の両親はちゃんと埋葬しておいたよ。町の西に丘があるだろ？あのとつぺんの、見晴らしのいいところに、さ。ちゃんと墓参り、行けよ」

「ちよつと待つてくれよ！！」

そのまま青年がどこかへと行こうとしてるので、ラファは慌ててその腕をつかんだ。青年がきょとんとして振り返る。

「なに？」

「あんた誰だ？なんで、俺に……」

ラファの台詞を遮るように、額に、青年の手が添えられた。父さんよりも小さくて、母さんよりも冷たい、手……

「おいおい、もう俺のこと忘れちゃったのか？」

青年は笑った。

「でも、お前まだ赤ちゃんだったもんな。覚えてるわけねえか」

青年は、優しく言った。

「じゃあ、今度はちゃんと覚えておけよ。俺の名前は、」

「レースー！！」

いきなり大きな音を立てて、大声を上げて、階段を駆け下りてくるものだから、マユキは驚いて、壁にかけられたラファとその家族の写真から顔を上げた。

「ど、どうしたの？ラファ」

ラファは答えずに、リビングの窓を大きく開けた。だが、求める銀色の髪はどこにもない。ラファは肩を落とした。

「……なんでもない」

ラファは、そして左手に握り締めた白い封筒に、視線を落とした。青い、2羽の鳥が交差している印の押された蠟をはがすと、三枚ほどの紙が入っていた。

- - -
- - -
- - -

我が息子の息子、ラファへ

「孫」という表現は俺が年老いた気がするから、こういう言い方で失礼するよ。

俺の名はレーチス。君と、四分の一だけ血の繋がった存在だ。そして、「ノルツセル」という、不老不死の血を引いている…これでももう千年くらい生きてるんだ、と言ったら、君は信じるかな？

俺は世界創設時代、エルミリカ・ノルツセルの補佐をしていた。世界創設を成し遂げた「聖女」とは腐れ縁でね…

会ったび言い争いをしては、エルミリカに叱られていたよ。エルミリカには会っただろう？彼女が、自分の…予知夢の君の片割れである、

過去夢の君を放っておくわけがないからな。

さて、話を戻そう。昔話も色々と聞かせてやりたいけど、紙がいくらあっても足りなくなってしまうから。

君はきつと、”過去夢の君”が何なのか、よく分かっているだろうと思うて。

だから、前過去夢の君である俺が教えてやろう。

…そろそろ、俺の正体が見えてきたかな？

まあ、他人がつけた俺の呼称なんてどうだっていいし、俺には俺なりの考えがあつて動いているんだから、人にそれをとやかく言われる筋合いはないと思うけどね。

双子神エルの話は知っているか？

未来を視ることのできる妹が、兄の死を知ってしまったて、その未来を変えるために、自分の命を絶ったという話だ。

けれど、結局兄は、妹を失った悲しみから、自らも死ぬことにする。

…矛盾していると、思ったことは無いかな？

「妹の予言は外れてしまっているんだよ」。

何故だと思う？

それはね、兄が「過去」を変えたからなんだ。

妹の予言は、「兄が生き残った」という”過去”を前提とした”未来”なんだ。

…言っていることが難しいかな。

未来というのはね、過去が、そして現在がなければ成り立たない。

とても不確定で、不安定なものなんだ。

対して過去は、変えることができないだろう？

何が言いたいのか、分かってくれたかな。

”過去夢の君”は過去を、”予知夢の君”は未来を、変えることができるんだ。

まさかと思うか？でも事実さ。

それだけでも信じられないだろうけど、過去を変えられるということは、

すなわち未来をも操れる力を得たのと同じだということに、気付い

たか？

勿論、そうそう簡単にいくものではないんだけど。

多大な魔力が必要になるしね。

：そう、だから俺は：いや、俺と兄貴は、「赤い印」を創ったんだ。神に届くほどの魔力を、手に入れるため、と言ったほうがいいかな。

俺の変えたかった未来を、守りたかった過去を同封しておいた。

もつと聞きたいことがあれば、エルミリカに聞けばいい。

「レーチスに言われた」といえば、彼女だって何でも教えてくれるはずだ。

どうぞ、君の行く先に幸があらんことを。

世界に名だたる異分子・レーチス

- - -
- - -
- - -
- - -

ラファは紙をめくった。最後の一枚には、誰かの肖像が描かれていた。

二人の少女だった。一方は豪華な椅子に座り、一方はその背もたれに手を掛けて立っていた。二人とも、柔らかに微笑んでいた。片方の少女には見覚えがある。この虚ろな瞳：エルミリカ・ノルツセルだ。立っている少女は初めて見る。短髪の明るそうな女の子だった。エルミリカがふんわりとしたドレスを着ているのに対して、彼女は召使のように質素な風貌だった。

裏返すと、端正な文字で、

「エルミリカ姫と召使ウラニア、ロゼリーにて」

とある。そしてその下に小さく、

「二人が最後の”予知夢の君”となりますように」と書かれていた。

予知夢の君？最後の？どういうことだろう…

「……レーチスの願いは……”異分子”の願いは、」

予知夢の君を、なくすこと？

手紙を読んでぶつぶつとなにやら呟いているラファを、マユキは困惑して見つめていた。一体彼はどうしたというのだろうか？

ラファが顔を上げた。マユキは恐る恐る尋ねた。

「ど、どうしたの？ラファ……」

「ラトメに行こう。今夜の真夜中だ」

「えっ!？」

ラファが紙をめくった。

「見てくれよ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

追伸

そうそう、”時計”があるから、今の君の魔力はもとの半分くらいしか発揮できないんだけど、

絶対に外してはいけないよ。

できれば寝る時も付けているのが望ましい。

その時計がちゃんと、普通の時計としての役割を果たせるようになるまでね。

でないと、わけのわからない過去夢を見る羽目になるよ。

経験がないかな？ 出会う人出会う人の過去を垣間見てしまうこと。

それと、上手な力の使い方を教えてあげよう。

今度ファナティライストの連中に、その時計の文字盤を見せてやるんだ。

そして極限まで魔力を込めてやる。

何が起こるかは、お楽しみだ。

面白いことが起こる、とだけ言っておこう。

込める力加減にもよるけど、そうだな。

初めて使うなら、最低でも一時間くらいは足止めが効くだろう。

あと、いつか「レフィル」と名乗るやつに会ったらよろしく言うておいてくれ。

俺のことを追ってるらしいんだけど、いずもすれ違ってしまつてね。俺はこれからエルミリカに会ってから、ファナティライストに渡ろうと思う。

また会った時は、無視しないで声をかけろよ。
元気で。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……時計って、それ？」

マユキがラファの左手首に巻かれた銀の時計を指した。今、その針はゆっくりと反時計回りを繰り返している。

「だな。何が起こるかはわからないけど」

「それ、さつき叫んでた、レーチスって人の手紙？その人、誰？」

ラファはしばし黙った。馬鹿正直に「異分子だ」と言ったら、流石のマユキも怯えてしまうのではないか。けれど、親友に、ただでさえ両親の死を黙っていたのだ。これ以上、隠し事はしたくない。

「…俺の、爺さんに当たる人で」

「うん」

「……」異分子”だよ」

「うん…え？」

「だから、”異分子”だよ。フェルマータが言ってただろ？最初に赤い印を作った異分子だ。フェルマータは『死んだ』って言ってたけど」

生きていたのだ。レーチスは、現に自分の目の前に、姿を現した。

異分子は生きていた。そして、エルミリカも…

「エルミリカ・ノルツセルに会わなきゃならない」

ラファは言った。

「それで、今度こそ、ちゃんと全部聞くんだ」

マユキは黙ってラファを見ていた。

「待って、じゃあ、異分子も、エルミリカさんも、まだ生きてるってこと？」

「ああ」

「ラファは、その異分子の…レーチスさん？の、血を引いてるってことだよな」

「そうなるな」

マユキは口をつぐんだ。この友情も、ここまでだろうか。溜息をこらえた、そして。

「…それって、すごいよラファ！」

ラファの心配は、杞憂に終わった。マユキはラファに詰め寄り目を輝かせた。…いつもどおりの、夢見がちな、マユキだった。

「すごいすごい！死んだと思ってた人が生きてて、しかも不老不死で、ラファのおじいさんが赤い印を作ったってことで！ああもうっ、私もそのレーチスさんに会いたかった！」

このままだとマユキが、「レーチスさんに会いにファナティリストに行きたい」とでも言い出しかねないので、ラファは先手を打った。

「言っておくけど、ファナティリストには行かないからな。…とにかく、レクセはさっさと出なきゃ。一体何が起こるのかはわからないけど、ここはレーチスを信じるしかないな」

自分の言いたいことを先読みされたからか、単にレーチスに会えないことを悔しがっているだけなのか、マユキはすこし口を尖らせた。やがて、口を開く。

「じゃあ、夜に備えて寝ようか」

「そうだな」

ラファはちよつと笑った。

大丈夫。

この家にはだれもいなかったけど、今は隣にマユキがいる。

…そして、レーチスがいた。

俺はまだ、一人じゃない。

みんなと一緒に、生きていけるんだ。

「学校なんてはじめて通うよ」

真新しい、糊のきいた制服に身を包んだロビが、ネクタイを緩めながら言った台詞に、ギルビスは首を傾げた。

「君、フアナテイリストで学校とか行ったりしなかったの？フアナテイリストには学校があるんじゃないかったっけ？」

「あるよ。巫子狩り育成用の神官学校は、ね。僕は世話してくれた女官に家庭教師じみたことをしてもらったんだ。やたら博識だし一問一答違えることに『おしおきです』とか言って魔術飛ばしてくるし……教師としては最悪の奴だったね」

「でも、その人のおかげで、ロビは今そんなに頭がいいのね」

屈託なくラゼが笑うので、ロビは肩をすくめて目を伏せた。……どうやら少し照れているらしい。それを見てギルビスはしばし目を瞬いた。もしかすると、飄々としたロビにとっては、ラゼのように純真な子は不得手なのかもしれない。

ロビはまじまじとこちらを見ているギルビスの意図を察したか、とってつけたような笑みを浮かべて話を逸らした。

「ギルビスは？君こそ学校に行っていないのかい？」

「そんな金があるように見えるかい？僕は独学だよ。医術と巫子の本ばかり読んできたから、そのほかに關してはさっぱり。興味ないことには手をつける気にならないし」

「……でも、いいなあ、ふたりとも。私は勉強とは縁がなかったもの。ゼルシャの村では、文字が読めてお金の計算ができればそれでよかったから」

「普通はそうなんじゃない？少なくとも、それさえ分かれば日常生活に支障はないし」

「そうそう。それに大丈夫だって。僕らの中には壊滅的な馬鹿が一

人いるじゃないか」

「……おい、それはもしかしくとも俺のことか？」

トレイズが、一人の女性教師を引き連れてやってきた。教師は眼鏡のレンズ越しにきりりと一同を見渡した。

「初めまして、新入生のみなさん。私は歴史教師のメアルです。あなた方のクラスへ案内するので、私についていらっしゃい」

「はい」

メアル先生はどことなく沈鬱な表情だった。少しやつれていたし、厳しそうな顔つきなのに、その視線に覇気は無い。ぎょっとしたラゼが、思わずといった風に尋ねた。

「あの、先生？どこか具合でも悪いんですか？」

「え…？あ、ああ、ええ。ごめんなさいね。何ヶ月か前に生徒が二人行方不明になってしまつて、どうも調子が、ね。片方はとんだ問題児だったのだけれど、いざいなくなると…」

おそらく、ラファとマユキのことだろう。一同は顔を見合わせた。まさか、今レクセに彼らが戻ってきていることなど、彼女は予想だにしていなかったらう。

黙りこんだ一同に、悪いことを話したとも思つたのか、メアル先生はあいまいに笑った。

「…あなたたちにこんな話をしても仕方ないわね。大丈夫。そんなことはルイシルヴァでも二度と起こることはないわ。警備が厳重になったから…さあ、ここがあなたたちがこれから勉強するクラスよ。最近入学した子がもう一人いたはずだわ。みんなと仲良くなさいね」

障子開きの扉のむこうに、二十人ほどの少年少女たちが各々の時間を楽しんでいた。メアル先生に引き連れられて、見慣れない人間

が入ってきたことに、好奇の視線が突き刺さる。教室中がさわさわとひそめるような浮き足立った囁きで支配された。

入り口から程近いところでかばんを探っていた黄土色のおさげの少女が声を上げた。

「先生、その子たち、新入生？」

「ああ、エピナ君。そうよ。色々教えてあげなさいね」

「はい。私エピナだよ。よろしくね、なんでも聞いてね。…あ、待つて先生。マユキとラファ、まだ帰ってきてないの？」

びくり。

メアル先生が去ろうとしている背中に呼びかけたエピナの台詞に、トレイズたちの表情が動いたが、メアルもエピナも気付くことはなかった。メアル先生はぎょつと肩を跳ねたあと、溜息をつく。

「ええ…」

「ねえ、本当に、何か事件に巻き込まれてるんじゃないんですか？ マユキもラファも、”無人廃墟の館に行く”って言ったきり戻ってこなくて…そりゃラファはよく問題起こしてたけど、自分から学校から逃げ出すような子じゃないです！まさか…誰かに連れて行かれちゃったんじゃない…」

トレイズの視線が泳いだ。「誰か」もなにも、彼らを連れて行つた張本人がここにいるのだ。居たたまれないことこの上ない。

メアル先生は精一杯微笑んだ。

「きつと二人とも家出気分で行っただけよ。そんなことを考えるのはおよしなさい。あの二人は先生が探しておくから、エピナ君、あなたは自分の、学生としての本分を果たしなさい」

そしてメアル先生は今度こそ去っていった。トレイズとラゼが顔を見合わせる。二人の無事を教えてやりたいのはやまやまだが、どこに敵がいるとも知れないこの状況で、勿論そんなことができるはずもなく。

エピナは困ったような笑みを言せて言った。

「……ごめんね、寮に案内するね。あつ、そうだ」

エピナが教室を振り返った。窓から外を眺めてぼんやりしている少女に声をかける。

「ルナ！寮に帰ろう！」

ルナは、綺麗に手入れされている長い黒髪をポニーテールに結い上げた少女だった。北の人間だろうが、陶器のようにさらりとして白い肌で、彼女はゆつくりとこちらを見た。少しつんと澄ました態度が格好いい。漆黒の瞳が、トレイズたちをひとりひとり映した。

エピナが解説した。

「ルナもね、最近この学園に入ったばかりなんだよ。あなたたちよりもちよつとだけ先輩だね」

「初めまして、ルナって呼んで」

こちらにやって来たルナは大人びたほほえみを浮かべて右手を差し出してきた。トレイズが握手に応じた。

「よろしくな」

「ええ、同じ時期に他にも来る人がいて安心したわ」

しつとりと艶やかでハスキーな声。ルナは深く笑んだ。

ルイシルヴァ学園の裏にある、学生寮の一室。自分にあてがわれたベッドに腰掛けて、ロビは救急鞆の整理をしているギルビスと、日課らしい腕立て伏せを繰り返すトレイズに口を開いた。

「意外と簡単に入り込めたね」

「ユールたちがあの先生に『この人たちを推薦する』って言っただけですぐ通してくれたからな。けっこう信頼されてるみたいだったし」

「僕達はいいいとしても…ラファ達は見つかったりしてないかな」

ギルビスの台詞にトレイズは眉を寄せた。確かに気になるのは、別行動を取っているラファとマユキのこと。かといって、ここにいる誰もラファの家の位置など知らない。様子を見に行くことはできないということだ。

ロビが窓から、日の沈んだ濃紺の空を見上げた。世間を、数多の星屑がきらめいて、彩っていた。

「新月か…」

ラファ達は深夜零時に事を起こした。人気の無い、レクセディアの小道を駆け抜け駆け抜け、月の無い闇に紛れて彼らは走った。

「ラファ」

マユキが声をひそめて、ラファを呼ぶ。

「どうせだからトレイズたちのところに行かない？ 寮に忍び込めば、一緒に逃げることもできるんじゃない？」

「いや、駄目だ。ルイシルヴァは大通りにあるから、見つからないとも限らない」

現在位置は、レクセディアの入り口から、またルイシルヴァ学園から、大体同じくらいの位置にある住宅街の端の小道だった。もしここで学園に寄るとなると、必ず大通りに出なくてはならない。

「向こうにはロビとかギルビスがいるし、ラゼも強いし、トレイズだっている。俺たちよりも楽に逃げられるはずだ。」

マユキが渋々納得したように頷いて、小さく歌を口ずさみ始めた。ゆったりとした旋律。子守唄のようなやさしい音色。ラファは大通りの手前で立ち止まって、マユキの唄が終盤まで差し掛かるまで待った。

目指すは入り口のゲート。逃げることは予測済みとばかりに、十人ほどの巫子狩りが、暗闇に同化するように立っていた。

「……行くぞ！」

あとワンフリーズで唄が終わる、というときに、ラファは叫んで飛び出した。ロッドをひとつ大きく振って、一瞬不意を突かれて震えたあとで魔弾銃を構えた巫子狩りに、なぎ払うように叩き込んだ。ガンッ、盾にされた魔弾銃と、ラファのロッドが鈍い音を立ててぶつかり、離れた。

「マユキ！」

「…第五の赤き刻印よ、謡え！！」

謡い終わったマユキが、最後に高らかに命じると、幻術をかけて小麦色だった髪の毛の魔術が解け、一気に紅く染まりあがった。前に差し出した右手のひらに光があふれて、それはいくつにも散らばって、矢のように巫子狩りに襲い掛かった。

「チッ」

巫子狩りが舌打ちして、近場にいるラファに魔弾銃を向けてきた。見ると他のものもちちらへと向かってくる。

…今だ！

ラファは時計に全神経を集中させた。レーチスからの手紙に綴られた文面を思い出す。時計に魔力を、溜めて……巫子狩りに、向ける！

きゅんっ！

一周、時計の長針が時計回りに、勢いよく回転した。鎖状のベルトがやけどしそうなくらいに熱くなる。文字の無い盤面が光って、数字が浮かび上がって、巫子狩りめがけて、強く放たれた。

「ぐあぁっ！！！！」

巫子狩りが悲鳴を上げた。目にゴミでも入ったかのように反射的に手でおおって、後ずさった。見ると、他の者もそれは同じで。

「……？」

光が完全に収まっても、巫子狩りたちはうめいていた。ラファが不審に思つて、一步前に出た。ブーツのかかとが小さく音を立てる。すると一様に、巫子狩りたちの肩が大きく震えた。まるで恐怖にものいているようだ。

「ひ…っ」

「や、やめろ、来るな！！俺にこんなものを見せるなああっ！！」
「どうなってるんだ…？」

今や、巫子狩りたちは魔弾銃を取り落とし、必死で何かから逃れようと首を振っていた。何が起こったのかわからないラファ達は立ち尽くすまま、彼らの姿に恐怖すら沸きあがってきて。

「と、とにかく行こうよ。今なら逃げられるよ」

「あっ…ああ」

もがき苦しむ巫子狩りの脇を難なくすり抜けて、入り口のゲートを越える。

だが、すぐに、足を止めた。

後ろから来たマユキが、突然立ち止まったラファに首を傾げて声をかけた。

「ラファ？どうしたの…」

その視線の先を追って、彼女もまた息を呑む。

セント・クロスの森。少し手前に黒い人影。微笑みを浮かべた少年は、ラファに和やかに声をかけた。

「やあ。インテレディアで会ったきりだったから…一ヶ月半ぶり、くらいかな？」

「チルタ…」

チルタは、ラファ達の背後で悲鳴を上げている巫子狩りたちを一聲した。

「へえ、なんだか面白い魔術を覚えたんだね。流石は過去夢の君…魔力も半端ない、か。ますます味方に引き込みたくなっちゃうよ」

「駄目！」

マユキがラファの腕にしがみついて、チルタを睨みつけた。

「ラファをそっちに…ファナテイリストなんかには、渡さないんだから！」

「マユキ…」

「”ファナテイリストなんか”、ねえ…」

チルタはつまらなそうにマユキを見て、ラファを見た。

「ラファ君、まさかとは思うけど、その子、君の友達？」

困惑しているかのような問い。ラファはマユキを守るように一歩前に出て、答えた。

「そうだよ。……なんでだ？」

「本当？本当に？へえ…」

チルタはもう一度マユキを見た。値踏みするような視線だ。

「なに…？」

「いや、君の一族と、ラファ君の一族は確かものすごく仲が悪かったような…よく親が止めなかったね。特に…マユキ、だっけ？君のほう」

「はあ？」

マユキの一族？

ラファは振り向くが、マユキも目を丸くしている。二人は顔を見合わせて、怪訝にチルタに視線を戻した。

「どういつ、こと…？」

「だってさ、」

チルタは首をわずかに傾けて、心底納得がいかない、とても言いた

げに、悪気もなしに尋ねてくる。

「君、”神の子”の娘だろう？その髪といい目といい、憎らしいくらいにフェルマータの奴と瓜二つじゃないか」

チルタが問うてから、マユキが言葉を発するまでに、たつぷり十秒は経っただろうか。ラファはその間、まじまじとマユキを見ていた。

小麦色の髪。

彼女の見慣れた笑顔。

そうだ、俺が二回目にフェルマータと向き合ったとき。チルタに会って、父さんと母さんの死を聞いて、ラトメに戻ってきた時。フェルマータが浮かべた笑みを、どこかで見たことがある気がしたんだ。

あれは、マユキの笑顔と、被ったんだ。

「嘘」マユキが呟いた。「まさか」

「まさかって…僕の思い違いかな？もしかして、別に両親がいた？」それは違う。ラファは直感的にそう思った。マユキはレクセに来るまで旅暮らした。ユールと二人で旅をしていたと聞いた。親の話も聞いたことがない。

親がいらないなんて、この世界じゃそう珍しいことでもない。大して触れることではないし、それでいいとも思っていた。そもそもルイシルヴァじゃ、人への詮索はご法度だ。けれど。

マユキの親は、誰なんだ？

「だって…母さんは知らないけど、父さんは…私の父さんは、ラトメの指名手配犯だったもの」

声が震えていた。目尻に涙が浮いていた。

「ラトメでは有名な殺人鬼だもの！そんな、フェル様が、神の子が、私のおかあさんだなんて……！」

ありえない。消え入るようにマユキは言った。

殺人鬼の父親。本当にフェルマータが母ならば、マユキとユーラは、ラトメの最高指揮者と、人殺しの子供ということになってしまふ。マユキの言にも追及したいところがあるが、それでもラファは何も言えなかった。ただ絶句するだけだ。

チルタは案外真面目にマユキの言葉に耳を傾けていた。これまで現れたときには、精々ラファとトレイズのことくらいしか興味がないうだったのに、マユキのことをじっと見ているチルタはなんだかいつもの気味の悪さがなりを潜めていた。

「じゃあ、違うのかな。まあいいか。人の関係に口出ししてもしょうがないもんね。今はそんなことより」

そのわりたいたした感慨も抱かずに、チルタは右の手袋に手を掛けた。白い手袋の下から、真っ赤な右手が現れる。…赤。赤い印。

「運良く紅雨もないし、ここで敵戦力を削っておかなくちゃ。二人まとめて、」

右手を、こちらへ向けて。

「捕らえてやるよ」

重い。

ラファの背丈よりも大きな鉛のかたまりでも降ってきたかのようにだった。別に天変地異が起きたわけでも、何かが現れたわけでもない。それは身体を直接締め上げる、押しつぶされそうな衝撃。そう、どこからか現れた衝撃だ。身体を圧迫してくる苦しさ、息が詰まった。身体を折った。苦しい、苦しい、苦しい……！

「苦しいかい？」

チルタが歩み寄ってきた。

「苦しいだろうね。僕の力は、何もしなくても生き物を苦しめることができるんだから」

相手に苦痛を与えることが、第九の巫子の力なのさ。そう言っ
て、チルタは妙に歪んだ笑みを浮かべた。いつもの無邪気な笑顔じゃ
ない。もっと…もっと、世界を悟った、悲しげな表情だった。

「お前、は…レーチスを、尊敬してるんだろ…？」

「そうだよ」

「じゃ、……お前の目的……」世界征服”ってのは、予知夢の君や…
過去夢の、君をなくすこと、か？レーチスと同じで、世界で一番尊
いとかいう存在をなくして、そしてお前は、自分がその座に就く
ん
だろ？」

「……」

チルタが意外そうに目を丸くした。まさかそんなことを言われる
とは、とでも言いたげな顔だった。

胸を突く圧迫感が消える。チルタは、ふと微笑んだ。

「そうだよ。過去夢の君…きみが、僕の目的。君だって、人の過去
や未来が簡単に視えてしまうなんて、嫌だろう？…だから、僕は君
たちを、助けてあげるよ」

ラファはまっすぐにチルタを見上げた。チルタは変わらず、こち
らに向けて微笑んでいる。ラファはかみつくように言った。

「エルミリカ・ノルツセルは、お前の助けなんて望んでない！」

「！」

「ラファ…？」

「それに、俺も…お前の助けなんて、いらない！」

「……よく言ったよ」

小さな声。そして、直後、チルタからラファを守るように、両者

の間に一本の矢が突き刺さった。

「！」

「誰だ！」

それは少年だった。

くすんだ茶髪。右側につくられた三つ編み。ハニーブラウンの瞳。黒の神官服。彼は…

「レフィル？」

レフィルはわずかに笑んだ。かつてルシファで会ったときのように、泣き出してしまいそうな表情で。そして、やって来たのは彼一人ではなかった。

「ラファ様の言うとおり、予知夢の君はもとより、たかだか十七歳の子供などに助けられるほど落ちぶれてはいません」

「エルミ！」

銀髪の、少女。身に纏っているのは神護隊の衣装ではなく、ラファ達と同じような旅装束だった。

「お久しぶりです、ラファ様、マユキ様。もう大丈夫ですよ」

「エルミ、どうして邪魔をする！恩を忘れたのか！？」

「恩？…ああ、盲目を治してくれたことですか？あのくらい、自分でもどうにでもなったことです」

チルタが息を詰めた。エルミの目は、ひどく冷たくて。視線をチルタに向けたまま、ラファに手を差し出す。

「ラファ様、指輪を返していただけませんか？」

「…？あ、ああ…」

嵌めつぱなしの、エルミにもらった銀の指輪を返すと、彼女はそれを左手の中指にはめた。

「強すぎる魔力は、身体に負荷をかけてしまう。予知夢の君として

の魔力は、十歳の子供の肉体では支えきれないほど膨大でした。それを、チルタ。あなたは私の魔力をこの指輪に封じ込めることで鎮めた…けど、今はこんな封印に頼らずとも」

エルミはそして指輪にそつと口付けた。銀の輪から光がこぼれ、あふれ、竜のように伸びて、広がった。

「自らの手で操ってご覧に入れましょう」

「やりすぎるなよ」

「ご冗談を。ノルツセル一門のためならば、手加減はしません」

レフィルの言葉に軽い口調で返して、エルミは人差し指を立て、くると回した。絡みつくように光が巻きつく。エルミは唱えた。聞いたことのない言葉だった。

エゼルフ・ヒールズ・エウ・レベラフ
「彼の者に久遠の眠りを」

「…！？」

「馬鹿ツ、殺すつもり！？」

レフィルが呪文に慌てて怒鳴るが、もうそのときには、エルミは手にした指輪をチルタに向けた後だった。

ジニヒルス・セイビル
「万命の眠り！」

ドン！大きな音がするのが早いか、それともラファ達を砂煙が覆うのが早いか。ラファ達が恐る恐る目を開くと、しかしそこにはチルタの姿はなかった。

「逃げられましたね」

「まあ、君にあれだけ言われたら逃げたくもなるだろう…君たち、大丈夫か？」

「な…に、今の…」

マユキがショックを受けたように座り込んでいた。

「なんなの…人のこと散々引っ掻き回して、うやむやにして…！」

「マユキ…」

「せつかく…せつかくあの親から逃げられたと思ったのに…なんでこんなところで…こんな、こと…」

マユキの肩が震えていた。ラファは途方に暮れていた。こういうときなんと声をかければいいのだろうか。普段はにこにここと笑っているマユキの弱弱い姿を前に、ラファは悩んで、悩んで…

「ほら、マユキ」

軽く両腕を広げてやる。

「思う存分俺の胸で泣けよ」

マユキの泣き声が、大きく響いた。

「…で、どうしてレフィルとエルミはここに？」

「ついさっきレフィルがいきなり神護隊に來まして、”レーチスがレクセにいる！”とか叫ぶものですから付いてきたんですよ。レフィルは転移呪文が使えないから、まんまと移動手段として利用された感がありました」

「人聞きの悪いこと言わないでくれよ、エル。まあ、そうしたら入り口で君たちが戦ってるだろ？だから助太刀したってわけだよ」

「レーチス？」

目を真っ赤にしてマユキが首を傾げた。

「あれ…でも、レーチスさん、ファナティライストに行くって…ラファへの手紙に…」

一同がラファを見た。ラファは懷から手紙を出して、鬼氣迫る表情をしているレフィルに差し出した。

手紙を読んだレフィルは激怒した。

「あの野郎…！いつもいつもいつもいつも！何が”よろしく”だ！それに、エルミリカに会うつて…」

「どうやらすれ違ったようですな。この調子だと、今頃はファナテイライスト行きの船の中つてところですか」

「今度会ったら覚えてるよレーチスの奴…！」

いきり立つレフィルを無視して、エルミはラファ達に笑いかけた。
「災難でしたな。ラトメに帰りましょうか」

「エルミ…」

すると、マユキがエルミをまじまじと見つめていた。ラファもエルミを見た。神護隊の制服でないというのは新鮮だ。厚手の濃紺のマントの下に、蔓色のシャツ、下は白いロングスカートに編み上げブーツ。腰に長剣を一本吊っている。

こうして見ると、勿論「美」の文字が頭につくのは否めないが、それでもちゃんと少女に見えて…

そこまで考えて、気付いた。

「おんな…？」

マユキの声が、先ほどとは違う意味で震えていた。

「お、女…？ラトメで一番人気の美少年が、女の子…？」

「うん？」

エルミは首を傾げ、自分の旅装を見下ろして、合点がいったとばかりに頷いた。

「そつえば、マユキ様には言つてませんでしたっけ。ラファ様、教えてあげなかったんですな」

「言えるわけないだろ。ラトメにいた時は、毎日のようにエルミのこといかにも恋してますって態度で話してくるし」

「知ってたの！？ラファばかりずるい！」

むくれるマユキ。…この分なら、もう大丈夫だろう。——少なくとも、表面上は。

「詳しい話はラトメに戻ってからにしましょう。しばらくチルタは襲つてはこないでしょうけど。知りたいこともおありでしょう？そ

れに、レフィルのこともきちんと紹介したいですし。レフィルも、レーチスがここにいないのなら一緒にいても構いませんよね」

消沈したレフィルが頷くのを見て、エルミは転移の呪文を唱えはじめた。ラファは彼女の側に寄ると、エルミにしか聞こえない声で囁いた。

「エルミ…それとも、エルミリカ、かな」
エルミがこちらを向いた。その目は、決して虚ろなんかじゃなかった。

「ありがとな、ずっと側で見守ってくれたんだろ」
そう言って指輪を指したラファに、エルミリカ・ノルツセルはひどく優しく目を細めた。

真夜中のラトメディア。皆が寝静まった神護隊本部の執務室で、エルミが四人分のお茶を淹れてやってきた。

「どうぞ」

「あ、どうも」

レフィルとエルミは、ラファ達に向かい合うようにして椅子に腰を下ろしていた。お茶を一口飲んで、エルミは口を開いた。

「さて…何から話しましょうか」

「とりあえず僕の自己紹介からかな」
レフィルが微笑んだ。

「ラファとは一度、ルシファで会ったけど、僕はレフィル。レーチスとは…そうだね、兄弟のように育った仲だ。そして、世界創設者…その中で、幹部の一人だった」

「まさか！」

「だって、世界創設者の幹部は、赤い印を創って、消えちゃったんじゃない」

「僕はちよつと例外だね」

レフィルは肩をすくめた。

「見ての通り、今もまだ健在さ。ずっとラトメにいたんだ。フェルのヤツは隠していたのか。まあ、あいつのやりそうなことだ。フェルは僕が嫌いだからね。彼女の恋人と仲良くしてたら妬まれちゃったのさ」

「彼女ほど性格の悪い女はそうそういませんよ。」私”だって、彼女と比べればまだ温和な方でしょう」

「さあ、どうだろう」

困った奴だとばかりにため息をついたレフィル。エルミは肩をすくめた。

「じゃあ、何か聞きたいことはありますか、ラファ様？レーチスに言われてしまった以上、”私”には、あなたに真実をお教えしなければなりません」

「ラファでいいよ、今のあなたは”エルミ”じゃないだろ？」

「そうですね、では、ラファと呼ばせていただきますしょう」

「……ゼルシャで、夜…俺が会ったのは、あんだだったんだな」

マユキが目を丸くしてエルミを見た。エルミは微笑んだ。

「私だと言えば私だし、そうでないと言えばそうではありません。

あれはちよつと特殊なものでして…まあ、そんな話はどうでもいいでしょう。あなたの行動は指輪を通して私に視えていましたよ」

「黒い本の詩の一節が分かったのも、」

「それも、この指輪の影響でしょう。ラファ、けれど、そんなことよりも、聞きたいことがあるんでしょう？」

ラファはうつむいた。だが、迷っていたのは一瞬で、すぐに顔を上げて問うた。

「なんであந்தが生きてるんだ？エルミリカ・ノルツセル」

今度こそ、マユキが息を呑んだ。エルミリカはラファから視線を外し、マユキを見た。そして笑った。エルミよりも深い深い、全てを悟るような表情で。有無を言わせぬ口調で、言った。

「エルディ君には、内緒ですよ？」

「エルミが…赤の巫子の、考案者……？」

「ええ、私の名前はエルミリカ・ノルツセル。かつてロゼリー帝国の女王だった、そして黒い本を書いた、…赤の巫子を考案した、世界一の罪人です」

エルミリカは自嘲的に口端を上げた。

「なんで、あந்தが生きてるのに…こうして赤の巫子が存在してる

んだ？レーチスと、ミフィリ…だっけ？二人は、エルミリカを生き返らせるために、巫子になろうとしたんだろ？それとも、レーチスがあんたを生き返らせたのか？」

「予知夢の君」は、未来を変えられる」

神妙な口調でゆつくりと、エルミは言った。

「私」は未来を捻じ曲げたんです。自分が殺されることを”視て”いて、納得していたはずなのに…崖から突き落とされたとき、私は”死にたくない”と思ってしまったんです。まだ、死にたくない、死ねない理由があるって」

エルミリカは窓の外を見た。黒く塗りつぶされた夜闇が広がっていた。

「気が付いたら、この時代にいました」

「この時代って…時代を飛び越えたってことか！？」

「ええ。これもまた、予知夢の君の力なのでしょね。今から六年ほど前の話です。しかも体は十歳くらいの頃まで縮んでいるし…孤児集落で倒れていたところを、エルディ君に拾われました。私を本当の妹のように育ててくれた。どこの誰かも分からない私を。ただ、自分と似ているというだけで」

感謝してもしきれない、自慢の兄ですね。そういつて、エルミリカはしばし目を伏せた。

「ラトメに、エルディ君を追って神護隊に入ったとき。ラファにはお話ししましたね、二、三年前ですか、レーチスと再会しました。そこで彼に、ノルツセル家の末路、赤の巫子が存在していること、そして、過去夢の君…ラファ、あなたのことを聞きました」

「俺の…？」

「ええ、あなたが次の過去夢の君だから、銀時計を渡して、助けてやってくれと。だから、私は…自分の魔力を溜め込んだこの指輪を通して、あなたの力を制御していたんです。とはいえ、完璧ではありませんでしたから、時々過去を見てしまうこともあったでしょう

が……」

エルミリカはラファの手を取って、銀時計の文字盤を上向きにした。針は今、壊れかけた時計のように、右へ左へ、ぶれている。

「あれ？」

マユキが一緒になって覗き込んで声を上げた。

「それ、レクセにいたときは反時計回りだったよね？」

ラファも頷いた。

最初は止まったまま。次は反対周りに、ぐるぐる回転していて、それからだんだんと、時を刻む速さが遅くなっていった。

「普通の時計としての役割を果たせるようになるまで」と、レーチスは言っていた。ということは、いずれはこの針も時計回りになるのだろう。

先ほど手紙を読んだレフィルは、文字盤を覗き込んで言った。

「ラファの力が安定してきたのかもね」

「じゃあ、もう過去夢もあんまり視ないで済むのか？」

「レーチスの手紙が正しければ、だけど」

ラファはレフィルから視線を外して、もう一度時計を見た。そういえば。

「レクセで巫子狩りにこの時計を見せたとき、何が起こったんだらう……」

「……随分と攻撃的なことをやりましたね」

エルミリカが頬を引きつらせた。レフィルが、「レーチスの入れ知恵だろ、あいつが穏便な手を取るわけないよ」と返した。

「どう……？」

「つまりですね、その時計を通して魔力を放つと、光が出てきたでしょう？あの光を食らうと、その人の一番見たくない記憶を鮮明に

映し出すんですよ。巫子狩りだって人間ですからね、非道な任務を与えられ、手を汚している分、恐ろしい記憶だって多いでしょう。…チルタに見せておけばよかったですね、再起不能でこれ以上邪魔されずに済んだかも」

「エル…君も大概えげつないよね」

レフィルが顔をしかめた。ラファは、胸の奥がちくりと痛むのを感じた。

「俺…すごくむごいこと、やっちゃったのかな」

誰にだって見たくない記憶はある。勿論、ラファにだって。それを無理矢理掘り起こされるなんて、考えただけでもおぞましい。

すると、エルミリカが首を横に振った。

「私は、それでも戦乱の世に生まれてきましたから、あまり優しいことはいえませんが…戦いにおいて、敵に情けをかけることほど、あとで痛い目を見るものです。向こうだって命を懸けている。それを生ぬるい優しさなどで否定するのは愚かなことです」

「そうかな」

「そう思わなくては、勝てなどしませんよ」

エルミリカはゆったりと微笑んだ。ほの暗い笑みだ。…彼女の故郷、ロゼリー帝国は既に滅亡している。彼女は自身の経験を持って、それを実感したというのか。ラファは黙りこくった。

「もう夜も遅い」

西に傾く月を眺めてレフィルは言った。

「寝た方がいいよ。僕もレーチスを探しに行かなくちゃ」

「レフィルは、どうしてレーチスを追ってるんだ？」

執務室の扉に手をかけたまま、レフィルは振り向いた。笑んで言う。「ただ、ふらふらその辺をほっつき歩いてる馬鹿レーチスを一発ぶ

ん殴りに行くだけさ。人間長生きすると、人を一発殴るだけでも労力を惜しまなくなってきたね。こっちから出向かないと気がすまないのさ」

ひらひらと手を振って執務室を出て行くレフィル。その背はラファよりも一回り小さいのに、とても重く、強く見えた。あれが年の功というものか。直接言うとかクリと嫌味を言われそうなので、ラファは口には出さなかった。

エルミリカも立ち上がったて茶器を片付けながら言った。

「部屋に案内しましょう。トレイズさん達が来るまで、ゆっくりお休みください」

「トレイズ達は無事なの？……ですか？」
マユキが慌てて敬語に直した。

そういえば、彼女は自分達よりずっと年上のはずだし、何より今あるこの世界を、そして現代の平和を作り上げた創設者の一人なのだ。本来ラファ達が気軽に話していい相手ではない。

しかし、エルミリカはゆるゆると首を横に振った。

「敬語でなくとも構いませんよ。今の私は王家の一員でもないし、世間的には死者となっているのですから」

立ち上がるエルミリカ。

「部屋は以前と同じところをお使いください。案内します」

エルミリカはラファ達の数歩先を歩き、ふと思い出したように振り返って、にっこりと笑った。…そして”エルミ”は気を取り直したように、数段声を低くして、言う。

「トレイズさんですか？多分今頃はのんびり寝ているんじゃないですか？」

a c t ・ 3 4 世界創設戦争（後書き）

今度アテナの舞台裏のお話を番外かどこかで載せようかと思うのですが、そのときに誤解のないようにひとつだけ。

この小説、登場人物が平気な顔して嘘をつくという小説にあるまじき構造をあえてやってるので、後で「違うじゃん!」という苦情は受け付けませんのでご了承ください。ちなみに本編読んでる限りでは全く明かされない「嘘」です。

ラゼはとても機嫌が良かった。

入学してきた時期が重なったからだろうか、ラゼはルナと寮のルームメイトになった。ゼルシャにはエルフしかいなかったし、一緒に旅をしていたマユキには嫌われていたから、同世代の、しかも人間の女友達というのは初めてだった。

ルナはとても頭が良かった。博識なのに、その知識を決してひけらかしたりしない。しかも努力家で、優しくて、かっこよくて。時折見せる笑顔が可愛くて。その美しい姿も、きりりと澄んだ雰囲気も、それらの魅入る要素に何一つ頓着していない彼女の気取らない態度も。まるで女の子の理想像だ。

ルナと仲良く手を繋いで（ルナは苦笑していたが、纏わり付くラゼに悪い顔はしていなかった、と思う）教室の扉を開くと、ギルビスとロビが額をつき合わせてなにやら席で話し込んでいた。彼らも、特にギルビスのほうがロビを毛嫌いしていたというのに、いつの間にかこんなに仲が良くなったのだから。疑問に思いつつも朗らかに挨拶したラゼと、隣に立つルナと、そして最後に二人の繋がれた手を見て、二人はちらと目を見合わせた。

「やあ、ラゼ、ルナ。仲良くなったんだ」

「ええ」

「うん！」

「……へえ」

ギルビスはよかったね、と言って微笑んだが、ロビは口をつぐんだままルナの顔を凝視していた。首を傾げるルナ。

「…なにか？」

「ああ、いや。なんでもないよ。綺麗な黒髪だと思ってね、珍しい色だし」

「これ？」

ルナは、ポニーテールにした黒髪をひと房取った。少し恥ずかしそうな笑みがとても可愛らしい。はにかんで言う。

「お母さん譲りなの。私の自慢の髪よ」

「…そう」

「いいなあ、ルナ。お手入れも何もしてないんでしょう？それなのにこんなにサラサラで、羨ましい」

「あら、ラゼの金髪も、私、素敵だと思う」

ラゼは途端、頬を染めてうつむいた。嬉しさを顔に湛えたままギルビスたちと別れて自分の席に向かっていくラゼは、ルナの腕をくいくい引つ張って隣の席にいざなっていた。

その様子を見て、ギルビスはロビに低く問うた。

「…どう見る？」

「いろんな意味で危ないかもね。ラゼも、あのルナって子も」

「あの様子じゃ、”付き合うな”とも言えないだろうし…」

困ったな、ばやくギルビスに、しかしロビは肩をすくめた。

「ラゼだって馬鹿じゃないでしょ？ゼルシャに閉じ込められてたにしても、さ。自分でなんとかするって」

「ロビ、君、その無関心、治したら？」

「残念、生まれつきさ」

「嘘つけ」

軽く言い合う。ロビはにつこりと笑った。

すると、教室の扉を勢いよく開けて、トレイズが戻ってきた。
「やあ、トレイズ。首尾はどうだい？」

「朗報だ」

ギルビスの、ロビとは逆隣に座って、トレイズは身を乗り出した。周囲に視線を飛ばしてから、声をひそめて言う。

「あいつら、ラファとマユキな、昨日の真夜中に脱出したらしい」

「随分早いな」

「あの二人にそんなに器用な真似ができるとは思わなかったね」

「二人とも、仮にも巫子だってことだ、ロビ。ユールの話だと、もうラトメにいるらしいから…国境を越えて転移を使っただろうな」

「なかなかやるじゃない、あの二人！」

ロビはからからと笑った。

「まあ、過去夢の君と次期”神の子”なんだ、このくらい余裕でしょ」

「まあね、過去夢の君と…え？」

「はあ？」

ギルビスとトレイズは一拍遅れて顔を上げた。訝しげにロビを見る。「ちよつと待って、次期”神の子”って？」

「過去夢の君はラファだから、え、嘘だろ、マユキのことってんのかよ」

「違っのかい？」

「違っものにも、マユキから親の話なんて聞いたことないし、第一そんな人間がレクセで学生なんてやってるわけないだろ」

「でも、あの子フェルマータにそっくりだよ。あのいけ好かない女がにこにこ笑ってるのかと思っただけで最初は鳥肌が立つくらい。トレイズ、気づいてなかったの？」

「そりゃあ、髪の色は似てるけど…でもなあ」

「僕は、君達がインテレディアに来る前の話は知らないけど。でも、だとしたら大変かもね。ラファの…ノルツセル一族と、ラトメの一族って、確かものすごく仲が悪かったはずだし。マユキがラトメー門の人間だったら、ラファと友達だなんて、親類が絶対に許さないだろ」

「ロゼリーは千年前に滅んでるんだし、もうそこまでうるさくは…
第一、確証がないだろ？マユキが…まさか」
「どうだかね」

ギルビス、トレイズ、ロビは男三人で黙りこくった。教室の奥から、ラゼの楽しい笑い声が聞こえた。

やがて、トレイズがため息をついた。

「フェル様に聞くことが増えたな」

「ユールにも聞いてみようか。あいつなら知ってそうだし」

「機会があつたらね」

とりあえず、誰ともなく口にして、最後にロビが締めくくった。

「さっさと僕らも脱出しなきゃ」

「えっ？あの二人、もうラトメにいるの？」

事情を説明すると、ラゼが素っ頓狂な声を上げるものだから、トレイズは慌ててその口をふさいだ。ラゼは一瞬だけ注目を集めた周囲を見て、くぐもった声で「ごめん」と謝った。

「よかったね。じゃあ、この調子で私達も…」

「この調子で、いけばいいんだけどね」

「……どういうこと？」

ロビが嘆くような仕草を大仰にして言うので、ラゼは首をかしげ、隣のギルビスを見た。彼は何も言わず、しかし窓の外を顎でしゃくった。

屋根の上。よく見るとぽつぽつと浮かぶ、黒い影。ラゼは息を呑んだ。

「巫子狩り…」

「幻術使って姿を消す手法もありだけどね。ああして姿をさらして

おけば、こっちは警戒してなかなか動けない。つまりは僕らがこの学園にいることはばれている。向こうも必死なんだよ」

「二人も、しかもチルタが一番欲しがってる、過去夢の君を取り逃したんだ。残りの四人だけは捕まえないと……ってな」

「なめられたもんだよねえ」

にこにこ悠長に笑うロビ。膝には黒い本が開いて置いてある。どうやらこの話し合いの最中にも読書に勤しむようだ。

「この僕がいるということを忘れてるのかなあ彼ら？」

「自信、あるんだね」

「そりゃあもう。巫子狩りごとき格下に負けるほど落ちぶれちゃいないさ。仮にも僕、王子様だよ？そこの奴らと比べれば、ファナティライストのやり方をよく知ってるってわけ」

「ばたん、黒い本を閉じて顔を上げ、トレイズを見上げた。

「さて、いつ行動しようか？」

「そうだな、ラファ達は深夜零時に出て行ったって話だから、その時間帯は警戒が厳しいだろうし、朝夕は大通りに人が多いから巻き込むかもしれない。……だから、授業中だな」

「今日、もう出ちゃうの？」

少し寂しそうにラゼが言う。トレイズたちは気まずげに顔を見合わせた。彼女の境遇はギルビスとトレイズがその目で見た。地下牢に閉じ込められていた彼女の初めての友人と、たった一日で引き離すのは、どれだけ甘いと言われようと、さすがに良心が痛むのだ。トレイズはやがて、あいまいな笑みを浮かべてラゼに言った。

「……準備も心構えも必要だろうし、明日にするか」

「そうだね。今日一杯は体を休めることに集中しよう」

「僕も構わないよ」

三人の優しい言葉に、ラゼは花開くような笑みを浮かべた。

「46の円占い」。それが、ユールの最も得意とする占術である。

占いというのは、彼にとっては遊びや迷信ではない。れっきとした魔術のひとつなのだ。神経を研ぎ澄まし、ぴんと緊張の糸を張り巡らして、魔力の流れを手繰り寄せ、求めるものを引き出す…神秘的な、芸術の一種。

小さな円状のボードを宙に弾く。それは眩い光を放って、机上を青く照らした。広がるばかりのライトはしばらくして収束し、いくつもの円を線で繋いだような、不可思議な図形を描き出す。

ぴたり。回転していたボードは、図形が完成すると宙に浮いたまままで静止した。

ユールはすると数十枚の円いカードを取り出した。表面は、皆同じ幾何学模様。そして裏面には、それぞれが違った、細かな絵柄が入っている。ざらざらと表にしてカードをかき混ぜて、カードをひとまとめに重ねる。彼の動作は洗練されていて、まるである種の舞踏でも見ているかのようなだった。それだけ、彼の一挙一動が彼の意図を持って動いているのだ。

「それにしても、占いなんて初めて見たよ」

ロビが興味深げに声を上げた。ユールは手早く、机に描かれた図形の、空いた円の中に次々とカードを並べていた。

「そうか、北方じゃ珍しいよな。ラトメだと、割と一般的にみんなやるんだ。特に神官とか貴族は占いに頼るな」

「そういえば、ユールってラトメの出身なんだよね」

トレイズの言葉を受けて、ピルはユールを見た。カードを並べる手

を休めて、ユールは顔を上げた。…皮肉っぽく、笑った。

「そうですよ。…小さい頃、父がやっていたのを思い出して。僕の両親、ラトメの神官だから。…いや、父親はもう辞めちゃったんですけどね」

「それで、その母親っていうのは、今の”神の子”なわけだね」

さらりとロビが言うので、一瞬の間が空いた。まさかいきなり彼が核心を突くとは思っておらず、ギルビスとトレイズはひやりとした。一同が、ゆっくりとユールを見る。ユールは、相変わらずの眠たげな瞳にかすかな光をたたえたまま、小さく首をかしげた。

「どうして、そう思うんですか？」

「だって、マユキはフェルマータに生き写しだしさ。それにその占い方法…えーと、”46の円占い”、だっけ？ラトメの上流階級に伝わるものだって聞いたことあるよ。…最後は君の雰囲気、かな。」

どんなに隠そうとしても、ちょっとした仕草や態度はなかなか変えられないからね。君達の動きはちよつと優雅すぎるのさ」

「…そ、そうなの？ユール？」

どうやら初耳だったらしい、ピルの問い。ユールはしばし目を伏せた。フェルマータと同じ小麦色の髪が、さらりと耳からこぼれた。…母には、会った記憶がありません」

ぽつり、つぶやく。一同は静かに彼の涼やかな言葉に聞き入った。「でも、父のことはよく覚えています。姉さんは、父さんのことを嫌っていたけど、彼はとても優しい人だった。…とても、偉い人でした。ギルビスさん、あなたの髪よりも少し色素は薄いけど、彼も青い髪と瞳をしていました。僕と姉さんは、物心ついた頃からずっと、父と共に逃亡生活を送っていました。…僕らの父は、ラトメではそれなりに有名な殺人鬼なんですよ」

殺人鬼。殺人鬼の子供。

もし、それが真実で、また、ロビの言った仮定も本当だとしたら、マユキとユールは、神の子と殺人鬼の間に生まれた子供と言うことで…？

いや、まさか。そんなことがあっていいはずがない。あるうことか、ラトメの最高指揮者の夫が、殺人鬼であるだなんて。

「とはいえ、僕は父本人からそう聞いたわけじゃありません。…父は、”神の子”を殺そうとし、失敗して、ラトメから逃亡するときに多くの神官を殺そうとして、拳句”神の子”を切りつけたと」

「それ、聞いたことあるな。神護隊が出来たのも、二度とこんなことが怒らないように、っていう一種の対策だったらしい。…マユキと、ユールの親父さんが？」

「少なくとも、周囲と、マユキ姉さんはそう思ってます」

「含みのある言い方だね」

ユールは目を細めた。窓の外を見る。夕暮れのやわらかい光が、彼の横顔を照らしていた。

「ある時…まだ父と一緒に旅をしていた頃、僕が怖い夢を見て、そのあとなかなか寝付けなかったことがあるんです。そのとき、父が話してくれました。僕らの、母さんのこと」

ユールの父は穏やかに言った。

「君のお母さんはね、ユール。鳥みたいな人だったよ。楽しそうに飛び回って、気ままで、怒ったかと思えば優しくなつて…くるくる表情が変わって、本当に見ていて飽きない人だった。

でも、でもね。あの人は、今暗いところに閉じ込められて、身動きが取れないんだ。あんなに毎日が楽しそうだったのに、いつの間

にか彼女が浮かべるのは、悲しそうな笑顔だけになっていったんだ」
幼いユールは、まんまるに目を見開いて、無邪気に問うた。

「それって、おとうさんみたいに？」

切なそうに笑っていた男は、しばし目を瞬いて、それからふと、
またいつもの、悲しげな笑みに戻して言った。

「……私なんかよりも、もっとずっと綺麗だ、フェルの笑顔は」

「フェル」

トレイズが呆然と繰り返した。「まじかよ」

「さあ、たまたま同じ名前だったのかもしれない。そのあとすぐ、
マユキ姉さんが父さんの指名手配書を持ってきて、僕を連れて、『
あんな人が父親だなんて認めない』って、レクセに逃げてしまった
から。…父さんとは、それから会っていないんです。今はどうして
いるのかも、何も、僕は知らない」

ユールは再びカードを並べる作業に戻った。最後の一枚を中央の円
の中に置いて、顔を上げて、彼は微笑んだ。

ロビはユールのはかない笑みがどうにも釈然としないとはかりに、
机に頬杖をついて首をかしげた。彼にデリカシーというものはない
らしい。彼ははずけずけと尋ねた。

「得意な占いで、父の居場所を探そうとは思わないのかい？レクセ
に來たとき、僕らの位置を見つけたみたい」

「おそらくできるでしょうけど…会いに行くことはできないから。

それは、マユキ姉さんへの裏切りになるから」

並べたカードの上に手をかざす。真っ白な、やわらかいカードを
照らし出す。

「会えないのなら、見つけても意味がないんですよ。所詮占いなん

て、一時の気休めに過ぎないんだから」

「ユール、」

では、はじめましょうか。何事かを不安げな瞳で言おうとしたピルを一切見ることなく、一連の会話などなかったかのように、ユールは最初のカードをめくった。

「占いはあくまで仮定です。完全な予知にはならない。本当の予知は占いとは別領域。それを忘れないでください」

最初のカードでは、美しい少女が腕一杯の花束を抱えていた。詠い上げるようにユールが言う。

「一枚目のカードは運氣をあらわす。『花嫁』は未来の不確かと今の幸せを。気を抜けばすぐに安心は崩れるから気をつけて」

花嫁のカードの三つ隣にあるカードを四方ともめくった。右側は檻。左側は天使。上側は死神。下側は天使。

「四方にひそむもの。西側に吉があるみたいです。南からなにか助けがくるらしい。北と東にはあまりいいことはないようだ」

「西？というと、インテレディアか？」

「延長戦上にファナティライストとクライディアがあるけど」

トレイズとギルビスがそれぞれ言った。ラゼが眉を寄せる。

「まさか。ファナティライストって、敵じゃない」

「僕らが相手にしているのは国じゃない。たった一人の人間だよ。神都に味方がいたっておかしくはない」

「もしかして巫子か？あとは十番目と六番目：十番じゃないか？ロビの親父さんだろ」

「ああ、第十の巫子って”世界王”が代々引き継ぐんだっけ」
「まあね」

珍しく渋い表情でロビは返した。ピルがすつとんきょうな声を上げる。それまで彼女は氣遣わしげにユールの様子を伺っていたのだが、ロビの招待はその心配も吹き飛ばしたようだ。

「せつ…世界王が、お父さんって…まさか、世界王子様!？」

「あんまり言いふらさないでよ。そう知られたくないことなんだ」

「あ、ごめんなさい…」

素っ気なくロビは鼻を鳴らして、話を戻した。

「まあいいことに関してはどうでもいいよ。北と東があまりよくないっていうのは」

「北はシェイルディア？でも東はただの無国籍地帯で人は住んでないはずだけど」

「そこまで広い範囲とは限りませんよ。ものによっては、それこそ隣の家だとか…あるいは隣の部屋だとか。そういうこともあるんです。あくまで指しているのは方角。距離までは細かく割り出せませんです」

ユールの指摘に、一同は顔を見合わせた。

「お前達の隣部屋は？」

「わかんない、あいさつしてない」

「でも確か今まで話したこともない奴だよ」

「私はエピナの隣よ」

「うーん…短期間しか滞在しないつもりだったから、人付き合いなんて大して必要ないと思ってたし。もっと情報収集すべきだったか」
トレイズが唸った。

「まあ、それは後回しだ。とにかく占いを続けてくれ」

それから順に四十数枚のカードをめくっていったが、特に重要な事項はなかった。

「これで最後の一枚です」

最後にユールは、ひとつ残ったカードを裏返しにした。

それは、暗闇から伸びた片手の絵。見ただけでもまがましい絵だ。

「詐欺師のカード」

ユールの顔から、もともと薄かった表情が消えた。言われずとも、よくないカードであることがわかる。

「気をつけて、信じている人ほど、敵になって困るやつはいない」

ユールは、トレイズに「詐欺師のカード」を差し出した。彼は神妙な表情で受け取る。周囲で一同が不安げにトレイズを見ている。ピルなどは青ざめて震える始末だ。

闇から伸びた手は青白く、トレイズはその手に心臓をわしづかみにされるような底知れぬ重みを感じた。

ある暗い室内での話だ。

「…へえ。じゃあ、紅雨たちがここを出るのも、そう遠い話じゃないさそうだね」

「はい。明日にでも事を起こすことになると思われます」

「それは確かな情報かい？」

「そう簡単に私の暗示が破られるとでも？あなた様は私を信じてくださると思ったのは間違いでしょうか」

「ふふっ、そうだね。君のこと、疑うわけがないだろう？…じゃあ、これからも監視を頼むよ」

「はい。失礼します」

「……ねえ」

部屋を出ようとしたひとつの影に、もうひとつの見送る影が声をかけた。きしり、廃墟の床が軋む音が大きく響く。足を止めた影に向かつて、もう一人は言った。

「…過去夢の君をなくすために、第九の巫子をやっているんだろうと、言われたよ」

「彼から、ですか？」

「そう。まったく笑っちゃうよね。僕がやろうとしているのは、そんな大それたことじゃないのに」

「……それは、」

きい、古い扉が開く音とともに、影はそっと、優しく、切なげに、きめられた歌詞を歌い上げるように、言った。

「あのラファ・ノルツセルが、底なしの大ばか者だということです」

a c t ・ 3 6 占術師のジレンマ（後書き）

ややこしいので円占いの結果まとめ。一応本編では触れていない細かい意味も足しています。

- ・今は幸福だが、気を抜けばその幸福はすぐに崩れてしまう
- ・西側から吉報が届く
- ・南側から助けがやってくる
- ・北側から命の危険が招かれる
- ・東側から困難がやってくる
- ・信じる者に騙されることになる

act・37 “女の子からの呼び出し

エルミは形のいい眉をひそめた。手には一通の白い便箋。丁寧な文字で、「太陽が一番高い頃に貴宿塔の裏で」とある。差出人の名前はどこにもない。けれど、剥がした封筒の蠟は紅色で、ラトメ神宿塔からの押印である2本の杖の交差した形が描かれていた。

わざわざこんな大仰な便箋を毎回送られずとも、この文字だけですでに差出人が分かってしまうほど馴染んだ相手からの手紙だった。

何事か考えるようにロッカー前に立ち尽くすエルミの背後から、レインがひよっこり顔を出した。彼女の手の中にある手紙を見ると、彼はすぐに心得たとばかりに言った。

「また”女の子”からの呼び出し？ 大変だねえエルミは」
「レイン」

金髪の少年は、みかん色の瞳を細めて笑った。にっこりと。

「マユキ様」

いつもの通りにこりと笑顔を浮かべた、神護隊一番人気の「少年」に声をかけられたマユキは肩を揺らした。頬を僅かに染めて振り返る。隣にいたラファが声をあげた。

「エルミ？」

「ラファ様も。お休みのところ申し訳ないのですが、ちょっと付き合ってくださいませんか？」

「えーと…付き合うつて、どこに…です、か？」

ぎこちなくマユキが問うた。それもそのはず。目の前にいた、恋とまでは行かずとも好意を寄せていた相手が実は女性で、しかも過去に赤の巫子を考案した天才でもあり、更に言えば今あるこの世界

の基盤を作り上げた、世界創設者の一人なのだ。
喜ぶべきか嘆くべきか、マユキは複雑そうな表情だった。

だが当のエルミは、昨夜のことなど全く覚えていない、とでも言いたげに、マユキの動揺をからからと笑い飛ばした。

「どうなされたのですか、マユキ様？『僕』に敬語を使われるなんて。以前どおりで構わないですよ」

「あ……うん、そ、そうだね、エルミ……」
気まずそうに頷いたマユキに、エルミは続けた。

「それで、マユキ様。あと……できれば、ラファ様も。よろしければご一緒願えませんか？」

「どこに？」

エルミは、笑みを深めた。……どこか不穏な香りを、内に潜めて。

「女の子」からの呼び出しに「

「あーあ、エルミがいないと暇だなあ」

書類を投げ出して、レインはひとつ伸びをした。真向かいの机に座るエルデイがちらとレインを横目で見やった。

「エルミはどこに行っただよ」

「どうせまた呼び出しだろう。まったく……あいつがいないと仕事が進まない」

「エルミは神護隊のアイドルだからねえ」

「気色悪いことを言うな」

仕事の手を休めないままに、クルドが青ざめた。レインは羽ペンをインクに浸しながら、窓の外を見上げた。

薄く雲がかかった、白っぽい空。時折、甲高い鳥の鳴き声が聴こえてくる。

エルディとクルドが口々に愚痴をこぼしていた。

「まったく…トレイズさんがいないだけでも仕事の進みが遅くなるというのに…」

「せっかくだから、ラファ様とマユキ様にも手伝わせればいいんじゃない？学生なんだからこのくらいの書類片付ける頭はあるだろ」

「まさか、巫子様のお手を煩わせる訳には行くまい。第一あの方々も今は外出中だ」

「トレイズさんはこき使ってくせに…」

レインはほんのちよつと口端を上げて、もう一度言った。

「…あーあ、エルミがいないと暇だなあ」

貴宿塔の裏。細い小道の行き止まり。呼び出した「女の子」は、エルミたちの足音に気づいてゆっくりと振り返った。

「…お待ちしておりました、お三方」

「フェツ」

「フェルマータ…!？」

そこにいたのは、地味なマントのフードを目深に被った、フェルマータ・M・ラトメ、人呼んで、「神の子」だった。供を一人もつけずに、ラトメディアの最高指導者がこんなところにいるもいいのだろうか。

「ふふ、私だって外にくらい出るんですよ」

ラファの考えを読んだかのように、フェルマータは血色の瞳を細めた。彼女はエルミに…否、不機嫌な表情でフェルマータを睨みつけるエルミリカ・ノルツセルに向き直って一礼した。

「お呼び立てして申し訳ありません、エルミリカ様。ラファ様とマ

ユキ様が戻られたと伺ったので」

「ならば直接”神宿塔”に呼び出せばよかったでしょう。もしくは供の一人…サザメをつけるなりなさって下さい。その辺で野たれ死なれたら困ります」

「サザメは今別件で出ております。今回は、少し個人的な用でお呼びしたかったので」

そしてフェルマータは、マユキを見た。マユキはびくりと警戒したように一歩後ずさる。フェルマータと同じ、小麦色の髪が、ふわりと風に舞った。

「お知りになったのですよね。私の”眼”が教えてくれました」

「え？」

「マユキ様……いえ、『マユキ』と呼ぶべきでしょうか」

「……！」

「元気でしたか？などと言う資格は、ないでしょうね」

マユキの目が、大きく見開かれた。呆然とつぶやく。「なんで」

フェルマータは自嘲的に視線を落とした。

「あの人と、どこかへ逃げて、どこか…ラトメではないどこかで、幸せに生きるようにと仕組んだことを、今は後悔しています」

「嘘」

「ラトメディアという、貴族と神官と舞い手に圧迫された鳥かこの中に、あなたや、あの人や、ユールも、閉じ込めてしまうことは私にはできないのです。ならば私は恨まれてもいい、貴方達の居場所を、このラトメから失くしてしまえば、ここにいないのではないのだから」

「やめて」

「けれど、あなたは戻ってきてしまった。”第五の巫子”。幸せそうな顔をして、あなたは自分から、そうと知らずに…鳥かごに入り込んでしまった」

「やめて!!」

マユキが怯えた表情で叫んだ。耳を塞いで、うずくまって。その上にやさしく被さるように抱きしめて、フェルマータは、穏やかに……しかしどこかに悲哀を込めて、ゆつくりとマユキの心に染みこむように、言った。まるで麻薬のようだと言った。

「私はあなたの母です」

きゅん、静かに、ラファの腕時計の針が回った。立ち尽くして眺めていた、うずくまるマユキと、それを抱きしめるフェルマータの姿が、一瞬ふれたかと思うと、その直後、二人の姿が、変化した。

しゃがみこんでうつむく女性は、現在と寸分たりとも変わらない神官服に身を包んだフェルマータその人だった。抱きしめているのは、ギルビスより僅かに薄い青色の髪と瞳を持つ男だった。二人とも苦渋に満ちた表情をしている。……特に、フェルマータは、今では想像もつかないことに、その赤い瞳からぼろぼろと涙をこぼして、抱えた、眠る二人の幼子を見下ろしていた。

「フェル」

男が、フェルマータを呼んだ。フェルマータは、すぐるように彼を見上げ、懇願した。

「お願い、お願いだから。この子達を連れて、あなたは逃げて。腐ったラトメのしがらみから、この子達を護らなきゃ。あなたが護つて。私じゃ、……私じゃ出来ないの」

「君を置いて、逃げるなんてできない」

「馬鹿言わないで!!」

フェルマータは、子供達を男に押し付けた。立ち上がり、彼から距離をとって、断固とした視線で男を見た。

「私は、”神の子”になんてなりたくなかった！けど、運命に抗う

ことはできなかった！…失敗した奴に同情することなんかない。この子達には、まだ可能性があるのよ！」

男は途方に暮れた様子で、穏やかな寝息を立てる子供達を見下ろした。片方は女の子。もう片方は男の子。まだ、ほんの赤ん坊。男は、悲しげに、しかし愛おしげにフェルマータを見た。

「君は、いつも独りで決めてしまうんだね。自分ひとりで決めて、そして、自分ひとりで傷ついてしまう」

「傷ついてないわ。あなたたちが幸せでいてくれれば、傷つくことなんてなにもないの」

フェルマータの姿は決然としていた。一步男へ近づき、女の子と男の子の頬に、片手ずつで触れた。

「マユキ、ユール。あなたたちは、どうか私のようにならないで。ラトメに、囚われないで。…私の、愛しい子」

そして男を見て、囁くように言った。

「行って」

「フェル…」

「行って、じきに追っ手が来るわ」

「……」

男は、掠めるようにフェルマータと唇を合わせた。顔を近づけたままで、早口に言った。

「愛してる」

「私もよ」

そして身を翻して走り去っていく男の背を涙をこらえて見送って、それからフェルマータは、袖裏から一本の小さなナイフを取り出した。一瞬迷って、そして、

自身のわき腹を、刺した。

「あああああああああああつ!!!!!!!!!!」

「ラファ」

エルミリカに声をかけられて、ラファは我に返った。また過去の残像を視ていたらしい。マユキはもううずくまっていなかった。フェルマータの腕を払いのけて、距離をとって、ぎらぎらとフェルマータを睨めつけていた。

「信じられない!!」

マユキは甲高い声で叫んだ。フェルマータは、薄い笑みを貼り付けたままで、寂しそうにマユキを見つめていた。

「嘘よ、嘘!! 私、信じない。あのひと、あなたが…夫婦だなんて、そんなの……っ!!」

マユキは口元を押さえて、きびすを返してもと来た道を走り去っていった。その背が一瞬、あの男とぶれた。マユキとユールを抱えて逃げた、がむしゃらな背中と。

「フェルマータ」

マユキを追うために、一步前へ出た。ラファはもう全てを悟っていた。目の前のこの女性の目論見もすべて見当がついていて、それなりに同情もしたが、それでも自分はマユキの友人だから、彼女を追わなければならない。フェルマータは、ナイフの代わりに、拳を握り締めていた。

「本当は、マユキの父さんは、殺人鬼なんかじゃないんだろ」

「…視たのですね、過去夢の君」

フェルマータは微笑んだ。あの男が、フェルマータを見た視線と同じ色をしていた。

「私は、彼がこの場所から離れてくれるなら、自分も、他人も……
そして彼自身も、傷つけることだってできます」
そして、今度は、この女性は自身の娘を傷つけたのだ。ラファは見
下すように、子を持つ一人の母を見下ろして、それから踵を返した。

act・38 ノルツセルとソリティエ

ラファとマユキの足音が完全に聞こえなくなってから、ただ一人何も言わずに佇んでいたエルミリカはフェルマータに向き直った。

「そういった強がりには、見苦しいと思いますが」

冷え切った目でフェルマータを見据え、エルミリカはさりとて言い放った。"神の子"は苦笑した。

「エルミリカ様は、私には優しい言葉をかけては下さらないのですね」

「ソリティエ一門の者は嫌いなのです。愛国心の欠片も持ち合わせていないあなた方は」

「貴方にそれが言えるでしょうか。私からすれば、愛する者のためならば何もかも捨てられるという貴方達ノルツセルの気が知れませんか」

エルミリカはちらと背後の女性を見たが、ふとその瑠璃色の瞳を伏せて、仕方ないとばかりに言った。

「……」そうして、満足なのですか」

「はい？」

「」そうやって、自分も相手も傷つけて、全てを壊してしまうことが、あなたのしあわせだともいいますか」

「っ」

「昔、この私にそんなことを言ってきた、果敢な者がいました。…

所詮、貴方も私も、同じ穴の貉ということですね、フェルマータ・M・ラトメ」

エルミリカは、フェルマータを振り返らずに歩き出した。立ち尽くした女性は顔をゆがめたが、その顔を見ようともしない”予知夢の君”は、穏やかに言った。

「逃げたいのなら、逃げればいいでしょう、”神の子”。どの道私にそれを止める権利はありません」

「……」

やがて、ゆつくりと歩くエルミリカの脇を、一人の女性が追い越していく。動きにくいマントも、ゆつたりとした上着も脱ぎ捨てて、彼女はその称号も置き去りに、全速力で駆けていった。

エルミリカは立ち止まった。神護隊の隊服。銀の髪。瑠璃の瞳。未来を視る、この力。——自分は、捨てられるだろうか。
「逃げられないのは、私も同じですね……レース」

過去夢の力を断ち切ってラファに預けたレースと、その力を受け入れ、チルタの手を払いのけたラファと。自分はそのどちらにもなれない。所詮、自分は囚われ続ける運命なのだから。

だから、自分はそのどちらにも……ならない。

「マユキ」

ラファはマユキに追いついて、彼女の小さな背を見て、ふと、初めてこの街にやってきた時のことを思い出した。あの時自分は、巫子の運命を受け入れたくなくて、フェルマータの元から逃げ出して、マユキの手も振り払って、なにかもを投げ出そうとした。

今のマユキと、丁度、逆の立場。

「マユキ」

もう一度声をかけると、マユキは顔を上げた。真っ赤に充血した瞳が、ラファを映した。

「ラファ、冗談だつて言つてよ」

「マユキ」

「あのひとが、フェルマータ様が、私のお母さんだつていうんなら、お父さんは、お父さんはフェル様を、自分の妻を、こ、殺そうとしたつてことで……！」

「マユキ、聞けよ！」

「っ……！」

マユキの肩をつかんで強く揺さぶると、彼女はぎよつとしたように口を閉ざした。ラファはゆつくりと、告げる。

「お前が、お前の父さんのことで気に病む必要はないだろ。お前は

……マユキは、マユキだ。マユキの父さんじゃない」

「ラファ……」

「マユキは、フェルマータが母さんだつて分かつて、嫌だったのか？」

マユキはきゅつと眉を寄せたが、やがて、ふるふると首を横に振った。こらえていた涙をはらはらとこぼして、首を横に振った。

「い、やじゃ、ないよ」

「……」

「嫌じゃないよ！いやじゃないよ、私のおかあさんが、フェル様なら……う、うれしいよ。フェル様のこと、よく知らないけど」

「なら！」

ラファはずいとマユキに詰め寄った。

「ちゃんとそれをあいつにも言つてやれよ！」

マユキの唇が引き伸びたのが先か。それとも、いつの間に来たのだろう。背にした広場の人だからからどよめきが起きたのが先か。

「……どういうことだ、”神の子”！」

その単語に、ラファとマユキは弾かれたように顔を上げた。広場に

集まった人々は、一様に困惑したような表情を浮かべ、青ざめる者も、怒りに顔を赤く染め上げている者もいた。人ごみを掻き分け進むと、輪の中央に、一組の男女が向き合っているのが見えた。

女のほうはフェルマータ。マントも上着も着ておらず、息を切らして、目の前の男を見据えていた。

対する男は、以前神宿塔ですれ違ったエッフェルリス公だった。裕福そうな小太りの顔を青を通り越して真っ白にして、身体を震わせてフェルマータを見ていた。その表情は、恐怖のそれにも似ている。

フェルマータは、凜とした声で言った。

「何度でも申し上げましょう。15年前の事件、わが伴侶エルフェオが、多くの神官や、私に刃を向けたという事件は、濡れ衣だと言ったのです」

「な、な、な…」

隣で、マユキが息を呑んだ。彼女はエッフェルリスよりも強く震え上がった。フェルマータが続けた。

「全ては、私の咎。私が彼に変装して、彼をラトメから追放するために、多くの神官を手にかかけました」

「まさか…」

「フェルマータ様がそんなこと…」

「嘘でしょう、フェルマータ様！」

「そうだ、フェルマータ様がそんなことをなさって何になると…」

聴衆がざわめいた。けれどフェルマータは顔色一つ変えずに淡々と続けた。

「事実です。凶器のナイフも、変装に使ったかつらや衣装もここにあります。…エルミ」

「はい」

エルミが前に進み出た。手には麻袋。それをエッフェルリスに差し出した。エッフェルリスは怯えたように一歩後ずさった。

「お受け取りください、エッフェルリス公」

有無を言わせぬ口調でエルミは言うのと、エッフェルリスに麻袋を押し付けた。彼は、袋の中身を確認し、ぐっと息を詰めた。その表情が、全てを物語っていた。

「……本当に貴公が、新宿塔に多くの被害をもたらしたあの事件の犯人だと言うのなら、私は貴宿塔塔長として、あなたを裁かねばならない」

「覚悟はできております」

「死刑も、可能性は否定できませんぞ」

再び、群衆が息を呑んだ。ラファもさすがに目を見開いた。と、隣にいた少女が、いつの間にかいなくなっている。

見ると、聴衆を押しつけてマユキが輪の中心に向かっていった。人々の頭上を、澄んだフェルマータの声が駆け抜けた。

「構いません。いつそこれを機に、”神の子”の制度自体廃止してしまえばよいでしょう。そうすれば、エッフェルリス。あなたが望む、ラトメディアの権力を与えてもいい」

「フェルマータ様……何故……」

騒ぎを聞いて駆けつけてきた神護隊。その最前列にいたクルドが呆然とつぶやいた。エッフェルリス公は吐き捨てるように、フェルマータに言葉を投げかけた。

「あなたには御子がいる。彼らを探し出して、”神の子”の座に据えるより他にないでしょう。”神の子”は、世界創設以前より続く伝統の王座……そうやすやすと廃止してはならない」

「っ、」

フェルマータの顔がこわばった。彼女が声を張り上げたのと、マユキが輪の中央に飛び出したのとは、ほぼ同時だった。

「私の子供達を、ラトメの暗い神殿に縛り付けることは許しません！……！」

マユキが立ち止まった。エルミがふとマユキに視線を走らせた。瑠璃の瞳は語っていた。「今は出るべきでない」と。

「あなたにそれを決める権利はない！！……神護隊、今すぐフェルマータ・M・ラトメの御子二人を探し出して、お連れしろ！」

「やめて……！」

エッフェルリスの台詞にフェルマータが反論するが、彼は背を向けて、言った。

「……その者は、ラトメディアを大きく揺るがした大罪人だ。牢に入れておけ」

言うが早いか、割れた人ごみを突き抜けて去るエッフェルリス。人々も、神護隊も、立ち尽くしたまま。

ラトメディア神護警備部隊隊長、略してラトメ神護隊長トレイズ・グランセルドは、ラトメでそんな混乱が起きていることなど露知らず、目の前の情景に顔をしかめていた。

左隣にはエピナ。そして右隣にはルナが座っており、真ん中でにこにこと楽しそうに笑っているラゼは、一行の中で最も学園生活を満喫していると言えた。ラゼにとっては初めての人間の、それも女の子の友達である。気が緩むのも分かると思うが…

「あんまりいい兆候ではないね」

ギルビスが教科書片手にぼやくのに、トレイズは頷かざるを得なかった。ユールの占いから一夜明け、今日中にレクセを出ると決めたものの、ラゼがこの様子では、まだここにいたいと駄々をこねられそうだった。

「さつさと引き離してレクセを出たほうがいいんじゃない？これ以上居座って、ファナティライストの奴らに見つかるのも避けたいし」

「でも…」

ロビの台詞に、しかしトレイズは低く唸った。

「あんなにラゼが楽しそうにしているのは初めてなんだよなあ…」

ギルビスとロビは呆れたように溜息をついた。トレイズは、同じ表情でこちらを見る二人を見て思う。

この二人こそ、日に日に仲良くなっている気がする。

シェイルディアでの二人の確執（それは半ばギルビスの一人相撲だった気がするが）を思い出し、トレイズはちよっぴり視線を落とした。

「へえ、じゃあラゼはレクセに来る前は旅をしていたんだね」

「うん。レクセの前はシエイルにいたの」

へえ、と興味深げにエピナは瞳を輝かせた。ルナが嬉しそうに声を上げた。

「実は私、シエイルディアの出身なの。首都のクレイスフィーには行っただ？」

「えっ…ルナ、あの街の出身なの!？」

「といつても、そんなに長い間住んでいたわけじゃなくて…訳あって親元から離れて暮らしていたから、そんなに愛着はないんだけどね」

そうは言いつつ、ルナの黒い瞳は、故郷を思い出して遠い光を放っていた。エピナが羨ましそうに言う。

「いいなあ。私は生まれてからこれまで、レクセを離れたことがないんだもん。ラゼみたいに旅に出てみたい」

「旅も、いいことばかりじゃないよ」

ラゼは言う。もともと、自分が村を出た経緯はお世辞にもいいものではなかった。ルセルを殺し、エリーニヤに剣を向け、拳句の果てにはラファを刺した。

それなのに、皆、ラゼを仲間の一人のように扱ってくれる。それが、無性に悲しくて仕方がなかった。ああ、なんて、この人たちは優しいのだろう、と。

ラゼは首に引っかけたままのネックレスを握った。マユキに返しそびれた首飾り。彼女に近づいて、顔をしかめられるのが怖かった。そしてちらとルナを盗み見る。

（…私も、ルナみたいに大人っぽくて、強かったらよかったのに）
羨望。なんて子供じみた感情かとラゼは思う。出会ったのはほん

の2、3日前のことなのに、まるでずっと昔からの友人のようにルナとは仲良くなった。

けれど、それも今日でおしまいなのだ。今日、自分はトレイズ達と共にレクセを離れなければならないのだから。

「…ねえ、ラゼ？」

「うん？」

エピナが神妙な表情でラゼを見ていた。緊張気味に尋ねてくる。

「あのね…これまでの旅の中で、ラゼ、ラファとマユキっていう、男の子と女の子に会わなかった？」

「えっ、」

「あのね、二人はね、もう何ヶ月も前に、無人廃墟の館っていう幽霊屋敷に出かけたつきり戻ってきてないの。学園から逃げるような子達じゃないし、まだその辺にいるんじゃないかって先生達みんなで探したんだけど、見つからなくて…今じゃ搜索を続けてくれてるのは歴史学のメアル先生だけ。ユール君も何もつかんでないみたいだし、私、心配で…」

「エピナ…」

ラゼは逡巡した。勿論知っている。つい数日前まで、ラファやマユキとは一緒に行動していたのだから。…先ほどまで考えていたことのいくらかは、彼らとも関わりがあったのだから。

しかし行方不明とは初耳だった。仲間達の旅の軌跡など尋ねたこともないし、ロビの時は周囲の者達が認めた上での同行となったから、大して気にも留めなかった。皆が皆、周りに背中を押されたわけではないのだ。

今にも泣き出しそうなエピナに、真実を告げるか否か、ラゼは口ごもって、そして…

「それは…」

「おーいラゼ、ちょっと来てくれよ！」

トレイズの呼ぶ声にびくりとラゼは肩を揺らして、こちらに向けて手を振る教室奥のトレイズを見た。慌てて「ごめんね！」と声高にエピナたちに告げると、転がるように、ラゼは彼と、他の少年の元へ逃げ去った。

残されたエピナは、小さく息をつく。隣で一部始終を見ていたルナが、眉を寄せた。

「ねえ、エピナ」

「なあに、ルナ？」

「やっぱり怪しいわよ。ラゼ、まるでエピナの友達について何か知ってるみたいだった。…それも、何か隠してるみたいに」

「——え？」

ルナはじつと、ラゼたちを見据えていた。どこか怪しいあの集団。共通点も見当たらない。あのトレイズとかいう奴は常に手袋をしているし。そういう干渉はこのルシルヴァではご法度だといわれているが、今回ばかりはそうも言っていられない問題だった。

「もしかしてあいつらが、そのラファとマユキって子を連れ去ったんじゃない？」

「ちよっ、ちよっと待ってよ、ルナ！ラゼがそんなこと、」
「でも」

ルナは声を低めた。手招きされて、エピナは彼女に耳を近づけた。ルナがひっそりと告げた言葉に目を見開く。

「私、あいつらが話してるの聞いちゃったのよ。『ラファ達は深夜零時に出て行った』って」

「今日の午後、最初の授業だ」

トレイズの唐突な台詞に、ラゼは息を呑んだ。

「準備は大丈夫？入学するときに武器はあのメアルとかいう人に預けちゃったから、脱出するときに失敬していくけど」

「武器庫への案内はユールたちがしてくれるらしい。……ラゼ？」

物言わぬラゼに、ギルビスが声をかけた。続けて言う。

「言うておくけど、もうこれ以上は待てないよ」

「わかってる……」

分かっていそうな表情には見えなかったが、口で言うぶんには出て行く気はあるのだろう。ひとまず安心して、トレイズはラゼの背を叩いた。

「そりゃ、こんな状況でもなけりゃ、もうちょっと長居したいけど。」

「巫子の仕事が終わってから、また会いに来ような」

「……うん」

小さく頷いたラゼ。ユールの占いで出来た小さなしこりを抱えて、ギルビスとロビは、ちらと顔を見合わせた。

そして、午後の一番はじめの授業。ルイシルヴァ学園の制服を脱ぎ去って、一行は静かな廊下の影に潜んでいた。ピルが、ルナになにやら話して、戻ってきた。どこか顔が青い。昨日の占いの件といい、彼女はプレッシャーに弱いようだ。

「と、とりあえず、適当にごまかしておいたよ。」トレイズ達は面談があるからって先生に言うておいてくれ”って」

「なあ……ピル、大丈夫か？悪いな、こんなことに巻き込んだじゃって申し訳なさそうにトレイズが言っと、ピルは困ったように笑った。

「大丈夫よ！ユールが付き合うのに、あたしだけのけ者にしないで。それに、ラファ先輩やマユキ先輩の友達なんだもの。ここで抜ける

なんてできないよ」

「なら、いいんだけど」

一同はユールとピルの案内に従って、ひっそりとした廊下を駆けた。高く鳴る足音を出来る限り押し殺して、校舎を西へ西へと向かう。

「ここです」

三階の西側階段の隣。南京錠が3つ4つかけた上に、鎖でぐるぐる巻きにされた鉄の扉の前で、ユールが立ち止まった。

「随分嚴重にしてるのね」

「そうかな？ファナティライストの神官学校じゃもっと重そうな扉だったけど」

ラゼの疑問を、ロビがさらりと流した。ユールはポケットから、じやらりと鍵の束を取り出した。

「昨日のうちに借りておきました。役員の権力があってよかったですね、皆さん。こうして簡単に鍵を借りられるんですから…開きました」

鉄の扉をぐつと押し開ける。暗い室内。その奥に、ひとつの影。待っていたわ」

影が喋った。一同は息を呑んだ。…西には、吉があるんじゃないか？たのか！ラゼが、さあと顔色を失くしてつぶやいた。

「メアル先生…」

act・40 逃走劇

メアル先生は、あちこちに武器が押し込められて、狭くなっている部屋の中央に仁王立ちをしていた。入り口前で立ち尽くすままの一行を見て、眼鏡の奥の瞳がきらりと光った。

「初めて見たときから、何かおかしいと思っていたの。知り合いをあまり作らないユール君やピル君が、こんなに大勢の推薦者を連れてくるんだもの」

ギルビスが舌打ちした。メアルは疲れた様子でくすりと笑う。

「お急ぎのところ申し訳ないけど、きちんと事情を話してくれるまでは離さないわ。…レクセ・ルイシルヴァ学園の司法は私達教師よ迷うわけがないわね？」

「どうするんですか、トレイズさん」

ユールが声を低くして問うと、トレイズは、一步前に出て、胸に手を当てて、頭を下げた。

「俺はラトメディア神護隊長のトレイズといいます。」神の子”フエルマータ様の命で、”赤の巫子”搜索の任に就いていたのですが、フアナティライストの兵に追われ、この学園に、ユール達に協力してもらって、身を潜めていました」

メアル先生の目が、ゆつくりと見開かれた。さすがに予想だにしない言葉だったらしい。引き続いて、ピルが叫ぶ。

「あの、あのね、先生！ラファ先輩とマユキ先輩も”巫子”なの！行方不明になったあの日、先輩達は”赤い印”を継承して、ラトメに逃げたんだって！」

「……な、んですって……？」

驚きうつろたえるメアル先生に、トレイズはなおも頭を下げた。

「ラファとマユキを連れて行ったのは、俺です。あいつらも俺たち

と一緒にレクセに戻ってきてたけど、こんな時に学園の処罰で時間を取られるわけにはいなくて、学園には来ていません。あいつらは、一足先にラトメに戻りました」

「じゃ…じゃあ、じゃあ、あの子達は…あの子達が、巫子…？世界を救う、巫子…それじゃ、貴方達も」

「そうだよ、僕らは赤の巫子だ」

ロビが肩をすくめて言った。トレイズは左手の手袋を外した。真っ赤に染まった左手に、メアル先生は息を呑んだ。その眼前に赤い印を向けたとトレイズは、声に不穏な香りを滲ませて言った。

「武器を引き渡してください、メアル先生。でなきゃ俺は、あなたを攻撃しなきゃならない」

「——！！」

「もつと、眠りの呪文とか使えたらよかったね」

「つくづくラファの有難さが身にしみるよ。僕以外の”印”の能力、全員攻撃的だから」

和やかに話すラゼとギルビス。その穏やかな空気が、余計にメアルの心臓を震え上がらせた。安穩としたレクセの学園とは違う、殺伐とした世界にあのラファとマユキが身をおいているのかと思うとメアルはぞつとした。まるで信じられなかったが、トレイズ達がこんなところで嘘をつくとも考えられない。

「ラファ君とマユキ君は、…無事なのね？」

「きっと今は、ラトメで俺達を待ってます」

「……」

メアル先生はうつむいて、脇に避けると、トレイズ達を奥へと通した。蒼白な表情だった。

「ありがとうございます、先生」

「ねえ」

自分達の武器を取り戻したトレイズ達に、メアルは静かに問うた。
「ラファ君はとんでもない現実主義よ。少なくとも彼がいなくなつたあの日、ラファ君は巫子なんているはずないと言っていた。…そんな子に、巫子なんて務まるのかしら」
トレイズは振り返った。自信も満々に、言う。
「あいつは、すごくいい巫子だよ」

学園を抜け出すのはそう難しいことではなかった。というのも、メアル先生が「ラファ君とマユキ君を守ってくれ」と懇願するとともに、警備員のついたルイシルヴァの裏門を教師の許可を出して開けてくれたのだ。トレイズ達は、昼間だというのにほの暗い小道を走った。

「なんだ、意外と楽に行けるじゃないか。ファナティライスト兵もいないみたいだし」

「……その樂さが、なんだか引つかかるけど」

ロビがぼそりとつぶやくと、案の定。再び、前方に行く手を塞ぐ影があつた。

こつり。革靴の踵が鳴る。こつり。憎らしげにこちらを見る瞳。

こつり。黄土色の髪が、ふわりと舞った。警戒心もあらわに一同が武器を身構えるが、ラゼだけは目を丸くした。

「あれっ、エピナ…？」

エピナは手に、訓練用の刃のない長剣を持つて、こちらをぎらりと睨みつけていた。殺気立った憎しみに駆られた瞳。身に覚えのない彼女の態度に、ラゼは戸惑った。

「エピナ、なんでここにいるの？」

「なんで…？ふふっ」

肩を震わせて、エピナはわらった。血走った目。その奥の奥にどこか狂気を感じて、一同は一步後ずさった。

「それを、ラゼが聞くの？私のことずっとだまして…私がラファとマユキのこと探してるって、知ってたくせに！！」

一同は啞然としてエピナを見つめた。黙り込むラゼたちに、とうとうエピナは涙を浮かべ、自嘲的に笑った。

「そうなのね」

確信を帯びた口調。

「そうだったのね」

「エピナ…違うの！話を聞いて」

「何が違うっていうの！！」

甲高い声。途方に暮れて顔を見合わせる一行を見かねたユールが、一步前に出た。

「エピナさん。マユキ姉さんたちは、別にさらわれたわけじゃないんです。自分達の意思で学園に戻ってきていなくて、だから」

「ユール君も騙されちゃだめよ！そうよ…マユキやラファを人質に取ってるんでしょう？そうに違いはないわ！何も知らない学生のふりをして…ユール君とピルちゃんを離さない！」

エピナは剣を降りかぶって、こちらへと駆けてきた。刃のない剣だ、斬れることはないが、しかし…一瞬立ち尽くしたトレイズ達。エピナが迫る。振るわれた刃。そして――

「そこまでだよ」

全く揺るぎのない声と同時に、エピナの首筋に、真正銘ざらりと光る切っ先が当てられた。ロビの槍だった。勿論、触れれば切れる。

「ひっ」

エピナがその不穏なぎらつきにぎよっと目を剥いた。ラゼが金切り声を上げる。

「ロビ、やめて！」

「残念だけど、今回のラゼの願いは聞けないなあ。言つたよね？僕、人を信じない奴って大嫌いなんだ。そういう奴は、お仕置きしなくちゃ」

とん、軽い音を立てて、立ちすくむエピナの首筋に槍の柄を叩き込む。彼女はその場に、崩れ落ちた。ロビの一片の隙もない動きに、単なる学生の彼女が敵うはずもなかった。

「エピナ！」

ラゼが駆け寄るも、エピナは動かない。気を失って、剣も取り落としていた。

「妙だね」

ギルビスが唸った。

「どうして彼女が、ラファとマユキが僕達とつながりがあるって、しかも、僕達が…正確にはトレイズが、だけど…彼等連れて行つたって知ってるんだろう？」

「前に教室で話してたのを聞かれた、とか？」

「それはないわ！あの時エピナは教室にいなかったんだもの！」

ラゼの台詞に、一同は訝しげに顔を見合わせた。ユールが、黙り込む一同の思いを口にした。

「誰か、手を引いているものがいるようですね。エピナさんに、姉さん達のことを吹き込んだ人間が」

「えっ！？」

ピルが目を丸くして震えた。

「それ…それって、スパイってこと？」

「その可能性が高いね。ファナティライストの側からも、僕らと同じように学園に入り込んでいる奴がいてもおかしくはないのさ」

ロビはなんてことはない風に言つたが、顔は真剣だった。

「考えても見れば、メアルとかいう先生の時もそうだ。いくら僕らが怪しいって言つても、今日、あの時間に僕らが武器庫に行くって

どうしてわかった？鍵は昨日借りたんだ。わざわざ次の日の昼まで使わずにいたことを、あの先生が知るわけがない」

「……」

再び沈黙に陥った一行。ラゼは意識のないエピナを見下ろした。
一体誰が？

「…考えたってしょうがない。とにかく、これからもうこうして教師や生徒が向かってくるかもしれないことを警戒しよう。行こうぜ」

トレイズの言葉に、弾かれたように一同は動き出した。渋るラゼの腕は、ギルビスが引っ張って。ロビが最後尾に行く。ふと振り返り、倒れたエピナを見るともなしに見て。

「——最有力候補はあの黒髪の女だけど…ラゼには言うべきじゃないよね、うん」

レクセディアの入り組んだ小道を、ユールやピルの案内で突き進む。不思議なことに、これまで巫子狩りに遭うこともなかったし、その気配も感じなかった。逆に不安な心地で、彼らは警戒を強めていた。

「この先が出口です」

小道の角を曲がる前に、ユールが立ち止まった。家屋の陰からレクセディアの出入り口を見る。――巫子狩りは、いない。

「おかしいな。俺達が脱出するっていう情報が流れてるなら、大量の見張りがいるはずなのに……また幻術でもかかっているのか？」

「そんな気配はないなあ」

緊迫した口調のトレイズに対して、ロビの様子はきわめて悠長だった。

「わ、畏、だと思っただけど」

ピルがびくびくしながら問うた。ギルビスも頷いてトレイズを振り仰いだ。

「十中八九そうだろうね。どうする？」

「行くしかないだろ。ずっとここに立つてるわけにはいかない」

「じゃあ、私に先に行かせて。私が一番、気配には敏感なんだから」

ラゼがきゅつと眉を寄せて言った。手にした武器：鋭い刃の突き出た物騒なチャクラムをきつく握り締めて、前に出た。エルフに育てられた彼女は、人間よりもい感覚がエルフに近いのだ。

だが、男所帯のこの一行の中で、女の子を一人で突撃させるのはいかなものか。言いよどむトレイズを、ラゼはさすがのように見上げた。

「お願いトレイズ。私、みんなの役に立ちたい」

トレイズは眉尻を下げた。助けを求めて、ギルビスとロビを見る

も、二人は肩をすくめて、

「ラゼが一番戦闘センスがあるのは事実だよ」

「まあ、いいんじゃない？」

「……」

ラファ達の時といい、こういう目には弱いのだ。トレイズは溜息をついて、ラゼを見下ろした。

「危ないと思ったら、すぐに退くんぞぞ」

「ええ」

「絶対だからな」

「くどいわよ、トレイズ。私、大丈夫よ」

ラゼは左の金髪を払った。髪の内側に隠れた血色の左耳が風にさらされた。そっと、呪文を口ずさむ。

「封印を、解除します」

とんつ、右のつま先を地面に叩きつける。にいと唇が弧を描いた。直後、目にも留まらぬスピードで、ラゼは単身駆け出した。人気のない大通りを、小柄な少女が走る。出入り口であるゲートに辿り着くにも、大した困難はないように見えた。しかし、そううまくいくようでは、当然、これまでにメアルやエピナが立ち向かってきた疑問が拭えないのである。

ガンツ!!!

頭上から、轟音。魔弾銃が火を噴く音。一瞬でそれはラゼの元へと飛び込んでいく。が、ラゼは銃弾を難なく避けて、振り向きざま音の出所に向けてチャクラムを投げた。一同が建物の陰からチャクラムの行く先を追う。屋根の上で、黒マントが、チャクラムを避けた。

巫子狩り！

「巫子狩り一人？巫子四人に対しては随分な歓迎だね」

「こっちは願ったり叶ったりだけだな」

黒マントが、建物の屋根から降りてきた。魔弾銃を右手に、フー
ドの奥からラゼを見据えている。戻ってきたブーメランを受け止め、
ラゼはまっさらな笑顔を巫子狩りに向けた。

「こんにちは、巫子狩りさん」

「……」

巫子狩りは応えない。代わりに、女性の声で言った。

「——チルタ様の命により、巫子を捕らえる」

「ふふっ、あなたにできる？」

くるとブーメランを一回転させるラゼ。女性は黙って銃身を持ち
上げて、ラゼに向けて構えた。音のない大通り。トレイズ達は息を
詰めた。

ガウンー！

銃声。ラゼは避けた。巫子狩りに向けて駆け出し、大きくチャク
ラムの刃を振るった。巫子狩りはひらりと避けた。ふわりと舞った
黒いマントの裾に、中指ほどの長さの裂け目が入った。

「……」

巫子狩りがぐつと息を止めた。近づいたラゼを牽制するように銃口
を向ける。ダンッ！しかし銃弾の通った軌跡上に、もうラゼはいな
かった。

「ちィッ！」

舌打ちした巫子狩りは魔弾銃を捨てた。それは地面を南側へと転が
って、門のアーチの傍で止まった。巫子狩りは懷から小さな折りた
たみ式のナイフを抜いて、ラゼめがけて突き出した。ラゼはそれを
チャクラムの刃の腹で受け止めた。

目にも止まらぬ速さで繰り広げられるそれ。埒が明かない戦闘に、
トレイズははらはらとそれを見守った。その隣で、何故だかゲート

のほうを見ながらロビが言う。

「ねえ、ここって、ルシルヴァから見て南だっけ？」

「何言ってるんだよ？そうだろう！」

トレイズはラゼと黒マントの戦闘から目を離すことなくやきもきしながら言った。ロビの意図を読んだユールが、彼と同じ向きを見てぼつりとつぶやいた。

「剣士のカード……」

ユールは少し迷って、そして、入り口に向けて走り出した。

「ユール！」「馬鹿、危険だ！」

ピルが悲鳴を上げ、トレイズが叫んだ。巫子狩りがその声に気づきユールを見た。

ユールは入り口のゲートに辿り着くと、落ちたままの魔弾銃を取り上げて、まっすぐに巫子狩りへと向けた。一瞬、驚きか戸惑いか、巫子狩りが動きを止めた。

時間は一瞬で十二分。ラゼが巫子狩りの背後に回って、チャクラムの切っ先を彼女のマント越しの首筋に当てた。

そして、沈黙。

「ナイフを離しなさい」

微笑を浮かべたままラゼが言った。少しの間を置いて、巫子狩りはナイフを地面に落とす。首筋に刃を当てたまま、ラゼはそれを巫子狩りから離すように数メートル前方に蹴飛ばした。そして、目を伏せて、唱える。

「封印を施錠します」

とん、左のつま先を地面に叩きつけると、ラゼは目を開いた。あの狂気的な雰囲気はすでに失せていた。

「みんな、出てきても大丈夫だよ」

ラゼの言葉を聞くなり、ピルが物陰から飛び出してユールに飛び

ついた。

「ユール！なんでこんな無茶するの！？あ、あたし、心臓が止まるかと」

「ごめん、いつまで経っても”剣士”が現れないから、いつそ僕がみんなの助けになろうと思って」

魔弾銃の銃口を下ろして、ユールはピルを見た。うつむく巫子狩りの前に、ギルビスとロビ、そしてトレイズが立つ。ギルビスが眉を寄せて巫子狩りを見た。

「さて、巫子狩り一人で来るなんて余裕じゃないか。これを期にいろいろ吐いてもらわないと」

「話すことは何もない」

「別に話さなくてもいいよ」

ロビが一步前に出た。槍の切っ先を巫子狩りに向けて、穏やかに問う。

「さて、巫子狩りさん。そのフード、外してくれるよね？」

「…断る、と言ったら？」

ハスキーな、どこかで聞いた声だ。ラゼが訝しげに首をかしげた。ロビはにっこりと笑う。

「勿論、無理矢理にでもそのマントを取ってもらうよ。巫子狩り…いや、ルナ・シエルテミナ、さん？」

「……え？」

声を上げたのは、トレイズか、それともラゼか。とにかく二人は気づかなかったようで、目を丸くして巫子狩りを見た。巫子狩りは小さく溜息をついたあと、ゆっくりとフードを外す。…中から現れたのは、黒い綺麗な髪。

ルナだった。

「ルナ!？」

「なんで私の家名を知っているのか、なんて愚問よね。こんにちは、ロビ・S・ファナティリスト。黒髪のことを聞かれたときはうつだと思っただわ」

「そういう君も、僕のこの緑の髪がファナティリスト血族の証だつて知っているみたいじゃないか」

「ま、待て! ということだよ! 髪の色とルナになんの関係が…」

「黒髪は、シエルテミナ家の象徴なんだ」

混乱するトレイズに、ギルビスが静かに言い放った。

「緑の髪と瞳がエファイン、蒼の髪と瞳がソリティエ、銀の髪に瑠璃の瞳がノルツセル、そして…黒い髪に黒い瞳がシエルテミナ。不老不死の血族の直系は、その特徴を色濃く受け継ぐって言われてる。シエルテミナ家っていうのはね、ファナティリストの神官…主に優秀な巫子狩りを輩出している”名門一族”なんだよ」

僕らにとっては因縁の一族ってわけさ。ロビがのんびりと付け加えた。

ラゼは蒼白な表情でルナを見つめていた。瞳を揺らして、問う。

「ど…、どうして、どうして、ルナ…? ルナ、巫子狩りじゃないよね? 嘘だよね…?」

「……」

ルナは黙り込んで、そして、ラゼの質問には答えずに、言った。

「そこまで知っているのなら、勿論、このことも知っているのよね?」

一同が眉をひそめた直後、ルナは左手を前に突き出した。手袋を外す。その白くて細い手首に、赤い筋が走っていた。——”赤い印”! 一同が息を呑む間もなく、ルナは高らかに宣言した。

「第六の赤き刻印よ！彼の者を滅せよ！」

ドンッ…思い音を立てて、ユールとピルの背後に、血色の巨大な門が現れた。誰に何も言われずとも、それが危険なものであることは見て取れた。トレイズが叫ぶ。

「ユール！ピル！逃げろ！」

「あ、……あ……？」

ピルが腰を抜かして座り込む。ユールが彼女の腕を引っ張った。

「ピル、立って、逃げなきゃ」

「…え、あ…？だ、だけど、こ、腰が…」

ゆっくりと扉が開いていく。両開きのそれぞれの扉の隙間から、獣かなにかの鋭く長い爪が「にゅるり」と出てきて、門をこじ開けようと、ぐわしと扉をつかんだ。ユールは舌打ちした。

門が開いて、中から真っ黒な、巨大な狼のような毛玉が、ユールたちがけて飛び出すのが先か。それともユールが、呆けるピルの身体を突き飛ばすのが先か。

とにかく、ユールがその獣に、思い切り体当たりをされて、彼は十数メートル吹っ飛ばされた。

「ユール……！」

ギルビスがユールに駆け寄る。一同の意識が彼等に逸れたその直後、ルナはロビとラゼを蹴り飛ばし、ギルビスとユールの元へと駆けけた。ユールの手当てをしようと咄嗟に呪文を紡ぎ始めたギルビスの背を蹴り倒し、ユールの胸に、彼の緩んだ腕から取りあげた魔弾銃の銃口を向けた。

「ルナ……！」

ラゼが叫んだ。ルナはギルビスの背にブーツの踵を食い込ませて、

「近づかないで！」

と金切り声を上げた。

「ふふ、第三の巫子を献上すれば、チルタ様はきっと喜んでくださる…そうよ、きつとそう。あなたたちに、チルタ様の目的の邪魔はさせないわ！」

「チルタの、目的？」

トレイズが眉を寄せるのも気にせず、ルナは詠うように言った。

「あの方は悲しいひと。過去にばかり目を向けて、そのために命まで賭けていらつしやる…お傍に私がついてるのに、あの方にはたった一人しか見えていない…あの方は、かなしいひと」

その瞳は潤んで、頬は赤く染め上げられて、まるで恋する乙女のように。だが、期を取り直して、ルナはまっすぐにラゼを見た。

「だけど、チルタ様の望みは私の望み。誰にも邪魔なんてさせないわ。ねえ、ラゼ？あなたに近づけて、とっても便利だったわ。いろんなことが分かったもの。あなたの友達だって言って近づけば、協力してくれた人もいたしね？」

「協力…って…？」

ロビが舌打ちした。勢いよく振り向いて、その視線の先にいる人物をにらみつけた。

「なるほどね…詐欺師は君だったってわけだ。——ピル」

座り込んだピルが肩を震わせた。他の者が、啞然として彼女を見た。

「え…」

「ピル…？」

蒼白を通り越して土気色の表情のピルを、ルナは高らかに嘲笑った。「うっふふ！とっても簡単だったわよ？ユール君のことをちよっと

引き合いに出せば、すぐにあなたたちの脱出する時間を教えてくれたし、メアル先生に武器庫に誰か来るって告げ口もしてくれた。ね、ピルちゃん？あなたも、とっても便利なひとね」

だからね？不敵な笑みを浮かべて、ルナはぱちんと指を鳴らした。すると今まで大人しくしていた黒い獣が、がばりと口を勢いよく開いて、よだれを撒き散らして、目の前の少女…ピルを喰らおうと、突進した。

「邪魔者は、消えて頂戴」

a c t・41 巫子狩り（後書き）

とりあえず今のところ出てきてる占いの結果です。詐欺師はピル、西の吉はメアル先生、北からの死神はルナ、南からの助けはユール。本編中に東の檻はちらつとしか出てきませんが、東の無人廃墟の館にはチルタがいて、占いの檻のカードはチルタを示しています。

act・42 紅雨のトレイズ

「ピル!!」

ピルは皆の叫びも耳に入らないようで、がちがちと歯を鳴らして座り込んだまま、来たる獣の口内を呆然と見つめていた。

その牙が今まさにピルの首の首を喰いちぎろうとした瞬間のことだ。

ピルと獣の間に、固い土の壁がぼこ、と地面から現れた。がり、獣は少女の体躯の代わりにその壁を噛み砕いた。その隙に、トレイズがピルを担いで獣から引き離す。彼はいつの間にか左の手袋を外し、真っ赤に光る左手をさらしていた。

ルナは大して動じることなくトレイズを見た。

「人質がいるのに、いい度胸ね」

「いい度胸?…くくっ」

トレイズが、笑った。いつになく冷酷な笑みだった。ラゼがぞつとした顔でトレイズを見た。彼は目を細めてルナを見ていた。…いつになく、冷酷な眼差しだった。

「お前こそ、俺が”千人殺しの紅雨のトレイズ”と知ってて喧嘩を売るとはいい度胸だな」

ざあ、と、突然空から雨が叩きつけた。血色の雨。インテレディアの時と、同じ。

「俺を怒らせるなよ、ルナ。」グランセルドを怒らせるな”って聞いたことないのか?」

「さあ?私が怒らせちゃいけないのは、チルタ様ただ一人だもの。馬鹿の一つ覚えみたいに雨を降らせて、ばっかみたい」

とん、つま先を地面に叩きつけて、トレイズは駆けた。腰の長剣を素早く抜くと、再度こちらへと向かってくる獣に、容赦なく振り下

るす。…が、それは獣の胴に触れる前に、霧となって消え去った。

「!?!」

見ると、ルナが発動を止めたようだった。巫女狩りのフードを深く被り、ユールとギルビスの腕をひっつかんで、彼女はにこりと冷たく微笑みかけて言い放った。

「紅雨のトレイズ。憎きグランセルドの生き残りであるあなたを殺すのもまた一興だけど、残念ながらそれは私の役目ではないの」

「…!?!?どういう意味だ!」

「それに、別に私、貴方達を殺しに来たわけでもないし。でも、この子達は連れていくわね?チルタ様のお望みだから」

「ギルビス!?!ユール!?!」

ラゼが一步前に出た。ルナは、困惑と悲しみの入り混じった表情を浮かべるラゼを一瞥すると、嘲笑した。

「じゃあね、お馬鹿なラゼ。また会いましょう?」

言い残して、ルナはいずこかへと転移した。一同は呆然と血色の雨の中立ちすくむ。と、ロビが気絶したピルの目前にしゃがみこんだ。

「さて、意外なところに伏兵はいたってわけだ」

「冷静に言っくんじゃねえよ!?!くそっ」

トレイズは地団駄を踏んだ。彼にしては珍しい挙動にラゼが驚いて、びくりと肩を揺らした。

「くそっ!ギルビスにユールに…ラファやマユキに、フェル様になんて言えば…畜生!」

「トレイズ…」

気遣うように、トレイズの腕に手を置くラゼ。ピルを抱き上げて、ロビはトレイズを振り向く。

「とにかく落ち着きなよ、トレイズ」

「これが落ち着いていられるか!？」

「そこを落ち着けて言ってるのさ。…過ぎたことを悔やんでも始まらない。とにかく、今は状況をラトメに知らせないと。ひとまずは、レクセを出よう」

「ちよつと待って、ロビ。ピルは…?」

ラゼが控えめに問うと、ロビは腕の中のピルを見下ろした。

「悪いけど、彼女には付いてきてもらうよ。巫女狩りと通じてたってことは、何かしらファナティライスト側の情報が手に入るかもしれない」

「……行こう、トレイズ」

トレイズは、ちらとルナ達の立っていた場所を振り返り、そして足早に、立ち去った。

トレイズ達は黙々とラトメへと続く道を突き進み、しかしピルはなかなか目を覚まさなかった。彼等が次に口を開いたのは、モール橋で一人のエルフと再会した時だった。

「トレイズ! やつと見つけたわ」

「サザメさん!？」

神宿塔にある、ソリテイエ神殿の守衛であるサザメは、トレイズに駆け寄って花のように微笑んだ。

「探してたのよ、フェルが不吉な予感がするって言うから、私が貴方達を連れてくるように命じられたの」

「フェル様の護衛が傍を離れててもいいのか!？」

「……」

困ったようにくすりと笑んで、サザメはその話題から逃げた。ロビとラゼ、それから気を失ったままのピルを見る。

「お初にお目にかかります。私はサザメ。見ての通りのエルフですが、フェルマータ様のご厚意で、神宿塔の守番をしております」

「ちよつと、サザメさん」

一礼して、もの言いたげなトレイズに向き直る。

「大変なことになつちやつたのよ、それが。私もさつきモール橋の警備兵に聞いて初めて知つただけだ…どうも、フェルマータ様が…ラトメディアの”神の子”が、反逆罪で捕らえられた…って」

「なんだって!?!」

トレイズが身を乗り出して叫んだ。サザメは神妙にゆつくりと頷く。

「事情はよく知らないの。それが本当かどうかもね。とにかく、早くラトメに戻らなきゃと思って、急いで貴方達を探してたのよ。そつちも…見る限り平穩無事とはいかなかったようだけど…」

「それはいいけど、そうなると、ラファやマユキもまずいことになるんじゃない?二人は一応、フェルマータに保護される形になっているはずだし」

ロビが口を挟む。言われて気づいたのか、トレイズは舌打ちした。「次から次へと…!」

「言つてもはじまらないわ。とにかく急ぎましょう。真実を確かめない」と

act・43 逃げたことへの代償

ラトメディアは騒然としていた。民衆達からは口々に暴言が飛び交い、中には泣き喚く者、青ざめる者、いい気味だと叫んで、屈強な男達に叩きのめされる者…

神聖都市ラトメディアの象徴であったフェルマータのいなくなつたこの町では、全ての規律が失われていた。

「トレイズさん！」

怪我人の手当てに追われていたレインが、こちらに気がつき駆けてきた。きつとろくに寝ていないのだろう、民達に負けず劣らず顔色の悪い彼は、それでも笑顔を浮かべてトレイズ達を迎えた。

「お帰りなさいませトレイズさん、サザメ様。無事でよかつた…」

「そんなことはいい、どういう状況なんだ、これは？」

「僕らにもよくわかつてません…いや、多分、ほとんどの人は経緯もなにも分からずに、混乱しているんです。とにかく、フェルマー様が、実は、先の殺人鬼エルフェオの反逆事件の主犯だったということが発覚したんです。広場で、貴宿塔長のエツフェルリスの目の前で、フェルマー様ご自身が明言されたことですから、確かな情報だと…」

「なん…ですって…？」

サザメがレインの肩に掴みかかり、甲高い声でわめいた。

「エルミ…エルミはどこにいるの！？」

「エルミ、ですか？」

レインは目を白黒させて、そして合点がいったとばかりに鋭い視線でサザメを射抜いた。

「エルミの責任じゃありません！」

「じゃあなんだっていうの？エルミが止めないからこんなことにな

「つたんでしょー!？」

「エルミは本来部外者のはずだ!なのに、貴方はいつも彼女に責任を押し付けようとする!」

「お、おい、サザメさん、レイン。一体どういことなのか俺達にも説明してくれよ」

トレイズが話に加わると、二人は何故か苦虫を噛み潰したような表情で互いに顔を背けた。それで気が付いたが、見るとレインの頬にも、殴られたときに出来る真っ赤な腫れがくつきりと浮き出していた。

「わかることだけでいいんだ。一体フェル様は何をやって、それで今は何が起こっているのか」

「それは…」

「それは、僕がお話したいでしょう」

コツ、革靴の踵が鳴る音が大通りの奥から響いた。銀の髪、瑠璃の瞳。そして隣にはラファがいて。エルミはこの暴動の起こる街に似つかわしくない柔和な笑みを浮かべた。そしてまず、トレイズに礼する。

「お帰りなさいませ、トレイズさん」

「あ、ああ…」

あまりに悠長なその様子に面食らう一同。ラファがトレイズ達に駆け寄った。

「無事だったのか!良かった……あれ?」

そしてトレイズに負ぶわれたピルに首をかしげた。

「なんでピルがここに?…それに、ギルビスは?」

「待てよ!ギルビスとユールが、ファナティリストに捕まった

って…！」

ラトメディア神護隊本部。その一室で、レクセで起こった一連の出来事を聞いて、ラファは身を乗り出してトレイズに詰め寄った。

「そんな…そんなこと、マユキにどう説明してやれば…」

「そういえば、マユキの姿が見えないね。どうしたんだい？」

ロビが問うと、答えたのはエルミだった。

「マユキ様なら、エルディ君とクルドさんと一緒に新宿塔に行かれましたよ。その牢に、フェルマータ様がいらっしゃいますから」

「フェル」

サザメが俯いた。エルミが続けて語り始める。

「こちらの状況はご覧になったとおりです。殺人鬼として名高い、そしてフェルマータ様の伴侶であったエルフェオの事件…神官を幾人も切りつけ逃亡した事件で、エルフェオが冤罪だと判明し、今はフェルマータ様が主犯とされ、牢で監禁されています。民は混乱し、各地で暴動が頻発していて、ラトメは半ば内乱状態です」

ゆつたりと語り終えてから、エルミは口元に手を当てた。

「…ですが、まずいですね」

「なにが？」

「ユール様がファナティリストに捕まったことです。このままフェルマータ様が処刑されて”神の子”がいなくなれば、当然、ラトメは次の”神の子”を探すでしょう…つまり、フェルマータ様のご子息、マユキ様とユール様を、です」

「そうか」

ロビも気づいたらしい。珍しく眉を寄せて考え込んでいる。ラゼが困惑したような声を上げた。

「どういうこと？」

「ファナティリストに、ユールが”神の子”の継承権を持つことが知れば、きっとあの神都は、彼を取引材料に使うだろう。ラトメはファナティリストと対立関係にあって、今はその戦力は同等

「ただ、ユールの存在は、人質になりうるってわけだ。僕たちだけじゃなくて、ラトメ全体の、ね。…あるいは、ルナもそれが目的だったことも考えられる」

一同は青ざめた。でも、とトレイズが口を開いた。

「でも、わからないだろ？今まで隠し通してこれたんだ。ユールがラトメの上流階級だって証拠なんて、」

「あるじゃない」

ラゼが震える声で言った。

「……」46の円占い」が」

ラファ達の間には沈黙が流れている一方で、神宿塔の地下ではマユキ達が高く靴音を響かせて、細く暗い牢獄を歩いていた。入り組んだ廊下。ぴちゃん、どこからか水滴の落ちる音が聞こえる。

隣でエルデイが口を開いた。

「フェルマータ様は一番奥の部屋だそうです。本当は舞宿塔から行ったほうが近いんですけど、今の状況じゃ、僕たちが入れるのは神宿塔だけですから」

「ううん、大丈夫。ありがとう」

そう言いつつも、マユキは上着の合わせ目を手繰り寄せてその身にきつく巻きつけた。

ラトメディアの牢は地下に木の根のように広がっており、出入り口は三尖塔の転移装置のみ。あちこちに守備兵がいて、訝るようにマユキ達を見ていた。フェルマータは、神宿塔から最も遠い牢にいる。

クルドが溜息をついた。

「しかし、フェルマータ様になんのご用事ですか、マユキ様？いく

ら巫子とはいえ、会えるかどうかは難しいと思いますが」

「会えないなら会えないでいいの。私のわがままだし、それに…エルミに、会いに行くように言われたから」

「エルミに？」

エルデイが、双子の妹とそっくりな表情をゆがめた。

「あいつ、また妙なことを考えてるんじゃない？」

「お前の弟だろう、エルデイ。ちゃんと見張っている」

「それを言うならあんたの部下だろ、僕の責任じゃない」

ぴちゃん。再び水音。地下深いここまでは、さすがに暴動の音は聞こえてはこない。

「ラファ達、大丈夫かな」

「どうせ殺しても死なないでしょうあの方は。それよりトレイズさんが戻ってきた時のほうが恐ろしい。あの人のことだから牢まで乗り込んで来かねない」

「うん。エルミには、なにか考えがあるみたいなんだけど」

ノルツセルの”予知夢の君”エルミリカ・ノルツセル。彼女のこの未来が視えていたのかは甚だ疑問だが、しかし彼女の頭脳を持つてすれば、それを差し引いてもマユキに見えないものが見えているのだろう。

「本当にエルミの奴、何を考えているんだか」

クルドは盛大に溜息をついた。とはいえ今そんなことを話していても仕方がない。自分達には自分達の、やるべきことをやるだけだ。

目の前に立ちはだかる牢番に視線を向けて、マユキ達はようやく足を止めた。

act・44 フェルマータ・M・ラトメの供述

フェルマータの牢はいやに豪勢だった。そもそもそこは牢とは思えない作りだった。広々とした部屋。シンプルな家具。きつと”神の子”の寝所には劣るのだろうが、それにしたって、一般の家と比べてもそこは居心地がよさそうだった。流石”神の子”の殺人鬼。冷たい牢獄の奥でひっそりと、フェルマータは暮らしていた。

「ああ、マユキ様、ようこそいらっしました」

「フェル…様」

獄中の人とは思えないほど穏やかに笑ってみせたフェルマータは、自分のテーブル越しの椅子にマユキを促した。マユキはエルディ達の待つ扉のむこうをちらと見てから、ゆっくりと腰掛け、うつむいた。

「あの、フェル様、私…フェル様に謝らなくちゃいけないと思って」「まあ、何を謝るというのですか？マユキ様の謝ることなどないでもないでしょう」

さらりと流したフェルマータ。思わず、マユキが顔を上げると、彼女は…微笑みを浮かべこそすれ、瞳は鋭くマユキを射抜いていた。

…赤い印。”神の子”の刻印。まるで、その先を言っではいけないと咎めるように、フェルマータはマユキを制していた。そういえば、貴族達が、彼女の子供を血眼になって探しているのだ。どこでマユキの正体が漏れるか、分かったものではない。

「……そ、うです、ね」

「ええ。でも丁度良かった。私もあなたにお話がしたいと思っていたのです」

ふ、ひとつ息をついて、フェルマータはまっすぐにマユキを見据えた。

「マユキ様、私が、あなたと…そしてラファ様の巫子継承を止めよ

うとしていたこと、ご存知でしたか？」

「え？はい、トレイズとエルデイが、毎日無人廃墟の館に来てたつて。それが？」

「何故止めようとしたのか、考えたことはありますか？」

マユキはフェルマータを見た。神の子はそつと自分のまぶたに指先で触れた。

「我が第一の赤い印は…歴代の”神の子”に伝わる、言わば”神の子”の証のようなものです。この印は神の子の血族しか認めない。今、こうして貴宿塔の者達が継承者探しに騒いでいるのは、ひとえに”神の子”の継承者は、第一の赤い印も共に継承する必要があるからです。つまり…印に認められて初めて、ラトメは”神の子”を認めるのです」

だから、今ラトメは混乱しているのだ。”神の子”の不在。継承者は行方不明。継る者を失った、ラトメの民衆たち。

「血には逆らえない」

いやに神妙に、フェルマータは呟いた。

「私がそうであつたように、マユキ様も、ラファ様も、きつと同じこと。ラトメ一門とノルツセルは、決して相容れない。あなたと、ノルツセルの末裔であるラファ様とは、根本的に”血”が違つのです」

過去夢の君。瑠璃の瞳。旅の間、紛れもなくノルツセルに侵されたラファ。とはいえ、マユキは内心でぐるりと心臓が跳ねるのを感じた。だって、自分とラファは、間違いなく親友だというのに！「言ってる意味が分かりません！私が、その…血を引いているからって、それに、ラファがノルツセルの人だからって、私達が親友だつていいじゃないですか！」

「ええ、いいのです。よかつたのです。あなた方が、”赤い印”を

継承することさえなければ」

フェルマータに気圧されて、マユキは口を噤んだ。目の前の女性は、感情の読めない血色の瞳をそつと伏せた。

「赤の巫子にさえならなければ、あなた方はその血に気づくことなく、一生を終えることができたでしょう。ラファ様も同じく。けれど、巫子になってしまったから、自分が不老不死の血族だと知ってしまったから、ラファ様の中のノルツセルが目覚め、そしてあなたは知ってしまった。」

わかりますか？」知る”ことは何よりの罪なのです”

マユキは訝った。目の前の女性は何を言いたいのだろう？それを感じ取ったのか、フェルマータは詠うように言った。

「人は”知る”ことに貪欲です。そして、未来に臆病です。彼のエルミリカ・ノルツセルでさえ、”死”という未来に怯えて規律を捻じ曲げた。異分子はエルミリカを生き返らせるために、世界の破滅に貢献することとなった。ミフィリは異端者を死なせないように、自分の命を赤い印に捧げた。世界創設者たちは赤い印の力を恐れて、赤の巫子を生み出した……」

「……！！」

「あなた方は持っているのですよ、マユキ様。人々が怯える未来すら失くしてしまいかねない、未知に満ちた強大な力を、この世の真理を何も知らない、無知な学生が」

トレイズは知っている。人が人の命を奪うことの恐ろしさを。

ギルビスは知っている。一番近い人間を失うことの虚しさを。

ラゼは知っている。大切な者が自分を庇うことのもどかしさを。

ロビは知っている。持ちたくもなかった力を持つてしまうことの苛立ちを。

けれどマユキは。そしてラファは。仲間達が皆”印”を継承する

前に垣間見た死の片鱗を、自分達だけは、知らぬままに、この強大な力を手に入れた。

そう思うと、途端に恐ろしくなってくる。言い知れぬ寒気を感じて、マユキは自らの腕を抱いた。牢の廊下とは違いここは暖かいはずなのに。フェルマータは自虐的に笑んで、マユキから視線を逸らした。

「私にはそれが恐ろしく感じたのです。何も知らないほうがずっと幸せだったでしょうに、そして何も知らずに生きていれば、あなた方は平凡な一生を送れたでしょうに。…私も所詮は”人の子”です。未来を知るといふ行為に、そして未来を変えんとする行為に、強欲な一人の人間でしかありません」

”神の子”などという忌まわしい肩書き以前に。うめくように付け足したフェルマータ。初めて言葉を交わしたときはあんなにも堂々と優美に見えていた彼女が、みるみるうちに小さく見えた。

マユキは無性に腹が立った。

「でも、でも！私はもう巫子なんです、この力を使って、私はみんなの…ラファ達の、少しでも助けになりたい！ラファなんて、ゼルシャで刺されて、巫子じゃなかったら死んでた…そんな風に、私には命懸けで人を助けるなんて、怖くてできないけど、でも！

私も、この力で何かできることがあるのなら、”神の子”だって”ラトメ”だって、何でも受け入れます」

「私にもそう思っていた時期がありました。ですが…これは、人殺しの力です。

どんなに綺麗事を並べたとしても、所詮は”第九の巫子”を殺すための道具でしかあり得ない」

「じゃあなんで、」

とうとうマユキは声を荒げて椅子から立ち上がった。机越しのフェ

ルマータを見下ろして、顔を歪めて問うた。

「なんで、私に『第九の巫子を殺さずに済む方法』なんて教えたんですか…！」

マユキがそれを知らなかったら、あるいはこの役目を引き受けなかったことさえ考えられる。

自分はラファが思うほど崇高な存在ではない。いつだって自分が可愛いし、自分を最優先に守りたい。その方法を知らなければ、マユキもラファと共にラトメから逃げていただろう。

人殺し？そんなもの。誰が進んでなろうと思うものか。

けれどそれを回避できるなら、切望していた非現実の世界に飛び込むのも悪くない、と。

睨まれたフェルマータは、わずか…ほんのわずか、指先をふと揺らして、悲しげに微笑んだ。それは”神の子”の表情ではなかった。

「誰が、」

か細い声だった。

「この世界で母と呼ばれる人の中で、誰が自分の娘を人殺しになんてしたがるでしょう？たとえ、それを世界が望んでいたとしても」

絶句、した。マユキはさあと青ざめて、拳を握り締めた。フェルマータは続ける。

「結局は私のエゴなのです。マユキ様、どうぞお忘れなきよう。あなたの方の持つその力は決して美しいものではないこと。そして、ラファさまはどう足掻いても、異分子の孫でしかあり得ないということ。」

ひとまずユールを助け出さなければ話にならない。そう結論づけたラファ達は、一旦話を切り上げて疲れた身体を休ませることになった。この話はマユキにもしなれば。

長い夜になりそうだ。窓から見える、神宿塔に半分隠れた銀色の月を見るときもなしに見て、ラファは嘆息した。

「ラファ」

澄んだ声。振り返ると、薄暗い廊下のむこうからエルミリカが姿を現した。

「エルミリカ」

「いい月夜ですね」

彼女はラファと並んで月を見上げた。

「私がこの時代に来て初めて見た景色も、こんな月夜でした」

そう言うエルミリカの瞳は夜闇よりも深かった。彼女はこの時代に来たとき視力を失っていた。それを治したのが…確か、チルタ。

「チルタは愚かですが馬鹿ではありません。第九の印を継承したのも考えがあつてのこと。ラファ、あなたを狙うのも、決して力を欲するばかりのことではありません」

「どういう、ことだ？」

エルミリカはゆっくりとラファを見て、右手の薬指に嵌めた銀の指輪を取り、ラファの手のひらにゆっくりと載せた。すっかり馴染んだ、心地よい冷たさ。エルミリカはにこり、笑った。

「覚えておいてください。『使えるのは一度きり』です」

「何を…」

その時、ぱん、弾けたようにラファの足元に魔方陣が浮かび上がった。ラファの手首に巻かれた銀時計から溢れた光。きゅっとエルミリカがラファの手を握る。

「この世界を生かすも殺すも貴方次第。ラファ…私の、私達の運命

を、貴方に託します」

「ちよつ、どういう意味だよ、エルミリカ!？」

「銀時計を」

言われるままに左手首に視線を落とすと、動きのおぼつかなかった状態の針が、今は狂ったように反時計回りにぐるぐると回転している。

「ラファ、これから行く場所では、あなたの一挙一動が大きな影響を及ぼします。下手をすればあなたの”今”の存在ですら危ういらいに。それでも、」

切羽詰った様子で矢継ぎ早に言うと、エルミリカは柔らかに微笑んだ。

「ラファ、貴方の行く道に幸があらんことを」

そつとエルミリカがラファから手を離すと、まるで風船にでもなったように、ラファは自身が浮き上がって、飛び上がって、月に向けて、放たれていくのを感じた。

act・45 チルタと過去

声変わりしていない高い少年の声で目が覚めた。おぼろげな視界。空はもう薄ぼけた太陽が昇っていた。

「おにいちゃん、だいじょうぶ？」

まんまるの目をぱっと見開いて少年が首をかしげた。鳶色の髪。人懐こい笑顔。

どこか見覚えのある顔立ちだ。否、見覚えがあるなんてものじゃない。何故だか、ラファの知るものよりもっとずっと幼いけれど、この顔をラファが見間違えるわけがなかった。

（チルタ…！？）

幼少時代のチルタは、何も知らぬ表情できょとんとしていた。

そこが過去の世界だと知るのに、さして時間はいらなかった。目覚めたそこは少し大きめの屋敷。ちよつとした富豪らしいチルタの父親は、気前のよさそうな明るい笑顔でラファに言った。

「ほう、君はラファ君というのか。さてね。このチルタが庭に倒れているのを見つけてね。見たところスラムの人間とも思えんし、休ませてやるくらいはいいだろうとここへ運んだのさ」

「チルタって」

「ああ、うちの息子だ。今年で八歳になる」

父親の影に隠れたチルタは、気恥ずかしそうににこりと笑んだ。八歳。ということとは、ここは過去のチルタの家なのか。

ふとベッド脇の窓から見える庭を見下ろす。青々と茂る緑。ぐると屋敷を囲んでいるらしいセピア系の色で統一された、レンガ造りの塀はどこかで見たことがある。

(シェイルディアだ)

どうやら自分は過去のシェイルにやって来たらしい。ラファは、その事実以前に、まず自分がこの明らかな「非現実」に、さして衝撃を受けていないことに驚いた。

「さて、それで君はどうしてあんな所に…？」

「え、あの、えっと、その」

しばし迷ってから、

「お、俺、レクセの学生なんです。いろいろな街の特色について研究してて、課外研究として半分旅みたいな形で各地を回ってるんですけど、ラトメからここまで、転移呪文を使おうとして、失敗して気づいたら…」

「ほう、その歳で転移呪文を使えるのかい？それはそれは…驚いたな」

至極優しい口調でチルタの父は言ったが、ラファは見逃さなかった。一瞬、ほんの一瞬だったけれど、彼の目がちろりとラファの瑠璃色を射止めたのを。…ということは、彼は知っているのだ。”ノルツセル”を。

相手はなんといつても「あの」チルタの父親である。警戒するに値する人物ではなかるうか。ラファが身構えると、チルタの父は快活に笑った。

「ははは！そんなに構えることはないだろう。そうか、じゃあシェイルには来たばかりというわけだ。いいだろう、よし、よし。部屋はこの通りここが空いてるし、よかったら研究が終わるまでここに泊まっていったらどうだね？ん？」

「……」

心底優しい笑みを貼り付けた男の腹は見えない。ラファが黙り込んでいると、駄目押しだとばかりにチルタの父は続けた。

「お金は必要ないよ。シエイルを出るまで、ここを君の家だと思えばいい。うーん、だが、チルタの面倒を見てくれると有難いがね」

チルタは汚れなど知らぬ瞳でラファを見上げた。エルミリ力が、彼女が何を思っ、自分をここに寄越したのかは分からない。けれどあの賢人は言っていた。「この世界を生かすも殺すもラファ次第だ」とすると、そのように「この世界を殺す」可能性があるということ。…世界を殺すのは、第九の巫子の目的だ。

つまりエルミリ力は、自分と過去のチルタが接触すると踏んだのだ。ならば、ラファはそれを上手く利用せねばならない。

考えて、ラファはチルタの父に向けて深々と礼をした。

「…お世話になります」

チルタの父親が出て行っ、部屋には自分とチルタの二人きり。

どうしたものかと戸惑っていると、チルタが興味津々にラファのベツドに身を乗り出してきた。いつも憂えるような深い微笑みを浮かべていたチルタのあどけない表情に、ラファはもぞもぞと落ち着かない気分で彼を見下ろした。

「ねえ、お兄ちゃんの目、きれいだねえ」

覗き込んでくるチルタの茶色の瞳。

「パパが言っ、たよ。」るりいろのひとみ”はノルツセルの”あかし”なんでしょ？『かみさまに好きになっ、てもらっ、たし、うこ』なんだっ、パパが言っ、たよ」

「…！」

「かみさまに好きになっ、てもらっ、たのっ、て、どんなかんじなの？ねえ？」

神様に好かれる？馬鹿馬鹿しい。ラファは嘲笑したい気分を寸で、このでこらえた。自分が…ノルツセルが神に愛されるというのな

ら、何故ラファは赤の巫子になったのか。エルミリカは殺されたのか。レーチスは黒い本を見つけてしまったのか。

ラファは、無性に「ノルツセル」というものが醜く思えてきた。それら全てが神の愛だというのなら、それはもうすでに「呪い」ではない。

チルタはそれを知らないのだ。今も、これから。でなければ、レーチスの意志など継げるはずもない。

ラファがどう返したものと口を曖昧に開いたとき、盛大に部屋の扉が開け放たれた。見ると、あどけない顔をした黒い短髪の女の子が、男物の貴族服に身を包んでチルタを睨んでいた。

「チルタ！」

「る、ルナ」

ルナ？ラファは首をかしげた。どこかで聞いた名前だと記憶を掘り出すと、すぐに分かった。トレイズ達が話していた、ファナティライストの、巫子狩りのなまえだ。

トレイズ達の話だと、彼女は黒髪の美少女で、チルタに恋をしていらしいとのことだが、見るからに男勝りな女の子は、まっすぐにチルタに向かっていき、身を縮こまらせる彼の胸倉を引っつかんで揺さぶった。どう考えても未来にこの少年に恋をするとは到底思えない拳動だ。

「またお前は約束を破って！今日は私達の家に来るっていうから待ってたのに！！」

「ご、ご、ごごめんルナ……！」

「おい、放してやれよ……」

見かねたラファが思わず口を挟むと、ルナはぎろりとラファに視線を向けてきた。年下だと分かっているにも、殺気立った視線が恐ろしいことに変わりはない。ラファはたじろいだ。

「何者？おまえ」

「…ら、ラファ」

「ぼくの家に泊めることになったんだよ、ルナ」

取り繕うようにチルタが付け足す。胡散臭そうにルナはラファを一瞥すると、再びチルタに鋭い眼光を向けた。

「で？お前はこいつの世話してる所為で今日私達の家に来れなかったってこと？」

「ご、ごめん」

するとルナは怒りの矛先をラファに向けたらしい。じつとりこちらを睨めつける彼女に、ラファは僅か、たじろいだ。

「いきなり出てきやがって…お前、この家の親戚ってかんじでもないな」

「あ、はは」

警戒心むき出しのルナにどう返したものの。黒曜の瞳でまっすぐにこちらの瑠璃を見据えてくる彼女は、自分より随分と年下なのに、妙に威厳があった。

「えーと、その、俺は、」

「ラファおにいちゃん、ぼくの”ともだち”だよ！」

声を、張り上げて。言い放ったチルタに、ラファとルナは目を瞬いた。

「友達い？」

「そっだよ、ね、おにいちゃん！」

「え？あ…ああ、そっだよ。俺はチルタの友達だ」

この場合はチルタに合わせたほうがよさそうだ。ラファも頷いて見せると、ルナは若干不満そうに口を尖らせたものの渋々納得したようだった。

「チルタに友達ができたん、ならしょうがない、けど」

「うん！今から君達の家に行くから。ほら、行こうルナ！」
ぐいぐいとルナの背を押して、チルタは慌しく部屋を出て行った。
途中、こちらを振り向いて、任せるとばかりにひとつウインクして
みせた。…情けなくも、失敗してもう片方の目も半開きになってい
たけれど。

閉じられた扉の向こうに思いを馳せて、ラファは呆然と呟いた。
まるで人生の前提が覆されたかのようなだった。

「なんだ」
いい奴じゃないか、チルタ。ラファは偏見もなににもなしに素直にそ
う思った。

チルタは妙にラファに懐いていた。将来に自分の敵となる少年。気を許すのはいけないと自身に言い聞かせるも、しばらく彼の家に世話になるうちに、少しずつ彼と仲良くなるうとしていている自分がいることに、ラファは内心で薄々気づき始めていた。

チルタは優しかった。シエルではそれなりの名家らしい貴族の一人息子だというのに、わがままで横暴な所もなく、いつも誰かを気遣って。相変わらず何を計略しているのか分からないあの父親に、男手一つで育てられたにしては嫌にまつぐな少年だった。母は、チルタが生まれて間もなく流行り病にかかって亡くなったらしい。

ルナとは幼馴染だそうだ。彼女があのお老不死一族である「シエルテミナ」家の一人だと聞いて最初は驚いた。ラファがレクセの学生だった頃はその片鱗すら見たこともない「不老不死」が、まさかシエルの大貴族の名家だったとは。しかし毎日のようにやってくる彼女も、何故だかいつも男物の服を着てはいるがごくごく普通の女の子で、彼女もまた、巫子狩りに名を連ねるような存在には見えなかった。

そんなルナに、昨日こつそりと、どうして毎日忙しくなくチルタの元に通うのか尋ねたところ、頬をバラ色に染めて彼女はそっぽ向いた。

「チルタは、ほら。あの通り内気でおどしてるから、友達の一人もいなかったんだ。放っておくと、家の中に閉じこもって出てこないし」

なるほど、だから初めて会ったとき、ルナはラファがチルタの「友達」だから許したのか。不器用な優しさに思わず笑みを漏らすと、ルナは憤慨して怒鳴った。

「な…わ、笑うな！」

そして今日、ラファはチルタに連れられてシエルテナ家にやってきていた。流石不老不死一族の本家ともあって、街中からは外れた、クレイスファイアの端にある林を抜けた先に来てようやく見つけたその屋敷は、想像していたよりももつとずっと大きくて豪勢だった。家というよりは、城に近い。

広い中庭を通って、玄関らしき門まで辿り着くと、門前でルナが仁王立ちで待ち構えていた。

「遅い！」

「う、ごめん」

「悪い、ルナ。俺があちこち見て回ってたから」

以前来た時はティエラ探しに明け暮れて、ろくに観光もできなかった。事実も交えてラファの背中に隠れるチルタのフォローをしてやると、彼女はひとつ鼻を鳴らしてラファ達を玄関ホールへ通した。

内装は更に豪奢だった。ひとつひとつの細工に芸術性を感じるのはラトメの神宿塔に似ているが、こちらの方が随分派手で、一目見ただけでシエルテナの財力が窺えた。

不躰に周囲を見回すラファはいくつかの視線とかち合った。広々とした玄関ホールで談笑する女性達。彼女らの髪も瞳もルナのように黒くはない。女性達はちらとこちらを見て目を細めていた。…不躰な視線は、どうやらお互い様のようだ。

金の手すりに恐る恐る指先を触れて階段を上ると、ずんずんと一人先へ進んでいたが、ある一室の前でこちらに手招きしていた。ラファと大差ない様子で遠慮がちに大理石の床を歩くチルタと視線を交わして、二人はそっと彼女の元へと向かった。

「あれ、見たことない人ですね。あなたがチルタのおともたち？」
部屋には先客がいた。否、きっと彼女がこの部屋の主なのだろう。
ルナと同じ黒髪黒目で、しかも顔のパーツがやけに似ているが、彼女はストレートの髪をまつすぐに背中まで垂らして、なめらかな生地のできた、金系の刺繍が入った白い女物の衣装をきちんと着こなしていた。同じ高貴さを感じさせても、ルナよりも雰囲気がずっと柔らかい。二人並べばまさに王子と姫だ。

少女は優雅に腰掛けていた椅子から立ち上がると、レース地の力バーにくるまった本を脇の丸テーブルに置いて、ラファに向けて一礼した。年の頃はルナ達と大体同じだが、三人の中では最も大人びた表情をしている。

「お初にお目にかかります。私はレナ・シエルテミナと言います」

「あ…ご、ご丁寧にどうも…ラファ、です」

「レナは私の一個下の妹だ」

妹。それにしては大人っぽい。チルタが声を上げた。

「レナは身体が弱いからあんまり屋敷から出られないんだよ！でも、すつごく優しいんだ！」

「ふふ、チルタったら」

鈴が鳴るような声で笑うレナ。チルタは即座に顔を真っ赤にした。それを見たルナがわずかに眉をひそめる。…三人の関係性が大体見えた。ラファは必死で表情を隠しているルナを内心で慮った。

「ラファお兄さんは研究のためにシエイルにいらっしゃったんですよね？」

「そうだよ」

「すてき！じゃあ、シエイル以外の土地のことを教えてくださいな。」

クレイスフィーの城下のことはお姉様やチルタがいつも話してくださるんですけど、シエイルの外ってどんなところなんですか？森にはエルフという怖い生き物がいるって、本当？」

「エルフは怖くなんかないよ。人間と一緒に人里で暮らすエルフもいるし、楽しんだり、悲しんだり、人間と違うところなんてほとんどない。ただちょっと耳が長いだけだ」

インテレディアの宿屋の娘が快活に笑って言った台詞を思い出し、ラファは目を細めた。今ではもう遠い過去のように感じられるが、実際はものの数ヶ月も経っていない。その短い期間のうちで、よくもまあ自分はこんなに変わったものだ、以前はエルフという存在すら認めていなかったというのに。

それからラファ達は他愛もない会話に時間を費やした。自分は一人っ子だったから、突然に弟や妹ができた気分で、子供達に話をせがまれるのも決して悪い気はしない。思いつくままに、ラトメの神宿塔や、レクセでの立ち回り、ゼルシャというエルフの森に迷い込んだこと、シエイルでは宝探しまがいのことをやらされて、インテレの穏やかな村の情景は今も鮮明に思い出される。話は、いくら語っても尽きない。

日が暮れる頃になってようやく、レナが感嘆の声を上げた。

「わあ…旅って素敵なものですね！いいなあ、私もいつか旅に出られたらなあ」

「レナ…」

ルナが気まずそうに眉を寄せた。しかしチルタは頬を紅潮させて、興奮気味に言った。

「行こうよ！いつかレナが元気になったら、ルナと、僕と、ラファおにいちゃんと四人で！世界中旅して回って、誰も見たことないような場所にも行こう！」

いいよね？同意を求めるようにこちらを見上げるチルタ。レナは身体が弱いから、体力が必要な旅は難しいのかもしれない。姉であるルナの表情を見れば尚のこと。ましてラファは、未来ではチルタと対立することになるのだから。

紛れもなくチルタはラファにとって親の仇で、ルナはギルビスとユールをファナティライストに連れ去ったというし、まさか、一緒に仲良く旅をする、だなんて。

しかし、それを今の彼等に言っても、仕方がないことのように思われた。ラファは内心の複雑な心境は抑えて、ただ今はこの幼い少女少女たちを喜ばせるためだけに、言葉を紡いだ。

「…ああ、約束だ」

「やった！絶対ですよ」

歳相応にはしゃぐレナ。ルナはあまりにも嬉しそうな妹の様子に、ようやく苦笑を漏らした。

そういえば、チルタにも、ルナにも、巫子たちは接触したけれど、レナには誰も会ったことがない。

未来で彼女は何をしているのだろう？まさかこんなにも穏やかな少女も、ファナティライストについているのだろうか。

ふと疑問に思っても、返ろうと腕を引っ張るチルタに急かされて、その考えはラファの頭から打ち消された。

a c t ・ 4 7 紅いトラウマ（前書き）

今回から残酷描写があります。苦手な方はご注意ください。

チルタはどうして第九の印を継承したのか。彼が世界を滅ぼす”悪役”だと言うには、その小さな背中にはあまりにも頼りなかった。

思えば、未来で彼と出会ったとき。常に彼は穏やかな笑みを浮かべていた。無邪気さは確かになりを潜めていたが、この時代とやら変わらぬ笑顔。その手を赤色に染めても、表情のあどけなさは染まっていない。

もしかすると、チルタは”変わらないから”第九の巫子となったのかもしれない……ちらと浮かんた言葉遊びの意味を、自分で考えておきながらラファは推し量ることができなかった。

「ねえ、ねえ、ラファおにいちゃんは将来なにになりたいの？」

「うん？」

帰り道。チルタからの無邪気な問い。

「うーん……ちよつと前までは考古学者にでもなりたいたいと思ってたけど、今は決まってるないな」

「へえ」

「チルタは、なにになりたいんだ？」

するとチルタは、へらりと企みが成功したかのような笑みを見せた。「あのね、僕はお父さんの跡を継ぐんだよ！それでね、それでね、たくさんの人を助けるの！お父さんは、ま、”まじゅつようぐ”？の、お店の社長さんなんだ。このあいだ、お父さんが言ってくれたんだ。『おまえはお父さんの跡を継いで、立派にみんなを幸せにする商品を作りなさい』って！」

魔術用具店の社長。シエイルにそんなものがあっただろうか。十年度あとの記憶を探ってみるが分からない。未来に戻ったら、探してみるのもいいかもしれない。

チルタがあまりに楽しそうに父の事を語るので、ラファは彼の頭に手を置いて尋ねた。

「チルタは、お父さんのことが好きなんだな」

「うん！僕ね、僕ね、お父さんみたいに、やさしくて、すごい人になりたい！ラファおにいちちゃんのお父さんは、どんな人なの？」

ぴくり、指先が揺れた。唐突に体中の血液が沸騰したようだった。ラファは今すぐに、この小さな鳶色の頭を握りつぶしてやりたい衝動に駆られた。誰がそいつを殺したと思ってるんだと、怒鳴って、殴ってやりたくなった。

「……俺の、父さんは」

「チルタ！ラファさん！」

背後から、聞こえるはずのない声に我に返って、ラファは振り向いた。見ると、線の細い女の子が息を切らしてこちらに駆けてくるではないか。チルタが目をまん丸に見開いて、叫んだ。

「レナ！？」

「ああ、よかった…追いつきました…」

レナは、息切れた呼吸を、胸に手を当てて整えると、顔色を真っ青に染めたままチルタに詰め寄った。

「どうしたの？こんなところまで出てきて」

「二人とも、大変なんです！私の家にもつい先ほど連絡があったんですが、とにかく危険なんです、今すぐシエルテミナの屋敷に戻ってください！」

「ちょ、ちょ、ちょっと待てよ！何がどうなってるっていうんだ？」

ラファが軽くレナの肩を揺さぶると、ようやく彼女も平静を取り戻したらしい。何度か勇気を震わせて大きく頷くと、顔を上げてラ

ファを見た。

「襲われているんです」

「襲われてる？誰が誰に？」

「……チルタの家が、賊に」

「なんだって!？」

チルタが声を荒げた。温和な彼がここまで激情を表に出すのを、ラファは初めて見た。

「レナ、待って、賊って…そんな、だって家には父さんが、」

そこで、少年ははたと何かに気が付いたとばかりに言葉を切り、それから鉄砲玉のように一目散に町を駆け抜けていった。…自身の家めがけて。

「チルタ、待って、待って!」

「レナ、俺が見てくるから、お前は自分の家に、」

「嫌です!そんな、チルタ…お願いラファさん、私、私も連れて行ってください!」

「お前は病弱なんだろう?もうへとへとじゃないか!」

「お願い、ラファさん!」

まっすぐなレナの黒曜とラファの瑠璃がかち合った。その視線。どちらが優位かは、火を見るより明らかだった。…こういうとき、トレイズやギルビスなら、上手く言いくるめられるんだろうな。

考えたのは一瞬だった。ラファは身をかがめて、レナに背中を見せた。

「ほら、乗れよ。そっちの方が早いはずだから」

屋敷は炎に巻かれていた。周囲を取り囲むように、同じ衣装に身

を包んだ暗い笑顔を貼り付けた男達が、にやにやと炎に舐められる屋敷を眺めていた。おそらく、彼等が例の「賊」に違いない。肩のうしろでレナが恐れおののいて呟いた。

「グランセルド……！」

グランセルド？ 鸚鵡返しに尋ねる。一体何者だったか……旅中のどこかで聞いた単語だった。

「ああ、チルタが危ないわ！ ラファさん、急いで！」

レナが急かすので疑問は頭の隅に追いやって、門前に駆け寄ると、男のうちの一人が、剣を抜いてラファ達の行く手を阻んだ。マフラに隠れてその口元は見えないが、口の端が上がっているのは見なくとも声で分かった。彼らの金の瞳がぎろりと光った。

「おおっと、ここは関係者以外立ち入り禁止だぜエ」

「通してくれ！ ここを一人男の子が通っただろ……？」

「ひひッ、どうだったかなア。覚えてねエなア……まあ今頃は、中で見回ってるトレイズあたりが殺してるだろうよオ」

トレイズ。衝撃が胸を駆け抜けた。ラファは思わず、魔力を込めた左手首を男に向け、叫んだ。

「レナ、目を閉じる！」

きゅんっ！ 銀時計から放たれた光を浴びた男がうめくのも構わずに脇に蹴り飛ばして、ラファは屋敷に向けて一目散に走った。背後でラファを引き止める男の悲痛な声が聞こえたが、流石に炎の中にまで追いかけてくるつもりはないらしい。幸い、まだ火の手が届いていない玄関脇の窓を蹴破って、ラファ達は屋敷に飛び込んだ。

直後、肉の焼ける音と鉄錆の臭い、そして、うだるような暑さにラファは息を詰めた。チルタが向かうとすれば、父親の居場所だろう。応接室か、自室か、書斎か……とにかく、一番近いところから探していくしかあるまい。手近な応接室へと一歩踏み出すと、小さくレナが咳き込んだ。

「大丈夫か？レナ」

「こほっ…は、はい、とにかく、チルタを…」

「ああ、急ごう」

応接室はすでに崩れて入れなかった。すぐに引き返して彼の自室に向かう。チルタの父親の部屋は二階だ。一旦ホールまで戻って階段を上がらなければ。足元に倒れているメイドのステーキから目をそむけて、ラファはレナを背負う腕をちらと確認して走った。

その時。

「うわああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

「!!」

「!!」

「ホールからだ！」

響いた、チルタの悲鳴。震えるレナを気遣ってやれる余裕もなく、ホールへと向けて走った。

廊下の扉を開け、シエルテミナ家ほどではないが十分広く立派なホールに出ると…おかしなことだ、雨が降っているように感じた。空から水滴が次々とこぼれる。天井が焼けてしまったのだろうか。否、そもそも外にいたときは晴れていたのに？

前方で、チルタが座り込んでいた。彼に降り注ぐものを見てようやく、ラファはこれが雨ではないと気が付いた。

血だ。それも、この屋敷の人間の。

チルタの父親の死骸に縋りつく少年を見下ろす影が、ひとつ。自分が知っている姿より幾分幼いそのいでたちは、まだ十代の前半に見えた。片手に剣を携えて、赤混じりのブラウンの髪を紅色に染め

上げて、冷酷な金の瞳でチルタを射抜いて。

紅雨のトレイズ。

縁起でもない異名。あの朗らかな青年の過去。似つかわしくないと思っていた二つ名が、こんなにも彼にぴったりだと思っ日が来るなんて。

ラファはさつとレナを下ろすと、チルタの元へ急いだ。丁度、トレイズが剣を振りかぶるところだった。

「待てよ！」

「次から次へと……」

吐き棄てるように呟いて、トレイズはラファを見た。最初は胡乱げに、しかしラファの目を見て、すぐに笑みを漏らす。

「ああ……その瞳、お前だよ、お前。やっと見つけた」

彼は、何を言っているのだろうか？まるで自分を探していたかのような口ぶりに、ラファは眉をひそめた。トレイズは剣を収めてラファに笑いかけた。困ったような笑み。何度となく見たその表情。やはり彼は、トレイズなのだと確信した。

「依頼人からのお達しでさ。俺もよくわかんねえんだけど、あんたの眼が欲しいんだってさ。ここの主人がさ、なかなか口を割ってくれないから困ってたんだけど、」

こつ、トレイズがこちらに向かってくる。こつ、ブーツの踵が鳴る。こつ、背後のレナがラファの背中に縋りつく。こつ、チルタが呆然とこちらを見る。こつ、

小さく頭の中で誰かが囁いた。

——綺麗な眼だね。流石、裏市場で高価く取引されるのも分かるよ

正直な話…

自分が巫子としてチルタを殺すことを決めたのは、親の敵討ちというのも勿論あつたし、巫子になってレーチスのことを探ろうとしたことも含んでいるが、その決定打は、トレイズだった。

自分の頼みの綱にしているはずだったのに、彼はラファの意志を、駄々をこねていたのを尊重して、チルタの目の前で、ラファを”ただの学生”と称したから。

あの頼もしげな微笑みに応えたかったから。
それなのに。

どうして、自分は銀時計をトレイズに向けているのだろう。ラファは無性に泣き出したい気持ちに駆られた。

a c t・48 裏腹の後悔（前書き）

まだ残酷表現が続きます。苦手な方はご注意ください。

「チルタ！伏せろ！」

叫んで、そして、咄嗟に身体を床に貼り付けたチルタを見止めると、ラファは全神経を銀時計に集中させた。

直後、トレイズの悲鳴が、響く。

「うあああああああああああああつ！！！！！」

「っ！？な、なに…！？」

「チルタ！はやくこつちに！」

当惑するチルタとレナをよそに、ラファはポケットから白いチョークを一本取り出すと、手早く魔方陣を描いた。その間も、トレイズは頭を抱え、うずくまって涙ながらに叫んでいる。

「あ…ああつ、やめろつ、俺にこんなもの見せるな！！」

「レナ、チルタ、陣から出るなよ」

「や、やめてくれ…もうやめる、やめるよ、グランセルドなんてやめるから！！」

血の雨の中で懇願する紅雨を無視して、ラファは唱えた。

「『我らを照らす天空の覇者よ！今この地に恵みの光を与え我らを助けよ！導け我らが望む地へ…転移！』」

燃え盛る屋敷に取り残されたのは、無力な殺人者の悲鳴だけだった。

「はあ…はあ…」

「ラファさん…大丈夫ですか？」

「ああ…大丈夫、ちよつと、疲れただけ…」

二回連続の銀時計による魔術に加え、高度な転移呪文の使用で流石に魔力を使いすぎたらしい。息切れを整えながら、チルタの返り血で真っ赤に染まった肩に手を置く。

「チルタ…」

「ラファおにいちゃん…」

チルタの顔は酷い有様だった。煤と血にまみれて頬は薄汚れていたり、涙で目元はてらてらと妙に光を帯びていた。彼は情けない表情でこちらを見上げた。

「あいつ…あいつ、お父さんを斬ったんだ…」

「うん」

「お父さん、真っ赤になって…だんだん冷たくなって、血はとっても熱いのに、人形みたいに動かなくて、重くなって…」

「うん」

「……お父さん、死んじゃった」

「ごめん、チルタ、ごめんな」

思わず、ラファはチルタを抱きしめていた。自分の所為だ。そう言ってもどうしようもないのはわかっていた。自分のこの血が、チルタの家を襲った。

なんだ、自分だつてのちのチルタと同罪じゃないか。俺は、チルタの親を殺したんだ。

弱弱しくしゃくり上げながら泣くチルタ。レナもすんと鼻を鳴らした。

周囲に広がる、スラムの町並み。薄汚れ、血にまみれたラファ達に、貧民達の奇異の視線が突き刺さる。ここにも長居は出来ない。ひとまずスラムを抜けて、レナをシエルテミナに帰して、安全な場所に行こうとチルタたちを見下ろすと、背後から怒声がかかった。
「デメエエッ！！見つけたぞ！」

見ると、グランセルドが何人か、こちらをぎらぎらと睨んで追ってきていた。手にはそれぞれの得物。不吉な予感を察知して、ラフアは子供二人の手を引いた。

「走れ！」

「逃がすかあアッ！！」

「よくも仲間をヒデエ目に遭わせやがって！」

後ろを盗み見る余裕はなかった。ガシャツ、何かを構える音がする。ぞわりと底知れぬ恐怖に全身の毛が逆立った。

「ヒツ、ヒヤハハハハ！！喰らえエツ！！」

ダンッ！！

ラファが左手を握っている、レナの身体がふと重く感じた。視線を走らせると、彼女の小さな体躯がのけぞって、黒い目をまんまるに見開いて、髪をふわりと舞い上がらせて…

「レナ！！！！」

チルタが金切り声を上げた。

倒れこんだレナを抱え込んで、ぐるりと振り向く。眼球が飛び出るほど大きく目を見開いて嘲笑うグランセルド。その手には、黒い筒が煙を上げていた。――魔弾銃。すっかり見慣れてしまった、その武器。

ラファの中で、何かが盛大な音を立てて、切れた。

この感覚は知っている。この張り詰めた静寂。静かな水面のような怒り。とくん、波打って。頭の奥深くで、巫子となったときに聴こえた青年の声が、そっとラファを包み込むように響いた。

――…第二の赤の巫子の力は、”守る”こと…

誰だよ、お前は？聞かずとも分かっていた答えだったが、それでも答えないその声に、ラファは苛々した。

——幻術、守護陣…君の持つ力は刃を持たない

うるさい、俺はあいつらを殺してやりたいんだ！ラファは内心で怒鳴った。

——殺す？できるのかい？君に。ふふつ、だって君は、以前そうやって、チルタを殺せなかっただろう？

「うるさいうるさいうるさい！！！」

叫ばずにはいられなかった。自分の力が”破壊の力”を持たないことを、これほどにも憎いと思ったことはない。

「こんな、小さな子を…！！」

責任転嫁だということくらい分かってる。それでも、当り散らしたくてたまらなかった。

「一人守れずにいて、何が”世界を救う赤の巫子”だ！」

駆け出す。突然わけのわからないことを叫ぶラファに、グランセルドが一瞬、怯んだ。…お前ら全員、動かなくなってしまうえ！！

その時、ぴたり、グランセルドは石にでもなったかのように、訝しげな表情のままで硬直した。そういえば、初めてチルタと対峙したときも、同じことが起こった気がする。しめた。ラファは懷から護身用のダガーを取り出して、振り上げて――

「ラファおにいちゃん！！！！！！！！」

チルタの悲痛な叫びに、ラファはばかりと目が覚めた。
——ほら、やっぱり君には殺せない。くすり、優しげに青年の笑い
声が響いた。

どうやってあのスラムから逃げ出したのか、よく覚えてはいない。
気づけばそこはシエルテミナ家の前で。腕に抱えたレナの亡骸。ど
うしたものかと一瞬迷ってから、ラファはシエルテミナの門をくぐ
ろうとして、

「入っちゃ駄目だ」

前方から、声。ラファは足を止めた。見ると門の向こう側で、ル
ナが蒼白な顔色で立ち尽くしていた。

「ルナ……」

うよろけながら、門の鉄柵越しにレナに手を伸ばす、彼女の姉。す
べらかな頬を撫ぜた。彼女の美しい黒曜はもう見れない。

ルナは一瞬これでもかと顔をゆがめるが、すぐにラファを見て、
硬い声音で言った。

「今すぐレナをここに置いて、逃げろ」

「なんだって!？」

「ルナ、どういうこと?」

男二人が問うと、ルナが目を伏せた。

「どういうことだろうと何でもいいだろ、シエルテミナの敷地に入
るな。お前達はレナに会わなかった。自分達は命からがら屋敷から
逃げ出して、レナはお前達を心配して後を追ったけど、お前達とは
行き違いになった。レナの亡骸は、私がチルタの屋敷から連れてき
た。お前達はここへは来ていない。……いいか?」

「よくないよ!」

「そうだ、なんでこんなことになったのか…家族にちゃんと説明して…」

「駄目だ！」

ルナは今度こそ顔をぐしゃぐしゃに歪めてラファを見た。…ラファの、瑠璃色の瞳を。

「…グランセルドの奴らを、チルタの屋敷に送ったのは…依頼人は、シエルテミナ家だ」

「……え？」

「ラファ、お前をここに連れてきちゃいけなかった。屋敷の奴が父さんに…ウチの当主に言ったんだ。」ノルツセルがいる”って」

「……」

「ど、どういうこと？」

チルタ一人が話についていけずにいたが、ルナはちらと悲しげに彼を一瞥しただけで、再び口を開いた。

「シエルテミナは、不老不死一族には危険なんだ。あいつら、お前を手に入れるためなんなんでもする。私の友達だからって言い訳はきかない。もしここに入ったら、お前は…チルタと一緒に、さんざ利用されて、最後には魔弾銃で殺されるだけだ」

「おい…待てよ、一体なにに利用されるっていうんだよ……」

ルナは、ラファよりも十近く年下のはずなのに、その姿は畏怖すら感じるほどに威厳があった。彼女はゆっくりと首を横に振り、話を戻した。

「さあ、はやくレナを置いて、逃げろ。チルタも一緒に」

「いやだ！レナをこのまま置いていくなんていやだよ！」

「チルタ……」

ルナは笑った。ひどく自虐的だった。

「レナは、チルタのそういう優しいところが好きだって、いつも言

つてたよ」

「……！！」

「さあ、行け、ラファ！チルタを連れて」

ラファはしばし立ち尽くしていたが、やがてゆつくりと、レナを地面に下ろし、横たわらせて、チルタの手をしっかりと握った。

「ラファおにいちちゃん、…やだ、やだ！僕、行きたくないよ！」

「行くんだ、チルタ。無事を祈ってる。…もう会うこともないと願ってるよ」

「ルナ…っ、いやだ！いやだあぁっ！！」

「行こう、チルタ」

「うっ…うわあああああああぁあぁあぁっ！！！！」

最後には彼を抱き上げて林の奥めがけて走る。小さな少年は、ラファの肩に顔をうずめて泣いた。その姿を、ルナが悲しげな黒の瞳で見つめていたことも、知らずに。

チルタは泣きつかれて眠ってしまった。クレイスフィーを抜け出して針葉樹林帯を駆け抜け、ようやく見えてきた草原を歩くも、逃げるアテなどこの時代のどこにもない。チルタを負ぶって歩けど、見えるのは少ない養分を奪い合いしなになった草ばかりで、その道程は途方もないものに感じられた。

そういえば、この辺りだったか。ゼルシャの森を抜けて、気絶したラファが目覚めた場所。エリーニヤを庇って腹を刺された。

あの時感じた疑問。巫子が人々を助けるために存在しているのだとしたら、巫子のことは、誰が助けてくれるのか。

そんなの決まっている。ラファは足元の踏み潰した草を見て一人ごちた。巫子が人々を救ってくれるだなんて方便に過ぎない。誰も救えない巫子を、誰かが救ってくれるはずもない。

暗い夜空。ふと見上げていると、背後からのんきな声がかかった。

「ん？お前、こんな夜中にピクニックか？」

聞いたことのある声。ラファは弾かれたように振り返った。

ひとくくりにされた銀の髪。釣り目気味の瑠璃色の瞳。青年、レ
ーチス・ノルツセルは、ラファの目を見て少々驚いてみせた。

レーチス・ノルツセルの手首には、ラファのそれと全く同じ銀の腕時計が嵌められていた。レーチスも同じところを見ていたらしい。楽しげに、ああ、と声を上げた。

「君は、もしかしてラファか！過去に渡ってくるなんて、さすがは俺の息子の息子！……って、俺のこと、分かるか？」

気安くラファの肩を叩くレーチス。ラファは朧な視界で彼を見止めた。

「レーチス……」

「そう、天下の異分子レーチス様だ。それにしても、どこもかしこも真っ赤じゃないか。髪が固まってるぜ。おいおい、まさか怪我してるわけじゃないよな？」

「怪我は、してないけど」

レーチスの優しさは目にしみるようだった。少し体温の低い大きな手が肩に乗っている。世界に名だたる大悪党であるはずの彼が、今のラファには英雄に見えた。

「なあ、レーチス」

「うん？」

「いきなりごめん。でも、頼みを聞いてくれないか？」

相変わらず煤だらけの顔でレーチスを見た。彼はラファのその姿で何かを察したらしい。優しく微笑んだ。

「ノルツセルは、一族の奴のためならなんでもできるんだぜ」

それが答えだった。ラファは背に抱えていたチルタを見て、顔を歪めて頼んだ。

「こいつを……チルタを、預かって欲しいんだ」

「おいおい、俺に子守を頼む気か？知ってるかもしれないけど、俺

子供の扱いはものすごく苦手なんだよなあ」

レーチスは苦笑いを浮かべたが、ラファの願いを砕きはしなかった。眠りの世界に落ちたチルタを受け取って、まるで硝子細工に触るかのように恐々抱いた。

「ああ、やっぱり怖いなあ。おいラファ、この子が未来でどんな奴に育ってても文句言うなよ」

「そうになったら黙って恨んでやるから」

うわあ、レーチスはチルタを起こさないように朗らかに笑った。

ラファは柔らかなチルタの頬にかかった髪をそつと払って、呟いた。「俺はすぐに未来に帰るよ。俺と一緒にいると、チルタが危険だから」

彼が目を覚ましたら、チルタはどんな反応をするだろう。ラファは傍にいないくて、そして見知らぬ青年に託されて。ラファを恨むかもしれない。もう笑いかけてくれないかもしれない。憎まれて、もしかしたら殺されるかも。

それでも、本来この時代に居場所のない今のラファが、この時代の彼を連れて行くわけにはいかなかった。それがたとえ未来でも。

ラファは右手の薬指を見下ろして、そしてふと思い立って、チルタの両手をラファのそれで包み込んだ。

「チルタ、お前の人生をめちゃくちゃにしておいて、こんなこと、言える義理じゃないけど…」

目を伏せ、願った。

「チルタの行く先に、幸がありますように」

ふわり、夜風が舞った。むせるほどの草の香り。チルタにとっての未来が、自分の知るものより優しくありますように。

ラファは足元を見下ろした。先ほど踏みつけた草は元の通りに立

ち上がっていた。チルタにとっての世界が、自分の知るものより美しくありますように。

「俺、帰るよ」

「ん、そうか。気をつけて帰れよ」

まるで近所に住む友人に向けて言うかのごとく、軽い調子で片手を上げてみせたレーチスは、未来で会ったときと同じようにマイペースだった。それがとても安心した。彼に預ければ、チルタは大丈夫だと根拠もなく感じた。

右手の薬指に魔力を総動員させる。ふわり、すっかり懐かしく感じる、銀髪の少女の手がラファに伸びた気がした。おかえりなさい。囁く声。再びあの浮遊感を感じながら、ラファの意識は遠ざかっていった。

ラファが消えるのを見送ったレーチスは、ころりと足元になにかが転がって、つま先に当たるのに気がついた。うん？声を上げて身をかかめると、草の合間に、ラファがつけていた銀の指輪が落ちていた。

どこか硬い床に倒れこんだ。冷たい石の材質にひりひりと痛む頬。その空気はラトメよりも冷たくて、シェイルよりも張り詰めていた。ラファは気だるさを覚えつつ、身を起こした。

そこは庭園だった。広々としたそこは大きな公園にも見紛うが、自身の倒れている床は真っ白な石で出来ていて、神聖な雰囲気を感じ出すそこは神殿であることが容易に見て取れる。

「ここはどこだ？」

少なくとも今までに来たことがない場所なのは確かだ。ラトメの建物とは違う。他に、こんなに立派な神殿といえば…

「あらあらあら？こんなところで寝ていると、風邪を引いてしまいますよ？」

答えが喉まで出かかったときに、いきなり庭園のほうから妙に上っ滑りな優しさを込めた声。当惑したまま視線をやると、黒い神官服を身に纏った若い女性が、なにやら食えない笑顔で歩み寄ってきた。

黒い、神官服。やはりここは。

「このファナティライスト神殿で寝そべるだなんて、随分と度胸がありなんですねえ。それ以前に、そんな薄汚れた身なりで入ってこられては、シェーロラスディ世界王陛下の聖域を穢していると思われるてしまいますよ？えーと…」

「……ラファ」

「そうですか、とりあえずその衣服とお体をなんとかしないと。えーと、ラピー君？」

「だからラファだ！！」

以前も同じことを言った気がする。既視感を感じながら反射的に怒鳴るも、女性は軽い調子で、しかしちっとも面白くもなさそうにくすくす笑うと、ラファが立ち上がるのに手を貸した。

「ふふ、まあまあ、ちよつとからかっただけじゃありませんか。

わたくしはファレイアと申します。ファナティライスト高等祭司が一人です」

「こ、高等祭司？」

確か、今、高等祭司は二人しかいないのではなかったか。片方が、チルタ。すると目の前のこの女性が、もう一人の高等祭司？そんな馬鹿な。

何を考えているのか読めない笑みを浮かべて、ファレイアはラファの腕を引っ張った。華奢な体つきの割りに、とんでもない怪力だった。

「うふふ。話は後ですよ。とりあえずそのお召し物をどうにかしてしましましょう。わたくしの部屋へおいでなさいな。美味しいお茶もご用意してさしあげましてよ」

彼女のおっとりとしたペースに完全に吞まれて、わけもわからずにファレイアに連れていかれそうになったとき、前方から、”ここ数日”で会った時よりも随分と背の伸びた少年が、ゆっくりと歩いてきた。…天の助けと思ってしまったのは、マユキ達には秘密だ。『ファレイアさん、もう会議の時間ですよ。シェロ様がお待ちですって、どうしてラファ君がここに』

「チルタ」

「あらあら、もう見つかってしまいました。せっかく会議を抜け出すいい口実ができたと思ったのに。まったくもう、チルスケ君。駄目でしょう。会議にこない祭司なんて放っておかなくては」

「チルタです。そう思うならちゃんと会議に出席なさってください。それに、彼は僕の友人ですから、勝手に連れて行かないでください」

苦笑のままにチルタが返す。ファレイアはきょとんとして（どう見ても『フリ』にしか見えない拳動だ）チルタとラファを交互に見ると、あらあら、とわざとらしく口元に手をのせた。

「すねないでちょうだいな、チルタン君。わたくしはこのラフィ君の服を換えて湯汲みして差し上げようと思っただけでしてよ」

「ラファだ！」

「チルタです。…そうですね、確かにラファ君はお風呂に入らないと。じゃあ僕がラファ君を連れて行きましょう。ファレイアさんはシェロ様に申し上げてきてください。またどこかに行かないでくだ

さいよ」

きっぱりと言い切って、チルタはファレイアの手からラファの手を奪い取った。彼の少々体温の高い手がぎゅっと握り締めてくる。ファレイアはにこにここと裏の読めない笑顔でラファを見た。小柄な出で立ち、細っこい身体。しかしラファは絶対に彼女には勝てないと確信した。

「うふふ、愛されてるんですねランベル君？」

「…あんだ、それわざとだろ」

ファレイアは底知れぬ笑みをたたえたまま、白い渡り廊下をのんびりで行ってしまった。静かな庭園に残されたのは、ラファとチルタの二人だけ。やわらかな太陽の日差しに照らされたチルタの笑顔は、穏やかに目を細めた。

「僕の部屋に行こう。そんな服じゃ君、まるで乞食みたいだ」

「チルタ…」

ラファがもの言いたげに声を上げた。彼の過去に巻き込まれてしまった以上、知らぬ存ぜぬで単に彼を憎んでしまうのは、ラファには至難の業だった。

ラファの言わんとしていることが、チルタにも通じたらしい。彼は少し目を伏せ、ラファに背を向けると、自室に向けて先陣を切って歩き出した。

「…僕はね、ラファ君。もう一度会って、会って話したいと思うてる人がいるんだ」

その背中が、あの頃より広くなって、けれどちっとも頼もしく思えなかった。

「その人は、最後に会ったのはもう随分も昔で、顔すら曖昧に思い出せないんだけど…最後は煤だらけの顔で、服からは灰と血のおいがして、それで…すごく綺麗な瑠璃色の瞳をしていたんだ」

チルタは立ち止まった。振り返った。ラファの動揺を包み込むように、やさしく笑んだ。

ああ、そうか。ラファは納得した。彼はやはり、昔と今とで何も変わっていないのだ。昔の通り内気で、穏やかで、子供らしい少年に違いない。

もうラファに、彼を責めることはできなかった。自分も同罪。ラファは目を伏せて、チルタの微笑みを受けた。

「やっと会えたね、ラファおにいちちゃん」

ファナティライスト神殿の奥深くでその会議は行われるという。長机が置かれた一室。その上座の、一際豪華な椅子に掛けた男は、部屋に入ってきたラファ達を見るなり柔和に微笑んだ。

その髪はモスグリーン。見た目の年齢では30にも届かないように見えるだろう。髪と同色の瞳は奥深く、彼の意思を読み取ろうと思うことすら難しい。黒い衣装をゆったりと着込んでいる。

世界王シェーロラスディ・T・ファナティライストは、息子とは似ても似つかぬ穏やかな口調でラファを迎えた。

「ようこそファナティライストへ。歓迎するよ、ラファ君」

シェーロラスディは、チルタとラファを席に着くよう促すと、親しみを込めてにこりと微笑んだ。

「君の話はチルタからよく聞き及んでいるよ。私はシェーロラスディ・トルシェ・ファナティライスト。一応世界王のようなことをやっている」

「あ…あの、ラファ、です」

「はは、そんなに硬くなることはない。私のことはシェロと呼んでくれ」

そんな、恐れ多い。硬くなるなというほうが無理な話だった。彼はとても温和そうなのに、どこか有無を言わせぬ威圧感があつた。彼に見られただけで、射抜かれたような衝撃が走る。彼が口を開くだけで、身体が硬直し身構えてしまう。これが世界王の威厳だともいふのだろうか。しかし不思議なのは、そうした圧力が不快ではないことだった。

否が応でも従いたくなる王者。シェーロラスディ陛下は、それを

体現しているように見えた。

シェーロラスディの左の傍ら、腰掛けたファレイアが声をあげた。
「見ての通り、世界王としての立場を十分にご理解なさっていない方ですから、遠慮は無用ですよ、ラファ君。…ああ、チルタ。立っているついでにお茶を淹れてきてくださいな。じっくり煮出す茶葉がいいですね」

「はい、お待ちください」

ちらとチルタを見て、意味深に微笑むファレイア。その意図を汲むと、チルタは何の反論もせずに、本来は侍女のものであるはずの役目を受けて、一旦会議室を後にした。一瞬だけの、沈黙。シェーロラスディが口を開いた。

「さて…ラトメの惨状はこちらにも知らせが届いているよ。フェルがとうとう立場を捨てたというじゃないか。これは、巫子としての役目も変わってきたね」

「どういう…?」

「ラトメの集める”赤の巫子”。その目的は、世界を滅ぼすという”第九の巫子”の消滅…つまりチルタを殺すことだというのは、勿論知っているね?」

「…!」

ラファは息を呑んだ。そういえば、第九の巫子の消滅のためには、チルタ以外の巫子を全員集めなければならない。しかし、今や第一の巫子フェルマータは牢獄の中だ。

「しかも彼女はよりにもよって貴宿塔のエッフェルリスの監視下だというし、ね。彼のことは私も知っているよ。ラトメに生まれついているながら、”巫子”の伝承すら半信半疑の堅物さ。それだと巫子だからと言って牢から出してくれることに期待などはできないだろう。…まあ、今更というべきか、フェルのほうにボロが出てしまっ

たわけだ」

盛大に、わざとらしく、且つ楽しそうにため息をついてみせた世界王陛下。ラファは顔をしかめた。

「じゃあ、このまま世界が滅びるのを黙って見てろっていうのか！」
「うん？…ラファ君、君は今も本気で、チルタを殺したいと思っているのかい？」

絶句、だった。二の句も告げずにいるラファに微笑みかけて、シェーロラスディは卓上に組んだ自身の両手に視線を落とした。

「ちなみに、私は”否”だ」

「…！」

「何をそんなに驚いていらっしゃるのですか？わたくし共ファナテイライストが第九の巫子を保護しているのです。守りこそすれ、何故に殺すことなどいたしましょうか」

ファレイアも当たり前のように頷くので、ラファは呆氣にとられた。
た。

世界を滅ぼす存在…殺すことならいざ知らず、守るなど、世界を統べる王の立場からして決して褒められたことではないだろうに。目を瞬かせるラファに、シェーロラスディは穏やかに続けた。

「第九の巫子の持つ力は、…文字通り、”破滅”の力だ。命を壊し、運命を壊し、そして世界を壊す。しかし物事にはなんでも表裏があるものだ。彼の持つあの力は、自身の心を砕いてしまう」

「……え？」

「皮肉な話だ。最初に出来た印だから粗悪な部分が多いのか…彼のあの力は、少しずつ、少しずつ、しかし着実に、彼の”心”を切り崩していく。第九の巫子の力というのはね、人間が持つにはあまりに大きすぎるのだよ。一旦リミッターを外して力を解放してしまえば、チルタが”チルタ”足りうるその心…例えば彼の感情、彼の記

憶、彼の想い…それら全てを失うことになるだろう。だから私が、彼が彼のまま生きられるよう、この第十の巫子の持つ”封印”の力を持って、彼の力を制御している、というわけだ。…とはいえチルタと離れすぎるとその効果は薄れるから、あるいは何かしら力を暴走させてしまうこともあったかもしれないが」

ラファは思い出した。インテレディアで「僕の力はまだ未完成だ」と言ったチルタ。レクセディアで力を使ったとき、悲しげに笑ったチルタ。そして、初めて面と向かって彼と出会ったとき。

——そう…僕が”第九の巫子”だ。君がいずれ、殺すであろう人間だよ

死への覚悟。心を失うことへの覚悟。彼はどちらを願っていたのだろう。チルタは、この代償を知ってなお、第九の巫子となる道を選んだのだろうか。

「…チルタは、優しい子だ」

噛み締めるように、シェーロラスディは呟いた。

「とても優しい子だ。だが、世界の汚さを知っている子だ。この世の不条理を知って、本気でこの世を憂えた場合…その極限にある思想とは、”世界を壊してしまうこと”なのかもしれないね」

それは物理的かもしれない。大地が割れ、水に吞まれ、そんなこの世のあらゆる天変地異を起こすことも、あるいは世界の破滅といえるかもしれない。

もしくはこの世に住まう生命の命を皆砕いてしまうことも、ある意味では世界の終わりがかもしれない。

どうして。

「なんで、チルタは、そんなことを…」

「……約束を、」

ファレイアが、薄く笑みを、模った。

「昔、大切な人と交わした約束を果たすためだと、言っていましたよ。どんな約束かは教えてはもらえませんでしたか」

約束。

——行こうよ！いつかレナが元気になったら、ルナと、僕と、ラファおにいちゃんと四人で！世界中旅して回って、誰も見たことないような場所にも行こう！

そうだ。自分は何を忘れていた？

そもそも何故レーチスとミフィリが赤の巫子を生んだのか。何故エルミリ力が赤い印を考案したのか。

彼が、チルタが望むものは、

「——この世の規律を、壊すこと……」

息絶えたレナ。彼女を、生き返らせること。

「……馬鹿じゃないのか、あいつは！」

その原因を作った更なる原因がラファにあるとしても、叫ばずにはいられなかった。ラファは世界王の御前だということも忘れて、椅子を蹴倒して立ち上がると、会議室を飛び出した。

残されたシェーロラスディとファレイア。

「あらあら、シェロ様ったら、うまいことラファ君を誘導されたようですねえ」

「それを言うならファレイア、君の功績だろう？見事にラファ君をけしかけたじゃないか」

してやつたりな笑みを浮かべる食えない大人二人。それから、シェ

「ロラスディはなにやら口元に手を当てて声をあげた。

「おっと……そういえば、彼に”第九の巫子を殺さずに役目から解放される方法”を教えるのを忘れていた」

まあいいか。軽い調子でそう言つて、シェーロラスディとファレイアは上品な笑い声を上げた。

チルタはすぐに見つかった。というより、彼は会議室の扉の脇で、うずくまっていたのだ。

「……チルタ」

声を掛けると、彼はちらとラファを見て、自嘲気味に笑った。

「ただね、自分に出来ることはないかな、って……そう思っただけなんだ」

脈絡もなくそう言うチルタ。会議室の扉がわずかに開いていることから、彼も会話を聞いていたのだろう。

「エルミの盲目を治したのも、そのため。ノルツセルは、僕にとって特別だから」

「”過去夢の君”と、”予知夢の君”をなくすって言ったのは……」

「……そもそも、そんな存在がなければ、君は狙われることはなかったんだから」

ノルツセルが狙われるのは、単にその身体的特徴に希少価値があるだけじゃなくて、それを得られれば、自分にも過去や未来を見る魔力が備わると思つてる人がいるからなんだよ。そう付け足して、チルタはようやく顔を上げて、まっすぐにラファを見上げた。

「……僕は、正直言つと、ラファ君を恨んでたよ」

そんな表情には見えなかった。チルタは眩しそうにこちらを見上げていた。

「レーチスさんから、君は未来から来たって言われて、ずっと、な

んで僕を置いていったんだって怒ってやろうって、君を探してた。シエロ様にも協力してもらって、それで、ラファ君が第二の巫子になる可能性があるって言われて、すぐに巫子狩りに迎えに行かせたけど、紅雨に、阻まれたんだ」

人を捕まえること以外の任務は歴史上初めてだって言ってたよ。

笑うチルタ。ラファは笑えなかった。巫子狩りを迷うことなく斬ったトレイズ。…彼らに、敵意はなかった？

「モール橋で君を見たとき、なんかもう…どうでもいい気がしたんだ。ラファ君が、確かにそこにいて、生きてて、無事でいてくれたなら、もうそれでいいんじゃないかって。笑っちゃうよね、君を脅かすのは、他でもない僕自身だって言うのに」

ラファは、笑えなかった。

「君のご両親を殺したとき、もう僕は君の悪役になるしかないんだと思った。あのときの言い訳をするつもりはないよ。彼らを殺すのに迷わなかったのは事実だし、そこに大した悪意はなかった。あのときは、過去夢の君を…君を産んだ彼らが、心底憎かった」

あらかじめ定められた台詞を辿るように、チルタの言葉は平坦だった。ラファはもう限界だった。

「そんな僕を助けようなんて、思わないほうがいいよ。シエロ様も、ファレイアさんも、僕を買いかぶってる」

「……………るな…」

「僕は彼やラファ君のように優しくないんだ。こんな世界、簡単に壊したいと思えるんだから」

「…ふざけるな……」

「あはは！いつそ、世界の大罪人として名を残すのもいいね！そうしたら、僕もレーチスさんに近づけるかな？」

「ふざけるな！！」

思いきり、右の拳で彼の頬を殴った。彼は悲しげに微笑んだままだった。それがまた悔しくて、ラファは叫んだ。

「ふざけるなよ！！俺は…ッ、俺だって、お前が憎いよ！父さんと母さんを殺して、リイナを殺して、世界を壊そうとしていて、お前が…、お前がいなきゃ、俺はこんな非現実みたいな生活に巻き込まれずに済んだんだ！」

だけど、だけどさ！なんでそんな奴が…お前が、そんなに悲しうに笑うんだよ！！後悔してるみたいな顔なんてすんなよ！もっと胸張って、俺を蔑めばいいだろ！？お前が本当に”世界の大罪人”だって言うんなら、もっと俺も、心置きなくお前を憎めるようにしてくれよ！」

ラファもまたうずくまった。頭を抱えた。

「……俺は、馬鹿だ……」

搾り出すような声。

「俺は馬鹿だ、俺は馬鹿だ、俺は…ッ」

「ラファ君、泣かないでよ……」

「うるさいッ！お前が…本当にこれまでのこと後悔してるなら、もっともつと弱音吐いてくれよ！強がつてんじゃねえよ！」

「ラファ君、何が言いたいんだかわかんないよ」

「うるせえよ…俺だってわかんねえよ……」

やさしく、背中をさするチルタの手。しばらく動いていたその手はやがて止まり、ぽつり、チルタは呟いた。

「……どうして、だろうね」

か細い、チルタの嘆き。

「どうして、こんなことになっちゃったんだろうね」

ぱたり、真っ白な石の床に、チルタの熱い涙がこぼれた。

「レナを助けたくて、ラファ君と一緒にいたくて、それで巫子の力を手に入れたのに、どうして…どうしてこんなことしか、できなか

ったのかな？何で僕は、”壊す”ことしかできないのかな？僕：僕は、このまま、心とか、ぜんぶ壊れて、それで死んじゃうのかな？
…ラファお兄ちゃんに、殺されちゃうのかな？

…怖いよ、ラファおにいちゃん、こわいよ」

それは世界の大罪人にならんとする少年の叫びだった。小雨のよ
うにぱらぱらと落ちることば。

「たすけて…だれか、たすけて」

訴えるチルタのことば。ラファは、その嘆きを聞くことしかできず
に、この不条理な世界を、うらんで、

「…ちくしょおおおッ！…！」

無慈悲に彼らの涙を受け止める石造りの床を、強く叩くことしかで
きなかった。

act・51 ギルビスの意見では

その後。

あてがわれた部屋に通されて、ラファはぼんやりとベッドに転がって、チルタの今後を思った。

例えば、彼が生き残ったとして。そのときこの世界はどうなるのだろう。逆に、彼が死んだとして。否、殺せるのだろうか、自分達に。フェルマータはもう牢から出てこないのに。

答えもないことをつらつらと考えて、気づけば彼の疲れた身体は、眠りの世界へと沈んでいった。

「ギルビス君とユール君に、会う？」

そうチルタが切り出してきたのは翌日の昼だった。

そういえば、いろいろなことがありすぎてすっかり脇に追いやられてしまっていたが、ギルビスとユールはファナティリストに連れ去られていたのだったか。

チルタは薄く笑った。

「二人ともこちらでは特に危害を加えてないよ。ルナも大した怪我をさせたわけでもないみたいだし。ただ、外にふらふら出すわけにもいかないからね。この神殿の一室に止まってもらってる」

すると二人は無事ということだ。ひとまずそれにほっとして、ラファはチルタの申し出を受けた。

ギルビスとユールは同じ部屋に寝泊りしているようだった。チル

タと共に部屋に入ってきたラファを見て、ギルビスは表情を強張らせる。

「ラファ……」

「ギルビス、ユール」

それ以上会話を続けられずに口を噤んでしまうと、チルタが気を遣ったのか部屋から出て行った。途端、室内に広がる、沈黙。

まず口を開いたのは、ユールだった。

「お久しぶりです、ラファ先輩」

「あ、ああ……ユールも。怪我したって聞いてたから、よかった。無事で……」

「ということは、トレイズ達とは合流したってことでいいんだよね。あいつらとは……一緒にじゃないみたいだけど」

ギルビスも、表情を硬くしたままだが声を上げて、ゆっくりとラファを椅子に座るよう促した。

「トレイズ達がどうしているのかは、知らない。ここへは俺一人で来たから」

「……」

「あつ、べ、別にチルタの側に寝返ったとか、そういうんじゃないからな！……といっても、なんだかいりあつたから、何から説明していいのかわかんないけど……」

途方に暮れて頭をかくと、ギルビスは溜息を吐いた。

「はあ……まあ、いいよ。説明しなくても大体見当はつくしね」

「え？」

「シェーロラスディ陛下からお聞きしました。第九の巫子たるチルタは、八歳の頃に十七歳のラファ先輩と会ったことがあると」

ユールも後を続ける。ラファは呆気にとられて、彼の相変わらずぼんやりとした表情をまじまじと見た。ギルビスが肩をすくめた。

「当然、今から十年近くも前の時代に、十七歳のラファが存在しているわけがない。…あくまで、君が”ただの人間”なら、ね」

ギルビスはゆっくりと、その濃紺の瞳でラファを射抜いた。

「ラファ、過去の世界に行ってきたんだろ」

「……………それも、しばらくチルタの家に世話になってたよ」

白状すると、ギルビスは気が抜けたと言わんばかりに大きく伸びをした。

「これでようやく合点がいったというか…つまりは、チルタがラファだけを妙に意識してたのは、そういうことってわけだ。どうせラファのことだから、チルタに感情移入しちゃって殺すに殺せなくなっちゃったってところだろ」

二の句が継げずにいるラファをじとりと恨めしげに見たギルビスは、しかし視線を外して、窓の外に広がる庭の風景を見てもなしに見て、続ける。

「……………といっても、殺そうにも殺せないけどね」

「そうだよな…なんとかして、巫子の力をなくせないのかな」

「なくせるよ」

「そうだよな…って、え？」

ギルビスはのんびりと足を組んだ。

「聞いたことない？」第九の巫子を殺さずに済む方法」

「殺さずに…済む？なんだよ、それ！聞いたことねえよ！」

チルタを殺さなくても済む方法がある。じゃあ何故フェルマータはそれを教えなかった？自分が今まで悩んできたことは一体なんだっただんだ？

爆発的にラファの中で怒りがはぜた。ギルビスはそんなラファを呆れたように見やる。

「やっぱり知らないよね。まあ、簡単には出来ないことだし、普通

に第九の巫子を殺しちゃったほうが手っ取り早いんだから」

「どんな方法なんだ、それ!？」

「諦めること」だよ」

ラファは訝しげに眉を寄せた。ギルビスは謳いあげるように解説した。

「赤の巫子」が「赤い印」に、つまりは、世界創設者の意志だね。これに選ばれるというのは、ラファも身を持って知ってるよね？」

「えっと…そういうば」印」を継承したとき、「君は守りたいか」とかなんとか、言われたような…」

「そう、第二の巫子は」守り」を条件として選ばれる。何かを守りたい、そう強く願った者だ。こんな風に、赤の巫子になるためには一定の条件を満たさないといけない。例えば、僕は誰かを」救いたいと強く願ったこととか、ね」

ギルビスはそして、自嘲的に視線を逸らした。彼には、救いたいと願ったものがある。そして、救えなかった大切なものも。

「その条件ってやつは、巫子の持つ能力にも左右している。第二の巫子が持つのは守護の、第三の巫子が持つのは治癒の…といった具合にね。つまり、赤い印の発生源は巫子自身の」思い」なんだ。だから、その思いが消えれば…」

「巫子の役目も…消える？」

ラファが、後に続いて呆然と呟いた。

そうだ。何故気づかなかったのだろう。レーチスが第九の巫子の役目から解放されていることに。

フェルマータが「レーチスは死んだ」と言ったにも関わらず、ひよっこりとラファの前に姿を現したレーチス。彼は、他の巫子によって殺されているはずなのに。

——この子が未来でどんな奴に育ってても文句言っなよ

「未来」。なんとなしに言ったレーチスの台詞。なんとなしに……未来が続いていくことを是とした、レーチスの、台詞。

第九の巫子の力は「破滅」。そして、彼の願いは……

「それで、第九の巫子の”条件”というのは、なんですか？」

ユールの問い。ギルビスは肩をすくめて答えた。

「世界への絶望……世界の破滅”さ”」

レナを助けたくて。ラファを助けたくて。レーチスを尊敬して。トレイズを憎んで。エルミリ力を哀れんで。

それで得た巫子の力は、”壊す”ことしかできない。

「こわい」と、泣いたチルタ。この不条理な世界に、ラファは再び悔しさに涙したい衝動に駆られた。

act・52 幼き子ら

「とにかく、第九の巫子を殺す手が使えなくなった以上、僕らにはチルタに世界の破滅を止めさせることしかできない。それで、一番彼を説得できるのは、彼の味方に立っている人間だけだ。とはいえ、ルナのことはよく知らないし、シェーロラステイはどこか底が知れない。…となると、彼を止められるのは君だけだ、ラファ」

そんなことを言われても、どうしたらいいのかなどわからない。チルタの願いは身にしみて分かっている。あの日、あの時、四人で交わした約束。

——行こうよ！いつかレナが元気になったら、ルナと、僕と、ラファおにいちゃんと四人で！世界中旅して回って、誰も見たことないような場所にも行こう！

無邪気な願い。叶うはずのない願い。

「やった！絶対ですよ」
笑って言った、レナ。

止められるものか。

——チルタは、ほら、あの通り内気でおどおどしてるから、友達の瞳もいなかったんだ。

その彼が親しんで、好きだった幼馴染。彼が尊敬し、敬愛していた父親。屋敷の使用人たちも。彼の幼少時代の大事なものが、ぶっ壊されて。

止められるものか。

彼の大切なものは、ラファが過去に行きさえしなければ、起こらなかった損失だというのに。どの面下げて、彼を止められるというのか。

——この世界を生かすも殺すも貴方次第。ラファ……私の、私達の運命を貴方に託します

エルミリカの言ったことばが蘇る。彼女には、こうなることが分かっていたというのか。いつの間にか、指輪の消えた右手を見る。手を握り締めて、ラファは前方を見た。

白い廊下。果てしなく続いていくように見える。

「ひとまずは、人の意見を聞こう」

広いファナティライストのどこに彼がいるのかは判らないが、彼はなんとなく、すぐ近くでラファを待っている気がして。確証はない。……こういうのも、自らの身に流れる”血”によるものなのだろうか。

レーチス・ノルツセル。彼の人の居所を探すため、ラファは神殿の外へと駆け出した。……その時。

「お前、その怪しい奴！そこで何をしている！？」

黒いフードを目深に被った、巫子狩りの女。彼女は前方から魔弾銃を構え、こちらを警戒していた。

「お、俺は……！」

「ここをシェーロラスディ世界王陛下のおわすファナティライスト神殿と知つての狼藉か？覚悟……ん？」

「俺は怪しい奴じゃなくて、その、……え？」

巫子狩りのフードから覗いた黒曜と、慌てた様子で見開かれた瑠璃がかち合う。見覚えのある色彩。名を紡いだのは、ほぼ同時だった。

「ルナ？」

「ラファ？」

ルナは随分美しくなったと思う。昔は短かった髪は大分伸びてポニーテールにしていたし、顔立ちも体つきも、女性特有の柔らかいラインを帯びていた。以前の男の子らしい勝気な面影はどこにもない。彼女の髪と目が黒くなければ、きっと誰だかすぐには分からなかっただろう。

フードを取り払ったルナは、魔弾銃を下ろしてひとつ溜息をついた。

「そつえば、あなたが来ていたんだったわね。見慣れない顔だったから、不法侵入かと思ったわ」

「ご、ごめん…」

「こちらこそ、銃なんて構えてごめんなさい。それより、1人？チルタ様は？」

「いや、1人だ」

視線を逸らすラファに、ルナは眉を寄せた。

「…なによ」

「いや、その…外に出ようと思って」

「何考えてるの！？」

ルナが金切り声を上げるものだから、思わずラファはたじろいだ。だが、訳がわからないラファに、ルナは溜息をついた。

「ファナティリストがどんなところかくらい、ラファも知ってたと思ってた私が馬鹿だったわ。…あのね、この神殿の外は危険なの。

貴族の居住地は見慣れない貴方を平気で連行しようとするでしょうし、スラムでは身包み剥がされちゃうわ。初めての人は、よっぽど世渡り上手じゃないと切り抜けられないわ。…ラファには無理ね」「わ、悪かったな!」

彼女にとつては随分と久しい再会のはずなのに、ルナはまるでつい先刻会ったばかりの友人のようにラファに接した。と、ルナが肩をすくめて問うてきた。

「仕方ないわね。何をしに行くの？私も付き合っわ」

「えっ？」

「私のこの髪と目は、ファナティライストじゃ有名なの。私と一緒になら、誰も近づいてこないわ」

シエルテミナ。”巫子狩り”の、名門家系の証。ルナはちよつと笑って、その夜闇のような目を細めた。左耳だけについた、金色のイヤリングがきらりと光った。…とても、トレイズ達の話していたような、狂った少女には見えなかった。

「……有難いけど、もしかしたら相当、歩くかも」

「構わないわよ。なあに、そんなに遠くの店なの？」

「いや、買物に行くんじゃないわ——レーチスノルツセルに、会おうと思って」

ルナの顔色が、さあと冷えていった。その表情は、彼女がレーチスの正体を知っていることを物語っていた。彼女は、レーチスを恐れているようにも、憎んでいるようにも見えた。少なくとも、彼のことが好きだとは到底思えない。

「そう」

ルナはラファから視線を外し、風のそよぐファナティライスト神殿の庭園に目を向けた。ふわりと流されていく葉の軌跡を見るとともに見ながら、彼女は薄く笑んだ。

「……分かったわ。行きましょう」

もしかすると彼女は、幼い頃から賢かったのだ、ラファの目的すらも見抜いてしまったかもしれない。それでも彼女は何も言わずに、ただ頷いて、ラファを神殿の外へと導いた。

ルナに聞きたいことはいくらかでも見つかった。彼女自身のこと。チルタのこと。レナのこと。ラゼのこと。だけどそれらを聞くにはまだ二人の距離は遠すぎて、口を開くことすら、ラファには躊躇われた。

ラファより少し前を歩くルナのポニーテールが揺れる。周囲の貴族達は、ルナを畏れるように見た後、ラファにも奇異の目を向けてきた。

シエルテミナと一緒にいる少年。身なりがよければ話は別だが、ラファは身軽な旅装である。彼らから見れば怪しいことこの上ないはずだ。

「ちょっとびっくりしたわ。チルタ様が、ラファがここに来たと仰ったのを聞いて」

ぽつり、ルナが呟いた。

「気づいてた？私、あなたとラトメで一度会ってるのよ」

「……！」

ラトメ。そこで巫子狩りに会うといえ、それはラファが一番最初にチルタと対峙したときしかない。確か、あの時チルタの脇には女性の巫子狩りがいた。そういえばモール橋でチルタを見かけたときも。

あれは、ルナだったのか。

「チルタ様を睨む貴方を見て、この人が本当にあのラファなのかし

らって、そう思ったわ」

「……あの時の俺、何も知らなかったからな」

「そうね。……ねえ、ラゼに会った？あのひと、元気にしてる？」

ラファは弾かれたように顔を上げた。目の前で、ルナは足を止めて、まっすぐにラファを見ていた。…その瞳の奥の誰かを嘲るように、口元を歪めて。

それは酷く悲しげな表情だった。

「馬鹿よね。私がどれだけ、ラゼの人生を引っ掻き回したかも知らないで、私のこと友達だなんて言うんだもの」

「え…？それ、どういう」

「ゼルシャでルセルをけしかけたのは、私よ」

「……」

ルセル。もう久しく聞いていなかった名前。ラゼをファナティライストへと売ろうとしたエルフの青年。ラゼに、殺された…

「何を驚いてるの、ラファ？私は”巫子狩り”よ。チルタ様のためなら、なんでもやるわ。ルセルを、あんなエルフの1人くらい、簡単に捨て駒にできる」

それが、彼女の覚悟だとも言うのか。チルタと、レナと、楽しそうに笑っていた日々を捨てて。過去を捨てて、得た現在が、そんな。

そんな虚ろな瞳とでも、いうのか。

「ルナは、チルタのこと、知ってるのか？」

「まだ私の質問に答えてもらってないけど…まあいいわ。ええ、レナのことでしょう？知ってるわよ」

「お前はいいのか！？チルタが、そんな…そんなことのために」

「"そんなこと"」

神妙に、ルナは繰り返した。呆れたように、小さく噴出す。

「…そうよね。”そんなこと”」

「あつ…ごめん、俺、…ルナの妹なのに」

「いいえ。そうね…本当に、彼はなにをやってるのかしら」

ルナは決して泣かなかった。レナが死んだときも、そして今も。

けれどあの時と同じ目をしていた。顔をゆがめるだけで、至宝の黒曜はからからに渴いていた。

「ラファになら、言ってもいいかしら」

「なんだ？」

「私ね、…チルタのことが、好きだったの」

知ってたよ。心の中で、ラファは呟いた。

「でも、でもね。チルタとルナが一緒にいると、私まで嬉しくなったの…それは、本当なの。私、レナを好きなチルタが、好きだったの」

ぼろぼろに崩れた笑顔だった。さらに、彼女の前髪が耳から零れ落ちた。

「なのに、チルタ様は今でもレナの影を追ってるの。私を見ると、あの方、ちよつと泣きそうな顔するのよ。まだ泣き虫、治ってないのね。だけど、それをやめてくれって、レナは生き返ってもきっと喜ばないって、…私を見てって、そう言えないのは、多分、私が弱いよね」

憂いの表情はレナそっくりだった。彼女も同じように成長していれば、今頃はますますこの双子はそっくりになっていたに違いない。「私だって…巫子なんてやりたくないわ。チルタ様が、チルタが、

死んでしまつたら、それでレナが生き返つたつて、嬉しくなんてないのよ。こんなシエルテミナの肩書き、あつたところでなんにもならない。ならいつそ…いつそ、」

世界なんて壊れてしまえばいいのに。そう呟くルナの奥で、ぱりんと何かが割れる音がした。

黙りこくるラファとルナの沈黙。その空気を突き破るかのように、陽気な声が響いた。

「あれ、ラファじゃないか。奇遇だなあ。こんなところで何やつてるんだ？」

彼はいつだって、助けが欲しいときに来てくれる。それを彼自身が理解しているとは思えない。だがレーチスは、頼もしい笑顔と共に駆けてきた。

「レーチス……」

「よお。うん？そちらはシエルテミナのお嬢さん。大層な人と知り合いになったもんだなあ、ラファ。流石は俺の息子の息子だ！」

「……失礼ながら、その家名はあまり口に出していただきたくはありません、レーチス・ノルツセル卿」

「レーチス、彼女はルナ。チルタの幼馴染だよ」

ルナの肩が跳ね、恨がましげな視線を向けてくる。彼女はチルタとの繋がりをあまり口に出したくないようだったが、それでも、今のルナには、こういう紹介が一番合っている気がした。するとレーチスは眼を丸くしてルナを見た。

「へえ。そりゃ、ウチの不肖の息子が世話になってるな」

「……どうも」

「あ、怒るなよ、ラファ。チルタが”ああ”なるように育てたつもりは俺にもないからな。俺は手塩をかけて大事に大事に育てたんだ！素直でいい子だろ？子育てが苦手な俺にしちゃ、上出来だと思わないか？」

「親馬鹿はどうでもいいよ、レーチス、巫子のことと話したいことがあるんだ」

ラファが言うと、彼はおどけた調子を引つ込めて、決然としたラファの目をじつと見た。

「…長い話になりそうだな。どこか落ち着ける場所を探そうぜ。立ち話もなんだしさ」

そう言うレーチスに連れてこられたのは、小さな宿屋のレストランだった。こじんまりとした雰囲気、静かな店内には古っぽいメロディが流れていて、それは少し焦りだしていたラファの心を、ゆっくりと鎮めていった。

「ここ、前にエルと一緒に来たんだ。えーと…2、3年前だったかな。いい店だろ？」

「ああ。それで、レーチス」

「分かってるよ、チルタに世界の破滅をあきらめさせるためにはどうしたらいいか、だろ？」

ラファは思わず口をつぐんだ。まったく、彼にはなんでもお見通しというわけか。

レーチスはからから笑った。

「そんなもん、無理だろ！」

「…！そんな簡単に言わないでください！」

激昂するルナに、レーチスは肩をすくめてみせた。

「無理だよ。あいつがレナちゃんの死を受け入れるか、それこそレナちゃんが生き返りでもない限りはな」

レーチスのその台詞は、なにか含みがあるように聞こえた。ルナの顔が歪む。二人の間に、眼に見えない火花が散った。

「お、おい二人とも…」

「まあ、落ち着こうぜ、ルナ。まずは問おう、ラファもだ。二人は、チルタを殺してまで、世界を守りたいか？」

「いいえ」

ルナは即答した。当然の返答だった。だが、ラファはしばし迷った。

「…俺は、別に世界を守るために、チルタを殺すべきだって考えたことは一度もないよ」

「へえ？」

面白がるようなレーススの声。ぴきっ…頭の中のどこかに、不自然な亀裂が入った。

「なんていえばいいのかな…確かに巫子になったときは、ひたすら自分とマユキを守らなきゃ、とか…そんな”守る”ことばかり考えてたけど」

その”どこか”の亀裂はどんどん深くなる。まるで自分の一部が壊れてしまうような。だけど何かに背を押されるように、ラファは言い切った。

「”守る”とか、そんな大それた建前はいらなかったんだ。俺はただ、自分が生きたくて、チルタにもこの世界で生きて欲しくて、いつかはチルタとの約束を果たしたいって、一緒に世界中を旅して回りたいって、たったそれだけの話なんだ」

ぱりん。小さな小さな、ラファの中に潜む硝子細工が、かすかな音を立てて、壊れた。

「……………そうか」

レーススは満足げに笑った。

「流石は俺の息子の息子。いい答えを見つけたな」

「いや…って、そんな、俺のことはどうでもいいんだ。それよりもレーススの話を、」

「そこにいる男が、あなたの望みの答えを与えてくれると思った

ら大間違いですよ、ラファ様」

どきり。心臓が大きな音を立てると、レストランの扉が開かれるのとはほぼ同時だった。入ってきたのは、男物の旅装の少年…否、少女。銀髪に瑠璃の瞳。エルミだった。

だが、彼女に声をかける前に、ラファは頭を金棒でぶん殴られたような衝撃と共に固まった。

エルミは一人ではなかった。次に現れたのはレイン、彼も動きやすそうな旅装束に身を包んでいた。そして二人は扉を開けたまま立ち止まり、残りの人間を中へと促した。前から、トレイズ、ロビ、ラゼ、そして…マユキ。

「よお、エル。久しぶり」

「レーチス、お久しぶりです。ラファ様もご無事で何よりです」
「れっ、レーチス!？」

マユキが眼を丸くした。そういえば、なぜか幻覚をかけていたはずの彼女の髪が紅くなっている。過去に渡っていたせいで効果が切れたのだろうか。彼女はこちらに駆け寄ってきて、レーチスとラファ、そしてルナを見回して、最後にラファを見る。

「ラファ!心配してたんだよ?いきなりラトメからいなくなっちゃって、どうしてファナテイリストに?なんでレーチス…さん?と一緒にいるの?それに、その人…そのマント、み、巫子狩り!？」
「マユキ、落ち着けよ。ちゃんと説明するから」

マユキは厳しい顔でルナを見たが、彼女のほうはマユキなど見てはいなかった。まっすぐに、愕然と頬の筋肉を突っ張らせて、ラゼを見ていた。

「ラゼ…」

「る、ルナ、なんで…」

ラゼが言い終える前に、ルナが盛大な音を立てて席を立った。

「…帰る」

「えっ！？おいルナ、待てよ、」

「世界王子がいらっしゃるのだから、ファナティリストの中でも私がいなくても大丈夫でしょう。私はチルタ様のところに戻るわ」
「だけど、」

ルナがフードを目深に被って、ラファを見下ろした。黒いフードの隙間から彼女の黒い瞳がぎらりと光った。

「こんなところで言うのは誤解を生みそうだけど一応言っておくわ。……チルタの友達は、ラファ、あんた一人。それは間違いない。でも、付き合いが長いのは私のほうよ。あんたの気持ちは分かるけど、

私に同情してくれるなら譲って頂戴。邪魔は、させない」

なんの、邪魔だろう？

チルタの邪魔だとは思えなかった。まるでルナ自身が意思を持って何かを画策しているようだった。…それも、なにかろくでもないことを。

ルナはレーチスに目礼すると、立ち尽くすトレイズたちを押しつけてレストランを出て行こうとした。呆ける一行の中で、ラゼだけが叫ぶ。

「ルナ！」

「……まだ私の名前が呼べるのね、心底馬鹿なひと」

冷たい視線で、ラゼを射抜く。ラゼは震えた。ルナは鼻を鳴らし、今度こそ立ち去っていった。その背中が、やけに小さく見えた。

ラファはため息をついた。
「何考えてんだ、あいつは」

「ラファ！ちゃんと説明してよ、どういうことなの？」

「マユキ、少し落ち着けよ。…ラゼも。とりあえず座ろうぜ」

トレイズが、ここに来て初めて口を開いた。ラファは思わず唇をかみ締めた。…彼の眼を、正面から見られる自信がなかった。

「とにかく、よかった、ラファ。急に行方不明になるもんだから心配したんだぞ」

心配。その単語に、再び胸がうずいた。とすると、エルミは彼らに何も説明してないらしい。うつむいたまま、ラファは席に着く面々に問うた。

「あれから…どうなった？ラトメは」

「何も変わってないよ。フェル様…ううん、母さんは新しい”神の子”が見つかるまで、牢に入ったままだっという話だし、だけど巫子としての務めは果たさなきゃいけないしって、ひとまず第十の巫子であるシェーロラスデイ世界王陛下にお会いしようって話に…そうしたらクルドが、ラトメがあんな状態だから、ファナティライストとラトメの関係についても、話し合わなきゃならないって言ってるね、エルミとレインも一緒に」

「本当に大変だったんですよ！エルデイが自分も行くって駄々をこねて！エルミとトレイズさんがなだめて、どうにかラトメに置いてきたんです」

レインが胸を張って誇らしげに言うので、思わずラファは上げまわしとしていた顔をレインに向けてしまった。

「え…なんでエルデイは置いてきたんだ？」

「エルデイは事情に詳しくないんですよ、ラファ様。エルミが過保護なもんだから何も説明してないんです。あ、ちなみに僕は全部エルミから聞いてますよ」

「え！？」

「あはは、何驚いてるんですかラファ様。エルミって実はそんなに口が堅いほうじゃないんですよ。…ああ、勿論あなたのこともお伺

いしてます、レーチス・ノルツセル卿。僕はレインといいます」

レーチスはしばし目を瞬かせ、それから笑った。

「へえ、じゃあエルが神護隊でやっていけるのはキミのおかげでわけだ。エルが世話になってるな」

「……失礼だけど、あんたは？」

トレイズが問うと、レーチスは肩をすくめてなんとなしに答えた。

「ああ、自己紹介がまだだったな。俺はレーチス・ノルツセル。まあ分かりやすく説明すると……」異分子”って言ったほうがいいか？」

「”異分子”って……第九の印を創った!？」

「冗談にもほどがあるね」

「残念ながら冗談ではないんだよ、ロビ・シェーロラスディ・ファナティライスト王子殿下。なんならキミのお父上に聞いてみるといい。きっと食えない顔して笑うに違いない」

ロビのポーカーフエイスが瞬く間に怒りに染まった。不機嫌丸出しの幼馴染の様子に嫌な予感を悟ったのか、トレイズがあわてて話を戻した。

「そ、それで、ラファは？今までどこで何をやってたのか教えてくれるよな？」

ラファは、ちらとエルミを見た。彼女は穏やかな水面のように冷静だった。

「……過去に、行ってきた。今から十年くらい前の、シェイルディアに」

「過去!？ラファ、それ本当？」

「なるほど、”過去夢の君”の能力ってわけだ」

「ああ。そこで、過去のチルタと一緒に、暮らしてた」

一瞬ざわめいた席が、突如凍りついた。ラファは深く頭を下げた。

「ごめん。チルタが第九の巫子になったのは、俺のせいだ」

「お、おい、何言っただ、ラファ？」

「トレイズ。グランセルドにいたとき、シエルテミナから依頼を受けたこと、なかったか？」ノルツセルの眼”をもってこいつて」

まっすぐに、トレイズを見た。トレイズは記憶を手繰るようにラファを見て、そして、その表情から、笑みを拭い去った。静かに佇むラファと、そして左手首に変わらずある銀時計を見比べて、愕然とした。

「おまえ、まさか、あのときの」

「チルタが”紅雨のトレイズ”を憎んでたのは、トレイズ。あんたがチルタの家を襲って、家族を殺したからだ。そして…その原因を作ったのは、俺だ」

当惑した仲間たちの表情。すると、眉をひそめたままロビが口を開いた。

「つまり、こういうことかい？ラファは過去のチルタの元へ行つて、そしてどこかでノルツセルであることがばれた。ノルツセルの瑠璃の眼は貴重だから狙われる。それでグランセルドがチルタの家を襲つて、チルタは家族を失った」

「ああ。…あいつの人生をめっちゃめっちゃにしたのは俺だ。殺すなら、俺を殺せ」

「ラファ！そんなこと言わないで！」

マユキが大声で抗議した。

「チルタはラファのお父さんやお母さんや…リイナだって！ラファにはあの人を庇う理由なんてないでしょう！」

「約束したんだ」

ラファは微笑んだ。無性に、笑いたくなつた。あの約束を思い出すと、どこか胸の奥が暖かくなるのだから不思議だ。打算もなにもな

く、ただ敵だとばかり思っていたチルタを喜ばせたいがために、ただそれだけで紡いだあの約束。

「チルタや、ルナと、一緒に行こうって、約束した。もう、俺はあいつらを裏切りたくないんだ」

言葉が足りないが、これでいいんだ。余計なことを言って彼女らを惑わすことはない。目を伏せて、ラファはマユキたちからの怒声を待った。

しかし。

「ねえ、ラファ。教えて。チルタやルナはどうして、世界を壊そうとするの？」

沈黙を破り、水面に落ちた一滴の雫のような声を上げたのは、今まで放心したように全く口を開かなかったラゼだった。その瞳はひどくまっさらだった。嘘もなく、真実もなく、善もなく悪もなかった。いつそ空虚と言ったほうが正しいかもしれないその視線は、ゼルシヤの牢獄で初めて彼女と出会ったときと同じ光をまとうていた。

マユキが彼女をとがめた。

「ラゼ！あなた…」

「ねえ、お願いラファ。私、彼らのことが知りたいわ。彼らの過去を見てきた、他でもないあなたに。…私、ルナにはああ言われたし、ルナには騙されてたんだって分かってる。でもね、私、ルナとまだ友達なんだって、そう思ってる。友達のこと、私、ちゃんと知りたいわ」

マユキは困惑していたようだったが、他の面々はどこか感心したようにラゼを見ていた。レーチスに至っては、口笛まで吹いている。「へえ。なかなか見所のあるお嬢さんが仲間にいるんだな。おいラファ、話してやれよ」

「だけど」

「いいんじゃない？僕も聞きたいね。どっちみち奴を殺すのはもう無理なんだし、それならラファの情報はきつと役に立つよ」

「ロビ」

それでもトレイズとマユキの表情は浮かないままだったが、ラファは意を決して話すことを決めた。頭の中で、レナの笑い声が、儼く響いていた。

「なるほど、ね」

「じゃあチルタは、そのレナって子を生き返らせるために、第九の巫子になったのね」

ラゼは眉尻を下げた。ロビは気が抜けたとばかりに伸びをしながら気楽に言った。

「結局のところ、利己的なのはお互い様ってわけだ！片や愛のために世界を壊そうと目論んで、片や平穩のために世界を守ろうとしているってことかい。あのぼーっとした顔で何考えてんのかと思ったら、あはは！奴にも色々思うところがあつたみたいだね」

「ロビ！笑い事じゃないよ！」

マユキはむつつりしていた。だが、それをトレイズが制す。

「マユキ、お前、もしラファが誰かに殺されたら、どう思う？」

「そんなの、わかんないよ。だけど私、チルタの考え方、わかんない。おかしいよ、死んじやってもういない人のほうが、世界より大事なの？」

「そりゃ、俺には耳の痛い話だな」

レーチスが苦笑した。見るとエルミも笑っている。

「僕もどちらかといえばマユキ様に賛成ですね。世界の理というのは人間ごときが個人のために操れるほど容易くはない」

「でも、もう賛成とか反対とか言ってられないんですよ。チルタに世界の破滅をあきらめさせる、引いてはレナさんを生き返らせることを諦めさせることでしか、巫子の役目を果たす方法はないんでしょう?」

「ああ…」

レインの台詞に、口ごもるラファ。ギルビスには、「止められるのは君だけだ」とまで言われた。だが、諦めさせると言ってもどうすればいいのかわからない。自分に、その資格があるのかどうかすら。

すると、レーチスが首をかしげた。

「なんだよ、ラファ。気づいてなかったのか? お前、もう巫子じゃないんだぞ」

「……え?」

巫子じゃ、ない? 何を言ってるんだ、彼は。

「馬鹿言うなよ、俺、だってずっと巫子の力を使って、マユキの髪だって、」

そこまで言って、気づいた。マユキの髪が、紅い。自分に、幻術を解いた記憶はないのに。

マユキは紅い髪をつまみあげた。

「これ? これ! この店に入る直前に気づいたの。ロビが言ってくれて」

「嘘だろ!?!」

ラファは両手を握りしめ、念じた。第二の赤い印よ! ラトメで、エルディにしごかれて散々使いこなそうと奮闘した文句だが、あの骨を焼くような熱は浮き上がることなく。そしてマユキの髪はいつまでも血色に染まったままだった。

問いただすようにレーチスを見ると、彼はにやにやと笑った。

「自分で言っただんじゃないか。」守る”とかいう建前はいらないう

て
「は」

ギルビスが言っていた。赤い印の発動源は、巫子自身の”思い”だと。その思いが消えれば、巫子の力は失せるのだと。そして、第二の巫子の条件は…”守る”こと。

「だけど！チルタは世界を壊すのがこわいって言ったのに、”印”は消えてないぞ！？」

「”こわい”程度じゃまだだめなんだよ。”やりたくない”って、”やらない”って、心の底から思わなきゃ。

まあ、今更ラファがどうこう言っても、もしかするともう片がついてるかもしれないな」

「！？」

「どういうことだ？」

トレイズが問う。レーチスはやと人の悪い笑みを浮かべた。

「ルナがもう行動を起こしてるってことさ」

世界の破滅。それを止めるためにはどうすればいいか。チルタが諦めるにはどうすればいいか。レナの死を受け入れるか。

レナが、生き返る、か？

「まさか」

ラファは気づいた。ルナは言った。「邪魔はさせない」と。そうだ、あるじゃないか。彼女にしかできない方法。巫子でなくてもできる、ただルナにしかできない簡単な方法が。

レナを、生き返らせれば、

「あの馬鹿！」

「ラファ！？」

席を立ち、レストランの外へと駆けていくラファ。わけが分からずに呆ける面々の中で、エルミリカとレーチスだけが冷静だった。

「……相変わらず、最低ですね、レーチス」

レーチスはいつそ嬉しそうに、笑みを深めるばかりだった。

ファナティライスト神殿の一角、その少女は静かにたたずんでいた。ストレートの髪をまっすぐに背中まで垂らして、なめらかな生地のできた、金糸の刺繍が入った白い女物の衣装をきちんと着こなして。

黒髪に黒曜の瞳の少女。彼女は麗しきファナティライスト神殿の庭の中で、静かに、静かに、穏やかに、天使のように、ひとり、たたずんでいた。

そこへやってくる影が、ひとつ。黒衣を身にまとったチルタ。書類を小脇に抱え、廊下を歩き、ひとつため息をつき、ふと顔を上げて、

少女を、見る。

その穏やかな雰囲気、惑わされる。

まさか。

まさか。

まさかまさかまさかまさか、まさか。

「レナ？」

少女はゆっくりと立ち上がり、振り返って、チルタを見て、微笑んだ。

ぱきん。どこかで、硝子細工が壊れる、音。

「待つて、ラファ！」

マユキが、店から飛び出したラファの腕をひつつかむ。自分よりも彼女のほうが足が速いというのは情けない。ラファは振り向きざま言った。

「行かせてくれ！ルナを止めなきゃ」

「なんで？チルタの”印”が消えるんでしょう？ならいいじゃない」

マユキは、相変わらずラファの行動を理解しかねるようだった。

確かに、マユキの言い分には一理ある。この馬鹿げた物語から解放される。巫子の役目を、あんなに疎んでいた、手を汚すことを免れる。ああ、なんて素敵な終わりだろう！

「だけど、だけど！」

「うまくいえないけど、でも、駄目なんだ！ルナの方法じゃ」

「だけど、今欲しいのは自分とマユキだけの幸せじゃない。旅をはじめの前よりもラファは欲張りになっていた。物語の終わりにあるのは、そう、皆の笑顔でなくてはならない。ハッピーエンドじゃないといけない！」

すると、マユキは何かおかしなものを見る目でラファをじっとりと見据えた。

「ねえ、やっぱおかしいよ、ラファ。ルナが解決できるんなら、」

「俺はノルツセルだ」

マユキが、どこか愕然とした表情を、こちらに向けた。それは一種の拒絶だった。自分と彼女は違うという、決定的な壁をたたきつけた。そうしてでも自分には行かなければならなかった。

「チルタのためなら、なんでもする」

レーチスが息子と呼ぶ彼は、もう一族の仲間だ。

もちろんそれは方便だ。なにより自分が、自分の意思で、彼と生きたいからに他ならない。

マユキは顔をゆがめた。

「私は、ラトメだよ」

「知ってる」

「でも、私たち、親友だよ」

「勿論だ」

「じゃあなんで！」

血を吐くように叫ぶマユキにとって、ラファの行動は裏切りに見えるのだろう。あるいは本当にそうなのかもしれない。でもラファはかまわなかった。ラファにとっては、マユキはマユキであり、チルタはチルタだった。それ以上でもそれ以下でもない。どちらの敵でもなく、そして両方の味方だった。

「俺が、ラファ・ノルツセルだからだよ」

そして、自分はどこまでも自分だった。

レクセディアの一角に生まれ、

現実主義で夢物語を嫌い、

ルイシルヴァ学園の学生となって、

マユキと出会い、

巫子になって一旦は逃げて、

トレイズやギルビス、ラゼにロビ、

そしてフェルマータやシェーロラスディと出会い、ルナやチルタと出会い、

他の多くの人間と出会い、

それらの出会いから得たたくさんの糧から、見つけ出した自分だけの決意。

ラファ・ノルツセルという人間に素直であること。それは裏切りよりむしろ、これまでの愛しい出会いへの礼のようにすら思えた。それがたとえ、親友であるマユキと違う考えであつても。

今、マユキ達と会えてよかった。そうでなければきっと、今も自分では迷つていただろうから。

「俺は、自分に正直に生きていくよ。だからマユキ、マユキもそうすればいい。…そうだ、ユールたちに会いに行けよ。あいつらも元気だから」

「ラファ！」

「じゃ、」

ラファは少し迷つて、それから片手を上げた。やんわりとマユキの手を振り払った。彼女は泣いていなかった。ただ呆然と、ラファを見ていた。胸がぎしりと痛んだが、不思議と後悔はなかった。

チルタは、ファナティライスト神殿の庭園で一人、呆然と自身の右手を見下ろしていた。その手は、もう赤くない。少し薄めの肌色がのぞいているだけ。ラファは息を切らせたまま、彼の正面に立った。

「チルタ」

「ラファ、君」

チルタは未だに信じられない、といった表情で、ラファを見た。

「レナが」

「チルタ、」

「レナが、生きてたつて思ったときに、なにかが割れる音がして、そしたら、そしたら苦しいのも、痛いのも、全部全部なくなったん

だ。印が、消えた？」

「チルタ、聞けよ。あれは」

「あれは、レナじゃないのに」

声が、詰まった。チルタは泣いていた。

「レナじゃないって、すぐわかったのに。ルナだって、わかったのに。レナは、もう死んでるって、わかってるのに。僕、言えなかった。ルナだって、ごめんって、言えなかった。僕は、」

「おい、チルタ！」

チルタの肩を揺さぶると、彼の涙がこぼれて、草の上を跳ねた。

「僕、なにやってたんだろう。ルナはレナの代わりになんてなれるわけないのに、いつつ僕は、ルナとレナを重ねてたのかな」

チルタは両の手を顔にかぶせて、うつむいた。ラファはただ立ち尽くした。

すると、彼の瞳が、ゆっくりとラファに向いた。虚ろな瞳がラファを射抜いた。もう彼の手に第九の印はないはずなのに、彼は解けることのない呪いに侵されたかのようにだった。

「ねえ、ラファおにいちゃん」

ラファおにいちゃん。途方に暮れた調子で、チルタは繰り返した。

「僕は、ルナのことか、すきだったんだね」

それを聞いて、ラファはやつと分かったのだ。

彼の笑顔が昔と変わらないなんて、彼が変わらないだなんて、そんなのは嘘だったのだ。そんなはずはない。短い旅の間でも、こんなに変わる人間なのに、チルタただ一人がいつまでも時を止めているだなんて、そんなことはないのだ。

私のことを見ると、チルタはちよつと泣きそうな顔をするのだと、ルナは言った。きつと最初から彼は知っていた。レナはもういないのだということ。

「もう、世界を壊したいとか、言わないから…もうなにもいらないから、だから、かえってきて、僕に謝らせて、ルナ」
ラファは絶句したまま立ち尽くした。この少年にかけてやる声もなかった。そのときだ。

「また泣いてるの、チルタ？」
涼やかな、声。

振り返ると、黒髪の、レナの姿をしたルナが、ひどく優しげな微笑をたたえて、立っていた。

「ふふ、しょうがないわね。泣き虫、治らないんだから」
「ルナ…」

「何言ってるの、チルタ。私、レナよ。…あら、もしかして、ラファ、さん？」

ルナのその演技はひどく滑稽に見えた。だが完璧だった。その表情も口調も性格も雰囲気も、間違いなくルナではなかった。

「ルナ！」

チルタが怒鳴った。

「ルナ、もういいんだ、もうやめてよ」

「チルタ…本当にどうしたの？私はレナだって何度も言ってるのに、お姉様はシェーロラスディ陛下に任を与えられて、行ってしまわれたんでしょ？」

「え！？」

まさか。何故そんな嘘を。思わずチルタを見ると、彼は唇を引き結んだ。

「シェロ様が、そう言ったんだ。しばらくは帰ってこないって」

こんな短時間でそこまで手はずを整えるとは。ラファはすぐにピ

ンときた。なるほど、あの食えない世界王。チルタを救うために、ルナの手に乗ったというわけだ。

ルナは寂しそうに目を細めた。

「残念だわ。久しぶりにお姉様にもお会いしたかったのに」

彼女は、レナじゃないのに。決してレナではないのに。チルタもラファも、痛いほど分かっているのに。彼女を否定する要素が、どこにも見当たらない。

「ねえラファさん、さつきチルタにも話していたのだけど」

ころころと鈴の鳴るような声で笑うルナ。

「私、とうとう自由に外に出るお許しをいただいたんです！だから、

チルタが右手を握り締めた。

彼が望んだのは、こんな形じゃなかったはずだ。レナを生き返らせて、みんな喜んで、そう、ルナも一緒に、四人でまた笑いあえる日々を望んでいたはずで。なのにその右手の刻印が消えたのは、ひよっとすると、彼の心の奥ではそうではなかったのかもしれない。

ルナは笑う。レナとして笑う。

「これで一緒に、旅に出られますね」

人生というのは難しい。誰もが物語みたいなハッピーエンドを願っていたのに、ラファも、チルタも、ルナも、そしえおそらくは、レナも。そのために色々なものを犠牲にしてたどり着いた答え。

誰も笑えない。誰も幸せになれない。

ここまで無慈悲なエンディングが用意されていたなんて、かの予知夢の君でさえ、知っていたかどうか怪しいものだった。

act・56 拡散するセレナーデ

「やあ、レナ。体調は大丈夫？」

「やだ、私もう病気は治ったのよ？元気に決まってるじゃない、チルタ」

あれから、一夜明けて。チルタは月に惑わされて魔法にでもかかったように、見事に道化を演じてみせた。ルナに歩調を合わせるように。与えられた新たな筋書きに、見事に従ってみせた。

「納得がいかなくて顔だね、ラファ」

幸せそうな二人を見ながら、神殿の廊下に立ち尽くしていたラファの背を、ギルビスが軽く小突いた。隣にはロビの姿もある。いつの間にかこの二人は仲良くなったのか。ラファは妙な気分で並ぶ二人を見た。

「しかしまあ、ルナも役者だよね。レクセで会ったときもほぼ完璧に学生を演じてたし、巫子狩りより俳優を目指すべきだと僕は思うね。多分僕、彼女が黒髪じゃなきゃ敵だなんて気づかなかったと思うよ」

「ロビ、お前今日はトレイズと一緒に陛下と会議じゃないのかよ」

「そんなもの出るわけじゃないでしょ。あの腐れ親父と同じ空間にいらなんて考えただけで耐えられないよ。それに、どうせファレイアさんがいるんだ、ろくな会議になんてなりやしないさ」

ロビはしれつと言い放つと肩をすくめた。あの高等祭司、以前ロビが話していた女官と同一人物だったそう。シェーロラスディが、ロビのいい遊び役になると考えて、身分を偽らせてもぐりこませたらしいが、かの世界王は人選を誤ったことを、ラファは確信している。

現実はどこまでも悲惨だった。あれからトレイズたちが神殿にやってきて、改めて話をした。そこでひとつの朗報があった。ピルが目覚ましたらしい。

しかしそれを語るトレイズの顔は暗かった。

「記憶を失くしてるんだ」

それを聞くユールの肩が、みるみるうちに落ちていくのをラファは見た。

「自分のことも、人のこともぜんぜん覚えてない。一般的な社会常識は身についてるから、生活には支障ないだろうけど、このまま学園に戻すのは無理だろうな」

「おそらく心因性の記憶障害だと思います。過去の自分と少しずつ接していけば、記憶は戻っていくケースは多いですが…」

説明するエルミは、途中気遣わしげにユールを見た。

「本人の意思次第です。現在、彼女は神護隊で保護しております」

ユールの顔は蒼白だった。ルナが知らぬ振りを通している以上真偽は謎だが、ピルがルナに脅されて情報を渡していたのは事実だ。それはおそらく、ユールのことを引き合いに出されたから。彼女がユールに好意を持っているのは周知の事実だったし、きっと彼女はユールのためならばなんでもするだろう。

なのに、結局ユールはピルを庇って怪我をして、連れ去られて、

それをルナに話したところで、きっと彼女は大慌てで、「姉」の非礼を詫げるだけである。

「まあ、僕もあまり…」というか、かなり釈然としないね」

ギルビスはルナとチルタを見ながらぼやいた。

「結局、僕たちの行動は全部無駄だったってことだろ？内輪で解決しちゃったわけだしさ。なんだか、リイナが死んだのも、無駄なことみたいで、僕は認められない」

認めようと認めまいと、「あれ」が事実だけど。ため息をつくギルビス。ロビも同意見のようだった。…だが。

「私は、無駄じゃないって思うけど」

ラゼが金の瞳を細めてやってきた。

「だって、私たち、巫子にならなかったらどうなったと思う？きつというんなことが変わってて、その生活だって、きっと楽しいばっかりじゃなかったと思うの。それに、私たちだって出会えなかったじゃない。…それが全部、無駄だったなんて嫌だわ。

確かに、辛いこといっぱいあったけど、私、みんな仲間になれて、よかったと思うわ」

そうして照れくさそうに笑ってみせるラゼ。ロビが半眼で彼女を見やった。

「……ポジティブだねえ」

「そこがラゼのいいところだろ」

確かに、自分のこれまでの行動が無駄だったとは思いたくない。後悔することはいくらでもある。むしろ後悔することだらけだ。だけど、それらは結果的に、自分の糧となって残っている。

問題は山積みだった。ピルのこと。ラトメのこと。チルタ達のこと。その中でラファ達にできることは多くない。世にあまた存在する物語のように、ひとつの問題が解決して大団円に笑って終われるほど、この世界は甘くはなかった。

「これから、ラファはどうするんだい？」

「お前らは？」

問い返すと、ロビは当然だとばかりにきょとんとして胸を張った。「勿論ナエのところに帰るよ。こんなところには、一秒だって長く

いたくはないね」

「私は、そうね…森を追放されちゃったから、しばらくマユキやトレイズについてラトメに行こうかな。雑用くらいなら、私でもできるでしょうし」

「ギルビスは？」

ギルビスはうんざりした口調で返した。

「うるさいのを待たせてるから村に帰るよ。まったく、結局役目を果たしてないなんて言ったら、あのエルフはどんな顔するやら」

「泣いて喜ぶだろ」

「フェイはね。でもソラは怒り狂って、『リイナの墓前で土下座しろ！』とでも箒振り回して追い掛け回されそうだ」

ギルビスはちょっと笑った。けれどきつと、ソラは喜ぶだろう。

ラファは思った。彼が村を出たときの顔、本当にひどかったのだから。

「で、ラファはどうするのさ？」

再度問うてきたロビに、ラファは口を開いた。視線をめぐらせると、一本奥の渡り廊下を、マユキとトレイズが並んで歩いているのがついた。トレイズがこちらに気づき、気まずそうに苦笑して小さく手を振ってきた。マユキはこちらを見向きもしなかった。

ラファはロビに視線を戻した。

「約束を、果たしに行くよ」

a c t . 5 6 拡散するセレナーデ（後書き）

次回最終話になります。

それは今から千年も昔の話。

この世界は七つの国に分かたれていた。どうしてそんな話になったのかは明らかにっていないけれど、各国は我こそが世界の王者だと、互いに戦いを繰り返していた。

そんな無意味極まりない戦争を食い止めたのが、今は「世界創設者」と呼ばれる十数人の一団と、彼らを束ねるリーダー、聖女クレリス。彼らは七つあった国をひとつの大国に纏め上げ、それから新たに神都・ファナティライストと呼ばれる都市を作り上げて、世界に平穏をもたらした。

世界は平和になった。平和になったのだと、誰もがそう思っていた。

けれどあるとき、世界創設者たちは忽然と姿を消すことになる。いかな目的か、「人工的な」不老不死の力を、世界に遺して。

それは今から千年も昔の話。

この世界は七つの国に分かたれていた。どうしてそんな話になったのかは明らかにっていないけれど、各国は我こそが世界の王者だと、互いに戦いを繰り返していた。

そんな無意味極まりない戦争を食い止めたのが、今は「世界創設者」と呼ばれる十数人の一団と、彼らを束ねるリーダー、聖女クレリス。彼らは七つあった国をひとつの大国に纏め上げ、それから新たに神都・ファナティライストと呼ばれる都市を作り上げて、世界に平穏をもたらした。

世界は平和になった。平和になったのだと、誰もがそう思っていた。けれどあるとき、世界創設者たちは忽然と姿を消すことになる。いかな目的か、「人工的な」不老不死の力を、世界に遺して。

「そして！その力を示す赤色の証を『赤い印』といい、それを宿した人間は不老不死の身体と絶対無敵の魔力を持った『赤の巫子』となると言い伝えられています。巫子達は全部で十人いて、歴史の節目に現れては世界を平和へと導くといっています」

歴史教師、メアル先生の声が広い教室に響いた。

レクセ・ルイシルヴァ学園は、学園都市レクセディアの中でも一際大きな学校である。その四年生の発展クラスで、その授業は行なわれていた。

生徒たちがメアル先生の解説に聞き入る中、一人の女生徒が手を上げた。

「メアル先生、赤い印ってどんなやつ？」

「いい質問ですね。では、ラファ君！教えてください。」赤い印”についての解説！」

「ええ？何で俺が。というか、『赤の巫子』なんてただの御伽噺だよ。そんな伝承信じるほうが馬鹿らしいって」

メアル先生に指された茶髪に瑠璃色の瞳の少年は、彼女の講義を鼻で笑ってみせた。メアルは手にした指差し棒を今にも投げたそうにゆらゆら揺らしながら、苛々と言う。

「勿論、それはあなたがもう三回もこの授業を受けていて、ここにいる誰よりも巫子について詳しいからです！」

「ああ、ラファって去年再入学したんだっけ？」

一人の明るい男子生徒が茶化した。

ラファはその話を出されるとちよつと赤くなる。案の定、そつぽ向いて「うるせえよ」とつぶやく彼を皆が笑った。と、ラファの右隣の席に座る男子が高々と手を上げた。

「だけど先生、ラファ君にそれを聞くの、間違ってますよ。彼って、根っからの非現実嫌いだもん。巫子の悪い面ばかり羅列していつて、講義としては悪影響だと思えます」

「チルタ！余計なこと言うなって」

「ふふ、ラファ、巫子のことに関しては相当詳しいから」

「レナも！」

ラファの左隣の少女までもがくすくす笑うので、仏頂面でラファは機嫌を損ねた。メアル先生は彼に発言させることを諦めた。気を取り直して講義を続ける。

「はあ…もうよろしい。」赤い印”も全部で十種類あり、その印の位置はそれぞれ”目”、”骨”、”肩”…」

終業のベルとともに、生徒たちが教室を飛び出していく。寮へと続く帰り道。ラファは淡い水色の便箋を開いて読んでいた。チルタがたずねる。

「誰からの手紙？もしかしてラブレター？」

「まさか！違うつて。ラゼからだよ」

「…ああ、ゼルシャの」

レナの笑顔がぴくりと動いたような気がするが、ラファはかまわ

ず続けた。

「今は孤児集落にいるってさ。子供たちの世話しに」

そしてかつての仲間の、チルタにとってはかつての敵の近況を読み上げるラファの横顔をぼんやりと見つめながら、ふとチルタが言った。

「ラファ君、背低くなった？」

「はあ？馬鹿、お前が伸びたんだろ。俺はもう成長期は終わったんだよ」

「ああ、そうか」

チルタはちよつと寂しそうに笑った。ラファの姿は、十七歳の頃からなにひとつ変わらない。そろそろ二十歳になるにも関わらず、それにしても顔立ちがあどけなく、同い年の人間の中では体格も小柄すぎる。

おそらくは、卒業までは学園にいられない。

チルタのその考えを読んだかのように、ふとラファは視線を宙にさまよわせて、出し抜けに身を翻して駆け出した。

「え、ラファ？」

「悪いけど先戻っててくれ！寄り道してくる！」

「だけど、もうすぐ寮の帰宅時刻だよ？」

「代わりに帰宅延長届、出しといてくれよ。夕飯の時間には戻る！」
そうして駆けていくラファの後姿を見て、レナは呆け、チルタは小さく息をついた。

その屋敷は、レクセディアのはずれにある。

屋根の緑色は雨風にさらされてくすんでいたし、壁はところどころ崩れ落ちている。草花は屋敷の主がいないのをいいことにぐんぐんと伸びはびこって、見るからに幽霊屋敷、というような大きな館の雰囲気をも更に際立たせていた。

名づけて、「無人廃墟の館」。

割れた窓から屋敷に侵入する。箆笥や椅子は倒れているし、床はほこりまみれ。天井近くには蜘蛛の巣のヴェールがかかり、廊下へと続く扉は、金具が片方外れて、不安定に半開きになっていた。

西向きの窓。

ラファの背から、名残惜しく輝くオレンジ色の光がいつぱいに入ってくる。

ラファはその部屋の中で、唯一立ったままの箆笥の前に立った。この箆笥をまじまじと見るのは初めてだ。栗色の塗装はところどころ剥がれ落ちているが、取っ手の部分は銀製で、細かい模様が入っている。どうやらラトメ製の年代物らしい。

箆笥の扉を開く。中には数枚のコートが掛かっていた。ここに自分と、もう一人少女が入っていたなんて、嘘のように中は狭かった。

ぼんやりと箆笥の中身から目を離して、部屋の中を見回していると、ふと向かいの居間のほうから、床が軋むような高い音が響いた。ラファはほんの少し、肩を震わせた。

テノールの：ああ、ちょっと以前より低くなっただろうか。明るい声が耳に入ってくる。

「おいマユキ、今更こんなところになんの用があるんだよ」

「いいでしょ別に！思い出したら急にまた来なくなっちゃったの！」

もうひとつの声は懐かしい、少女の声。少し雰囲気やわらかくなっただろうか。昔はもうちょっとひっくり返ることの多い高い声だった。

ふたつの声はゆっくりとこちらの部屋へと向かっている。弾むように話しながら、ラファは筆笥の取っ手から手を離すことも忘れてそれらに聞き入った。

少女の声が部屋の前で止まる。

「この部屋だね？私とラファが、トレイズ達と初めて会った場所！懐かしい、なあ……？」

半開きになった扉の隙間から、少女の小麦色の髪と瞳が見えた。

彼女の目は、こちらを見てゆっくりと見開かれる。そんな少女を不審に思うように、彼女の前に一人の男性が立ち、扉を迷わず開け放つ。

赤い錆のような色が混じった薄いブラウンの髪。グランセルドが持つ、きらめく金の瞳。

「おい、どうしたんだよマユキ。入らないのか？って……」

時が、止まったかと思った。

マユキは少し髪が伸びた。前は背中にかかるくらいだったそれは、今は腰まで流れていて。自分同様さして成長していないようだったが、それでも顔立ちはずっと大人びて、少女というよりは女性といったほうが似つかわしい。

トレイズは少し、背が伸びた。肩も広くなり、以前よりもがっしりとした体躯。扉を開け放った手も少し大きくなった気がする。前

よりも日に焼けたその顔は精悍そう、金の瞳を小さく丸めてこちらを見ている。

対するこちらは、何が変わっただろう。

少女の唇が小さく言葉をつむいだ。泣き出してしまいそうに、瞳がうるんだ。

物語はいつもここからはじまる。始まりも終わりも無慈悲なストーリー。戸惑いや迷い、悩みや葛藤の連続。泣いて、叫んで、怒って、それでも。

ああ、何故だろう。今になって思い出すのは、確かに存在していた笑顔ばかりで。

——あなたにとってのしあわせは、なんですか

ラファにとっての幸せは確かにあそこにあつたのだ。無駄なことばかりではなかった。マユキだって、トレイズだって同じはずだった。目には見えない、口でもうまく説明できない。だけど。

——ラファ、あなたの行く先に、幸がありますように

静かに、背を押された気がした。やさしく、やわらかく、ラファの幸せを祈るように。

人生はひとつの物語で終わるほど短くはない。ラファはその振り色の瞳をひとつ瞬かせて、彼らに向けて一歩、足を踏み出した。

a c t・57 幕引き（後書き）

ここまでお読みいただき、誠にありがとうございました！
これにて本編は終了となります。

あと一ページあとがきがあり、そこで裏話なども書く予定なので、
興味など湧かれましたらどうぞご覧ください。

あとがき（前書き）

本編のネタバレが多分に含まれます。本編未読の方はご注意ください。
い。

あとがき

まずは最初に、サイトからお越しの方はいつもお世話になっております、そうでない方は初めまして、作者の佐倉アヤキと申します。この度は「アテナのリコリス」を最後までお読みくださり、誠にありがとうございました。最後まで読んでない方もようこそいらっしゃいました。

アテナのリコリス第一章完結ということで、いろいろと感慨深い思いでいっぱいです。が、きつと裏話を期待してこのページを拝見していただいている方もいらっしゃると思いますので、しんみりした話は置いといてさくさく本編では明かせなかった裏話などを取り上げていきたいと思います。

ちなみに以下からは、サイトにて連載中のアテナ補完作品「白きロナネット」のネタバレも大いに含まれておりますので、お読みいただいている方はご注意ください。

《裏設定1・ラファ君の出生について》

まずはアテナ1でもっとも謎とも言えるこれ。一応本編では、「レーチスが（多分）祖父」だということになっており、レーチス自身もラファ君のことを「息子の息子」と呼んでいます。が、はっきりとした証拠は出てきておりません。act.6でもミリカはほぼ断定を避けていますし、結果ラファ君の「ノルツセル」の血筋はどこから来ているのかは本編中不明としています。

で、これもまたかなーりややこしい設定があるのですが、とりあえず結論から。【レーチスはラファ君の祖父ではありません】。

といいますか、そもそもラファ君は「この時代に存在するはずのない人」だったりします。

細かいことは後述しますが、ラファ君はとある人のとある陰謀により、本来の時代に生まれることができず、アテナ1の時代に生まれることになってしまった、とまあ大体そんな感じ。

これについては最後にまた記載を加えたいと思いますので、気になつてしょうがないという方は一番下の項目までスクロールをお願いします。

《裏設定2・ラゼと巫子の継承理由について》

ところで最終話 a c t . 57で、トレイズとマユキとの再会時にトレイズの瞳のことを「グランセルドが持つ金の瞳」と言っています。また、a c t . 27でも金の瞳はグランセルドの証だという話が出てきています。

基本的にこの世界、決まりきった容姿を持つのは基本的に不老不死一族なのですが、グランセルドだけは唯一例外で、「金の瞳」という容姿設定がくつついています。

そこでラゼとトレイズの話です。ラゼは a c t . 21で「赤ちゃんの頃に捨てられてレイセリア様に拾われた」と話しています。お察しの方もいらっしゃるかと思いますが、ラゼはグランセルド一族の捨て子です。ちなみにトレイズとは兄妹にあたります。

実はこれ本編で絶対出したいと思つてた設定なのですが、意外にもグランセルドの出番が少なく書きようがありませんでした…無念すぎる。

そもそも巫子を継承する人物には、a c t . 51でギルビスが言

つていた「条件を満たす」ということ以外にも、ある程度の制約があります。それは、「不老不死」または「第九の巫子と縁のある者」であること。

それを踏まえると、今回の巫子勢の継承理由は以下の通り。

第一の巫子／フェル：”神の子”。ソリティエの分家。

第二の巫子／ラファ：ノルツセル。チルタとは過去の世界で出会っている。

第三の巫子／ギルビス：濃紺の髪と瞳はソリティエの証。

第四の巫子／ラゼ：チルタの家族を殺した仇であるトレイズの家族。

第五の巫子／マユキ：チルタの友人であるラファの親友。ソリティエであるエルフェオの血を引く。

第六の巫子／ルナ：チルタの幼馴染。シエルテミナ。

第七の巫子／トレイズ：チルタの仇。

第八の巫子／ロビ：エファイン。仇であるトレイズの幼馴染。

第九の巫子／チルタ：――

第十の巫子／シエロ：”世界王”。ソリティエ。

まあこの流れを汲めば、エルミやレーチス、ユール、リイナ、エルディあたりも巫子になる条件は満たしてます。個人的にエルディ君が巫子だったら面白そうだね。

《裏設定3・グランセルドの末路》

アテナ2でこの話を出すか出すまいか未だに悩んでるので、とりあえず書いておきます。2でこの話を執筆することになったらこそりとの話は消えてると思います。

act・4で、深夜トレイズとエルディの会話シーン。トレイズが「巫子を匿っていた暗殺者集団が全滅した」と話していますが、

これはグランセルドとトレイズのことを指しています。

トレイズは過去のシェイルディアでラファ君に銀時計の魔術を使われて、「グランセルドなんてやめる」という言葉を実行します。そして彼は単身ファナティライストに渡り、スラムでロビと出会う、という流れです。

ただ、ロビ、ナエとトレイズが別行動になってからの話は `act . 27` でも深くは語られていません。「別行動してたら俺は色々あつてフェル様に拾われて」とそれだけ言っていますが、その間にトレイズは一度グランセルドと合流している、という設定があります。

深い設定は実際に書くか書くまいか悩んでいるので細かく決めているわけではありませんが、とにかくトレイズはグランセルドに匿われている間にチルタに見つかつて、チルタは仇であるグランセルドを全滅させた。けれど赤い印を継承しているトレイズを殺すことはできず (`act . 15` でチルタが「赤の巫子を殺せるものは存在しない」と言っています)、生き延びたトレイズがフェルマータに拾われた、とそれだけ考えています。

そういうわけでトレイズにとってもチルタは仇であり、ラストで結果的にラファがチルタ側につくことになったのを認め切れなかったのはこのことが絡んでいます。トレイズは元々自分の正義をどこまでも信じて貫いていくタイプなので、よく言えばまっすぐ、悪く言えば頭が固いです。

《裏設定4・レーチスとエルミリカの不仲》

それではそろそろ本題です。レーチスは本来「エルミリカ・ノルツセルを生き返らせるため」に赤の巫子の秘術に手を出したわけですが、それにしては `act . 54` でレーチスはミリカに「最低」呼

ばわりされているし、お世辞にもこの二人、仲がいいようには見えません。

その理由のご説明の前に、まずは「過去夢の君」と「予知夢の君」の能力について再確認。

・過去夢の君は、過去を司る。過去に行ったり、過去の情景を見たり、果ては過去を変えたりできる。

・予知夢の君は、未来を司る。未来に行ったり、未来の情景を見たり、果ては未来を変えたりできる。

そして肝心なことがひとつ。こと「過去夢の君」において、過去夢の君がたとえば「過去を変えた」として、そのことに「全ての人間が気づく術はない」、要するに、過去を変えた場合は、世界に生まう全ての人間は、過去が変わってるだなんて分からない、ということです。

つまりは、そもそもアテナーの世界においても、知らない間に過去が変わっていて、そこは本来全く別の歴史を辿るはずだった世界なのかもしれない。

細かい話は「白きロナネッタ」のほうで連載しているので、読む気がしないという方向けに大まかに流れだけ抜粋します。

まず肝心なのは、「レーチスが救おうとしたエルミリカ」と、実際にアテナーで登場した「エルミ」には、レーチスとの関係において差異があるようだ、という点です。

結論から申しますと、これは、前者と後者のエルミリカが、「実は別人」だということに起因しています。

実は世界創設戦争でロゼリー帝国が滅亡したときに、本物のエル

ミリカ・ノルツセルは死に、別の人間が「エルミリカ」としてその立場についています。ちょっと分かりにくいたえではありますが、死んだエルミリカの代わりに、彼女と全く似ていない別の人間をその地位につかせた挙句、世界中の人間に暗示をかけて、その別の人間が本物のエルミリカだと勘違いさせる、というメカニズム。平たく言えば影武者みたいなもの。

だから現代の世界の人びとにとっては、エルミリカはロゼリーでは死んでいないし、エルミリカはその後世界創設者の一人になって、黒い本を書いて、赤の巫子を作って崖から落ちて死んだ、ということになっているわけです。

つまり、「レーチスが救おうとしたエルミリカ」は影武者のほう、本編で登場しているエルミリカはロゼリーで死んだはずの王女、ということなんです。

act・34のあとがきで「この小説では登場人物が嘘をついている」と言っていますが、ここでその嘘を明かしたいと思います。

まずはact・34の嘘該当部分。

「ええ、私の名前はエルミリカ・ノルツセル。かつてロゼリー帝国の女王だった、そして黒い本を書いた、…赤の巫子を考案した、世界一の罪人です」

「私」は未来を捻じ曲げたんです。自分が殺されることを”視て”いて、納得していたはずなのに…崖から突き落とされたとき、私は”死にたくない”と思ってしまったんです。まだ、死にたくない、死ねない理由があるって」

両方ミリカの台詞です。まずは一つめの台詞から検証していきます。

上記した内容からいって、「かつてロゼリー帝国の女王だった」という部分は嘘ではありませんが、「黒い本を書いた」と「赤の巫子を考案した」は嘘。

また、二つ目の台詞は「崖から突き落とされた時」の話は世界創設者としての話なので嘘です。

本物のエルミリカは、ロゼリーで死んだ場面から直接孤児集落に飛んできており、そのため本来は世界創設者時代の「影武者エルミリカ」の存在は知りません。神護隊に入ってからレーチスにその話を聞き、あたかもエルミリカは最初から一人しかいなかったかのよう

うに振舞っています。

《裏設定その5・指輪と影武者エルミリカ》

それを踏まえて、まずはミリカがラファ君に貸していた「銀の指輪」について。act・18で指輪からエルミリカと名乗る謎の人物が出てきましたが、じゃあ彼女は一体何者なのかというと、本編ではきちんとした説明がなされていません。act・34でもミリカが言葉を濁しています。

あの指輪に宿ったエルミリカは「影武者」のほうのエルミリカです。よって神護隊のミリカとは別人。ですが、チルタがミリカの盲目を治すときに、彼女の魔力の一部を指輪に移し変えているため（act・33でミリカとチルタが対峙したときにその話が出てきています）、その指輪を通してミリカは「影武者エルミリカ」のことも感知することができる。要するに指輪の中で、二人のエルミリカが同居している感じといえはまだ分かりやすいでしょうか。

じゃあその「影武者エルミリカ」の正体とは誰なのか。そこでact・31のレーチスの手紙、二枚目にあった絵が要となります。

あの絵にも色々ややこしい設定が付きまとうので、突っ込んだ話は割愛しますが、「影武者エルミリカ」は、あの肖像に書かれていた「ウラニア」という召使です。世界創設戦争の時代、過去夢の君だったレーチスの策略でエルミリカの身代わりになって、その際エルミリカの持っていた「予知夢の君」の能力も受け継いでいるため、レーチスは「二人が最後の予知夢の君となりますように」と書き添えています。

本来、ウラニアがエルミリカになったときに、「ウラニア」という存在そのものがほぼ抹消されているので、そもそもその肖像が存在すること自体がおかしいのですが、レーチスはある程度、自分が過去を変えたことについておぼろげながら覚えています。それである手紙で、ラファに「過去夢の君は過去を変えることができる」という話を持ちかけているわけです。

《そして裏設定1・ラファ君の出生について》

まずは一項目めから飛ばしてきた方向けに、超簡単なまとめ。

- ・レーチスはその昔過去を変えた
- ・それはエルミリカの存在。実は本物のエルミリカはロゼリー帝国滅亡時に死んでいて、世界創設者になって赤の巫子を発案したエルミリカはまったくの別人、影武者だった
- ・影武者のエルミリカは本名をウラニアといい、ミリカの召使をしていた
- ・ちなみに、本編登場のエルミはロゼリーで死んだはずの本物のエルミリカ

これを踏まえて、じゃあラファ君は何者かについてのご説明に移

ります。

ラファ君は本来、エルミリカの召使だったウラニアと、レーチスとの間に生まれるはずだった子供でした。ウラニアは本編記載はありませんがブラウンの髪に瑠璃色の瞳の容姿なので、ラファ君の容姿とも合致しています（指輪のエルミリカの姿は諸事情あってエルミと同じ姿をしています）。

ただ、ウラニアがエルミリカの身代わりになる際、その時ちょうどお腹にいたラファは、「存在を抹消されるウラニア」とレーチスの間の子なわけですから、当然生まれてこれるわけがありません。ウラニアがいなくなれば、ラファ君の存在も消えてしまいます。

そこで死の間際のミリカが「予知夢の君」の力を使います。「ラファ君が消える」という「未来」を改変し、まあ、ラファ君の魂とでも言えいいでしょうか、それを別のところに移してしまったわけです。別の者の子供として生まれてくれば、ラファ君は矛盾なく存在することができます。

要するにラファ君は、実際に生まれてきた血筋はノルツセルとなんら関わりはありませんが、もとの存在がウラニアとレーチスの子供なので、結果、突然変異的にノルツセルの姿を持って生まれています。まあ、不老不死とはかわりのない一般人の女性の身体を借りて生れ落ちたノルツセルの子、というところでしょうか。

だから正確に言えば、レーチスとラファの関係は親子になります。肉体的じゃなくてもっと存在観念的な。科学的にはわけわからんお話なのですが、そこはフィクションということでご容赦ください…！

ところでエルミリカの呼び名がいろいろあつて区別が分かりづら
いですが、影武者話が出てきてからの区別は以下のとおり。

・「エルミリカ」はどちらとも言いつらい、もしくは両方をひっく
るめて言いたい時。

・「影武者エルミリカ」はウラニアのこと。

・「ミリカ」は本物のエルミリカのこと。現代に飛ばされてきてか
らのエルミリカは「エルミ」と呼んだりもしています。

しかしこうして見るとじつにやつやこしいお話ですね！細かい
話が好きなもので、説明文が苦手な方にはちよつと苦痛な小説だっ
たかもしれませんが、少しでもお楽しみいただければ書いた甲斐が
あります。

さつきから散々言ってますがこれから続編の2を書きたいと思ひ
ます。今回のアテナから25年後を舞台にしたお話で、主役交代し
つつアテナ1のキャラにもスポットを当てて、今回は見えなかった
アテナの世界をお楽しみいただければと思います。ちなみに今回は
主役が3人いるので、それぞれの視点から違つた世界観が見えてく
ると思われます。

ただ、次回話の展開上、どうしても「娼婦」とか「身売り」とか
いう話が出てきてしまひまして…直接的な性描写などは全く入つて
こないと思うのですが、単語から連想されるイメージを踏まえます
と、次回作はR15にしようか検討中です。よろしければ皆様のご
意見をいただけると嬉しいですよ。

それでは、長々と語つてしまひましたが、今回はこの辺で失礼い
たします。

最後になりましたが、皆様ここまでお読みくださり、本当にあり

がとうございました！

また次回作でお会いできますことを、心より願っております。

2011.3.25

佐倉アヤキ 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4198o/>

さかさまクロック

2011年7月28日07時55分発行